
この結婚は政治的戦略

薄明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この結婚は政治的戦略

【Nコード】

N2401P

【作者名】

薄明

【あらすじ】

休戦を条件に敵国の第二王子との政略結婚が決まった王女は人質覚悟でヴェルセシユカにやってきた。

生きていくのに必要なのは絶対的な地位と権力。しかしそれ手に入るために必要な手段とは……どうして仲のいいフリをするために人前でいちゃつかなくてはならないのでしょうか。

そんな二人が陰謀に巻き込まれながらも、ゆっくりと愛情を育んでいく物語。

1・政略結婚（見た目だけで判断しないで）

虚飾に塗り固められた舞台――。

今、幕は上がる。

長い戦争は民を、そして国をも疲弊させる。

西大陸と東大陸が最も接する地に、その二国はあった。

西のパルミディアと東のヴェルセシユカ。

それぞれの背後、パルミディアには西の大国ルーヴェルフェルト、ヴェルセシユカには東の大国ゴードヴェルクが控え、長い間、二大国は小国二国間に起こった戦争を見て見ぬふりを続けてきた。

だが一年前、その沈黙は突然破られる。二大国がパルミディアとヴェルセシユカの休戦を提案したのだ。すでにどちらの国も疲れ切っていた。このまま二大国に逆らってまで戦争を続ける意義もなく、両国は休戦を受け入れた。

両国間で交わされた条件は表面的な取りつくり過ぎない。だが両国とも国力が回復するまで数年はかかる。その間、どうしてもお互いを牽制する必要があった。当然、その牽制は過去幾度も繰り返されてきた方法が取られることとなる。

いわゆる人質の交換。

またの名を政略結婚ともいう。

一年前、ヴェルセシュカの王子と婚約をした。

一週間前、ヴェルセシュカにやってきた。

一月後の結婚式の為に。

晩春の夜。ヴェルセシュカの王宮では隣国からやってきたパルミディアの王女の歓迎の夜会が催されていた。

煌々と灯された明かりは広間を昼間のように明るくし、音楽が溢れ、煌びやかに装った男女が中央で円を描くように踊っている。かつての敵国、招かれたパルミディアの貴賓に、まるでその復興を見せつけるかのようだ。

そして今、リユーネリアは歓迎の夜会に出ていた。この夜会の主役の一人である。

本来なら婚約者が側にいるはずなのだが、リユーネリアは一人である。周囲にはヴェルセシュカの貴族たちに囲まれて、表面上には顔に笑みを浮かべて談話している。

一年前までは敵だった者たちである。全くしこりが無いとは言えない。でもそれはお互いさまである。

たとえ隣に婚約者がいなくてもリユーネリアはパルミディアの第

一王女としての誇りと、やるべきことは分かっているつもりだった。

「姫のような美しい方とご結婚される殿下が羨ましいかぎりだ」

「ありがとうございます（見た目だけで判断して欲しくないわ）」

「パルミディアは緑の美しい国だそうですね。ですが、このヴェルセシユカもいい所ですよ。早くここでの生活にも慣れて下さいね」

「はい。見るもの聞くものすべて珍しく興味は尽きませんわ（でも慣れる前に命を狙うのはどちら様かしら？）」

というような形ばかりの褒め言葉の羅列に辟易する。裏を返せば所詮、人質。いつでも命を取ることが出来るのだという意味が見え見えだ。しかし、顔だけは笑みを浮かべ続けなければならない。折角の休戦を台なしにしないために。そして、この休戦を取り持った二大国の顔に泥を塗らないためにも。

いい加減、頬の筋肉が強張って来た頃、やっと婚約者がバルコニーにいらつたのを聞きかじつた。

リユーネリアは周囲に出来ていた人垣に謝罪をし、会場から抜け出した。

なぜ婚約者が側にいないのか。

リユーネリアはため息をつく。この婚姻にケチをつけるつもりはない。これは国の為であつて、そしてそれは民のため、引いては自分のためでもある。

婚約が決まつた頃、よく耳にした噂があつた。

ヴェルセシユカの第二王子は無類の女好きである、と。

リユーネリアの感想は、それはそれで都合がいいかも、程度だつた。

政略結婚である。

そこに愛情はない。

国のためになればこそ、相手にたくさん恋人がいようがいまいが関係はない。むしろ自分に興味をもたれない方が都合がよい。しかも、婚約者の身分は第二王子だ。その権力は中枢に近い。リユーネリアの目的を果たすにはちょうど良かった。

2・博愛主義（協力はできるでしょう？）

バルコニーに行くと、目的の人物はすぐに見つかった。夜でも目立つ金髪が室内から漏れ出た明かりのおかげで余計にでも目を引く。思った通り、隣には必要以上に身体を密着させた女性がいた。

「ウィルフレッド様、こちらでしたか」

この夜会にとって主役二人の間に立つ本来のお邪魔虫は彼女の方なのだが、どう考えても現状はリユーネリアの方がお邪魔虫にしか見えない。

婚約者に対してのこの無礼な扱いに、むしろ込み上げてくる笑いをどうにか我慢すると、リユーネリアは二人に近づき、作法に則って優雅に一礼する。

白地に金糸で刺繍がされているドレスは室内の明かりを受け、すぐにウィルフレッドは誰だか気づいたようだった。

「これはリユーネリア姫」

その言葉に、彼の腕の中にいた女性は慌てたように身を離し、うつむきながらすり抜けるように室内に戻っていく。王子はそれを別段気にした様子も見せず、視線をリユーネリアに向けた。

「お邪魔をして申し訳ありませんでしたわ」

社交辞令を口上に乗せても、この王子には上滑りするだけだと分かっていた。逃げていった女性はすでに王子の意識にも残っていないだろう。お互いに遊びだと割り切っているのならリユーネリアが口を出すことではないし、気にすることでもなかった。

王子は広間に戻っていった女性へと視線を向けることなく、リユーネリアから視線を外さない。

意外といい根性をしているのかもしれない。一応、この婚約は休戦の条件の上に成り立っているのだ。もしも王子の悪癖のせいで婚

約破棄などという事態になろうものなら、どうするつもりなのだろう。それとも、破棄できないとも思っている？

リユーネリアは片手を取られると、挨拶代わりにその指先に口づけられる。

「かまいませんよ。代わりに美しい小鳥が来てくれたからね」

上辺だけの態度と言葉に、それならばとリユーネリアも上辺だけの微笑で応える。

「生憎、囀るのは得意ではありませんけど」

思わず本音が出てしまう。

「小鳥を愛でるのはその囀りを楽しむだけではないよ。見た目も大事だと思うけどね」

「では、褒め言葉として受け取っておきますわ」

差し出された腕を取ると、当然のようにエスコートされる。歩調もリユーネリアに合わせてくれて、どこまでも手慣れている。

二人の夜の夜会なのだ。いつまでも一緒のところを見せないのはおかしいだろう。

広間に戻ると、やっと揃った主役二人に自然と視線が集中する。見られるのは慣れている。

その視線に含まれる意味も。祝福などされていないことも。

「踊りますか？」

「ええ」

どうせ注目されるなら、好きなだけ見ればいい。

リユーネリアとウィルフレッドは広間に流れる音楽に乗って、上手くダンスの波に入る。

好奇な視線にさらされながら、しばらく無言で踊り続ける。だが、人々も次第に飽きてきたのか、二曲目を踊り始めるころには、視線はそれほど気にならなくなっていた。

そこでリユーネリアはやっと目の前の王子を見上げる。

「嫌そう、って訳ではなさそうですね」

何が、とは王子は尋ねなかった。

それは結婚のことを指すのか、それともその相手がリユーネリアであることを指すのか、はたまたこのダンスのことを指しているのか、実は尋ねた方も理由が多すぎてどれに当てはまるのか分からなかったのだが。

ウィルフレッドは不思議そうに首を傾げてから、微笑する。

「それは、あなたに対しても言えることだろう」

「ええ。わたくしはそれが仕事だと思っています」

「私はそうではないとでも？」

「いいえ、と答えすぐに、でも、と続けた。

目の前にいるのは完璧な『王子』だ。嫌ならばとつくに逃げ出すか、リユーネリアに対してもっと酷い仕打ちをしているだろう。

「……正直に話しても？」

「どうぞ」

促され、リユーネリアは慎重に言葉を選ぶ。

「あなたは女性に対して、かなりの博愛主義だとお聞きました。そのような方が結婚に縛られるのは不本意なのは、思っただけです」

「——博愛主義とは……。これはまた……。ものは言いようです。ね。そんないい言葉を選んでくれたことにお礼を申し上げるべきかな」
感心したように言われ、やはりこの王子は油断しないと気を引き締める。話を逸らされてはならないと、確認を込めて問い返す。

「違いましたか？」

じつとその青い瞳を覗きこんだが、反らされることはなかった。

「まあ、悪くはない見解だね。だけど、私もあなたと同じだと思ってもらって構わないよ」

「つまり？」

「私の仕事だと思っている」

どうやらこの王子は、リユーネリアが義務でこの国に嫁いでくる

のだと思っているらしい。確かに、義務だとは思っている。王族の仕事だとも思っている。でも――。

「ですが、あなたは……言葉は悪いですけど……諦めているようにしか見えません」

先ほどのバルコニーでも感じたことだが、この王子からはどこか厭世的なものを感じてしまう。決してリユーネリアに酷いことをしている訳ではない。自分の務めも果たしている。必要最低限、という言葉が付くが。リユーネリアがバルコニーに呼びに行かなくても多分、戻って来ていただろう。そんな気はする。ただ、必要以上に王子の務めを果たそうとしてない。その原因が、この婚姻に因るものなのかリユーネリアは気になっていたのだ。

「これは失礼を。決してあなたが気に食わないとか、結婚が嫌だと思っているわけではありません」

はつきり告げられ、やはり頭の回転は悪くないではないかと思う。「では、何に対して諦めているのかしら？ わたくしは別にあなたの主義に口を出すつもりはないのですけど」

こちらもはつきりと口にすると、王子は軽く目を見開いた。

そんなに驚くようなことを口にしたつもりはなかったのだが。

「姫は心が広いのか、それとも冷酷なのか……」

「どちらかというと後者かもしれませんね」

王子に対して固執するつもりはない。ただ、リユーネリアがヴェルセシユカで動く為には敵にならないでいてくれればいい。

かすかに愛想を含んだ笑みを向けながら答えると、王子は納得したようだった。

「なるほど。私たちの間に愛情は必要ないと考えているのか」

「必要性を感じないだけです。そのようなものが無くとも、協力は出来るでしょう？」

政略結婚が必ずしも上手くいかないと思っているわけではない。まして、この婚姻が人質としての役割しかなさないのでとしても、殺されるとは限らない。ならば、生きる可能性を探って悪いことで

はないだろう。その為には、この王子の協力が必要になってくる。最悪、協力してくれなくても、敵にならない保証が欲しいところだ。だが、王子は首を傾げて考える素振りを見せる。そして、否定した。

「それは、なかなか難しいと思うのだが」

「なぜ？」

すでに敵だと考えるべきなのだろうか。踊る為に繋いだ手に、じわりと汗が滲む。手袋をしていて良かったと頭の片隅で思った。

だが、返ってきたのは予想外の返答だった。

「通常、同性ならば仲の良い者が数名集まれば友情というものが生まれる。だが、異性となるとただ仲が良いからと集まったところで友情にはならない。必ず独占欲というものがどこかに生まれる」

「それはあなたの主義上のことではなくて？」

「経験上、異性間の友情を目にしたことはないね」

つまり――。

「わたくしがあなたの主義を認める場合、……わたくしに独占欲がわくと問題なのね？」

周囲の視線にさらされている為、眉間に皺を寄せるわけにはいかない。多少、引きつった笑みはこの際仕方がない。

「取りあいは嬉しいけどね」

本心なのかどうなのか、王子は整ったその顔に魅惑的な笑みを浮かべる。

「あまりいい趣味とは言えないわね」

思わず、声をひそめて呟いた。

呟きはどうやら聞こえなかったようで、王子は興味深そうに聞いてきた。

「で？やはり愛情は必要ないത്？」

「ええ。それより、話を戻しても？」

気づけば、話が逸れている。迂闊だった。

「諦めているとか言っていた話？」

「そう、この婚姻を嫌がっているわけではないのだとすると、何に對して諦めているのかしら」

傍から見れば、ウィルフレッドという王子は、女性に対して博愛主義で王子としての最低限の仕事しかしていないように見える。王族として国の責任を負う立場の一人としては心もとない。

「……諦めている、という言葉が適切かどうかは別として、それでもあえて当てはめるとすれば、私はあなたに對して何も出来ない、ということかな」

少しだけ沈んだ声音に、そこに彼なりの本意と謝罪が混じっているように聞こえた。

だが、リユーネリアは首をかしげた。意味の取り方が難しい。

命を狙っていることを知っていながら止める力がないのか、夫としての務めをするつもりがないのか、それともわざわざ敵国より嫁いできた王女を本当に人質として監禁するとても？

取りあえず言葉の裏を取らずに正面から疑問を投げかけてみる。

「……たとえあなたと結婚しても身の保証はないと言いたいのかしら？それなら、守ってもらおうなど最初から思っていないことだわ」

ヴェルセシユカに輿入れすることが決まった時から一年、覚悟は決めていた。

「それは大した覚悟だ。だが、そう思うのならあなた自身が問題なのではなく、こちらの事情だと言った方がいい」

「事情とは、何？」

「これは、知っているかもしれないが、今この場に來ていない兄上——第一王子は、身体が弱く床に伏せていることが多い、ということに關係する」

多くを言いはしなかったが、リユーネリアはウィルフレッドの言わんとしていることを察した。

確かに、知っている。第一王子のカール王太子はあまり身体が丈夫ではないと。それがどれほどのものなのか、実際のところはわからなかったが、今現在も王太子の身分でいるのは、それほど酷い状

態ではないのだろうと対外的には言われている。

だが、ウィルフレッドの言わんとしていることから察するに、もしかしたら想像以上に悪いのかもしれない。

「では……」

その可能性にリユーネリアは口を閉ざす。代わりに王子が口を開いた。

「その場合、人質であるあなたの存在が、この国にとって邪魔になるのは目に見えている」

3・一触即発（自分の身は自分で）

現在、ヴェルセシユカの第一王子が第一王位継承者だ。ちなみにウィルフレッドが第二継承者ということになっている。それは今、リユーネリアの左手に添えられた王子の右手の指に嵌められた指輪からも窺うことが出来る。ヴェルセシユカの内情についてはこの一年、婚約が成立してから勉強してきたことであるし、その程度のことなら誰もが知っていることだ。

どれほど第一王子の身体が弱っているのか分からないが、ウィルフレッドの様子からすると王位に就くのはかなり難しいようだ。その場合、目の前の王子に玉座が転がり込んでくるということになるのか。

それにはそれで一抹の不安があるが、もしもヴェルセシユカがパルミディアと戦争を再び始めるつもりなら、人質として来た姫が王妃になるのは邪魔でしかないだろう。

そしてウィルフレッドがリユーネリアに対して何も出来ないという理由。それは必ずしも彼に権力がないというわけではなさそう（それほど馬鹿そうには見えない）のだが、それについてはもう少し見極める必要があるのかもしれない。

「なるほど、ね」

「だから私は守るとは言えない」

自分の国の為なら、切り捨てなければならぬかもしれないと言っているのだ。

「……結構よ。自分の身は自分でどうにかするわ」

それなら余計にでも早くに動かなければならぬだろう。少なくとも、ウィルフレッドはリユーネリアのことを邪険にしてないし、むしろ警告も口にはしている。信用するかは別としても、やはり利用

できるところは徹底的に利用しなければ――。

「……………」

視線を感じて見上げると、王子の青い瞳と目があった。こちらが何を考えているのか窺っているのが分かる。

リューネリアも自分がどんなに強^{した}かな思考をしているか分かっているつもりだ。だからあえて微笑みかける。

「意外でしたわ。思っていたよりもあなたは誠実なのね」

博愛主義者に誠実はないだろうが、そちらの主義に対しての言葉ではない。王子も肩を竦めた。

「一応、可能性の話であって、目下あなたは私の婚約者だ」

その言葉に、リューネリアは軽く眉をひそめて見せる。

「その割には放っておかれた気がしますけど？」

「私の主義を黙認するのでは？」

もちろん、と肯定する。

その点に関しては二言はない。だが、それとこれとは別問題だ。

「口を出すつもりはないわ。でも婚約者だと言うのなら、それなりの扱いをして欲しいわね」

パルミディアの王女を婚約者である王子自らが軽んじるのは、ヴェルセシユカ側がパルミディアを軽視しているとも言える。それが再び、戦争を始める一因にもなりかねないのだ。

「では、何をお望みで？」

表面上は軽口を叩きながら、彼の瞳の奥には笑みなど一切含まれていなかった。ウィルフレッドもこちらのことを見極めようとしているのかもしれない。だから、敢えて先に延ばす。焦って結論を出すのは得策ではない。

「……そうね。取りあえず明日の午後、あなたの執務室を訪ねてもいいかしら？」

本来なら、お茶会でも言いたいところだが、お茶会を開くとなると毒殺の危険性が高まる。今現在、微妙な立場のリューネリアは口にするものもすべて細心の注意を払っているのだ。

それにこれ以上の腹の探り合いは、この場では危険だった。だが、もう少しこの王子とは話してみたいと思った。どこまで利用できるか。他に利用できる伝手^{つて}はあるか、探らなければならない。

「執務室には滅多に足を運ばないんだが……」

やはり王族としての仕事は必要最低限しかしていないのかもしれない。

「仕事は嫌い？」

しかし、どこまでが本気なのか分からない。仕事をしない王族など本来いないはずなのだから。

「博愛主義者の私としては、ね」

言い訳がましくウィルフレッドは憚然とした返答を寄こした。だが、リユーネリアはその返答に満足し、安心して心から笑った。

「ならば、執務室で逢引現場に行きあう可能性はないのね。安心して訪ねさせてもらうわ」

実はそのことだけが心配だった。逢引現場にうつかり出くわした時の対応など、経験不足のリユーネリアには対処のしようがない。無様にも逃げ出すかもしれない。先ほどのバルコニーでの現場も、あやうく硬直しかけたぐらいだったのだから。

「分かりました。お待ちしておりますよ」

今度はどんな女性も騙されてしまうような笑みをウィルフレッドは浮かべ、ちょうどダンスの曲も終わったところだったので、ダンスの為に取られていた片手をそのまま彼の口元に引き寄せられる。手袋ごしだが、手の甲に約束の口づけをされ、周囲のざわめきが一瞬大きくなる。

——慣れない。

非常に慣れないのだが、ここは敵地なのだからパルミディアの王女として堂々と振る舞わなければならない場所だ。

動揺を悟られないように、何事もなかったかのような顔をしたまま、ダンスの輪から連れ出され、広間でもあまり人の密集していない場所に休憩をする為に案内される。人目を気にしなければならな

いのは存外疲れるのだ。

ふと、隣に立つ王子を見上げる。

確かに、ヴェルセシユカ特有の金の髪は昔絵本で見て憧れた王子様そのものだ。青い瞳もパルミディアに多くある湖を思わせる深い青。顔立ちも端正で美しい。極上の部類に入るのではないだろうか。これで本人が自覚して博愛主義を発揮しているなら、籠絡される女性はいないだろう。

ぼんやり眺めていると、ウィルフレッドの手が伸びてきてハツとする。

「疲れましたか？」

ほつれかけていた髪を横に撫でつけられ、慌てて自分で簡単に手直す。

「姫の髪は見事に黒いですね。瞳も夜明けの空のような色とは……珍しい」

「……ええ。亡くなった母が同じような色をしていました。……でも、夜明けの空だなんて言われたのは初めてです」

確かに薄い紫にオレンジが混ざったような色をしている。絵で見たことはある。夜明けの空の地平線は確かにオレンジに染まり、夜の深い青との境目はそのような色になる。

「いつもはどのように言われているのですか？」

「パルミディアは緑の多い国ですから……。通常、花の色に例えられることの方が多かったですね」

董とか、と一般的に知られているような花の名を上げる。

貴族社会では男性が女性を褒めるのは社交辞令としては当然である。まして褒められるのに、花にたとえられて嫌な女性はいないだろう。

「……姫は砂漠を見たことは？」

王子は何を思ったのか、唐突に話を変えた。

残念ながらと首を横に振る。

「ありません。そう言えば、ヴェルセシユカは隣国との境に砂漠がありましたね」

地図を頭の中で思い浮かべながら尋ねると、王子は遠い目をして頷いた。

「ええ。砂漠で見る夜明けは格別です」

「その……、夜明けの空とわたくしの瞳が同じ色？」

「見て——思い出しましたから」

懐かしむような笑みを向けられ、何か今までの王子と身にまとう雰囲気が違うような気がした。

王子の遠くを見ていた瞳が、わずかに彷徨った後、リユーネリアの瞳にたどり着く。というより見入っている。その眼差しはどこまでも優しく、何かを思い出しているようだった。

「……わたくしも、あなたの瞳を見てパルミディアの湖を思い出しました」

気づくと、最初に感じた事を口走っていた。

「特別な思い出でも？」

それはあなたでしようと思いつつも、リユーネリアは逡巡したのち口にする。

「まだ、戦争が激しくなる前までは、夏に避暑を兼ねて家族で湖畔にある離宮へ行っていました。幼いころの思い出です」

あれから十年以上が経つ。その頃、まだ弟のライオネルは生まれただばかりで母も健在だった。まだ、戦争もくすぶりはじめたばかりで、リユーネリアは戦争がどのようなものかさえも理解していなかった。

「特別——というほどではありませんね」

誰にでもある思い出だろう。

「しかし、姫にとっては最も平和であつた頃なのでは？」

今まで考えもしなかったことを言われ、目を瞬いた。

確かに、戦争が激化してからというもの、家族で過ごすことは無

なくなった。その間に、母がなくなり、戦争を休戦する条件の一つとしてこの婚姻が決まってしまった。そして今はヴェルセシユカにいて、ある意味、人質としての生活が始まっている。

その事に気づかされ、リユーネリアは苦笑した。

「確かに……、そうですね」

認めてしまうと、王子はほんのわずかだが眉間に皺を寄せた。

戦争相手はヴェルセシユカである。その国の王子を相手に話す内容ではなかったかと気づき、不快にさせてしまったことを詫びようと口を開きかけた。が、その王子の口から零れた言葉は思いもがけず労わりの言葉だった。

「婚儀までというわずかな間なら、愚かな考えをもった者でも無謀なことはいらないだろう。出来るだけ不便のないよう取り計らうつもりだから、しばらくはゆっくり過ごしてほしい」

この休戦には、両国の背後に控える二大国がいる。今日の夜会にも貴賓として出席しているはずだ。完全な休戦は二人の結婚にかかっているのだ。婚儀が執り行われるまでにどちらかの身に何かあれば、二大国を敵に回すことになるのだ。そうなれば、パルミディアもヴェルセシユカも、国の名が地図上から消えてしまうことになるかねない。

リユーネリアにとって、婚儀が行われるまでの期間が、現実とは言えないが安心できる期間と言える。

「ありがとうございます。ウィルフレッド様のお心づかい、感謝いたします」

ドレスをつまみ、パルミディアでの形式で最上礼の感謝を伝える。

「では、行きますか？」

「ええ」

これから貴族たちへの挨拶だ。やっと二人揃ったの登場に、二人はあつという間に人垣へと埋もれてしまった。

4・因果関係（その判断基準は……）（前書き）

ウィルフレッド視点です。

4・因果関係（その判断基準は……）

最初、休戦の条件にパルミディアの王女との婚姻の話が出た時、第一王子であるカールがその相手だと誰もが思った。

しかし、ヴェルセシュカの国王が指名したのは、第二王子であるウィルフレッドだった。

「何故兄上ではないのですか？」

今現在、第一王位継承権は第一王子のカールにある。しかし第一王子は昔から身体があまり丈夫ではない。これは周知の事実だ。このままでは王位に就くのは難しいと、影で口にするものがあるぐら이다。だから再び戦争を開始するのであれば、王位の継げない可能性の高い第一王子と婚約させた方が都合がいいと誰もが思っていたはずである。

執務室に呼び出され、噂の事実をヴェルセシュカ王の口から聞かされたウィルフレッドは、平静を装っていたがわずかが声が尖ってしまった。

王は、ちらりと視線だけをウィルフレッドに向けると、にんまりと笑った。

「結婚は嫌だと顔に書いてあるぞ」

「……そんなことは言っていないでしょう」

図星を指され、頬が上気するのが分かる。

だが王は、書類にサインをしながらニヤニヤと笑っている。

「アレには婚約者がいるだろう。それに、おまえはいつまでたつてもフラフラと落ち着きがない。まあ、はっきり言えばおまえを落ち着かす為に丁度良かったからだな」

「父上——」

口の中から唸り声が出そうになる。

だが、王は今しがたサインした書類を脇に放ると、筆を脇に置いて椅子に深く寄りかかる。視線はウィルフレッドに向いているが、視界には入っていないようだ。

口から衝いて出そうになった悪言を、王の顔になった父親を前からろろうじて飲み込む。

「実のところ、今回の戦争ははっきり言って、お互い終結の時期を見誤ったとしかいいようがない。あのまま二大国が動かなかつたら、いつまでもズルズルと続いて、さらに被害は広がっていただろうし、国庫は空になっていただろうな」

それに休戦とはいえ、このまま終結したいことも暗に仄めかしている。

そもそも戦争のきっかけは、パルミディアとヴェルセシュカの間を通る運河の通航権をめぐる始まったものだった。

それというのもパルミディアとヴェルセシュカ他、数多の国家を有するエリシュカ大陸の地形にも一因がある。東西を分けるセレンⅡアデリーナ運河と、南北に分けるヤドヴィガ山脈。大陸の南、運河を挟んで西にパルミディア、東にヴェルセシュカ。北はヤドヴィガ山脈である。大陸北方の国との貿易は、どうしても運河を通らなければ成り立たないのだ。

ヴェルセシュカは小国ながら商業国家として成り立っている。大陸を東西に分けるこの運河の通航権は、百年以上前からパルミディアが保有している。つまり、通航料を払わなければ北への入り口は開かないのだ。パルミディアにしてもこの通航権は国の重量な財源だ。法外な通航料を請求しているわけではなかったが、商人にしてみれば、少しでも諸費用は浮く方がいい。そういう不満から、運河沿いの街で小競り合いが始まり、次第にそれが国家間のものへと拡大していったのだ。

深々と溜息をついた王に、ウィルフレッドはハツとする。

「だが、愚かな輩もいるからな。カールは頭はいいが、結婚したところでパルミディアの王女を守ってやることは出来ないだろう」

「それは俺だって」

言いかけた言葉を、王は手を上げて止めた。

「ああ、別におまえには期待していないぞ。王女は才女だという噂だからな。自分の身ぐらい守るすべは持っているだろう。おまえは王女の手伝いをすればいい」

「は？」

ウィルフレッドは聞き間違いかと、首を傾げた。

今、おかしい言葉を聞かなかっただろうか。

どこに、敵国の王女を懐に入れ、自国の王子がその王女に手を貸さねばならないのだろう。そんな危ない真似をしるというのだろうか。

「つまり、カールは身体が弱い。もしも何かあった時、王女の味方は誰もいなくなるということだ。そこを馬鹿どもに狙われてみる。再び戦争が始まる」

どうやら早合点してしまったらしい。

「つまり、俺の方が健康だから？」

「はつきり言えばそうなるな」

あつさりと認める王に、やはりどこか腑に落ちないものを感じる。

「なんなんだ、その判断基準は……」

「そう言うな。王女は才女であるが、大層麗しいとも評判だぞ。良かったな」

何故良いのだ、と心の中で呟く。

「まあ、あと一年は自由だ。せいぜい遊ぶなり、清算するなりやることはやっておくんだな」

それが父親の言葉なのかと、愕然としながらウィルフレッドはパ

ルミディアの王女との婚姻を受け入れたのだった。

一年も経てばそれなりに覚悟も出来る。

ウィルフレッドの婚姻の噂は、あつという間に広がり、今まで関係のあった女性も離れていくものもいれば、遊びと割り切って——ただ単に、王子という肩書に魅了されているだけかもしれないが——変わらない女性もいた。それで充分だと思っていた。

実際、パルミディアの王女を最初に見た時、ある程度仕入れていた噂の通りの女性だとは思わなかった。

ヴェルセシユカでは珍しい黒髪。瞳も珍しい紫。だが決して冷たい印象を与えないのはその紫の中にオレンジの炎を宿しているからだ。肌の色は白く、それでいて健康的。知的なまなざし。顔は確かに美しい。だが、彼女よりも美しい女性は沢山知っている。

形式的な挨拶をし、一週間後に開かれる夜会まで会おうともしなかったし、向こうも会いに来ることもなかった。

だから夜会の日はいつもどおり、適当に遊んでいるつもりだった。パルミディアの王女も所詮は政略結婚だと思っているのだと思ったからだ。

だが、バルコニーに呼びに現れた時は正直驚いた。

最初は誰かに何かを言われて逃げてきたのかと思った。だがそうではなく、すぐにウィルフレッドを夜会に呼び戻すためだと気づいた。

ダンスに誘ったものの引き結んだ唇は固く、笑顔を無理に浮かべているその表情は冴えない。決してダンスも下手ではなく、彼女ほどの腕前ならもっと楽しんで踊ってもいいほどののだ。それほどこの結婚が嫌だったのだろうかとも思った。王族に生まれたのだから政略結婚は当たり前だ。この結婚が決まってから一年もあつたのだ。

とうの昔にウィルフレッドだつて受け入れている。

一曲目のダンスで止めようかと迷ったが、思いのほか彼女と踊るのが苦痛ではないことに気づき、迷っている間に次の曲が始まる。すると、自分を見上げる瞳と目があつた。

「嫌そう、って訳ではなさそうですね」

観察をしているつもりが、いつの間にか観察されていたらしい。

彼女の言葉が一体何を指しているのか分からず、少しの間考える。そして同じ立場にいる彼女ならばと笑みを向ける。

「それはあなたに対しても言えることだろう」

「ええ。それがわたくしの仕事だと思っています」
なるほど、と思う。

彼女もこの結婚を諦めたのか。

多少、意地悪な気分になつて問う。

「私はそうではないとでも？」

「いいえ。でも」

視線を彷徨わせて、彼女はためらいがちに口を閉ざす。だが、すぐ決心したように口を開く。

「……正直に話しても？」

「どうぞ」

軽い気持ちで促すと、彼女は慎重に口を開いた。

「あなたは女性に対して、かなりの博愛主義だとお聞きました。そのような方が結婚に縛られるのは不本意なのは、思っただけです」

噂をどう取つたとしても、それは一般論だつた。

だが、なかなか上手い言葉選んでくれたようで、少なくともウィルフレッドを傷つける意図はそこには感じられなかった。そこは素直に感心した。

「——博愛主義とは、これはまた……ものは言いようです。いい言葉を選んでくれたことにお礼を言つべきかな」

「違いましたか？」

じつと正面から覗きこまれ、照れも見せず、反らすこともない。

「まあ、悪くはない見解だね。だけど、私もあなたと同じだと思ってもらって構わないよ」

「つまり？」

「それが私の仕事だと思っている」

諦めはついているのです、と心の中で呟く。正直、彼女には悪いと思っている。

5・背後関係（何をお望みで？）（前書き）

今回もウィルフレッド視点です。

5・背後関係（何をお望みで？）

「ですが、あなたは……言葉が悪いのですけど……諦めているようにしか見えません」

思わず、ステップを踏んでいる足が止まるかと思った。

だが、彼女に動揺を気づかれることはなかったようだ。本音のところを彼女は知るはずはないのだと自らに言い聞かせる。

「これは失礼を。決してあなたが気に食わないとか、結婚が嫌だと思っているわけではありません」

紫の瞳が、ウィルフレッドの言葉を一言でも聞きもらすまいと見つめてくる。

この状況でなければ、完全に口説く体勢に入っているのだが。

「では、何に対して諦めているのかしら？ わたくしは別にあなたの主義に口を出すつもりはないのですけど」

彼女から婚約者としては有り得ない台詞を聞き、ウィルフレッドは目を見開いた。

つまり、浮気はいいのか？ パルミディアは一夫多妻制だったかどうかと記憶を手繰り寄せる。それならば、そういう環境で育っているなら耐性はあるうが、引き出してきた知識は一夫一妻制のはずだった。

思わずまじまじと王女の顔を見つめてしまった。

「姫は心が広いのか、それとも冷酷なのか……」

「どちらかというと後者かもしれませんね」

うつすらと浮かんだ微笑に、彼女が今までどのような環境の中で生活していたのかを垣間見たような気がした。

決して彼女は姫だからと、蝶よ花よと育てられたわけではないのだ。彼女のそのオレンジの明かりを宿す紫の瞳が、何を見てきたのか、ウィルフレッドは興味を覚えた。

だが、まだ彼女が何を考えているのかは分からない。才女と言われているし、この夜会での堂々とした態度を見ても、並みの姫ではないのは見てとれる。警戒をして悪いことはない。

「なるほど。私たちの間に愛情は必要ないと考えているのか」

少し話を逸らしてみる。

「必要に感じないだけです。そのようなもの無くとも協力は出来るでしょう？」

協力という言葉に首を傾げる。

悪くはない、が彼女のいう協力の意味が分からない。

取りあえず、一般論を持ち出してみる。

「それは、なかなか難しいと思うのだが」

「なぜ？」

彼女の瞳が少し揺れる。なにか考えているのだろうか。

「通常、同性ならば仲の良いものが数名集まれば友情というものが生まれる。だが、異性となるとただ仲が良いからと集まったところで友情にはならない。必ず独占欲というものがどこかに生まれる」

「それはあなたの主義上のことではなくて？」

「経験上、異性間の友情を目にしたことはないね」

彼女はその言葉に考え込んでしまった。どうやら彼女の中にその答えはなかったらしい。

どういう答えが返ってくるのかしばらく待つ。

「わたくしがあなたの主義を認める場合、……わたくしに独占欲がわくと問題なのね？」

予想外の言葉に、思わず笑みが浮かぶ。彼女が、自身で導き出した答えはどうやら不本意だったらしい。

ぎこちない笑みを浮かべている。

「取りあいは嬉しいけどね」

つい本音が出てしまった。

「あまりいい趣味とは言えないわね」

空耳とも取れる小さな声が反論する。

聞こえなかったことにして、結論を尋ねた。

「で？やはり愛情は必要ないと？」

「ええ。それより、話を戻しても？」

断言され、しかも冷静に話を戻された。

何気なく違う話に持っていくこうとしていたのに、どうやらうまく騙されてくれる気はないらしい。

「諦めているとかいつていた話？」

「そう、この婚姻を嫌がっているわけではないのだとすると、何に對して諦めているのかしら」

「……諦めている、という言葉が適切かどうかは別として、それでも敢えて当てはめるとすれば、私はあなたに對して何も出来ない、ということかな」

正直、力不足だ。

一年前、彼女との婚約が決まって、父である王より休戦をこのまま終戦に持つていく意向を聞いた。だがヴェルセシュ力では意外と議会の力が強い。決して王族を蔑ないがしろにしているわけではないが、もしも議会によって王が不適格と認められてしまえば退位しなければならない。それは色々な制限があり、滅多にあることではないが、長い歴史の中で無かったわけではない。そして、終結の時期を見誤ったと言ったのも、議会が終戦を認めなかったからだ。

だから議会は、二大国の手前表立って言いほしませんが、休戦の条件であるパルミディアの王女との婚姻は本心では反対であり、彼女の存在は邪魔でしかないのだ。

その議会から彼女を守ることが出来る自信は、今のウィルフレッツにはなかった。

リユーネリアは首を傾げた。

「……たとえあなたと結婚しても身の保証はないと言いたいのかしら？守ってもらおうなど最初から思っていないことだわ」

可愛らしく首を傾げている様は、本当にまだ十七歳に見える。し

かしその可愛らしい唇から紡がれる言葉はかなり現実的だ。

出来ることならもつと魅力的な言葉を囁いて欲しいものだとの心
片隅で思う。

「それは大した覚悟だ。だが、そう思うのならあなた自身が問題な
のではなく、こちらの事情だと言った方がいい」

「事情とは、何？」

「これは、知っているかもしれないが、今この場には来ていない兄
上——第一王子は、身体が弱く床に伏せていることが多い、という
ことに関係する」

背後関係以外に、もう一つ問題があった。多くを言えなかったが
彼女は察したようだった。

「では……」

その可能性に、彼女は口を閉ざす。代わりにウィルフレッドが口
を開いた。

「その場合、人質であるあなたの存在が、この国にとって邪魔にな
るのは目に見えている」

二つの意味で、彼女はこの国にとって存在自体が邪魔なのだ。

だが、そこまで言ってしまったては無駄に彼女を恐れさすことにな
りかねない。それはウィルフレッドとしては不本意だった。

「なるほど、ね」

「だから私は守るとは言えない」

口にしなから不甲斐ないと思った。ヴェルセシュカの王や二大国
はこの婚姻に望みをかけているというのに。

だから出来るだけ、彼女には自分に出来る限りのことをしようと
は思っていた。

「……結構よ。自分の身は自分でどうにかするわ」

「……」

何も答えられなかった。

絶句していると、彼女は気丈にも笑いかけてきた。

「意外でしたわ。思っていたよりもあなたは誠実なのね」

誠実ではない。でも薄情者にはなりたくなかったただけだ。だが口から出てきたのは、単なる気休めでしかなかったが。

「一応、可能性の話であって、目下あなたは私の婚約者だ」

いつもの調子で軽く言っていると、彼女は軽く眉をひそめた。

「その割には放っておかれた気がしますけど？」

「おや、と思う。どうやら淡泊な関係を望んでいても彼女なりに不満はあるらしい。」

ついからかいたくなって口を開く。

「私の主義を黙認するのでは？」

「もちろん口を出すつもりはないわ。でも婚約者だと言つのなら、それなりの扱いをして欲しいわね」

ウィルフレッドは気づくと、彼女との会話を楽しんでいた。

彼女の本音を聞くのは今しかないと思った。

「では何をお望みで？」

軽口を叩きながらも、彼女の瞳を覗きこむ。

しかし返事はなかなかつれないものだった。

「……そうね。取りあえず明日の午後、あなたの執務室を尋ねてもいいかしら？」

どうやら彼女はまだ自分と話すことを望んでいるらしい。焦らされた答えには、それ相応の返答をしなければならならいだろう。

「執務室には滅多に足を運ばないんだが？」

嘘である。補佐官にいつも押し込まれている。

「仕事は嫌い？」

好きではない。それならば女性と遊んでいた方がもちろん楽しいのだが、遊んではかりいると補佐官に怒られ、しばらく執務室での生活を強いられる。

「博愛主義者の私としては、ね」

補佐官の今までの仕打ちを思い出し、思わず無然とした返答になっってしまった。

だが、彼女は花が開くような笑みを見せた。

「ならば、執務室で逢引現場にいきあう可能性はないのね。安心して訪ねさせてもらっわ」

「分かりました。お待ちしておりますよ」

今度はどんな女性をも魅了してきた笑みを浮かべると、ちょうどダンスの曲も終わったところで、踊りの為に取っていた彼女の片手を口元に引き寄せる。手袋ごしだが、手の甲に約束の口づけを落とす。

周囲のざわめきが一層大きくなる。

微かに王女の頬に赤みが差しているように見えたのは気のせいだったのだろうか。

6・暗中模索（そちらの本心を教えて）

パルミディアから連れてきた侍女のニーナを伴って、執務室の前で警備についていた衛兵に名を告げると、連絡はいつていたようですんなりと通された。

部屋は落ち着いた色合いの絨毯に、重厚な執務机が窓を背にするよう置かれている。執務机の前には接客用のソファとテーブルが配置されていた。二階に位置するこの部屋からは、窓の外の美しく整えられた中庭が見おろせ、執務室にして上出来な空間だ。

ニーナを部屋の隅で控えさせ、リユーネリアは執務机について書類を覗んでいるウィルフレッドを見やる。

金の髪をぐしゃぐしゃにしながら眉間に皺をよせ、一人百面相をしている王子にリユーネリアは思わず笑みが浮かぶ。

「お邪魔いたします。ウィルフレッド様」

「あ、ああ……って、もうそんな時間ですか！」

どうやら時間も忘れて仕事に没頭していたらしい。というよりも、先ほどの百面相を見る限り、無理やり仕事をさせられているようにしか見えなかったが。山のような書類を前に、素の顔で立ち上がった王子は、慌てて顔を作ると机をまわって出迎えようとした。

リユーネリアはそれを手で制して、自らが歩み寄る。

「お時間を取っていただき、ありがとうございます」

「いや、私もあなたとゆっくり話をしてみたかったので、私の方こそ礼を言うべきではないかな」

もとより顔立ちの綺麗な人だ。笑みも気障つたらしくなくなかなか好感はもてる。が、生憎リユーネリアにとって顔の美醜は、元より気にならない性質^{たち}だったので、ウィルフレッドの会心の笑みもさりとかわす。

だが、先ほど声をかけた時にウィルフレッドが発した言葉に、リ

ユーネリアは頭を傾げてみせた。

「あの……、お昼は召し上がりになりましたか？」

「え……、ああ、いや」

言葉を濁す言い方に、リユーネリアは控えていたニーナに目くばせをする。

彼女はわずかに頭を下げると、部屋から出ていった。

それを見届け、リユーネリアは王子に向き直る。

「一人で仕事を？」

「いや、先ほどまでエリ阿斯——補佐官がいたのですが、書類の処理をしに行ってます」

「そうですか……」

リユーネリアは視線をまわし、目当てのものを見つけると歩み寄った。

「茶器を使わせていただいても？」

手を伸ばそうとして、ふとウィルフレッドを振り返った。

「それなら誰か呼びましょう」

執務机の脇に置かれた呼び鈴に手を伸ばしかけたこの部屋の主に、リユーネリアは慌てて首を横に振った。

「大丈夫です。お茶ぐらい入れられますし……、よろしかったらウィルフレッド様もいかがですか？」

「では是非に」

その返事にリユーネリアは笑顔で頷き、茶器を手を取った。

背中王子の視線を感じながら、茶葉の入った缶を開ける。その香りに満足し、ポットに適量の茶葉を落とす。

「生活に何か不自由はないですか？」

「皆良くしてくれています。今のところ、これと言って不便は感じておりませんわ」

湯を注いで茶葉を蒸らしながら、ウィルフレッドの質問に返事をしていく。

本当に今のところ不自由はない。最悪、人質として監禁生活を強

いられることも想像していたのだ。だが実際には、出入りを禁止されているところはないし、礼をもって遇されていると思う。だから、むしろ拍子抜けしたぐらいだ。だが、これがこちらの虚をつく作戦かもしれないし、油断は出来ないのだが。

湯で温めておいたカップに出来あがったお茶を入れて、執務机の前にある応接用のテーブルに運ぶ。カップを置くとウィルフレッドも執務机を離れてソファに腰かける。

二人同時にカップに口をつけて、ホッと息をついた。

「美味しいですね」

普通、女性ならここで謙遜でもして見せるのだろう。リユーネリアも一応にこりと笑ってみせた。そして口を開く。

「毒が入っているとかは、考えていらっしやらない？」

ためらいもなくカップに口をつけたウィルフレッドに多少の驚きをもって尋ねると、ウィルフレッドは軽く咳き込んでカップを皿に戻した。

少し涙目になって咳き込む王子に、リユーネリアは思わず口をういて出たこととは言え申し訳なく思う。

だが、少しぐらい警戒心を持ってもらいたいとも思う。自国だからだと警戒しないのは楽観的すぎだ。まして婚約者とは言え、かつての敵国の人間が入れたお茶を口にするなど、今現在かつて敵国だった場所で生活しているリユーネリアには考えられない。

ウィルフレッドは咳が治まると、大きく一つ息を吐き出した。こちらを見る表情が、昨夜の人当たりのいい作り物の顔とは違う。

「……腹の探り合いはやめよう。あなたの目的は？」

どうやら敬語もやめるらしい。確かに、時間の無駄だ。

ウィルフレッドの湖面のようなまなざしが、今は夏の海のように力強い光を帯びている。リユーネリアも手に持っていたカップをテーブルに置くと背筋を伸ばした。

折角、邪魔者が誰もいないのだ。さっさと本題に入った方が良さそうだ。

すつと息を吸い込み、口を開いた。

「一時的なヴェルセシュカとの休戦ではなく——終戦です」

相手の本意を確かめもせず、こちらの目的を話すのは愚かしいことかもしれない。しかし、ここはヴェルセシュカの国で、しかもその国の中枢でもある王宮だ。敵の本拠地のただ中、味方はパルミディアから連れてきた二ーナと数人の侍女で、二ーナ以外の侍女は結婚式が終わるとパルミディアへと戻ることになっている。そんな味方がいないも同然の状況では、いつ殺されてもおかしくないのだ。

昨夜の夜会でのウィルフレッドとの会話から、この王子が少なくともリユーネリアにとって味方ではなくとも、敵でもなさそうだと思うえたその直感を信じるしかなかったのだ。まして、こちらの手の内を見せないとウィルフレッドも本心を見せないような気がした。

じつと目の前の瞳を見つめると、反らされることもないまましばらく時間は経過した。

何を考えているのか。何を計算しているのか。

リユーネリアもウィルフレッドも、まるで相手の瞳の中に答えが隠れているのではないかと窺う。

が、ノックの音と共に扉が開き、二人ともハッとしたように振り返った。

「失礼し……」

言葉と共に、白金の髪をした二十代後半ぐらいの青年が入ってきた。だが、リユーネリアとウィルフレッドの間に漂う異様な雰囲気察したのか、一瞬言葉を切る。

だがすぐに、ウィルフレッドの座っているソファの横にやってくると、リユーネリアに向かって頭を下げた。

「失礼しました。私はウィルフレッド王子の執務補佐官をしておりますエリアス・グウィルトと申します。以後お見知りおきを」

リユーネリアもソファから立ち上がり、ドレスをつまむと膝を折る。

「リユーネリアと申します」

ゆつたりと微笑を浮かべて挨拶をすると、エリアスは再び深く頭を下げる。当然だが、きちんとリユーネリアのことを知っていたようで、その態度からはヴェルセシユカ側にリユーネリアを見下げるような態度は見えない。他国と外交する時、相手が自分たちのことをどのように思っているのかは、直接対話をする相手よりも、その臣下の態度を見れば分かりやすい。それも下に行けば行くほど、態度が本心を表しているのだ。それでいくと、今のところヴェルセシユカはリユーネリアを軽んじてはいないように思える。

エリアスは、手に持っていた書類をウィルフレッドの執務机に置いてからすぐに部屋から下がろうとした。

だが、ウィルフレッドが止めた。

「待て。おまえも話を聞いていけ」

「お邪魔をする気はありませんよ」

振り返って、それでも部屋から出ていこうとしているエリアスに、ウィルフレッドは首を横に振った。

「そんなんじゃない。いいから座れ」

有無を言わず、ウィルフレッドはエリアスを自分の隣に座らせ、やつとリユーネリアに向き直った。

二人のやり取りを黙って見ていたリユーネリアは、エリアスに視線を向ける。

白に近い金髪に、濃い青い瞳。顔立ちも秀麗だが、きついまなざしが近寄りがたい雰囲気を出している。ウィルフレッドよりも痩身で、確かに文官らしい雰囲気を持っている。

「すまなかった。話しの途中で」

ウィルフレッドの謝罪の言葉に、いいえ、と返し、リユーネリアは視線を補佐官へと向けた。

「グウィルト様」

「エリアスで結構です。敬称もいりません」

決して畏まることなく、昨夜の夜会の貴族たちのように美辞麗句を連ねないエリアスのきっぱりとした口調に好感を持つ。その態度

からも頭の固い貴族ではなく、柔軟な態度を取れる頭の回転の速い人だと窺える。

リユーネリアはその申し出に頷くと、では、と口を開く。

「では……、エリアス。ウィルフレッド様があなたの同席を許すということは、この話をあなたに聞いていただきたいということだと判断し、もう一度お話します」

視線をウィルフレッドに向けると、ウィルフレッドは頷いた。

「私の目的は休戦ではなく、終戦です」

ゆつくりと言い切ると、エリアスはちらりとウィルフレッドを見て、苦笑した。

「なるほど。こうも直接的にこられては殿下が困るのも分かります」

「あら、直接的過ぎました？ 腹の探り合いはやめようとウィルフレッド様に言われたものですから」

同意を求めてウィルフレッドを見やると、仕方なさそうに頷いた。

「……殿下、日頃から手に負えない事は、一人で突っ走るなど言っているでしょう」

「ああ、だからおまえを呼びとめただろう」

「……取りあえずこの人のことは放っておきましょう」

ひどい言い方だが、思わず笑ってしまう。

その見た目から冷淡な印象を受けたエリアスだったが、先ほどのリユーネリアとウィルフレッドの間に流れていた雰囲気を一気に和やかにしてくれた。ウィルフレッドは苦虫を噛み潰したような顔をしていたが、黙っているところを見ると、ひどいことを言われながらも、どうやらエリアスのことを本当に信頼しているようだった。

「姫。確かに、この度のご婚約は休戦の条件でした。無期限の休戦というものです。しかし、なぜ終戦と？」

言葉的には無期限の休戦と終戦とでは変わりないようなものだが、実際のところそうでないことぐらい、エリアスも承知しているだろうに。

リユーネリアは膝の上で両手を握りしめた。

まださらに、手の内をさらさなければならぬかもしれない。それはリユーネリアの弱みにも繋がっていく。だが、完全に敵ではないなら、味方に引き込めばいい。

意を決して口を開く。

「これはパルミディアの意思ではなく、私個人の意思であって公での終戦を欲しているわけではありません」

「では、その真意は？」

「それをお答えする前に、そちらの本心を教えていただければ、と思います」

そう言っ、リユーネリアはウィルフレッドとエリアスの二人を見据えた。

7・相互扶助（協力してほしいの）

「……だそうですよ、殿下」

「そうだな」

ウィルフレッドは、やれやれとソファの背にもたれかかり、天井を見つめる。

その瞳が態度とは裏腹に真剣で、リューネリアは黙って言葉を待った。

「ヴェルセシュカは王と議会で国が動くのは知っているだろう？」

「はい」

こちらを見ていないのであえて声に出して返事をする。

リューネリアの育ったパルミディアでも王の一存で政治がなされていたわけではない。大まかにいえば、各専門の機関があり、それぞれに長がいて、その彼らが議会に意見を提出して、議会と王が承認することによって国が動いていた。それはここヴェルセシュカでも、そう大した違いはなかったはず。

ウィルフレッドはちらりとこちらを見て、ソファから身を起こした。

「開戦をしたのが議会で、休戦を受け入れたのが王だと言えば分かるか？」

良く考えなくても分かる。王と議会の意見が分裂しているのだ。では、王子であるウィルフレッドの立場は、今までの態度から鑑みても王と同じと考えてもいいのかもしれない。

ウィルフレッドは自分の立場を明確にしたが、それだと再び議会が開戦することを決めれば戦争が始まってしまうのではないだろうか。不安に思っただけ顔を上げると、ウィルフレッドはリューネリアの言いたいことを察したのだろう。首を横に振った。

「まだ国庫は回復していないし、傷ついた兵士たちも回復しきっていない。肉体的にも精神的にもだ。だから、十年は無理だろう」

「十年？」

ヴェルセシュカの弾き出した国の回復には十年かかるというのか。だが、それはパルミディアも似たようなものだ。

リユーネリアの呟きに近い疑問に、ウィルフレッドは律儀にも肯定を返してくれた。

「そう、十年」

それ以上かもしれないし、それ以下かもしれない。

しかし、それだけの時間があれば何かが出来るはずだ。

今までウィルフレッドの説明を黙って聞いていたエリアスが、それで、と口を開いた。

「姫の本心は？」

尋ねられ、リユーネリアは無意識にドレスを握りしめていた。

言わなければならぬだろう。ウィルフレッドは自分の立場を教えてくれた。誠意には誠意で応えなければ。

意を決して、二人を見つめる。

「……協力をしてほしいの。私の目的は、ヴェルセシュカでの『絶対的な地位と権力』」

王子妃にその地位と権力がないわけではない。王族の一員として一際敬意は払われる。^{ひときわ}表面的には。だが、リユーネリアが欲しているのは肩書だけではない。その実を伴ったものだ。ただ王子の隣に座っているだけの地位が欲しいのではない。

「これはまた、大きく出たな」

「なかなか豪胆な姫のようですね」

一つ意味の取り方を間違えれば、玉座を狙っているように思われたかもしれない。だが、呆れたようなその口調からは二人がリユーネリアの本意を汲み取ってくれたことがわかりホッとすると同時に、どこまでも本気であることを伝えたかった。

たった一人で出来ることではない。誰かの——ヴェルセシュカ側の誰かの協力がないと無理なのだ。

「分かっているのか？あなたの欲するものが、どれほど危険なもの

か」

ただでさえ命を狙われる可能性が高いのに、そんなものを手に入れば、どれほどその危険性が増すのか。しかし、ずっと考えていたことだ。だが、リユーネリアの命と最終的な目的を秤にかけた時、目的の方に傾いてしまった気持ちは今更変えられない。

だから、リユーネリアはウィルフレッドに頷いて見せた。

「あなたは私を守らないと言ったわ。だとしたら、自分の身を守るだけの権力を手に入れなければならない。この国に必要なだと認められなければ、自分の身は守れないわ」

きっぱりと言い切ると、エリアスが隣に座っている王子に氷のよう眼差しを向けた。

「殿下……。あなたは仮にも婚約者になんてことをおっしゃるんですかっ」

「い、いや、守らないとは言っていない！守るとは言えないと言ったんだ」

慌てて弁解を始めようとするウィルフレッドに、補佐官は容赦ない言葉で切り捨てた。

「ここでああなたの腑抜け具合を自慢してもしようがないでしょう！」「自慢はしてない！」

つかさず言い返すが、勢いでは完全に負けている。

「馬鹿ですか、あなたは！不安を取り除いてあげるのが婚約者の役目でしょうが！不安にさせてどうするって言っているんですよ！」

と、言い争っている二人を尻目に、扉がノックされた。その音にも気づこうとしない彼らを見て、リユーネリアは取りあえず今日のところの話は終わりだと判断し、扉を開けるために腰を上げた。

扉を開けると、そこにはニーナを先頭にヴェルセシユカの数名の侍女がワゴンについて待っていた。

ふわりと温かな料理の香りに、心が落ち着く。部屋の中からいまだ言い争っている声に訝しげな顔をしている侍女に、リユーネリアは苦笑してみせた。

侍女たちに入室を促し、食事の準備をしてもらった。

時間が時間なだけに軽めの食事だ。温められたスープとパンに肉や野菜を挟んであるもので、どうみても軽食だ。昼食を食べていない話しはどうやら上手く通じなかったようだ。

それにしても、王子の食事管理ぐらいきちんとしていそうな補佐官に見えたのだが。

「これは姫が？」

視線を向けた先にいたエリアスに、逆に驚きの眼差しを向けられた。

「ええ、お昼がまだだとおっしゃってましたので……」

勝手をしてしまいましたと告げると、エリアスが丁寧に頭を下げた。

「お気づかい感謝します」

きつと真面目な人なのだろう。そして先ほど言い合っていた言葉は酷いものではあったが、あんなにも言いたいことを言えるのはウィルフレッドのことを、彼も本当に信頼しているからに違いない。

ニーナと侍女たちには部屋から下がってもらった。取りあえず、ヴェルセシュカにも休戦を支持する人間がいることが分かっただけでも上出来だし、ましてこの二人がそちら側の人間なら、なおのことで目的に一步近づいたともいえる。それに、彼らにとってもパルミディアの王女は、ヴェルセシュカの戦争反対を掲げる者にとっての駒になるのだ。手を組むことは出来るだろう。

エリアスは執務机に近づくと、決裁の箱を覗きため息をこぼす。どうやら彼が思っていたほど仕事は捗^{はかど}っていないかったらしい。わずかに数枚の書類を手にとると、再び退室していった。

リユーネリアは執務机の窓の向こうに視線を向けた。

中庭は格別に美しかった。

中央に噴水がつくられ、左右上下対称に作られた庭は丁寧に計算され、いつの時期でも花を楽しめるようになっていた。

パルミディアでは見たこともない花が咲いていて、リユーネリア

の興味を引いた。

「さっきの話は……」

ソファに腰かけたまま食事をしていたウィルフレッドが、遠慮がちに声をかけてきた。

振り返ると、彼は食事の手を止めたままこちらを見ていた。

「なぜ、そんなものが欲しいのか聞いても？」

まっすぐに見つめるその瞳に、リユーネリアは思わず苦笑した。先ほど、その理由を口にしたはずだが、ウィルフレッドはどうやらリユーネリアがあえて言わなかったことを何となくだが気づいているようだ。

「自分の身を守るため、とは信じてくれないの？」

それでも嘘を吐いてしまう自分は、いつからこんなに荒んでしまったのだろうか。そしてそれに慣れて、嫌悪しなくなった自分はいつからいるのだろうか。

「いや、昨日はすまないことを言ったと思う」

先ほどのエリアスの台詞が引っかかっていたのか、ウィルフレッドは素直に頭を下げた。それにはリユーネリアも素直に応えた。

「いいえ。このことは前々から考えていたことだから。それに、夫となる方が協力してくれるなら、そのほうがいいでしょう？」

違いますかと首を傾げると、ウィルフレッドは逆に言い淀んだ。

「……俺がもし協力しないと云っていたら？」

「……その時は、協力してくれそうな人を見つけるまでよ」

あくまでも淡々と答えると、ウィルフレッドは少し落ち込んだように見えた。

彼は正直者だ。昨夜とは別人のように見える。ここが他人のいない空間だからなのか、それとも昨夜は他人がいる空間だったから仮面を被っていたのだろうか。

昨夜とは違い、現在のウィルフレッドの身にまとう雰囲気はどこか人を油断させる。昨夜も一瞬だったがリユーネリアに本音を話させていた。そして今も気づくと、別に話す必要のないことを口にし

ていた。

「私には目的、——いえ、願いがあるの」
思いが頭の隅を過る。

リユーネリアの手に入りたいものと願いは直結している。手に入れたいもの、それが自分の身を守ると同時に願いも叶えられることになる。

「あなたも知っているでしょうけど、私には年の離れた弟がいてね。母が早くに亡くなったものだから、私が母親の代わりになってよく面倒を見ていたの。ライオネル——レオは次のパルミディアの王になることが約束されているわ。大切な——たった一人の弟よ。生まれた時から戦争で、やっと休戦で国内が安定に向かうところでしょう。もう、戦争なんて起こって欲しくない。弟には平和に国を治めてほしいだけ」

戦争になれば国が乱れる。長くなれば長くなるほどその乱れは酷くなる。リユーネリアはその乱れを直接この目で見てきたのだ。権力を持ったものの身勝手さで、泣くのは力の弱い者たちだ。王族とはいえ、まだ子供であるライオネルに権力はない。パルミディアの国王である父が健在であるためまだ守られているが、もしも今、父に何かがあればライオネルは大人達に玩具のように扱われてしまうだろう。それだけはさせたくはなかった。

目を閉じて失笑する。

「口では国のためだとか、王族の務めだとか言ってるけど、本当は……とても個人的な願いだってことは分かってるわ。でも、それでも私に絶対的な権力があれば、このヴェルセシユカからの戦争を止められると思ったの」

身を守るのはついでの、と付け加える。

黙って聞いていたウィルフレッドは、それを聞いて何を思ったのか——。

再び食事を始めた王子からは返事はなかった。

8・才色兼備（つい癖で……）

返事が欲しかったわけではなかったの、リユーネリアもそのまま黙っていた。

だが、しばらくしてウィルフレッドが再び食事の手を止めていることに気づいた。

「……以前も話したが、兄は身体が弱く、今ではほとんど自室から出ることはないが、昔は今よりはもう少し丈夫だったんだ。兄は頭が良く、人当たりもよくて、誰からも好かれていて、次の国を担うものとして皆から期待されていた。俺も兄を尊敬していて、兄のようになりたいと思っていたよ。だが、戦争が激しくなるにつれ議会との軋轢も酷くなる一方で……、兄が倒れるまで兄の身体に限界がきていることを誰も気づかなかった」

遠くを見つめるその瞳は壁に向けられていて、ウィルフレッドは無表情に近い。だがどこか悔恨が見えるような気がした。

「だが兄は体調が落ち着くと自ら率先して戦場に行った」

まるで生き急ぐように見えたウィルフレッドは続けた。王太子が何を思っただろうとしたのか、ウィルフレッドは何度も問うたが教えではもらえなかった。そうこうするうちに結局、王太子が命を落とすことなく休戦することとなったが、ウィルフレッドの中には戦争に対する疑問が残ったと告げられた。

「戦争をする必要が本当にあったのだろうか」

言われた言葉に、リユーネリアは首を軽く横に振った。

「それは……今更言っても仕方のないことだわ」

仕方がなくても言いたくなることはある。それは十分に分かっていた。

そのカール王太子から、ヴェルセシュカに来てすぐ手紙と花束を貰ったことを思い出す。体調が優れずに出迎えも出来ずに申し訳な

いという謝意と、心のこもった歓迎の言葉が丁寧に綴られていた。形式的なものであるうとは思っていたが、ウィルフレッドの王太子を慕う言葉を聞いたからだろうか。それだけで王太子に対する見方が変わっていく。

ふと、視線を執務机の上に向け、何気に書類を手にとった。

戦時中、休戦を迎える一年ぐらい前まではパルミディアの国王に代わって内政のことに關しての決裁を任されていた。だからリユーネリアはほとんど無意識に書類を分け始めていた。

執務についた頃、リユーネリアも書類を山のようにして、幾日も徹夜をした頃があった。しかし、やり方一つで書類の山が早く減ることに気づいたのだ。それが無意識に身につき、ほとんどカンと言っても良いほどのもので以て三つの山に分けていくのだ。

一つは即決裁。

一つは再考。

最後の一つは確認事項を含む書類。

こうすることで、即決裁の書類は素早く処理され、再考書類も返却される。確認事項を含む書類に關しては、相談しながら決めていけばいいだけで、それだけで時間の無駄が省かれる。

「何をしているんだ？」

ふと気づくと、側にウィルフレッドが立っていて、リユーネリアの手元を覗いていた。どうやら食事は済んだらしい。

しまった、と思ったがあの祭りだった。

他国の決裁書類を勝手に見てしまっていないものではないことぐらい、リユーネリアにも分かる。つい癖で分けてしまいましたという言いわけが通るものではない。

ウィルフレッドを見上げ、頭の中が真っ白になってしまった。

「なぜ三つに分けるんだ？」

だがその声は責めを問うものではなく、単なる疑問だった。瞬き、取りあえず説明をする。

自分がやっていた時はこの方法が早かったし、つい癖で書類を手

に取ってしまった、と。

「ごめんなさい」

謝って書類をウィルフレッドに渡そうとしたら、続けてくれと言われた。いいのだろうかと言類を分け始めると、ウィルフレッドは机について、決裁書類に手を伸ばした。

何枚かめくつて、筆を取る。そしてサインをしていく。

それを横目に見ながら、リユーネリアは三つの山を作っていく。手元の書類がなくなり、決裁書類のみをウィルフレッドに渡し、再考書類を脇に置く。確認事項のある書類を手に取ると、一枚一枚確認していく。まだ、ヴェルセシカの国政がどのようなものなのか把握しきっていないため、決裁書類より確認書類の方がはるかに多い。しかし、もう少し慣れてくれば決裁に回せそうなものが増えるに違いない。

それに、良く見るとこれらの書類は地方から上がってきたものが多いように思える。ウィルフレッドが国の中枢に直接携わっている部分は少ないようだ。

しばらくして決裁書類にサインを終えたウィルフレッドは、筆を置くと今度は再考書類を手に取った。取りあえず目を通してながら、リユーネリアに疑問点を聞いてそれを再考するものと確認するものに分けていく。

リユーネリアが次に確認書類をウィルフレッドに渡すと、疑問に思ったことを一点一点口にした。

それに答えてもらいながら、それを再び決裁と再考書類へと分けていく。

こんなことをしていいのだろうか、疑問に思いながらもそれでも書類は時間と共に片付いていく。

残りもわずかとなった頃、エリアスが戻ってきた。

「失礼、お邪魔でしたか？」

気づくと、リユーネリアもウィルフレッドもかなり密着して書類を見ていた。

どうしても同じ書類を覗きこむのだから、その点は仕方がない。意図的ではないにしても、意識していない分には何とも思っていない。リユーネリアだったが、意識してしまうと途端、恥ずかしくなる。

スツと身を引き、距離を取るとエリ阿斯に見抜かれ、かすかに笑われた。

一方、ウィルフレッドは視線をエリ阿斯に投げると、自慢げに口を開いた。

「優秀な補佐官殿が邪魔しなければ、もう少しでこちらも終了していただころだ」

「何が終了なんですか？遊んではかりおられないで――」

言って近づいてくるなり、机の上の書類の山の変化に気づいたようだ。

すでに決裁はほとんど終わり、再考書類も脇にのけてある。ウィルフレッドの手元には、あと二、三枚しか書類は残っていない。

「ちよつと待つてろ。もう少しで終わる」

言うなりリユーネリアは呼ばれ、先ほど疑問に思っていた説明を促され、気まずいながらも書類を再び覗きこむ。そして、説明しながらその書類の不備や疑問点を指摘する。

茫然としているエリ阿斯は、ウィルフレッドの終了の声にハッと身を震わせ、目を吊り上げた。

「まさかあなたという人は、姫に手伝わせたのですか！」

ぎよつとして、リユーネリアはエリ阿斯に声をかけた。

「すみません。つい癖で手を出してしまったのです」

「癖？」

さきほどは軽く流したウィルフレッドだったが、仕事の終わりが見えて余裕が出たのだろうか。怪訝な顔をする二人に、リユーネリアは説明をした。

「はい。こちらに来るまでパルミディアでは国内の決裁は全て私に任されていたものですから」

「姫が!？」

ウィルフレッドとエリアスの声が見事に重なり、その声音に思わず首を竦める。

しばらく補佐官に見下ろされていたリューネリアはいたたまれなくなつて、そつとウィルフレッドの側を離れる。が、当の本人に腕をつかまれてそれも叶わなかった。

「もし良かったら、明日からも手伝つてくれないか？」

「は？」

「え？」

今度はリューネリアとエリアスの声が重なつた。

何を言い出すのだこの王子は。無理に決まっているではないか。

だが、悪戯を思いついたような顔をした王子を見て、目を瞬く。

「良い案だと思つけど？まさに協力には協力で返す？つて感じで、これは姫の地位を築く第一段階になるんじゃないか？」

一理ある。だが横から飛んだ補佐官の冷やかな声は当然却下だった。

「実は姫が決裁していました、つて？」

イライラとした声がエリアスの口から出てくるのを聞きながら、ウィルフレッドの言葉を一考する。

確かに、ウィルフレッドの手伝いをしながら、ヴェルセシユカの国政を勉強するのは良い手段だろう。だが、リューネリアが決裁したなどと噂が立てば、地位どころの話ではなくなるのではないだろうか。むしろ、王子であるウィルフレッドの地位が落ちて話しにはならないような気もしないが……。

「ちがうちがう。そんな俺の馬鹿っぷりを披露するんじゃないで、姫が手伝つことによつて得る俺の利益を考えれば間接的にも姫の地位向上には役に立つだろう？」

そう言つ考え方もあるかもしれない。

多少、勢いの落ちたエリアスが唸り声を上げる。

「それはそうですが……。あなたは仕事をしたくないからそんなこ

とで煙に巻こうとしているのではないでしょうね？」

「いや。姫が手伝ってくれば、なかなか仕事も楽しいかもしれないね？」

本心なのかどうなのか。あまりに軽々しい口調にリユーネリアは眉根を寄せた。

ウィルフレッドの言う考えは悪くはない。確かに、第一段階としては情報さえ操作できれば良い方だと思う。

しかし……。

エリアスを見上げると彼も同じことを思っていたのか、リユーネリアが口を開かないのを見てとると、深々とため息を吐きながら口を開いた。

「それにはやはり問題があります」

エリアスのこめかみが、わずかに引きつっているように見えるのは気のせいだろうか。

「なんだ？」

「せめて、婚儀が済んでからにして下さい」

「は？」

「まだ、姫はパルミディアの人間です。ヴェルセシュカの国政に携わるのはそれ以降になさるべきです」

正しい忠告だとも言える。

リユーネリアもウィルフレッドを見て頷く。

しかしウィルフレッドは何を思ったのか、掴んでいたままのリユーネリアの腕から手を滑らせ、指先を掬い上げると、そこに口づけを落とした。

突然の事に、リユーネリアは息を止めた。昨夜のように今日は手袋をしていない。指先に触れた、温かく柔らかな感触に、思わず体中に力が入る。

「では、明日は昼食を一緒に取ろう」

「……はい」

何とか声を絞り出し、手を取り戻すと距離を取って礼をする。

何か言わなければならないのかもしれないが、頭の中が真っ白で言葉が出てこなかった。

どうやって自室に帰ってきたか思い出せないほど、リユーネリアは混乱していた。

9・華燭之典（遊ばないで下さい）

「……ニーナ。ねえ、ニーナってば」

寝台の上でうつ伏せになり、足をバタバタさせながら、リユーネリアは明日の準備と確認をしている侍女を呼ぶ。

彼女はリユーネリアが五歳になった時から仕えてくれている侍女だ。この度、ヴェルセシユカに嫁ぐ身となったリユーネリアの為に、国を捨ててまで付いてきてくれた彼女は、姉のような存在で家族のようなものだ。

そんな彼女の前では、気心が知れている分だけ、王女でいる必要がなくなる。

今は他の侍女はいない。明日にはこの一カ月を過ごした部屋を引き払う為、そして彼女たちはパルミディアへと戻ってしまう為、荷物の片付けもあるだろうからと今日は早めに引き揚げさせたのだ。だから、こんな恰好をしていられるのだが。

「なんですか、リユーネリア様。子供みたいですよ」

呆れた眼差しを向けられ、バタリと足を下ろす。

明日、ついに婚姻の儀を迎える。

なんとか無事にこの日を迎えることが出来た事を喜ぶべきなのか、どうなのか、悩むところだ。今まで無事だったのは、二大国のおかげと言えるが、果たして無事に成婚となったからには刺客がいつ舞い込むとも限らない。

「私、いつまで生きていられるのかしら……」

決して悲観しての言葉ではない。先の見えない未来は、本来なら花嫁が思い描くだろう幸せを、ただ他人事のように感じてしまうのだ。

「大丈夫ですよ。いくら不甲斐ないといってもウィルフレッド様はこの国の第二王子です。リユーネリアさまの目的を達成する踏み台

ぐらいにはなつて下さるでしょう」

慰めにもならないような、王子を王子とも思っていない慰め方に、リユーネリアはため息交じりの苦笑を零した。

侍女にまで不甲斐ないと思われるまうとは。

可哀想だとは思うが、果たして本当にただのお馬鹿さんなのか、まだリユーネリアは見極め切れていなかった。あれから何度か食事をしたり、お茶をしたりと話す機会を何度か設けた。その時の会話の端々からも感じたが、決して頭の回転は悪くないと思う。面倒くさがりなところもあるが、やり始めた事はやり遂げる種類の人間だと思う。

多分、補佐官が切れ者なのだと思う。その影に隠れているため、目立っていないだけなのではないかと思うのだが、言いきれないところが痛いところだ。

「結婚……か——」

リユーネリアにとってはまさに命をかけた結婚だ。

聞こえはいいが、そこに本来あるべき愛情は無い。

ウィルフレッドの博愛主義は健在だ。それを兎角いうつもりはリユーネリアにはない。ただ、協力関係であることが肝心であり、それ以上を望むことはない。

「さ、もうお休み下さい。明日は大変な一日になりますので」

ニーナの言葉に素直に頷く気にはならなかったが、確かに寝不足で目の下にクマがある花嫁など無様である。ましてそれがパルミディアの姫として民衆の前に立たなければならないのだ。みつともなくは祖国に申し訳ない。

しづしづ布団の中にもぐりこむと、ニーナが明かりを落としてくれた。

「おやすみなさい、ニーナ」

「おやすみなさいませ、リユーネリア様」

寢室の扉が閉まる音とともに、ニーナの気配が部屋から消えた。

眠れそうにないと思っていたリユーネリアだったが、ここ最近の疲れが出たのか、ほどなく眠りの中に引き込まれていった。

神前での誓約後、リユーネリアは命を狙われることなく無事、成婚の祝宴へと出席することが出来た。

かなりの緊張を強いられてはいるが、主役であるため気は抜けない。しかし、今回はずっとウィルフレッドが側にいるため、命を狙うこと自体、難しいことであろう。邪魔なのはリユーネリアであって、ウィルフレッドが邪魔なのではないのだから。もちろん、その点も踏まえて警備も万全に期しているらしいが……。

隣に立つ今では夫となったウィルフレッドを見上げる。

手は常に彼の左腕に添えられている。しかもなぜかその手の上に彼の右手が乗っていて離れない。ちよつとした用で離れなければならぬことがあっても、側に戻るとすぐに手を取られ、同じ位置に添えられる。

これは仲が良いフリをしているのだろうか。

疑問に思っ てじつとウィルフレッドの腕に添えていた自分の手を見ていると、頭上から声を掛けられた。

「疲れしましたか？」

「……ええ、少し」

必要以上に近いような距離に、わずかに及び腰になりながら答えると、断りを入れながら人の輪から抜け出てくれた。

人もまばらなバルコニーに連れて来られ、ほつと一息つく。

歓迎の夜会から一カ月ほど経ったが、夜風は温かくなってきたようだ。あの夜は、晩春だというのに風が冷たいと思った記憶がある。しかも、今夜はどこかで花が咲いているのか、甘い香りがただよっている。

眼下に警備の者が人目につかないようそつと佇んでいるのを尻目に、リユーネリアは遠慮がちにウィルフレッドを見上げる。

「あの……」

「なに？」

視線を、彼の腕に絡めたままの自らの手に向ける。

「……手を離してもらえないかしら」

「離して欲しいの？」

手袋の上からそつと撫でられて、一気にその場に熱が集中する。

「離して欲しかったら、振り払ってもいいよ」

この場で、博愛主義者の手法を発揮しないで欲しい。

いたたまれない。

もし今、振り払うような暴挙に出ると、あまり喜ばしいことにはならない噂が立ちそうだ。人は少ないとは言え、視線は今日の主役たちに常に注がれている。少なくとも、ウィルフレッドやエリアスはリユーネリアに出来る限りの協力を約束してくれた。地位と権力を望むなら、やはりウィルフレッドと仲がいいところを周囲に見せれば、迂闊にリユーネリアをさげすむようなことを言う者はいないだろう。これは一種の牽制だ。結婚したからには、リユーネリアはすでにヴェルセシュカの王族なのだ。ウィルフレッドがリユーネリアを大切にすることとは、ヴェルセシュカの王族から受け入れられたということになる。これは大切な第一歩とも言えるだろう。

このことは、彼らとも話しあった結果、リユーネリアも承諾したことだった。

だが、何なのだろう。この豹変したようなウィルフレッドの態度は。

こうやって女性を陥落させるのか。

妙に冷めた目で見ている自分と、打算で振り払えないリユーネリアの目の前で、ウィルフレッドは自らの腕に乘せていた手をいつものように唇へと運ぶ。貴族間では淑女への挨拶でもある行動なのだが、彼の口づけはいつもより長い。

そつ、普通の淑女ならば目の前で、この見た目だけはいい王子の挨拶を受けようものならうつとりとでもするのだろうが、リユーネ

リアにとってこれは苦行でしかない。

パルミディアでもこの挨拶は主流だが、戦争で夜会などのパーティは控えられていた。しかも、いつも執務室で内政を仕切っていたリユーネリアは、公務でそこまで対外的な活動をしていたわけではなかった。つまり、慣れていないのだ。

あまりのいたたまれなさに、手に思わず力を込めた。いつそのこと、このまま手を振り払ってしまいたい。

だが、一瞬のためらいを見破られ、ウィルフレッドに手を握られる。そしてそのまま腕を引かれて、彼の腕の中に閉じ込められてしまった。

思わず叫びそうになって、慌てて口を押さえる。

この人は心臓に悪い。仲が良いところを見せるといっても、ここまですなければならぬのだろうか。

「ウィフルレッド様！」

小さな声で非難する。

「仲のいいフリだよ」

耳元に小声で返され、思わず言葉に詰まる。

だが、笑いを含んだその声に、リユーネリアは気づいてしまった。「わたくしで遊ばないで下さい！」

「役得だよ」

キツと見上げると、綺麗な笑みを浮かべていた。しかも、とても楽しそうに。

これを周囲から見たら、どのように見えるだろうか。さぞ、王子は幸せそうに見えるのではないか。そして実際、恥ずかしがっている姫は恥じらっているように見えるのか。

あまりの事に愕然とする。

「この際、キスでもしとく？」

調子に乗って頬を撫でてくる王子に、リユーネリアは低い声で応えた。

「張り倒さないという自信がありませんわ」

「それは残念」

台詞の中身とは逆に別段、残念そうに見えないウィルフレッドの顔から笑みは消えない。

ああ、そうなのかと気づく。

最初の夜会の時も思ったことだ。この人は、人前に出ると完璧な王子の仮面をつける。執務室にいる時や昼食を一緒に取った時などは、もっと砕けた感じで、はっきり言ってしまうえば不甲斐なく感じてしまうことが多い。だが今は完全に『王子』だ。普通に考えるなら執務室にいる時の方が本来の彼なのだろうと思えるのだが、違うと思った。ここまで完璧な仮面をつけられるものではない。

じつとウィルフレッドを見上げていると、微笑を浮かべたままの彼に頬を撫でられた。

ハツとする。

「隙を見せたら駄目だよ」

そうだった。ここには見えない敵が沢山いるのだった。

「ごめんなさい」

「いや、分かってないみたいだけどね」

最後の方は小声で、室内から流れてくる音楽によって、リユーネリアの耳までは届かなかった。

その後、しばらくして再び会場へと二人は戻った。

結局、バルコニーに出ている間も手を離されることはなかった。

10・大義名分（覚悟は出来てる？）

成婚の宴も、日付が変わる頃にはお開きとなり、つまるところ、リユーネリアにとつてはあまり喜ばしくない事態を迎えていた。

いや、覚悟はしていたというか、当然と言えば当然の流れなのだが、正式に王子妃となつて新しく移った部屋の寝室は夫婦共同。私室は、寝室からそれぞれの部屋へと出られるようになっていらい。

新しくリユーネリアに付くことになつたヴェルセシユカの侍女たちとの挨拶もほどほどに、寝支度を整えられて寝室へと押し込められたリユーネリアは、その場に当然のようにいたウィルフレッドを見て凍りつく。

いつもよりぐつと碎けた格好のウィルフレッドは、ガウンを羽織つて寝台の隅に腰かけていた。

「覚悟はできてる？」

その言葉に、勢いよく首を横に振る。

「無理です。というか、子供を作ることとは当分控えさせて欲しいです」

真剣に訴えると、ウィルフレッドは面白そうに笑い、首を傾げた。
「なぜ？」

「もし子供が出来ても、地位と権力がないと守る自信がないから」
「いつかは子供を産まなければならないことは、知っている。今は逃げているだけだということも、分かっている。」

「まずは、あなたの欲しているものを手に入れてから？」

「はい。勝手を言つて申し訳ないのですが」

「いっぱいいっぱいな自分の心を情けなく思いながら、頭を下げる。でも、逆も言えるよね。子供が出来れば狙われなくなる可能性も」

ある。ヴェルセシユカの王族の血を引いているのだから」

確かに、そういう考え方も出来る。それも考えなかったわけではない。

だが、子供を産みさえすればまさに用なしになるのではないだろうか。むしろその方が怖い。子供を人質に取られてしまえば、多分というか絶対にリユーネリアは身動きが出来なくなる。子供を持つたことがないリユーネリアではあったが、子供を弟に置き換えて考えれば、身がすぐむような恐怖に胃が痛くなりそうだった。

それを素直に口にする、ウィルフレッドは笑いながら頷いてくれた。

「それでは、決めよう。一応、夫婦となったからにはどこまで触れてもいいか」

「触れる？」

不可解な言葉に頭を傾げる。

「そう。人前で出来るだけ仲良く見せる方がいいだろう？」

そう言うことかと納得する。

確かに、夫婦らしく見せることは必要だ。それは側にウィルフレッドがいて、必要以上にリユーネリアが警戒しては仮面夫婦だということがばれてしまいかねない。宴の間中、ずっと腕を気にしていたぐらいだ。多分、それぐらい慣れなければいけないという意味なのだろう。しかし、どこまで、とは？

眉間に皺を寄せたまま、再び頭を傾げる。

「どこまで——、とは？」

真剣に尋ねると、ウィルフレッドは途端、吹き出した。悪いと思ったのか顔を背けたが、堪えようとしているのだろう。逆に肩が震えて、笑っていること自体が隠せていない。

「……あの？」

真剣に尋ねているのに、この態度は何なのだろう。おかしいことを聞いただろうか。だが、いつまでも震えている背中に、次第に腹が立ってくる。

宴の時も、ウィルフレッドは余裕をもってリユーネリアで遊んでいるように見えた。確かに、こちらの方面に関しては、博愛主義者のウィフルレッドにとってどうっていうこともない遊びでしかないだろう。だが、リユーネリアにとって不得手なのだ。こちらは真剣なのに、それをからかって遊ばれるのは釈然としない。

ムツとして余所を向く。

肝心のウィルフレッドが笑っていては話しにもならない。

と、しばらく無言でいると眉間を軽く押され、すぐ側にウィルフレッドが来ていることに気づく。

その目元はまだ笑っている。

「私で遊ばないで」

「遊んでいないよ」

「でも——」

文句を言いかけたところで、ウィルフレッドの人差し指がリユーネリアの唇を軽く押さえた。

「試してみよう。あなたがどこまで許してくれるのか」

「????」

唇を離れた手が、リユーネリアの手をすくい上げた。

いつもの挨拶と同じように手の甲に唇が押し当てられる。その時間は長くもなく離れたと思ったら、今度は手のひらを返され、手首に口づけられる。

ぎよっとして手を引っ込めようとしたら、バルコニーに出た時と同じように引き寄せられて、ウィルフレッドの腕の中に閉じ込められた。勢い余って胸にぶつかる。

今はドレスも着ていないのでコルセットも当然していない。とういうことは、背中に回された腕の感覚がより肌に近い。やわらかい柑橘系の香りがふわりと鼻をかすめ、頬にあたる固い胸板も、体温もすぐ近くに感じ、思わず身を引き剥がそうとした。

「もう無理？」

笑みを含んだ台詞にどこか挑発的なものを感じ、リユーネリアは頭上を見上げ、キツと睨んだ。

だがそこにあつたのは、静かな湖面のような瞳で、決してリユーネリアを挑発するようなものではなかった。

確かに、眼福という言葉はある。こんな身近でここまで整った顔を見る機会はなかなかないだろう。金色の髪は無造作に梳かれているが、それでもウィルフレッドの美貌を損なうことはない。

じつと眺めていると、ウィルフレッドはリユーネリアの髪を一房すくい上げ、まるで手の甲への挨拶のように口づける。だが髪はリユーネリアの意識に従うかのようになり、手の中から滑り落ちて逃げていく。が、それは逃げたのではなく意図的なもので、リユーネリアが意識をそちらに取られていると、額に温かい感触を感じ、次は瞼へ、頬へと移動する。

なされるがまま、頬を撫でられ、そのまま顎を持ち上げられて、瞳を覗きこまれた。

ゆっくりと近づいてくる顔と、睫毛の長さに内心感嘆しながら、現状に我に返る。非常にまずいのではないだろうか。

顎を引きたくても、持ち上げられた手と背中になわった腕によって固定され動けない。

唇が軽く触れた感触に、思わず身体中に力を入れ、ウィルフレッドのガウンを握りしめていた。

確かに、神前誓約をした時も同じような口づけを交わしたが、今は状況が状況である。場所も悪いような気がする。

唇が離れた一瞬の隙について、リユーネリアは持てる矜持を捨てて白旗を上げた。

「——これ以上は無理」

多分、顔は真っ赤になっているだろう。

フイッと顔をそらして、思わず不機嫌になってしまう。

心臓は全力疾走した時のように、鳴っていた。

「取りあえず、十分かな」

やっと腕から解放され、ある程度の距離を取ると、ようやくウィルフレッドの方を振り返る。だが、顔は直視できない。

だが、今耳に飛び込んできた言葉は、聞き捨てならないものではなかったか。

「取りあえず？」

「そう、人前でも出来るかどうか、明日試そう」

「人前!？」

思わず叫んでいた。今したことを人前でののか。

一瞬、ヴェルセシユカに興入れたことを後悔しそうになった。

この国は、そういうことを人前でする習慣があつたのだろうか。

「一応、夫婦だからね。……地位と権力を手に入れる為には、それぐらいの壁は乗り越えられるだろう？」

痛いところをついてくる。ぐつと我慢して頷くしかなかった。

「じゃあ、もう寝よう。今日は疲れただろう」

「……はい」

どこか納得がいかないまま返事をしたはいいが、しかしこの寝室には寝台が一つしかないことを思い出す。

首を傾げると、先に寝台に横になりかけていたウィルフレッドが隣を叩いた。

それは、どう見ても呼ばれているようにしか見えない。

「何もしないよ」

しばらくジッと見つめていたが、確かに、先ほどもリユーネリアが嫌がると止めてくれた。信用してもいいのだろうか。

いつまでも突っ立っているわけにはいかず、示された場所に入ると、身体に腕を回された。

「ちよつと!」

非難を込めて見上げると、瞼に口づけを落とされた。

「おやすみ」

どうやらそれ以上は何もするつもりはないらしく、疲れたと言っ

たのは嘘ではなかったようですぐに寝息が聞こえてきた。

リユーネリアも妙に緊張していたが、その寝息を聞いていると、同じく疲れもあつてすぐに眠りに落ちていった。

11・情報収集（取って食おうというわけでは）

リユーネリアの一日は、午前中は王子妃としての教育——主にヴェルセシユカ形式の礼儀作法、歴史や法令の授業など——を受け、昼食後はウィルフレッドの執務を手伝いながら、エリアスに国政を学ぶ。仕事は夕方までしか手伝わせてもらえないので、夕食後からリユーネリアの自由時間だ。

大抵、その時間は侍女たちとのしつわ歓談はなしになってしまうのだが。

パルミディアから連れてきた侍女たちと婚姻の儀の後に入れ替わりとして新たに付いた侍女は、ニーナを含め七人だ。身元はエリアスによって確認されているので大丈夫だろう。それに、ニーナも目を配ってくれているので、それほど心配はない。それに、彼女たちから知る王宮内の噂話もなかなか侮れない。

「殿下には現在、三人の恋人がいらっしゃるといふ噂ですよ」

左手の指を三本立てて声を落としながら、いかにも真剣な顔をしてみせているのは侍女たちの中でも、王宮勤めが最長のダーラだ。年齢は二十代後半だが、勤めが長いだけあってヴェルセシユカの王宮でのしきたりには詳しく、新しい生活に戸惑いを見せるリユーネリアにさり気なく教えてくれたりする。しかも侍女の中ではリユーネリアに一番近い位置にいるニーナを立てつつ、やはり国が違えば侍女としての礼儀も違うらしく、その辺りの面倒もそれとなく見てくれ、侍女の中では頼りになる存在だ。

もちろん、勤めが長いだけ王宮内の事情にも詳しい。

博愛主義を認めている妻というのも彼女たちからしてみれば奇妙なものに見えるようだが、そこは身分の高い人たちの考えることだ。

侍女ごときの常識には当てはまらないという現実を幾度も見てきているらしく、意外とすんなりとリユーネリアの持論は受け入れられた。だが、一方で彼女たちの想像力の逞しさに、リユーネリアは舌をまかすにはられない。

一応、彼女達の前でもリユーネリアとウィルフレッドは仲が良く見えているようだが、リユーネリアにしてみれば、あんなにも恥ずかしい思いをしているのだ。見えてもらわなければ困る。

そんなわけで、侍女たちが仕入れてきた情報を聞くと、ウィルフレッドは博愛主義だと言われているが、昔はともかくとして今現在、手当たり次第というのではなく、実際には特定の女性としか付き合っていないようだ。

「ランス公爵夫人コーデリア様、ソーウェル公爵令嬢ロレイン様、ヴァーノン子爵夫人ビアンカ様」

一人ずつ指を折りながら告げたのは、一番年若いナタリアだ。若いだけあって彼女は侍女たちの中でもずば抜けて元気だ。

しかし彼女の口から出た敬称にギョツとする。

夫人というのは当然、結婚している人につけるので、三人のうち二人が既婚者ということになる。未婚者はうち一人。

どうみても遊びにしか見えない。いや、遊びだと豪語しているのだから問題はないのか。

くらりと眩暈を感じ、思わず片手で目を覆う。

確かにウィルフレッドがどれだけ女性と遊ぼうが問題はない。だが、本当に女性たちも遊びだと思っているのだろうか。

しかし、その中の一人の名に、リユーネリアは記憶に引っかかるものがあつた。

「ねえ、ランス公爵夫人には確かお子様がいらっしやったわよね？」
目を覆っていた手を除けて、侍女たちを見渡す。自分の覚え間違いでなければ、彼女は――。

「はい。四歳になるお嬢様がいらっしやいます」
日頃は無口なヘレンが静かに肯定した。

お嬢様……ならば、間違いではないはず。

パルミディアとヴェルセシユカの休戦条件として交わされたのは、お互いの人質交換だ。パルミディアからはリユーネリアが婚姻という形ではあるが、ヴェルセシユカに嫁いできた。では一方、ヴェルセシユカからパルミディアへはどうなっているかといえば、現在、ヴェルセシユカ王家には人質として出せるような適当な人物はいない。唯一当てはまるのが、現国王の姪の子供。ランス公爵夫人がその姪にあたる。つまり彼女の子供こそがパルミディアへの人質として差し出される最有力候補なのだ。しかし年齢は四つ。それはあまりにも酷である。ここはパルミディアが譲歩という形で、彼女が十歳になるまで保留という形を取ることとなった。もちろん、それがパルミディアには不利だということも考慮した上で、西の大国ルーヴェルフエルトの王族から一人、長期留学という形でパルミディアに留まるという形をとってくれている。つまり、もしヴェルセシユカがパルミディアへ宣戦布告をするものなら、ルーヴェルフエルトも敵に回るということになるのである。が、これはあくまでも表面的なものであつて、実際に再戦されるものならルーヴェルフエルトは傍観することも考えられるのだが――。

難しい顔をしてしまっていたのだろう。ダーラが慌てたように言い添えてきた。

「皆さま、別に寵を競おうとしていらっしやるわけではありませんよ。殿下のご婚約が決まっても変わらずお付き合いをされていますし、同類って感じではないのでしょうか」

その言葉に、他の侍女たちも頷く。

同類――。

愕然とするリユーネリアに、傍で話を聞いていたニーナも信じら

れないといった顔をしている。

パルミディアではあまり褒められるべきではない社交術が、ヴェルセシユ力では華やかに展開していることに、もはや二の句が告げられなかった。

「ですが、殿下がりユーネリア様に向ける眼差しは他の女性に向けるものとは別物ですよ」

安心させようと思ったのか、もう一人の最年少の侍女であるバーニスが頬を赤くしてつけ加えた。

すると周囲の侍女たちも色めき立って同意する。

「もう、なんていうのか……、見ていることらが恥ずかしくなるほどですから」

「そうそう、思わず叫びたくなりますわ」

口々に言われ、リユーネリアは顔が引きつる。

確かに、ウィルフレッドは人目も憚らずに触れてくる。ちよつと待てと言いたくなるほどだ。それを、身の回りの世話をしてくれる侍女たちに見られているのだ。王宮内の情報を網羅している侍女たちの口から、仲がいいという噂をばら撒くためとはいえ、顔から火が出そうなほど恥ずかしい。

真つ赤になったリユーネリアに、再び侍女たちが恥ずかしげもなく言い始める。

「わたし、もうリユーネリア様を尊敬しますわ。ただでさえ美しい殿下に見つめられて平気でいられる人なんて、そうそういらつしやらないですもの」

「あら、それはもう慣れていらつしやるのではないのかしら」

「そうですね。毎日寝起きを共にされているんですもの」

ほうつとため息をつきながらの発言である。

そうなのだ。

朝、彼女たちが起こしに来るのだが、大抵、その時もリユーネリアはウィルフレッドの腕の中で眠っているのだ。眠る時から起きる時まで解放されることはない。これは毎日だ。

その状態を毎朝、起こしに来る彼女たちに見られているのだから、もうそれだけで勘弁して欲しいところだ。こんなことを口に出して言われると余計にでも恥ずかしさが増す。

背中にじわりと嫌な汗が浮かぶ。

余裕の笑みでも浮かべていれば上等なのだろうが、真っ赤になった顔でそんなことをしても意味はない。

そんなリユーネリアをニーナは気の毒そうに見て、空になっていたカップにお茶を注いでくれた。

どんどん過激になっていきそうな話に、どうにか軌道修正を加えなければ、とリユーネリアは考える。

「と、ところで、その三人の方々はこういった方なのかしら？」

もちろん、彼女たちなら知っているだろう。

聞いたところによると、ミレス公爵夫人は三十歳近くの美女で、やはりヴェルセシユカ国王の姪だった。つまり、ウィルフレッドの従姉になる。ソーウェル侯爵令嬢は騎士団に所属し、銀髪の美しい女性で、同性からも絶大の人気があり、話をしながら侍女たちも頬を赤く染めていた。ヴァーノン子爵夫人はもともと商家の娘で、見初められて子爵家に入ったというだけあって、美しくそして聡明な女性ということだ。

頭の中で、それぞれを記憶に留めておく。

いつか出会う機会があるかもしれない。

その時の対応も考えておかなければならないだろう。

だが、そのいつかは思いのほか、リユーネリアが対応を考えるよりも早くに訪れてしまった。

昼食後、侍女と護衛の騎士を伴って、いつものように執務室へと向かっていると、ちょうど目的の部屋から出てきた女性がいた。侍

女ではない。金の髪を結びあげて、青いドレスに身をつつんだ女性は、リユーネリアに気づくとそれは綺麗に微笑した。年のころは二十代半ばぐらいだろうか。結びあげた髪にはドレスと共布で作った飾りがさしてある。

扉の前で侍女と別れた後、彼女は立ちふさがる護衛の騎士を手で制すと、リユーネリアの目の前までやって来た。

「ごきげんよう、リユーネリア様」

軽く膝を折って挨拶され、リユーネリアもそれに答える。

一応、王子妃であるリユーネリアの方が身分は上のはずである。それでも護衛の騎士たちが彼女に従うということは、彼女もそれなりの身分のある者——王族に連なる者であろうか。しかし、ヴェルセシユカの王族の顔は全て覚えているので、はじめてみる彼女は王族ではないはず。

訝しんでいると、青い瞳を煌めかせて彼女は名乗った。

「コーデリア・エルシー・ランスと申します」

告げられた名に、息をのむ。

ウィルフレッドの恋人の一人で、パルミディアへの最も有力である人質候補を娘に持つ女性だ。

執務室の扉の前にいる衛兵たちも、ウィルフレッドの恋人たちの噂を聞いているのだらう。引きつった顔をしている。どうやら間違いはないようだ。

護衛の騎士も一応控えてくれてはいるが、彼らの身にまとう空気が冷ややかなのは気のせいではないはず。

それでも彼らに恐れも見せず、コーデリアは堂々とした態度を崩さない。

「ずっとお会いしたいと思っておりましたのよ」

ウィルフレッドの恋人と言われているわりに、リユーネリアに対して敵愾心を見せているようには見えない。むしろ青い目を輝かせているのは好奇心のように見える。だからだらう。騎士たちも迂闊に二人の間に割り込める機会を逃してしまっているようだ。

どう答えていいか迷っていると、そつと両手を取られた。

「少し、お時間をいただけませんか？お茶を一緒にしましょう」

近くに寄った彼女からは、花のような良い香りがした。

「あの、ですが今から殿下の手伝いを……」

彼女の本意がつかめず、湧き上がってくるのは警戒心だ。遊びだと割り切っているとはいえ、それはやはりウィルフレッドだけかもしれない。

警戒していることが伝わったのか、彼女はニコリと微笑んだ。

「では、お許しをいただきましょう」

そう言うなり、手を握られたまま執務室へと身体の向きを変えた。さすがに制止しようとした騎士たちを留めたのは、今度はリユーネリアだった。彼女は一応ノックをして、中からの返事も待たずに扉を開け放つと、慣れたようにつかつかと部屋に押し入った。

「殿下。妃殿下をお借りますすわね」

部屋にはウィルフレッドとエリアスがいた。二人とも、挨拶もなしに用件だけを告げたコーデリアの行動と、彼女の背後で手をつかまれているリユーネリアを、時が止まったように固まって見ていた。完全に事態がのみに込めていない顔だ。

「では、失礼しますわ」

許しもなにも、一方的にコーデリアは告げることだけすると、略式の礼をする。

「お、おい。待て！」

ウィルフレッドがさすがに慌てて立ち上がった。

「待ちませんわ。さ、行きましょう」

言い置いて、くるりと向きをかえて部屋を出ていこうとするコーデリアに、有無を言わせず連れ出される。無情にも扉は背後で音を立てて閉まった。

状況がのみに込めていない騎士たちは、付いてこようとしたがすぐに執務室の扉が勢いよく開き、動きを止めた。

「ちよつと、待て！」

珍しく声を荒げてウィルフレッドが追いかけてくる。

「別に取りつて食おうといわけではありませんのよ。すぐにお返ししますわ」

楽しそうにコーデリアは笑い、歩むことを止めない。

そんな二人の慣れたような言葉の掛け合いと態度に、やはり彼らは特別な関係なのだと窺うことが出来る。

リユーネリアは心を決めると、ウィルフレッドを振り返ってから告げた。

「ちよつと行つてきます」

大丈夫だと思いたい。

軽く頷いて、取りあえずコーデリアについていくことにした。

残されたウィルフレッドは呆然としたまま見送ることしか出来ず、騎士たちは遅れを取りながらもコーデリアに連れ去られるリユーネリアの後を追いかけてきた――。

12・直接対決（口を出すつもりはありません）

王宮の来客用の一室に連れて来られたリユーネリアは、目の前に座った美女を改めて見た。

確かに、美女と言える。黄金の髪は艶やかで、瞳は澄んだ青。艶やかな唇は自然な弧を描いて、笑みを浮かべている。表面的な美しさではなく、彼女は内側から美しいと思わせる何かがある。それは自信、だろうか。

「リユーネリア様……、いえ。ネリア様とお呼びしても？」

故国では親しい者からは、そう呼ばれていた。

「ええ、どうぞ」

懐かしいと同時に複雑な気分だった。ヴェルセシユカにきて最初にそう呼んでくれるのが、まさか夫の恋人になるうとは。

「では、私のこともコーデと呼んでくさいね」

どこまでも有無を言わせない。

彼女が公爵家から連れてきた侍女だろうか。王宮の侍女とはあきらかに違うお仕着せを着た女性が運んできたお茶を、コーデリアが口に運ぶ仕草はどこまでも洗練されていて優雅である。確かに、ウィルフレッドと並んで立つとかなりの迫力のある美男美女になるだろう。

護衛の騎士たちは部屋には入れてもらえず、扉のすぐ外で待機している。何かあった時にすぐに対応できるようにと、これだけは彼らも譲らなかったのだ。

取りとめもないことをぼんやりと考えていると、カップを皿に戻したコーデリアがやんわりと微笑した。頭の奥で警鐘がなる。この類の笑みは、決して表面と内面が一致しないことをリユーネリアは知っていた。

背筋を正し、コーデリアを見つめる。話がしたいと言ったのは彼女の方なのだ。彼女が口を開くのを待つしかない。

「殿下からお聞きしましたわ。ネリア様は私達にとっても理解がおありだと」

「ずばり、正面からきた質問に、うっかり口を開くことは出来ないと頭の中で計算する。」

「私達……、というのは具体的にお聞きしても？」

「あら、いやですわ。噂でお聞きになっっているでしょう？」

「……ええ。聞いております」

別に隠すことではないし、ここで肯定しなければ、この手の人間が相手だと話が堂々巡りをする恐れがある。

リユーネリアは一步引いて頷いた。

満足げな笑みを浮かべたコーデリアは、ゆったりとソファにくつろいでいる。

「でしたら、ネリア様は殿下に対して何もお思いにならないのですか？」

顔には笑みを浮かべたまま、こちらを窺う瞳は真剣だ。

「思う、とは？」

握りしめた手の指先が冷えていくようだった。

まるで両側が崖になった一本道を歩いている心境だ。一步でも間違えたら、何か取り返しのつかないことになりそうな、そんな予感がする。

その為には、一步一步、一つ一つを確認しなければならない。

「……嫉妬なさらない？」

ふふつと笑うコーデリアに対して、リユーネリアはきっぱりと言いつつ切った。

「ウィルフレッド様の主義に口を出すつもりはありません」

「それは余裕からおっしゃてる？」

「余裕とは何に対してでしょう？」

内心、怖いと思う。こんなやりとりを正面切ってやることになるとは。だが、王妃という立場上、勝ち負けはないにしても、舐められるようなことにだけはなってはならない。地位と権力を手に入れる為にも、だ。

「あら、それは私達とネリア様では立場が違うではありませんか。それに、殿下もネリア様を大層大切にしていらっしゃると噂されますし？」

「ではお聞きしますけど、あなた方はわたくしに対して何を思っていらいらっしゃるのですか？」

それは常々聞いてみたかった。

ウィルフレッドは遊びだという。ならば、彼女たちも本当にそうなのだろうか。もし、そうなら彼女達は恋人であるウィルフレッドの本妻のことをどう思っているのだろうか。

「――世間一般でしたら、嫉妬……という言葉が相応しいのかもしれませんが……」

そこで、ふふっと、彼女は笑った。

「残念ですけど、噂など信じるつもりはございません」

それは、どういう意味だろう。

ウィルフレッドがリユーネリアを大切にしているという事を信じないということか。それほど自分達に自信があるのか、それとも仮面夫婦だということを見破られているのだろうか。内心焦る。

だが、こんなところでつまずくわけにはいかないのだ。

「コーデ様は何がおっしゃりたいのかしら？」

相手の真意を探らなければ。

嫌な汗がジトリと背中を流れていく。妙に喉が渴いた。

ピリピリとした緊張感が増すこの場では、それは彼女も同じだったようで、コーデリアは目をずっと細めると、ふと視線をテーブルの上に漂わす。自らのカップに手を伸ばしかけ――そして、視線だけはピタリとリユーネリアのカップの上で止めた。

「……ネリア様は、お茶に手を付けられませんか」

ふと気づいたようにコーデリアは呟いた。一瞬、それが彼女の素顔になり、カップを手に取らないままソファに座りなおした。

リユーネリアは結婚してからは、特に毒に対してだけは気をつけていた。決めた場所以外では必要に迫られなければ飲食物は口にしないようにして、食器類も出来るだけ銀食器を用いるようにしている。銀はある種の毒に対してだが反応が分かるのだ。これだけで、多少は予防することが出来る。

「申し訳ありません」

気づかれてしまえば不愉快に思われるのは承知の上だ。その場合は素直に謝罪を口にするようにしている。

すると、今まで彼女から発せられていた刺々しい雰囲気、まるで嘘のようにフツと消えた。

「ごめんなさい。試させてもらったの」

目を伏せるように謝る姿も美女は絵になるな、と何気に思っただけ流すところだった。

「え——、試す？」

何を、と呟く。

「あなたがどこまでご自分の立場を理解しているか……を」

つまりそれは、単に政略結婚でやってきたリユーネリアが自分の身の危険を理解しているかということか。

コーデリアは申し訳なさそうに説明してくれた。

休戦の条件とはいえ、政略結婚でやってきた王女が、あまりにも安穩と過ごすにはまだヴェルセシユカには危険が潜んでいる。守ってもらっているのではなく、自らの身ぐらい守ろうと気をつけるぐらいの危機感をもっている者でなければ王子妃は務まらない。だから、本当ならウィルフレッドの主義など否定して、わずかでも危険と思うものを遠ざけるべきだと考えて欲しかったらしい。

「つまり……ウィルフレッド様から恋人たちを遠ざけないのが不満なのですか？」

突き詰めて考えればそうなってしまふのは気のせいだろうか。

しかし、目の前の人は一体、何を言っているのだろう。その恋人の一人なのではなかっただろうか。

「いやですわ、ネリア様。——噂など信じるものではないですわ」

先ほどと同じ意味合いの言葉を口にしたコーデリアは不敵な笑みを浮かべる。

「あの？」

「ここだけの話ですけど、私達、別に殿下の恋人であると自ら公言してはおりませんのよ？」

「え……、でも——」

「私達の夫や父親が議会の有力者だと言えばおわかりかしら？」

さらりと言い放った一言に、リユーネリアは確かに議会の主要メンバーにウィルフレッドの恋人と言われている人たちの家名があったことを思い出した。

「……なぜ？」

「戦争なんてしたい女性はどこにもおりませんわ」

王族は戦争を反対している。多くの議員たちは戦争の再開を望んでいる。ならば、どちらを支持するか。分かり切ったことだ。それに、彼女の子供は、パルミディアへの人質候補だ。人質としてパルミディアへ行き、もしも戦争が始まってしまったらその人質の運命は一つしかない。子供の身を案じない母親などどこにもいないだろう。

「殿下は、ご自分に議会と直接渡り合えるだけの力量がないことをご存じでいらっしゃるわ。だから、周囲から攻めることにしたのです」

つまり、議員の家族——、それも、女性たちだ。

もともと華やかな女性遍歴をもっていたウィルフレッドは、その噂の影で議会の家族と連絡を取り合っていたのだ。

「ですけど、もうそろそろ限界ですわ。ですから——」

コーデリアは、極上の笑みを浮かべた。リユーネリアさえ見惚れてしまうような。

「私達、王子妃に乗りかえようと思ってますのよ？」

「はい？」

何を言われたのか分からなかった。

乗りかえるとは、何を？

「先ほど試させていただいた時も思いましたもの。ネリア様との緊張感のある会話……。とてもゾクゾクして……。素敵でしたわ」

うつとりとした顔で言われ、返答に困る。

「ですから、もう殿下の恋人などとは言わせませんわ。私達、ネリア様をお守りするためにも、お側にいることをお許しくださいますよね？」

やはり、どこまでも有無を言わせないようだ。

しかし今、コーデリアが言ったように、議員の有力者の家族が側にいると言うことは、確かに危険な目にあう確率が低くなる可能性はある。その逆も然りだが、ウィルフレッドが側に置いておいた人たちだ。信用できるだろう。

「わかりました。わたくしもこちらの国のことを学ぶべきことがまだあります。教えて下さると助かります」

「ええ、もちろんですとも」

テーブル越しに手を取られると、ぎゅっと握られた。

本当にこれでよかったのだろうか、リユーネリアは一抹の不安が胸に残った。

13・新規事案（気になるところがあった）

リユーネリアがヴェルセシュカにきてもうすぐ三か月、ウィルフレッドと結婚して二か月が過ぎようとしていた。

その日の午後、いつものように執務室で書類を分けていたリユーネリアは、ふと一枚の書類に手を止めた。

最近、決裁書類と再考書類の量が増えてきた。それだけ確認を取る書類が減ってきているということなのだが、いつだって例外というものはある。それに首を傾げつつ、気になって取りあえず抜き出しておく。

ウィルフレッドに決裁書類と再考書類を渡し、エリアスと確認書類を一枚一枚目を通していく。すべて見終わって、再び決裁書類と再考書類をウィルフレッドに渡していると、先ほどリユーネリアが脇にのけていた書類をエリアスが手に取っていた。

「これは？」

「ああ、それなんですけど、少し気になるところがあった」

確認書類とも少し違うような気がして調べてみたいことがあると告げると、エリアスも頷いた。

「そうですね。少し確認して参りましょう。先に休憩をしておいて下さい」

エリアスは、書類を見ながら執務室を出ていった。

その背中を見送ったウィルフレッドは、一人分らず首をひねる。「なんだ？」

リユーネリアは茶器の準備をしながら説明をした。

要はザクスリウム領の領主から、今年の納税額を減らして欲しいという嘆願書だったのだが、理由の一つに昨年の不作を上げていた。「ザクスリウム領って、ヴェルセシュカの北方のヤドヴィガ山脈の

麓にある領ですよな？」

確認を込めて尋ねると、是と返ってくる。

「不作ってことでしたけど、どのような農作物を作っているのですか？」

いくらヴェルセシユカのことを勉強していても、まだ地方の特産物などまでは手が回らない。それでもウィルフレッドの執務を手伝っているため、そこから学ぶことも多いのだが。

ウィルフレッドは一考し、すぐに口を開いた。

「あの辺りは葡萄だな。はつきり言って葡萄の木だらけだ。ザクスリウム産の葡萄酒は国内でも高値で取引されているはずだが」

「でしたら、不作ってというのは葡萄が……ということになりますよね？」

「そうだな。……それが何かおかしいのか？」

尋ねられ、リユーネリアは言葉を濁す。

少しだけ気になっただけで、勘違いかもしれない。

お茶が入ったので、ウィルフレッドもソファの方へと移動してき

た。

いつもは三人で休憩をするのだが、ウィルフレッドとリユーネリアが同じソファに腰かけ、向かい側にエリアスが座る。今は二人なのだから向かい合わせに座ればいいものを、当然のようにウィルフレッドはリユーネリアの隣へと腰を下ろした。

「私の記憶違いかもしれないですけど……」

カップを持ち上げたまま、言うべきか迷う。あまりはつきりしないことを口にして、いらぬ心配をかけたくはない。それにまったく関係なく無駄なことかもしれないのだ。

「いいから」

軽い感じで促され、リユーネリアはお茶で口の中を湿らすと、隣のウィルフレッドを見上げた。

「昨年はまだヴェルセシユカにいなかったのではつきりとは分からないのですが、噂でもとりわけ天候が悪かったとか害虫が発生し

たとか聞かないんですよ。しかも収穫時期といえば、私達の婚約が発表されて、すでに休戦時期に入っていたと思うんです。それでいくと収穫手が足りないとかそういう問題でもないはずですよ」

兵役で借り出されていた男たちも領地に帰っているはずである。

「まあ、そうだな」

ウィルフレッドの返事に、やはり首を捻るしかなかった。

「だから、確かなことは言えないんですけど、不作の理由が思いつかないのです」

先ほどの書類には、不作の原因となる言葉が何もなかった。だから、引つかかったと言った方がいいのかもしれない。

違ったかなと思いつながら隣に座るウィルフレッドを窺うと、驚いたように見つめられていた。

「あの、何かおかしかったですか？」

やっぱり間違っていたかなと思っていると、ウィルフレッドはふつと息を吐き出し、肩の力を抜いた。

「いや、あの間でそこまで考えているのか……」

感心した声音に、リユーネリアは慌てて首を横に振る。

「たまたまです。それにエリ阿斯もすぐに気づいたようですよ」

本当に偶然だった。普通なら再考書類に回していたものだろう。

それに、何の説明もなく書類を見たエリ阿斯も調べると言っていた。特別なことではないと思ったのだが、ウィルフレッドは苦笑してカップをテーブルに戻した。

「あいつは特別だ。……だが、妬けるな」

ポツリと漏らした言葉に、首を傾げる。

やける、とは何に対しての言葉だろうか。

むしろ、日頃からリユーネリアの方がウィルフレッドとエリ阿斯を羨ましく思っているのに。

二人の間にある信頼関係は、リユーネリアとニーナの関係に近い。でも、リユーネリアの仕事にはニーナは関われな。彼女は常に空気のようになり添ってはくれるが、彼らのように隣に立って仕事を

することは無い。リユーネリアが間違った選択をしてもニーナは従うだけで、エリアスのように諫めることはしないだろう。

それがとても羨ましくあっても、逆に妬かれる必要がどこにあるのだろう。

言葉を待っていると、ウィルフレッドは唇に微かな笑みを浮かべて手を伸ばしてきた。その手はリユーネリアの頬に触れる。

「誰も見ていませんから仲のいいフリは必要ありませんっ」

その手から逃れるように身をそらすと、カップのお茶が零れそうになって慌てて皿に戻す。だがそれを見計らっていたのか、横から伸びてきた腕が、リユーネリアの腰に回され引き寄せられる。

必要以上の密着は心臓に悪い。上半身だけでもと、腕を突っ張ってウィルフレッドから遠ざかろうと試みる。

「冷たいな。俺から恋人を奪っておいで……」

突っ張る手の片方を取られると、笑みを浮かべたまま手の甲に唇を落とされる。

はぁ、とリユーネリアは嘆息する。

そうなのだ。コーデリアと初めて会った日以降、王宮では新たな噂が上がった。つまりリユーネリアが夫であるウィルフレッドの恋人を全員奪ったというものだ。不本意ながら、なぜかコーデリア他二人もリユーネリアを気にいつてしまったらしく、よく三人でリユーネリアの私室を訪ねてくる。もちろん、今までウィルフレッドに流していた情報も教えてくれる。だが、単にお茶をしに来ていることの方が多い。

それ以降、ウィルフレッドは以前にも増してリユーネリアに纏わりつくようになってしまったのだ。以前は人前で仲のいいフリを見せることと、眠る時にリユーネリアを抱き枕代わりに眠るぐらいだったのだが、今は人前であろうがなかるうが関係ないのだ。

ウィルフレッド曰く、対応に困って慌てふためくりユーネリアを見て楽しむことによって、恋人たちを取られたことへの逆襲をしているらしいのだが。しかし実は影で、王子とその元恋人達が、王子

妃の取り合いをしているという噂もあったりする。

手の甲への長い口づけも、人がいないのをいいことにリユーネリアは振り払う。しかもう片手はしっかりとリユーネリアの腰に回されているので、距離的にはまだ近い。

「もうっ、いい加減にして下さいっ」

赤くなりつつある頬を、これは怒りの為だと誤魔化すために声を荒げる。

「でもやっぱり、今思い出しても不当な扱いだったと思うよ。夫である俺よりも先にコーデ達に愛称で呼ばせるなんて」

目を伏せ気味に、ため息交じりに呟かれる。それは、どこか寂しげに見えなくもない。

そうなのだ。この話を出されると弱い。

コーデリア達とお茶をしている席に、ウィルフレッドが来たことがあった。その時、皆がリユーネリアのことを愛称で呼んでいるのを聞いて、ウィルフレッドが落ち込んでしまったのだ。愛称で呼びたかったら呼べいいのと言うと、皆と同じ呼び方は真似をしたみたいで嫌だと、さらに落ち込んでしまったのだ。

あの後、機嫌を取るのが大変だった。翌日から私室に籠って執務をしなくなり、エリアスに何があったのかを問いただされ、そんなことを口にするのも恥ずかしく必死でウィルフレッドの機嫌を取った。あの時ほど、ヴェルセシュカにきて大変な思いをしたことはない。

ちなみに、ウィルフレッドはリユーネリアのことをネリーと呼ぶことで納得した。リユーネリアにしてみれば、あまりにも甘ったるい呼び方に恥ずかしさはこの上ないのだが。

なおも抱きこもうとするウィルフレッドに、もう一度腕を突っ張って抵抗を試みる。当然、男の人の力には叶うはずなかったのだが、突如その拘束が解かれたことにより、ウィルフレッドから離れようと力を込めていたリユーネリアの身体は、力を込めていた方向とは反対へと向かう。

小さな悲鳴を上げ、ソファに仰向けに倒れたリューネリアが目を開けると、視界にウィルフレッドを認め、冷や汗をかく。

あまり嬉しくない体勢だ。頭の両側にウィルフレッドの両手が付かれているわけで。

「もう逃げないの？」

獲物を食べる前にいたぶる獣のようだ。

笑みを含んだその瞳を、リューネリアは負けじと睨み返す。

「遊びはここまでです」

「じゃ、今からは本気で」

と、口づけが顔中に降ってくる。

「ちがつ、そうじゃなくて、ちよつとウィルフレッド様！」

非難の声を上げるのと、扉がノックをされたのは同時だった。

当然お茶をしているものと思っていたのだろう。エリアスは返事も待たずに扉を開けて——……閉めた。

14・即断即決（行かせて下さい）

「エリ阿斯っ、助けなさい！」

扉が完全に閉まる直前に何とか呼び止めると、エリ阿斯は入ってくるなりウィルフレッドを引き剥がしてくれた。正確にはウィルフレッドの後頭部を容赦なく叩いたのだが。

「いちゃつくのは夜にして下さい」

「邪魔をするな」

ウィルフレッドは叩かれた頭を撫でながら、それでもリユーネリアから離れてソファに座りなおす。リユーネリアも腕を取られ、起こしてもらいながらもエリアスの小言を受け止める。

「妃殿下もきつちりと教育なさることをお勧めします」

「……はい」

乱れかかった髪を直し、小さくなってどこか納得いかないまま頷く。

もともとウィルフレッドの教育係だったのはエリ阿斯だ。ウィルフレッドが仕事をこなすようになってからは執務補佐官となったらしいが、本来ならそのあたりの教育もエリアスの仕事の範疇だったのではないだろうか。

それにエリ阿斯は、リユーネリアとウィルフレッドが仮面夫婦であることを知っている人間だ。どうしていちゃつくという言葉が出てくるのか不思議だった。

リユーネリアはエリ阿斯にお茶を入れる為に、そそくさと立ち上がって、それで、と促す。

エリ阿斯はいつもの場所に腰を下ろすと、いくつかのメモ書きを見ながら報告を始めた。

「結論から言うと、昨年、市場に出まわったザクスリウム産の新酒の葡萄酒の数は、平年とそれほど変わらなかったとのことです。天

候不順もなく、害虫の発生も報告されていませんでした」

「では、不作と言うのは偽りか？」

「一概に嘘だと結論づけるのは早計ですが……妃殿下はどうお考えですか？」

新たに入れたお茶をカップに注ぎ、エリアスの前に置く。

こうしてエリアスはリユーネリアを試すことがよくあるので気が抜けない。こちらがどこまで理解しているのかを知るためなのだろうが、不意打ちで試験を受けさせられている気分になる。今回もそうだ。

だが、先程の報告からいくつか考えられることはある。エリアスからメモ書きを受け取り、考えをまとめるためにも口を開いた。

「昨年の生産高を平年と比べるわけにはいかないのでは？それ以前は長く戦争が続いていたから収穫は決して豊富ではなかったでしょうし、昨年は働き手である男性たちが兵役を終えて帰ってきたにしろ、前年度と比べると確かに生産高は少ないのではないかと思えますけど……」

数字上のことだけで判断するのは難しい。現実には、いくつもの複雑な事情が絡み合っていることが起こっている場合がある。こういう場合、本来なら取るべき行動は一つしかない。現地へと調査に行くべきなのだ。だが、リユーネリアがそれを言うわけにはいかない。調査に行くにはある程度の人出と資金も必要になってくる。だがそれに以上に、気づいてしまったからにはリユーネリア自身が赴きたいと口に出してしまいそうではなかった。それにウィルフレッドやコーデリア達の側を離れるということは、命を狙って下さいと言っているようなものだ。

喉元まで出かかった言葉をぐつと我慢してウィルフレッドを見る。「調査に行った方がいいです」

必要以外の言葉を省く。

「……ザクスリウムへか？」

事が大きくなりそうな話に、ウィルフレッドは難しい顔をした。

一概に調査と言っても、いきなり国の上層部が動くわけにはいかない。まずは官僚でも地方査察を兼ねたものから始めるので、実際にウィルフレッドのところまで調査の結果が来るまでに時間はかかる。それにもし、官僚たちが見落としなどしようものなら再びこの案件がリユーネリア達の目に触れることはなくなる可能性も出てくるのだ。

しかし――。

「ま、行かなければならないでしょうね」

当然のごとくエリアスはいうと、カップを持ち上げてからチラリとリユーネリアを見た。

「まあ一般的に考えるなら不作というのは嘘なのでしょうが……。

妃殿下は行きたそうですね」

エリアスには、調べてきたものの結果を見た時点で分かっていたようだった。リユーネリアが調査の必要性を言いだすことも。

無理だと思いながらも頷く。

「行きたいとは思いますが……」

無理ですよ、と口にしようにとした先をエリアスによって遮られる。

「行かれますか？」

軽く言われ、思わずまじまじとエリアスを見つめる。

そんなに簡単なことではないはずだ。もしリユーネリアが行くことになれば警備の面からして、いやそれ以前にザクスリウム領に行くべき正当な理由が見つからない。リユーネリアは王子妃であり、王子の執務を手伝いつていることでさえ特異なことであり、本来なら調査をするべき人間ではないのだから。

「ちょっと待て。ネリーが行くのは危険だ」

それまで黙っていたウィルフレッドがエリアスを止めた。

「誰が表立って妃殿下が行くと言いました？」

ウィルフレッドの言をさらりとかわし、ニヤリとリユーネリアに笑ってみせる。

「妃殿下には当然、身分を偽って調査に行ってもらいます。その間の妃殿下の身代わりも必要でしょう。その上、警護もある程度は省きますので危険は承知して頂かなければなりません」

エリアスの提案は、リユーネリアにとって身に危険が迫るかもしれないという部分を差し引いても魅力的なものだった。だから答えなど決まっていた。

「かまいません。行かせて下さい」

身を乗り出すように言っていた。

横から危惧の念を混ぜたような視線を感じたが、止める気配はなかった。だから、引かなかった。

「この目でヴェルセシュカを見たいのです」

嫁いできてからずっと、王宮から一步も外に出ていない。かつての敵国だったパルミディアに、身内を殺された者もこのヴェルセシュカには数多くいるのだ。そのパルミディアの王女であるリユーネリアが、治安が良いと言われている王都ライルの街にさえ、もしものことがあつてはならないと行かせてもらえなかったのだ。この機会を逃せば、次はいつ出られるか分からない。

それに、ヴェルセシュカという国を見たかったのは嘘ではない。今現在、リユーネリアの手伝っている仕事が直接影響を与えてしまふのはヴェルセシュカの民なのだ。彼らの暮らしぶりを直接見てみなければ、細かなところまで気づくことも配慮すること出来ない。その判断一つで彼らの生活は変わってしまうのだから、その責任の一端をリユーネリアも担わなければならないはずだ。

「殿下、どういたしましょう？」

自らが煽っておきながら、エリアスは当然のように主命を仰ぐ。リユーネリアも隣の夫を見つめる。

その湖のような瞳が一瞬揺らいだように見えたが、すぐにウィルフレッドはエリアスを見て首を縦に振った。

「いいだろう。だが、おまえも行くことが条件だ」

「わかりました。お任せ下さい。……良かったですね、妃殿下」

エリ阿斯にっこりと微笑して言われ、リユーネリアは思わず隣にいたウィルフレッドの手を取ると、両手で握って感謝を込めて額につけた。

「ありがとう！嬉しい……」

この時、ウィルフレッドがどのような顔をしていたかリユーネリアは知らなかった。当然、エリ阿斯がそんな主君の顔を見て、吹き出しそうになっていることも知らなかったのだが。

15・用意万端（無事に帰ってこい）

五日の内に全ての準備が整えられた。

査察隊として派遣される人員は、エリアスを筆頭としてその補佐官にリユーネリア、あと護衛を八名ほどで構成された。ザクスリウム領まで馬車で往復六日。調査日数を七日とし、予備日を一日として全十四日の日程で行われる。

リユーネリアがザクスリウム領へと行くことを最後まで渋っていたのは侍女のニーナだった。王子妃であるリユーネリアが実は城にいないということを隠すためにも、王子妃付きの侍女であるニーナが留守番であるのは絶対の条件だ。それが一番の不満だったらしい。だが、ランス侯爵夫人であるコーデリア達の説得もあって、しぶしぶではあったが納得し、留守の間のことと彼女達に協力してもらうことになった。

査察隊の護衛には騎士団に所属するソーウェル侯爵令嬢も入ることになっている。これはウィルフレッドの手まわしだ。査察隊に女性一人、しかも実は王子妃ときては何かあったときに困ることになる。他にもう一人、女性の騎士がついたとも聞いた。

身の回りのことに関して言えば、リユーネリアは自分のことは自分で出来る。一国の女王として、普通ならばやってもらうのが当たり前という育ち方をしていない。というよりも、それもすべて過去にしたある経験のおかげなのだが。

出発を翌日に控えた日の夜、寝台の上でリユーネリアは一人で枕を背にして本を読んでいた。

すでに深夜だ。

ウィルフレッドはまだ私室にも戻ってきていないらしい。査察が決まってからは、査察の準備と日頃の執務で、いつも以上の仕事量になっていた。だが、準備もすでに終わったはずだし、もしかしたらエリアスと最終的な打ち合わせをしているのかもしれない。

今回の査察に行かせてもらうお礼をきちんと言いたかったリユーネリアは、明かりを落とさず本を読みながら待っていた。

どれぐらい待っていただろう。ウィルフレッド側の私室への扉が静かに開き、明かりが灯っていることでまだ起きていることに気づいたらしい本人と目が合った。

「まだ起きていたのか。明日は早いんだろう」

「ええ。でもウィルフレッド様にお礼を言ってなかったから……」
本を閉じて寝台脇のテーブルに置く。

ガウンを脱いだウィルフレッドはリユーネリアの隣に入り込んでくると、ちよつと驚いたようにリユーネリアの頭上に視線を向ける。
「染めたのか」

「はい。一カ月ぐらいしか持ちませんけど」

胸に垂れたひと房を手にとってみると、黒かった髪は明かりを受けて暗いレンガのような色をしていた。お世辞にも綺麗とはいえない色だが、むしろ身を隠すにはいいかもしれない。ウィルフレッドはよく黒髪を褒めてくれていたので嫌かもしれないが、

ぼんやりと思っていると、リユーネリアが手に取っていた髪を、横から伸びてきた手がさらった。

「これでネリーの身が守れるなら、かまわない」

そつとその髪の毛に口づけられ、胸の奥が温かくなる。嫌がられなかったことがなんとなくだが嬉しい。

その思いをそのまま笑みに浮かべると、リユーネリアは素直にお礼を口にすることが出来た。

「ザクスリウム領へ行かせて下さってありがとうございます」

「礼を言われるほどのことはしていない」

ウィルフレッドの手からこぼれた髪が、ふわりとリユーネリアのもとに戻ってくる。

「でも嬉しかったんです。皆が言うように、身の危険を思えば王宮にいたことが一番だと分かってても、この国を見てみたかった。それをウィルフレッド様は止めずに逆に送り出してくれた」

そして少しためらってからリユーネリアは口を開いた。最近、常に思い、反省をしていたことだ。

「……私、この国に来た時は戦争を止めるのはパルミディアの為に言いました。でも、これは一方的すぎました。ヴェルセシユカの為を思っても、それはする必要のあることだったんですよね？」

ウィルフレッドの執務を手伝いながら、いつのまにかヴェルセシユカの国を身近に感じていた。紙の上のことではあったが、そこにあるのはかつての敵国ではなく、確かにこの国で生活している人がいることを感じていた。そして、どうすれば民の為に becoming のかを考えていた。

その為に自分は何ができるか。

知識の上だけでヴェルセシユカを知るのではなく、実際に知らなければならぬのだ。目で見て、彼らと会話をし、触れ合えなければその先には進めない。

ウィルフレッドを見上げると、その静かな湖面のような瞳と視線が合う。頬を優しく撫でられて、間違っていないことを知らされる。「ネリー」

名を呼ばれ、自然と笑みが浮かぶ。

理解してくれることが嬉しい。

ウィルフレッドはふと、自分の指に嵌っていた指輪を抜き取るとリユーネリアに差し出してきた。

それは、ヴェルセシユカの王位継承権を持つ者のみが与えられる指輪。現在、この国には二人しかその指輪を持つ者はいない。

金で出来た指輪は部屋の明かりをうけて鈍い光を放っている。リユーネリアは手を取られると、それを握らされた。

「何かあればそれで身を守れ」

それがどれほど重要なものかリユーネリアも王族の一人として知っている。ウィルフレッドのその気持ちは嬉しい。だが、それはあまりにも庇護が大きすぎる。

たかが査察に行くだけのことなのだ。

「いけません。これを預かることなど出来ません！」

指輪の意味を知らない者はいない。この指輪を持つ者は持ち主と同等の権力を得る。そしてもし過ちを犯しても、裁けるのは本来の持ち主と上位の者のみ。この場合、王と王太子がそれにあたるだろう。

しかし何かあつとしても、この指輪を持っていたところで相手が権力に弱い相手ならいい。リユーネリアを守る即効性はある。だが、どうにかしてリユーネリアを亡き者にしようとしている人間だとこれは意味がない。むしろそうなった時、無くしてしまう方が恐ろしい。持ち主に与えられる権力は絶大なものだ。

返そうとウィルフレッドの手を取ったが、そのまま手首を取られる。

「無事に帰ってこい」

その声はひどく真剣で。

リユーネリアに反論を許さず、頷くことしか出来なかった。

指輪を握った方の手首を引き寄せられ、ゆっくりと近づいてくるウィルフレッドの口づけを目を閉じて静かに受けた。

慣れとは恐ろしいもので、これぐらいならとリユーネリアも感謝の気持ちがあつたため油断した。

最初こそ軽く啄ばむようないつもの口づけだったが、再び押しつけられた唇はいつもより強く、そして長く、すぐに息苦しさを感じる。やっと解放されたと思うと、今度は角度をかえて今までになく深く……。

「ウィル……っ」

わずかな隙について止めようと名を呼ぶ。

だが、いつの間にか片手を背中に回され、お互いの距離がもうないほど密着していた。

口内を感じる自分のものではない存在に、意識ごと絡め取られる。ウィルフレッズの身体を押しやるうにも、すでに腕に力が入らない。

ようやく解放され、上がった息で見上げた視線の先は、寝台の天蓋が張られた天井だった。

心臓が早鐘を打っている。上がる息づかいが耳に煩い。

その心臓の真上に温かい感触を感じて、ふと視線を下げた。

肌蹴た夜着から白い肌がのぞき、二つの膨らみのちょうど中央辺りに、ウィルフレッズが口付けていた。

「あ、のっ」

息をのみ、慌てて身をよじってウィルフレッズの下から抜け出すと、肌蹴た夜着の前をかき合す。

「あの……」

何か言わなければと思いつつも、言葉が出てこない。真っ赤になつて口ごもると、ウィルフレッズは息を吐くように笑った。

「それもお守りだ」

それ、と言われ、一瞬なんのことが分からなかったが、すぐに思い当たり、前をかき抱く腕に力がこもる。

「……………」

どうしていいか分からず、かといって視線を合わせられずに座っている、ずいっと足を引っ張られて、バランスを崩したリユーネリアはウィルフレッズのいつもの定位置、つまり腕の中に戻っていた。

身を固くし、勇気を振り絞ってそっと視線を上げると、いつものように瞼に口づけが落とされる。

「おやすみ」

まるで何事もなかったかのように、欠伸を一つするとウィルフレッズは目を閉じた。

リユーネリアはいまだ手の中に握ったままだった指輪を無くさないよう、少し考えた後枕の下に入れると、ゆっくりと目を閉じた。とても眠れそうになかったが、それでも明日のことを考えていると、いつの間にか眠りは訪れていた。

16・暗雲低迷（心強いわ）

馬車は二台用意され、一台にはリューネリアとエリアスが乗り、周囲を騎馬で護衛が固めている。もう一台には荷物と、騎士達の身の回りの世話をおおせつかったロドニーという少年が乗っている。もともと彼は従騎士で、常日頃は騎士団長について騎士になるべく学んでいるのだが、その騎士団長が何故だか八名の護衛のうちの一人として同行している為、大任を仰せつかることになったらしい。しかも今回やらされることは小姓としての仕事で、いわゆる雑用係だ。

ソーウェル侯爵令嬢のロレインも護衛の中にいた。

馬車の窓から騎乗の彼女の姿が見える。こうして見ると、騎士の紺色の制服に身を包んだ彼女は確かに凛々しく、麗しい。銀の髪を一つにまとめ、その艶やかな髪が馬の動きにあわせて背中中で踊っている。侍女たちが嬉しそうに頬を染めて噂話に花を咲かすのも分かる気がした。

「リリア。気分が悪くなるようでしたら我慢せずに言ってくださいね」

目の前に座っているエリアスが書類を見ながら言った。

リリアというのは、リューネリアの仮の名だ。

当然、エリアスの補佐官なのだから呼び捨てである。

気づくと胸の上に手を置いている。どうやらそれが気分を悪くしていると思われた要因だと気づき、手を下ろすがすぐに確認してしまふ。

昨夜、ウィルフレッドから預けられた指輪を鎖につなぎ、首から下げているのだ。指に嵌めるには大きすぎ失くす恐れがあったからだが、無暗に人目に晒すのも良いことにはならないだろう。ちょうど指輪は胸の中央辺りにあり、襟の開いていない服の為、鎖さえ見

えない。

ちなみに、今朝服を着替える時に侍女たちの意味ありげな視線を感じ、思わず見てしまった。今現在指輪がある場所——ちょうど心臓の真上あたりに、ウィルフレッドによってつけられた赤い痣を。

お守りといったが、何に対してのお守りなのか頭を傾げる。服の上から指輪を確認するということは、その痣の上にも手を置いているわけで、その点は複雑な心境だが、それでもウィルフレッドが心配してくれる気持ちを嬉しく思ってしまう自分もいた。いや、決して胸に付けられた痣が嬉しいわけではないのだが――。

道中、不穏な事はなく、三日後リユーネリア達はザクスリウム領エピ村に到着した。

エピ村は周囲を葡萄畑に囲まれた、のどかな田舎の村だ。領主の館からは、四方にまばらに広がる民家を見渡せる。丘陵は次第にヤドヴィガ山脈へと連なる山へと向かい、途中まではその斜面にも葡萄の木が整然と並んでいる。

初夏の葡萄畑は緑が茂り、それだけでも美しい。そして、もともとヴェルセシユカという国の気候自体が、どちらかと言えば夏でも乾燥していて涼しいのだが、このエピ村の気候は王都ライルよりも北に位置するためか、またはヤドヴィガ山脈に近いいためか、さらに冷涼だった。遠くに見える峰には夏でも溶けきらないほどの雪が残っているのだろう。白い輝きを望むことが出来た。

査察の間、リユーネリア達は領主の館に滞在することとなっている。

ザクスリウムの領主とは言っても、この度の査察に訪れたのは、ザクスリウム北方の地方領主だ。もともと広大な土地を有する領主は大抵が貴族で一年の大半を王都で過ごしている。なので、代わりに数人の領主に土地を分けて治めさせていることがほとんどだ。本

来ザクスリウムを治めるべき領主であるイーデン侯爵も、地方領主から上がって来た嘆願をよく調べもせずそのままに願い出たらしい。だから今回の査察の話には青くなつて、好きに調べてもいいが自分は関係ないとまで言つてきた。その話を聞いたリユーネリアたちは呆れてものが言えなかつたが。

地方領主は三十代の半ばほどの痩身の男だつた。名をコンラッド・アディントンと言つた。

栗色の髪の鋭い目つきをした男で、どこか人を寄せつけない雰囲気をしていた。それはどこか薄ら寒いものを感じさせ、リユーネリアの本能に何かを告げる。

しかも出迎えて最初に対面した時、査察官が若いエリアスだと分かると、明らかに態度が高慢なものへと変わった。エリアスも単にエリアス・グウィルトとしか名乗っていない。確かに家名から貴族ではないことが知れたが、だからと言つて査察官として来た人間を蔑ろにする貴族はいない。一概には言えないが、大抵の貴族は心づもりのもりか、査察官を丁寧にもてなすことの方が多いのだ。

リユーネリアもエリアスに紹介された時など、思わず笑顔が凍りつくかと思えるほどじろじろと見られ、補佐官だと分かると話す相手にもならないとばかりにその後は見向きもされなかつた。どうやら女だからだと見下しているようだった。

一通り挨拶を済ませると、割り当てられた部屋へ一度荷物を置きに行くことにした。

それほど大した荷物はなかつたが、ロドニーが手を貸してくれたので一度に運ぶ。

彼は先月やつと従騎士の地位を賜つたばかりで、十四歳という年齢の割に顔立ちも幼く、身長もリユーネリアと同じほどだ。薄茶色の髪と同色の瞳は人懐っこく、他の騎士たちに頼まれた雑用も嫌がらずに手際よく片付けていく。これぐらいの少年なら普通、従騎士

の地位を驕って嫌がりそんなものなのだが、彼はどうやら苦労性の人間らしい。年も近い分だけあって気軽さもあつたのだろう。旅の道中もなにかと気づかってくれ、今も部屋へと荷物を運ぶ途中、ため息交じりに話してくれた。

「団長のジェレマイア様は人使いがとってもひどいんですよ。あ、いや荒いって言った方がいいのかな。僕は小さい頃から団長の実家であるエーメリー家で働かせてもらっていたからそれなりに慣れていますけど」

エーメリー家は男爵家だ。そこで小姓として働いていたが、よく動くロドニーを騎士団長であるジェレマイアが気にいったらしい。ロドニーも気にいられたのはいいが、こき使われていたと話してくれた。だが、彼からはジェレマイアに対する尊敬が言葉の端々から感じられ、本当に嫌がっているようには聞こえない。

そのジェレマイアは現在、数名の騎士と警備の関係上、館の見取り図の確認と建物の周囲を調べに行っている。

「リリアさんも何か用がある時は言って下さいね。僕に出来る事だったら何でもしますから」

荷物を部屋に入ってすぐのところを下ろすと、ロドニーははにかんだように笑った。

「ありがとう。心強いわ」

彼は今から他の騎士たちの荷物もそれぞれの部屋へと運ばなければならぬらしい。今回の査察で、多忙を極めることを予告されている少年に、労いをこめて礼を告げる。

するとパツと頬を赤くして、ロドニーは慌てたように俯き、口早に退出の言葉を告げてから身を翻した。

まるで子犬のような少年を微笑ましく思いながら見送り、リユーネリアは部屋へと入った。

そこは意外にも日当たりのいい部屋で、こぢんまりとしていたが清潔感も漂っていた。

窓からはエピ村が一望でき、眺めも上々だった。

リユーネリアがくつろぐ間もなく、すぐに部屋の扉がノックされ、返事をするロレインが姿をあらわした。

「お疲れではありませんか？」

入ってくるなり胸に手を当てて敬礼しそうになるロレインに、慌てて駆け寄りその手を押さえる。誰が見ているか分らないし、何より、今のリユーネリアは単なる一官僚という役割に過ぎない。

「大丈夫です。それよりも、あなたも少しぐらいゆっくりしても良かったのに」

ずっと騎馬で来ていたロレインは、断然リユーネリアよりも疲れしているはずだ。それなのに疲れなどひとかけらも見せない涼しい顔をしている。

それにしても、すぐに部屋へとくるとは何か心配ごとでもあるのだろうか。

怪訝に思っていると、ロレインが再び姿勢を正す。

「リリア様。念のため、部屋を調べさせていただきます」

丁寧に頭を下げる彼女に、慌ててそれを止めさせる。そして小声で囁く。

「侯爵令嬢が、単なる査察補佐官などにそのような態度を取られる方がおかしくありませんか？」

「いいえ、あの方より命を賜っております。出来る限りのことをするのが騎士としての私の仕事です」

誰からだとはつきり名前を出さないあたりが、ロレインの優秀なところだろう。それにどうやら態度を改めてくれるつもりはないらしい。

思い返せば確かに、コーデリア達とお茶をしていた時も、ロレインはどちらかと言えば無口な方であった。いつも遠慮がちな態度だったが、仕事となると彼女は一步も引く気はないらしい。

仕方なくため息をつき、どうぞと部屋を調べる許可を出す。

「ロレインたちの部屋はこの近くかしら？」

「はい。おそれながら同じ階に用意をしていただきました。あとで部屋をお教え致しますので、何かあればいつでも声をかけて下さい」
寝台の下や絨毯等をめくりながら、頼もしいことを言ってくれる。確かに、今までどこに行くにもニーナと一緒にだったのだ。本心を言えば、全く不安がないわけではない。

「ありがとう。心強いわ」

ロドニーには悪いが、ロレインの方が同じ女性ということと正式な騎士というだけあり、数倍の安心感がある。感謝を込めて心より礼を口にした。

「出来るかぎり、リリア様のいらっしやる部屋には私がバレンティナが控えます。どうぞ心おきなく仕事をなさって下さい」

部屋を一通り調べ、不審なところはなかったらしく一礼して部屋から出ていった。

さて、と再び部屋の中央へと立つ。そして荷物へと目を向ける。

今夜は領主が査察官の歓迎の為の宴を用意してくれたらしい。

それなりの格好をしなければならだろうが、今は単に査察官補佐という身分だ。王女のように身を飾らなくてもいいというのは意外にも気が楽だった。

しかも染めた髪は茶色で、いつもの雰囲気と違う自分を見るものもなかなか楽しい。

荷物の中からドレスを出す。飾りの少ない簡素なドレスで、いつもリユーネリアが日中に来て過ごす部屋着よりも生地は劣る。それでも、今の自由をありがたく思ってしまう。それもこれも、リユーネリアを快く送り出してくれたウィルフレッドのおかげだ。リユーネリアは胸に手をあてて指輪があることを確認すると、改めてきちんと査察官補佐としての仕事をしようと、そつと心に誓った。

17・不安要素（相談にのってやるから）

翌日より領主の館の一室を貸し切り、エリ阿斯と資料を繰る。

借りた部屋は一階の書斎で、それほど大きな部屋ではなかったが、入り口を除いた全ての壁が蔵書で埋まっていた。中央に四人掛け程度の机が置いてあり、エリ阿斯と二人で作業するには十分な広さである。そこに必要な資料を運んでもらい、午前中はお互いに必要と思われる箇所を抜きだしく作業にあてた。

午後からは交代で村へ行き、村人から話を聞くことを予定している。

軽めの昼食を取った後、リユーネリアはロレインとバレンティナを伴って領主の館から出ようとしたところで、騎士団長のジェレマイア・エーメリーに呼び止められた。

今回の査察に、護衛として連れてきた騎士八人と従騎士一人のうち、リユーネリアの素性を知っているのはこのジェレマイアとロレイン、バレンティナの三人だ。他の騎士は単なる査察官補佐としか思っていないだろう。もし、王子妃としてのリユーネリアを王宮で見かけていたとしても、今は暗い茶色の髪に簡素な服なのだ。誰も王子妃だとは気づかないだろう。

「これから村へ行くのか？」

赤みの強い金髪を後ろに撫でつけてはいるものの癖が強いのか、寝ぐせのようにピョコピョコとはねている髪は、いかつい顔をどこか愛嬌のあるものに見せている。歳も三十を超えたぐらいだろうか。背も高く、リユーネリアにとっては見上げるほどだが、威圧感はいささか感じさせない。むしろロドニーと同じように人懐っこささえ感じさせる。しかも、この度の査察は身分を隠しているので敬語を使わないでくれと頼むと、ニカリと笑い、仲間と話す時のような態

度で接してくれていた。

「はい。村の方達にお話を聞いてきます。あの、何かありましたか？」

笑顔で尋ねると、ジェレマイアは自分の頭に手をやり、ぐしゃぐしゃと髪をかき乱した。

「いや、用ってほどのことはないが……」

言いづらそうに言い淀み、ちらりとリユーネリアの背後にいる二人に視線を送る。だが、二人がその場から動かないことを見て取ると、深々とため息を落としてから口を開いた。

「ちよつと聞くが……あんた、身の回りのことは大丈夫なのか？」

さぞ言いづらいことなのだろうかと身構えていたリユーネリアだったが、思いがけない問いに自然と笑み崩れる。

「その心配をしてくださったんですね」

本来、一国の王女として育ってきた姫ならば、身の回りのことはおろか、ボタン一つさえ止めることができなくてもおかしくはない。それをジェレマイアは心配していたのだろう。そして後ろの二人を見たのは、きつと彼女たちの手を煩わせているとでも思ったのだろうか。

リユーネリアは可笑しくて、思わず声を出して笑った。

「ありがとうございます。大丈夫ですよ。一人で出来ます」

「そうか……。いや、もし必要ならロドニーを貸そうかと——」

そう言いかけたところで、怖いものでも見たかのようにジェレマイアは一步下がる。

「エーメリー団長」

押し殺したような声を発したロレインが、リユーネリアの一步前へと出る。

「馬鹿なことをおっしゃらないで下さい。女性に男の小姓を付けるなど常識外ですよ」

「いや、そういうつもりで言ったんじゃない……、それにロドニーは小姓じゃなくて……」

従騎士——と声が次第に小さくなっていく。

ロレインは踵を返すと、さっさと玄関へと向けて歩き出した。

「行きましよう、リリア様。こんなところでぐずぐずしていると日が暮れてしまいます」

ちらりと振り返って、リユーネリアを何気に促す。

「ロレイン。団長さんは心配して……」

あまりの態度にいさめかけた言葉を、当のジェレマイアが止めた。
「いや、いい。……あまり遅くならないうちに帰ってきてもらえる
とありがたい。——二人とも、頼んだぞ」

身体の向きを変え片手を上げると、まるで逃げるように去っていった。

どうやら心配して様子を見に来てくれたようだ。多分、身の回り云々は口実に過ぎなかったのだろう。

ロレインとバレンティナも不器用なジェレマイアの配慮に気づいたのだろうか。リユーネリアと視線を合わすと、思わずといったように苦笑した。

「さ、行きましよう」

リユーネリアは今度こそ二人を連れて、館をあとにした。

リユーネリア達と別れて報告の為に書斎へと向かっていたジェレマイアは、廊下に立ちすくみ俯いている少年を見つけ、慰めるつもりで肩を叩く。

「まあ、あれだ。ロレインも悪気があって言っただけじゃないんだ。気にするな」

先程のロレインの声が聞こえていたのだろう。小姓と言われたことに衝撃を受け、落ち込んでいると思ったのだが。

「僕……リリアさんに小姓だと思われてるんですか？」

「は？」

思いがけない言葉に、ジェレマイアはまじまじとロドニーを見下

ろす。

この少年がまだ自分の腰ぐらいまでしか背がなかった頃からよく知っていて、まだまだ子供だと思っていたが、今の言葉から推測するに今頃になって色気づいたのか。

ここは喜ぶべきなのだろうが、先程ロドニーが言った名前に素直に喜べないものをおぼえる。

彼女の素性はたとえどんな事情があろうとも明かせるものではない。もしも何かあろうものなら、自分の命一つで償えるようなものでないことも承知している。

だが、ここで少年に初めて芽生えただろう恋心をいきなりぽつきり折ってしまうのも気が引けて、思わず唸る。

「いや、おまえが従騎士であることは知ってると思うぞ?」

小声になりつつ、控え目な慰め方しかできない。

「でも僕は雑用しかまだ出来ないし、それに年下だし……」

言いながら次第に落ち込んでいく少年に、ジェレマイアは天を仰いで片手で顔を覆った。

そんなことは問題にもならない。

彼女は王族で、雲の上の人間で、しかもなにより人妻だ。

最初からロドニーは失恋決定なのだ。

ジェレマイアの脳裏に、ふと第二王子の顔を浮かぶ。こういう時、あの王子がいればとも思う。この手のことに関しては、まず間違いないと上手く助言してやれる。しかし、今回はその王子の奥方がロドニーの初恋相手となるのか……。

髪をぐしゃぐしゃとかき回し、心中で悪態を吐く。なぜよりもよって彼女なのか。

そもそも、ウィルフレッドは王族のくせに、エリート意識の高い近衛兵を警護につけたがらなくて——要は女性遊びをいさめられることが多かったと記憶している——気さくな騎士団との付き合いを好んでいたところがある。パルミディアの王女との婚姻が決まった時でさえ、気楽に考えていたふしがあってジェレマイアでさえ心配

になったほどだ。が、ここ数カ月の間は一体どうしたものだろう。本当に第二王子自身の噂なのかと疑ってしまったほどだった。

その第二王子を骨抜きにした相手が一体どれほどの美女なのかと期待して、好奇心半分で今回の査察の護衛に願い出たのだが。

確かに清楚な雰囲気を持った人だと思った。今までの王子の趣味からはかけ離れた勤勉さも持っている。まだ十七だというのに、会話を正確に理解しようとする慎重さも持ち合わせている。正直、あの第二王子には勿体ないほどの女性だ。しかも時々見せる、瞳に宿る強い光にジェレマイアでさえゾクリとするものを感じさせた。それは王族でも一握りの人間が持つ、何か、だ。思わず膝を折りたくなる。

彼女は普通の王侯貴族の女性と同等と考えてはならない。それを、ウィルフレッドが気づいたというのなら、入れ込んでいるという噂が本当だということも頷けるものがある。あれはまるで稀少な宝石の原石だ。あの時折見せる清廉な輝きに心を絡め取られてしまう。手放すと二度と手に入れることは出来ないだろう。

それを考えると、絶対に相談できないし、してはならない。するべきではない。

深々と溜息をつく、ジェレマイアは頷く。それでも一つだけ言えることがある。

「何にしろ、おまえが騎士になる努力を人一倍すれば、彼女に認めてもらえるんじゃないか？」

これだけは確実だ。

たとえロドニーの恋心を叶えてやることは出来なくても、騎士として彼女に忠誠を誓うことは出来る。その忠誠を彼女が受け取ってくれば、ロドニーの望む形とは違えど、騎士としての本望は叶えられるだろう。

「そう、なのでしょうが？」

子犬のような眼差しを向けられ、ジェレマイアの良心が痛む。だが、ここはもう、首を縦に振るしかない。

「そうそう」

まるで棒読みのようだった。

「そう、ですよね」

それでも次第に本来の明るさを取り戻していくロドニーに、自分の無責任さを心の中で詫びる。

そして忘れてはならないことを一つだけ告げる。

「あまり早まった真似はするなよ。何かあれば相談にのってやるからな」

自覚したのが昨今なら、まあおかしいことはしないだろうが、念のためだ。釘を差しておかなければならないだろう。相手は人妻で、王子妃だ。そんな相手に何かしようものなら、知らなかったで済む話ではない。

ジェレマイアは、もう一度ロドニーの肩を叩くと、今度こそ書斎へと向かった。報告事項が一つ増えたなと思いながら。

18・跳梁跋扈（頼みます）

村の若い娘たちは、ロレインの風貌を見てみな我を忘れたように仕事の手を止めていた。

確かに太陽の光をあびた銀髪は美しく、澄んだ灰色の瞳もそれを納める顔も凛々しい。背もスラリと高く、男性と並んでも遜色はない。一方、バレンティナは薄茶の髪の柔らかい雰囲気的女性で、取っつきやすさはある。背も女性にしては高い方かもしれないが、それでも女性的な雰囲気は拭えない。二人がヴェルセシユカの王宮に仕えることが許された騎士にしか着ることが出来ない紺色の制服を着用しているものだから、目立つことこの上ない。そんな彼女らをつき従わせるリユーネリアも、実はそれなりに注目を浴びていることに本人は気づいていない。染めた髪は太陽の下で、紅に近い茶色に輝き、その双眸は紫だ。日頃、日射しの下に出ることのない肌は抜けるように白い。目立たないはずがない。

村人たちの視線を浴びながら、三人は取りあえず村長の家へと向かうことにした。

昼食を取ったばかりだったのか、村長は庭先にいて古い倒木を椅子がわりにしてお茶を飲んでいるところだった。

天気がよく、確かに外にいるには少し暑い。だが、木陰に入ると山から下りてくる風だろうか。通り抜けていく風が冷たく心地いい。こちらに気づいた村長に、かすかに頭を下げる。

「すみません。査察の者ですがお話をうかがってもよろしいですか？」

許可をもらって庭へと足を踏み入れる。

リユーネリアの背後から現れた騎士に、村長は何を思ったのかじつと目を向けた。

「そちらは……」

「護衛の者です。お気になさらないで下さい」

査察官に護衛がつくのはよくある話だ。

知られたくないことがある時、人は二つの行動のうちどちらかを取ることが多い。それは決して褒められた方法ではないことを前提としての話だが、多くの場合が、袖の下を送ることだ。これが一般的で穏便な方法だの一つだ。だが、もう一つの、危ない橋を渡る方を選ぶ者もいる。それは、査察官自体を消すことだ。消息不明にしまえば、知られることがなくなると安易にも思っているのだ。その為、大抵の査察官には護衛がつく。だから、リユーネリアが査察官補佐として護衛を連れているのも別におかしなことではないのだ。

リユーネリアの言葉をどう取ったのか、村長は陰鬱な顔をして家の中へと案内してくれた。

明るいい日射しの下から、急に暗い屋内に入ったので一瞬目がくらむ。

だが、次第に慣れてくると、広々とした広間が入り口を入ってすぐ左にあり、右は生活空間ともいえる台所や小さなテーブルが置いてあるのが見えた。

「汚いところだが好きなところに座ってくれ」

汚いとは言われたが、古いだけで実際に汚れているわけではない。きちんと掃除も行き届いている。だが、村長宅と言われている割には家屋の痛みが激しいように思えた。大抵、こういう村では祭りとか村での決めごとがある時、集まる場所は村長の家だ。当然、それだけの人間が入れる空間がこの広間なのだろう。常に手入れもされているはずだったが、この家はそうに見えない。

リユーネリアたちが広間の方へと向かうと、村長はお茶の準備をしてやってきた。

村長はジョナスと名乗った。歳は五十を過ぎた辺りだろうか。日頃から日にあたっているせいか、もう少し年にも見えなくはない。

「おまえさんがたは……その、王宮から来たのか？」

リユーネリアが椅子に腰かけ、その背後に二人の騎士が立つ。

ジョナスは背後の二人が座る気がないのを見ると、声をひそめておもむろに尋ねてきた。

「はい。ウィルフレッド殿下より指示を受け、こちらの査察に来ました」

一介の査察官補佐が直接指示されたのではないにしろ、統括しているのは第二王子だ。今回の査察の責任は、全てウィルフレッドが負うことになる。だから、査察官としてのリユーネリアもおかしな真似は出来ないのだが。

「じゃあ、わしの息子とは会っておらんのか？」

思いがけない言葉に、目を瞬く。

何故、ジョナスの息子の話が出るのか分からないまま取りあえず頷く。ちらりとロレインたちを見たが、彼女たちも小さく首を横に振った。

すると、ジョナスは見るからに一回り小さくなったかのようにうな垂れた。

「やはり無理だったか……」

背中を丸め、頭を抱えたジョナスに、リユーネリアはただ事ではない何かを悟る。

「何があつたのですか？」

わずかに身を乗り出して聞くと、ジョナスは肩を落としながら、それでもポツリポツリと話しだした。

「……戦争が終わってからのことだ。大抵の兵士は兵役を終え余程のことがない限り、普通は生まれ故郷へと帰るだろう。この村にも多くはないが無事だった者は帰って来た。だが、中には故郷に帰ろうとしない者もいるのさ。ただ、そのまま街に住みつき職を得るのならはまだいい。だがそうでない者たちの中には、ならず者として辺境の村に住みつくやつもある。やつらは平気で盗みを働く。荒らす。奪う。……そんなやつらがあの……あの山に住んでおるんだ」

ここからでは見えないが、ジョナスは一方向を指さした。その指先は、まっすぐと北に向いている。

リユーネリアはこの村に来る時に見た山を思い出した。隣国との境になっている、越すのも難しい山々だ。そこに住んでいるというのだろう。

痛ましげな様子の村長に、それでも聞かなければならないことがある。リユーネリアは躊躇いながら口を開いた。

「領主はそういう者たちを掃討しないのですか？」

当然、それは領主の仕事のはずだ。領民を守る義務があるのだから。

だが、ジョナスは力なく首を横に振った。

「領主もそいつらと結託して、甘い汁を吸っているのさ」

やっと身体を起こすと、村長は侮蔑を込めて吐き捨てた。

村長の発言に、一考する。

考えられないことではなかった。だがそれと同時に、リユーネリアの胸に苦いものが込み上げる。

こんなところまで戦争の爪痕が未だに残っているとは。

パルミディアとヴェルセシュカが休戦したのは一年以上も前なのに。お互い自国のことを思っ取り交わされた政略結婚ではあったが、これで少しは国民が戦争に追われた生活をしなくても済むと思っていたのに。国の仕出かした戦争の責任を少しでも負うことができるならと思っていたが、まだまだ現実はいきれていないのだろうか。

口から出てしまいそうな謝罪の言葉を胸に押しとどめ、リユーネリアはさらに気になったことを尋ねた。

「……その者たちはいつ頃から村に来るようになったのですか？」

「もう一年以上になる」

「それで、あなたの息子さんは何をしに王宮へ？」

「直接、訴えに行った」

最後の方は、すでに諦観がこもっていた。もう村長は分かっている。

るのだ。

地方の村の村長の息子が、王宮に行ったからといって簡単に役人が会ってくれるはずはない。本来なら、領主が仲介をしてくれる役割を持つ。だが、あの領主がそのようなことをするはずがない。もちろん領地の持ち主であるイーデン侯爵も面倒事は避けて通るタイプの人間だ。門前払いをされて終わりだろう。

「息子さんはいつこの村を発ったのですか？」

「もう五日になる」

ざっと逆算してみる。ジョナスの息子がこの村を出たのが五日前。王都に着くまで馬車を利用したとしても最短で三日かかる。ということは今日から三日前の夜か二日前の朝に王宮に着いたことになる。リユーネリア達が王宮を出たのが三日前の朝。完全に行き違いだ。だが、仮にリユーネリア達が王宮にいたところでジョナスの息子が来たことを知ることが出来ただろうか。

リユーネリアは小さく首を横に振った。

きつと無理だろう。門前払いされてしまい会うことはおろか、リユーネリア達の耳にも届くことはないだろう。だからきつと、今王宮にいるウィルフレッドへと話が届く可能性は限りなく零に近い。

そちらは取りあえず保留し、もう一つの懸念を確認する。

「息子さんが村を出たことを領主は知っていますか？」

「いや、多分まだ知らないはずだ。夜、人目につかないよう出て行ったから」

随分な警戒のしようだ。そのならず者というのは、かなり性質の悪い手合いなのかもしれない。

「わかりました。私達も出来る限り力になります。あなたも領主や他の人に息子さんがいなくなったことを出来るだけ隠していて下さい」

あの領主に知られるのはあまりよくない気がする。

ならず者たちと領主が結託しているとすると、村人たちに危険が迫る可能性がある。いや、もうすでにあるのだろう。でなければ、

ジヨナスの息子が王宮へ向かうことはなかったはずだから。

心細げな村長に、リユーネリアは力強く頷いて見せる。

「あなたも今までどおりの生活を心がけて下さい。でも、もしあなたの身に何か危険があるようでしたら、今私に話したことを言ってお下さって構いません」

「でもそうすると……」

「大丈夫です」

安心させるように笑い、椅子から立った。

こうしてはいられない。話は見えてきた。危険だが領主の館に戻ってエリアスに相談しなければならぬ。

「貴重なお話をありがとうございました」

リユーネリアはロレインとバレンティナを伴って村長の家をあとにした。

だが真つ直ぐに領主の館へは戻らない。

どこに領主の目があるのか分からない。道行く村人に声をかけ、本来聞くべきだった葡萄の収穫についての話をする。

数人に同じ質問をしたあと、やっと館へと足を向ける。

「ロレイン」

「はい」

背後にいた銀髪の騎士がすぐに返事をする。

「護衛の内、誰かを王宮への使いに頼めるかしら？」

「かまいませんが……領主に気づかれる可能性があります」

「——そうね。どうすればいいのかしら……」

先程から村人に話を聞きながらも、ずっと同じことを考えるがい案が浮かばない。焦燥に似た感情がリユーネリアの心中を支配する。

「まずはグウィルト様に相談された方がよろしいかと思います」

「ええ、そうね」

村の中央に建つ領主の館を見つめ、返事をしながらも、館への道のりがやけに遠く感じられ、リユーネリアは零れ落ちる溜息を止める。

ることができなかった。

護衛が八名しかいないものを減らすのは得策でないとエリアスに言われた。その場には騎士団長のジェレマイアも呼ばれ、彼の意見も同意見だった。

領主が減った護衛の数に何を思うか。ではどうやって王宮との連絡をつければいいのか、エリアスたちと策を巡らす。

朝には綺麗に整頓されていた書斎は、今は乱雑に資料が重ねてある。夕食後、部屋に明かりを灯し、話し合いを続けていた。部屋の前には騎士を配置し、誰もこの部屋に近づけないようにしている。

「一番良いのは、査察四日目に王宮との連絡をつける為に人が来ることになっている。その時に護衛の者を入れ替え、人数を合わすのがいいんだろうが……」

ジェレマイアが顎を撫でながら口を濁したのは、きっとリユーネリアが納得しないと思ったのだろう。

だがリユーネリアとしても、村に被害を出さないようにするには、事をできるだけ水面下で運ぶようにしたい。王宮へ手紙を届けるという案もあったが、それは絶対に領主の目に留まることになり、街道に出る前に握りつぶされかねない。そうなるとその手紙の内容を知られることになり、それだけは避けたかった。だがそうすると、やはり王宮からの連絡がくるのを待つしかなく、どうしても時間がかかる。

「あと三日も後のことになります」

眉根を寄せて訴えると、横からエリアスは同意ともつかない返事をする。

「まあ、そうですね。騎馬であれば二日もあれば王宮へと着きますが……」

だが、問題はまだある。今のところならず者たちの話は村長からしか聞いていないのだ。村人もならず者たちを恐れてか、エリアス

は昼の調査で何も話を聞いていないようだった。だから、もつと詳しく確かめなければ何か対策を練るにしても、王宮への使いを出せないとエリ阿斯は渋っているのだ。

そうこうするうちに、窓の外は暗闇に閉ざされていた。

結局、エリ阿斯やジェレマイアの言うとおり、三日後にくる王宮からの連絡を待つまでの間に、村長の言っていたことを極秘に調べることになった。

村長の言っていたならず者たちが、一体どれぐらいいるのか。受けている被害はどのようなものなのか。

「ですが、リリアは明日よりこちらの屋敷で本来の調査を続けてもらいます。村へは私が行きますので」

領主の側にいることが必ずしも安全とは言えないが、もしもリユーネリアが村にいる時にならず者たちが来た時のことを考えると、どちらが安全かは目に見えている。リユーネリアの側には常に騎士が二人いるのだ。領主も何かをすることなどそう簡単には出来ないだろう。

「……わかりました」

本当は自ら動きたかったが、このザクスリウム領へ来られただけでも感謝しなければならぬことなのだろう。それをわざわざ危険に自ら飛び込んでいくことなど、ロレインやバレンティナのことを考えると出来なかった。何かあれば彼女たちの責になる。それに、ウィルフレッドからは絶対にエリアスの言う事を聞けと言われていた。

不満が顔に出ていたのだろうか。

「ご自分の身をご自分で守る自信がありならなら止めませんが」
加えてリユーネリアが自分の身を守る術をもっていないことも確認された。それは遠まわしに本来の立場を考えろと言われているとしか思えなかった。

知らず内に胸の上に手を置いて指輪の存在を確かめる。

先程まで燻っていた苛立ちや焦りが、ゆっくりとだが確実に消え

ていく。

一度、ゆっくりと息を吸った。

「――頼みます」

リユーネリアは視線を上げ、正面から二人を見つめる。

エリアスは一瞬息をのみ、胸に手を当てるとゆっくりと頭を下げた。ジェレマイアも目を見張り、揺らぐ身体を押しとどめるように同じく胸に手を当てる。

彼らのその態度に、リユーネリアは思わず苦笑した。そのような礼を受けるべき資格はないのに――。

ザクスリウム領に来てからリユーネリアの胸に生まれた疑念は、本人も気づかないうちに静かに芽吹き始めていた。

19・暮色蒼然（誰が決めたんですか？）

視察三日目の日が傾き始めた頃、それは起こった。

領主の館で資料を読みあさっていたリユーネリアは、村から響いてきたざわめきにふと視線を上げた。

夕日の赤い光が窓から斜めに差し込み、リユーネリアの髪をいつそう紅く燃え立たせる。その一方、影は黒々と長く床に縫いつけられている。

資料を台の上に戻すと、窓に近づき村がある方向を眺めた。だが生憎、この部屋は一階でよく見えない。少し考えたのち書斎を出ると、扉の両脇に控えていたロレインとバレンティナが姿勢を正して問いかけてくる。

「どうなさいましたか？」

二人は、いつもの時間より早くに出てきたリユーネリアに驚いた様子だ。

廊下には外の喧騒がまったくいっていいほど届いておらず、嘘のように静まり返っていた。

書斎に鍵をかけると、リユーネリアは二人についてくるように言って、自分の部屋へと戻った。

部屋の扉を開けると、喧騒がわずかにだが聞こえた。窓から村の人々が、道や畑を横切り、慌てふためき走り回っている姿も見える。ロレインとバレンティナもそれに気づき、表情を変えて窓際に寄って来た。

仕事を終えて家に帰ろうとしていた村人たちが、馬で道を駆けていく数人の男たちに追いつがっている。馬上には馬から落ちそうになっている女性の姿も見えた。

それは、村の一カ所で起きていることではなかった。

女性を馬上に乗せている者もいれば、袋いっぱい何らかの——多分、農作物や衣服を詰め込んだ——ものを抱えている者もいる。それは明らかに略奪の現場で。

リユーネリアは一時、息をすることさえ出来なかった。

「——ロレイン、バレンティナ！お願い……。すぐに行つて！」
二人を振り返る。

だが、わずかな逡巡を見せたのち、ロレインが首を横に振つた。
「リリア様をお一人にすることは出来ません。どうしてもとおっしゃるならバレンティナを置いていきます」

言うなり、すぐにでも身を翻して出ていこうとするロレインに、
なおも言い募る。

「駄目です！私は大丈夫です。この部屋にいます。絶対に出ません。だから二人とも他の騎士たちと行つてきて」

「しかし……」

「お願い！私の代わりに——」
バレンティナを見上げると、彼女はいつもの柔和な笑みではなく真剣な顔つきで頷いた。

「わかりました。行つて参ります。ですが、絶対に私たちが帰ってくるまでこの部屋を出ないで下さいね」

それに頷き、それでもロレインはわずかに躊躇っていたが、リユーネリアが急かすと出ていった。彼女たちも騎士だ。困っている人を助けるのが仕事だ。

リユーネリアは窓から村の様子を見守る。

何も出来ない自分が腹立たしい。

こんな気分になったのは、四年前以来だ。

ヴェルセシユカとの戦争が激化し、一時期、リユーネリアは戦場の後方支援に回ったことがある。王族が戦場にいるだけで、兵士の士気が上がるという理由からだ。その時もこんな気持ちにさせられた。

父親の教育方針は娘に絶対に武器となる物を持たせないことだっ

た。たとえ身を守るための基本的な技術さえ、教えてもらうことは出来なかった。だが、その代わりに馬術だけは仕込まれた。どんな危険からも逃げられるようにと、それこそ徹底的に仕込まれた。そのおかげか戦場で戦火が飛んで来た時も、王女であるリユーネリアを逃そうとした兵士たちの足手まといになることはなかったはずだ。だが、目の前で広げられる惨劇を自らの力でどうにかすることが出来ないことは、戦時中も今も変わらない。何も出来ないまま、見ていることしか出来ない。

無意識に手を握りしめていた。きれいに手入れされた爪が、手のひらに食い込む。

その時、背後でカタリと音がして、部屋の扉が少し開く。

「誰？」

思わず声が尖ってしまった。

今この場に、身を守るものは何もない。

ロレインたちには部屋から出ないと言ったが、部屋に入ってくる者のことは何も考えていなかった。

息を潜めて、ゆっくりと扉が開くを見守る。

「リリアさん。ごめんなさい、脅かしてしまって……」

うなだれるようにして姿を現したのは、ロドニーだった。

リユーネリアは思わず安堵の息を吐き出す。

「どうしました？」

「いえ、僕にはまだ何も出来ることがないので、ジエレマイア様とロレイン様に、こちらでリリアさんを守るように言われて……」

つまり二人が心配して寄こしてくれたのだ。

申し訳ない気持ちで、リユーネリアはロドニー入室を促す。

「どうぞ、入って」

ロドニーを招き入れ、一応扉の外に誰もいないことを確認する。

「皆は村へ行ったの？」

「はい。馬を出しましたので、すぐに対応できると思います」

ロドニーも窓際に寄って、村を眺めた。リユーネリアも再び視線

を村へと向ける。

調査をして分かったことが何点があった。

もともとザクスリウム領の地方領主であるコンラッド・アディン
トンは、先の戦争で功績を上げ、二年前にこの領地をもらい受けた。
それまではエピ村の村人たちも普通に税を納め、男手は少なくとも
葡萄酒の生産高もそれなりにあり、戦時中というにもかかわらず、
割りと裕福な暮らしをしていたことが資料からは見て取れた。だが、
コンラッド・アディントンが領主となってから、休戦となったにも
関わらず、村人の暮らしは悪くなる。一つは、コンラッドの横行。
これはすぐに発覚した。お粗末なことに増税分と国に支払うべき領
主の税金が一致していなかったのだ。それともう一点は、村長が言
っていたならず者が村人を脅す^{おびやか}からだ。多分、リユーネリアが考え
るに、もともとコンラッドとならず者たちには接点があったのだろ
う。領主となったコンラッドのザクスリウム領を、ならず者たちが
根城にしたのだ。

絶対に許さないと思った。

もともと戦争が起きたのは国の上層部の決断だ。運河の通航権を
欲したのは商人と、商人の背後にいる貴族だ。なにも農民やその他
の民は望んで戦争などしたいなど思わなかっただろう。しかし戦争
で一番迷惑を被ったのは戦争を望まなかった民だ。それなのに功績
を上げたからと領地を与えられ、拳句に領民を脅かす領主を許すわ
けにはいかなかった。領主とは領民を守る義務があるはずなのに。

薄闇に染まる空の下、まだ喧騒は続いている。

と、ぼうつと一角がオレンジ色に染まる。

「まさか……」

思わずロドニーと顔を見合わせた。

——火をつけたのだろうか。

なんてことを、と呟き口元を押さえる。そして、ぎゅつと目を閉
じる。これ以上、見ていられなかった。

自分があの場合に行って何かができるわけない。足手まといになる

だけで、結局は何もできないだろう。だが、何かができるかもしれない。揺れ動く葛藤に、自分の立場が重石になる。

耐えなければロレイン達に迷惑がかかる。そして行く末は夫であるウィルフレッドにも。

だが、耳に届く悲鳴を聞いた瞬間、リユーネリアは身を翻していた。

もう耐えられない。

「リリアさん！」

二の腕を掴まれ、引きとめられる。

「どこに行くんですか!？」

「何もできないかもしれない!でもっ、このまま黙って見ていることなんて、私にはできないっ!」

腕を掴んだ手を振り払おうとしたのと、ロドニーが声を出したのは一緒だった。一瞬、何を言われたのか分からず、動きを止める。

「僕と一緒にいきますからっ。何もできないなんてことはありませんっ」

「でも……本当は、行つてなどいけないのに——」

混乱して、自分が言っていることと行動が伴わない。二つの相反する思いにさいなまれ、リユーネリアは身動きが取れなくなる。

だが、そんなリユーネリアの瞳を覗き込むようにロドニーは告げた。

「誰が決めたんですか?人が助けを求めている手を取ってはならないと、誰が決めたんですか!？」

その言葉に、リユーネリアは思わず目を見開いた。言葉が、その意味が、全身を強く打つ。

誰も決めたのではない。勝手に自分の立場に雁字搦めになり、勝手にそう思い込んでいた。

「行きましょう!僕がリリアさんを守ります」

リユーネリアは、胸に込み上げてきた思いと、熱くなりかけた目を固く瞑り、唇を噛みしめた。

「ありがとう、ロドニー。……ええ、行きましょう」

震える声で礼を告げ、決意を込めて目を開く。

二人同時に身を翻し、扉を開けて勢いよく出ようとした——が、リユーネリアは扉の前にあった何かにぶつかってよろけてしまった。まさかもうロレインたちが帰って来たのだろうか。

そう思っ、ぶつかっ、たものを二、三步下がったところで見上げた。

部屋は薄暗い。

だが、相手が明かりを持っていたので、すぐにそれが誰だかわかった。

「……領主、殿——」

自らが呟いた声が、ひどく乾いて耳に届いた。

20・絶体絶命(どうしてここに……)(前書き)

暴力的な描写あり。苦手な方はご注意ください。

20・絶体絶命（どうして ニジジ……）

はっとしてリユーネリアは頭を下げた。

「申し訳ございません。急いでおりましたので」

ぶつかつた非礼を詫び、この忙しい時に何の用だろうと思ひなおす。さつさと用件を片付けて村に行かなければならないのに、と焦つてもいた。

部屋が薄暗いことに気づき、背後を振り返るとちょうどロドニーが燭台に火を灯したところだった。

「領主殿、村が大変なのです。すぐに館の兵を村に向かわせて下さい」

入口に立ちふさがっている領主に、せめてもう少し横に避けていてくれたら部屋から出ていけるのにと氣ばかりがせく。だが、リユーネリアの言葉をあつさりとは無視した領主は、自らの問いを優先させた。

「グウィルト査察官はどちらに？」

つのる奇立ちを押さえつけ、溜息を誤魔化すように返事をする。

「——査察官でしたら、まだ村に行かれたまま帰ってきておりません」

きつとエリアスのことだ。剣は得意でないと云っていたが無事だろう。それに彼の周囲にもいつも護衛がついているのだ。何かあるはずはない。

先程から自らにそう言い聞かせていた。

「そうか」

領主はそう言つと、無遠慮にもリユーネリアの部屋に入つて来た。その態度に、リユーネリアは密かに眉をひそめる。ロドニーも領主の行動に不審なものを感じているのか、じりじりとリユーネリアの側に寄つてきた。

普通、女性の部屋に遠慮もなく入ってくる男はいない。まして昼間ではないのだ。なお有り得ない。

しかし、ここは領主の館だ。不快に思いながらもリユーネリアは再度、領主に訴えた。

「領主殿。村に兵を――」

「口うるさい補佐官殿だな」

どこまでも見下げた視線を向ける領主に、背筋が強張る。得体の知れない雰囲気、やはり領主がならず者たちとつながっているのは事実だったのかと不安がよぎる。あの日、村長の家から情報を持って帰ってからというもの、この件に関してはエリアスもジェマイアも口を閉ざしたままだ。だから、リユーネリアは詳しい話を知らない。

だが、嫌な予感だけはする。

「村人にはこのようなことなど日常茶飯事だ。ある程度のことを目を瞑れば、やつらも命までは取らない」

軽々しく言い放たれた言葉に、カッとなる。

「でも、攫われた娘もいたわ！」

彼女たちの身を考えると、どうしても命が無事ならいいという考えにはならなかった。

「数日後には村に戻ってくる」

それがどのような状態なのか、リユーネリアも分からないわけではない。命があればいいという話ではないのだ。

だが、なぜ今領主がエリアスを探しにここへ来たのかを頭の片隅で考える。

可能性として一番有り得るのは、村の現状の口封じだ。だからと言って、王宮から来た人間を消すことはしないはずだ。もしそうなれば、もっと大掛かりな査察が来るのは知れている。

「今回のことは目をつぶれと？」

領主を見上げて睨むように問うと、満足げに口元を歪めて笑った。「なるほど。補佐官殿は話が早いようだ」

どうやら間違いではないようだ。リユーネリアは背筋を正すと、正面から領主を見上げる。

「グウィルト査察官がそれを許すとは思いませんが」

「それはいくらでも方法はある」

鼻先で笑い、どこまでも小娘扱いをする領主に腹立ちは最高潮を迎える。

「あの方は甘くありません！」

それはリユーネリアよりもウィルフレッドの方がよく知っているだろう。仕事に関して、エリアスは妥協をしない。容赦なく片付けていくのだ。それはこの二カ月間、側で仕事を手伝っていたリユーネリアも見ていたことだし、周囲にも高く評価されていることだ。

だが、領主は突然声を上げて笑った。

「だから方法はいくらでもある」

「まさか……」

脳裏に最悪の事態を思い浮かべてしまった。

殺すというのだろうか。だからエリアスを探していると。そこま
でこの男は愚かなのだろうか。

だが、領主は意外にも否定した。

そして、一步リユーネリアに近づく。ざわりとした何かが、リユーネリアの本能に何かを告げる。

今まで黙っていたロドニーが、咄嗟にリユーネリアと領主の間に立ちふさがった。

「いくら甘くはないと言っても、身近にいる者の頼みなら甘くならざるを得ないだろう」

一步一步近づいてくる領主に、一步一步とリユーネリアも下がる。どう考えても対格差から、ロドニーも一緒に下がらざるを得ない。

何を言っているのだろうか、何をするつもりなのだろうと、リユーネリアは前にいるロドニーの背に庇われながら、焦る心の中で必死に考える。

「何を……」

窓際まで追いつめられ、あと少しというところで領主は止まった。その時、窓の外の喧騒が、一際激しくなる。

はっと窓の外に気を取られたその直後、派手な音とともにうめき声が上がった。

視線を戻すと、目の前にいたはずのロドニーが部屋の隅で崩れていた。意識がないのか、ピクリとも動かない。

「ロドニー！」

慌てて駆け寄ろうとしたが、領主の手によってそれは阻まれた。腕をつかまれ、思わず睨み上げる。

「何をするのか」

悲鳴に近い声は、得体の知れない恐怖のため、思った以上にうわずっていた。

領主はそれに気づき冷笑すると、容赦なくリユーネリアを床に引き倒した。背中を打ちつけ、一瞬痛みの為に息が止まる。だが、非常にまずい状況であることは頭では理解できていたので、どうにか痛みを我慢すると慌てて起きあがろうとした。

だが領主に、腕を床に押し付けられる。

「お前が査察官に泣きつけばいい。いくら査察官でもこれからおまえに起こることを思えば、黙るしかないだろう」

リユーネリアは出来れば想像したくなかった事態に、言葉を失った。

結婚前の女性が身を持ち崩すことは禁忌だ。身分が高くなればなるほどそれは絶対といえる。現在、仮の身分で王宮勤めということになっているリユーネリアにしても、それなりの良家の子女であることに変わりなく、そのような女性が貞操を疑われては結婚できなくなる。だから、リユーネリアがエリアスに口止めしろと言っているのだ、この領主は。

なんて卑劣な――。

それに本来の王子妃という身分から言っても、これは個人単位の問題ではすまされない事態だ。現実問題として故国であるパルミデ

イアにも泥を塗ることになるし、夫であるウィルフレッドにも申し開きもできない。

リユーネリアは渾身の力で領主の腕を押しつけようとした。だが、びくともせず、その抵抗さえ領主は面白いものでも見るかのように見下ろしている。

領主の片手でリユーネリアは両手を拘束され、空いたもう片手に握られたナイフを見て思わず動きを止めた。

冷やりとしたものを心臓に当てられたような気がする。

ナイフが首元に押し当てられ、実際に冷やりとした感触に息さえできない。少しでも動こうものならそのナイフが簡単に皮膚を破り、血管を切り裂いてしまいそうだった。

だが、すぐに布の裂ける音と同時にナイフの冷たい感触は遠ざかる。領主はナイフを放ると、その手は容赦なくリユーネリアのドレスを引き裂いた。

「いやっ、放して！」

コルセットのおかげで、直接肌を晒されているわけではなかったが、それでも身体を撫でまわすおぞましい感覚と、首筋に寄せられた領主の唇に嫌悪を通り越して、吐き気を覚える。いくら身をよじっても、拘束は解かれない。

助けを求めて視線をさまよわせた先にロドニーがいたが、ピクリとも動かず、領主が放り投げたナイフも当然手にすることができない。

その時、ふと領主の動きが止まって、首筋をざらりとした感覚が滑っていった。そこにあるのは、指輪を通していた鎖だ。リユーネリアは思わず抵抗を止め、それが最後の救いとはばかりに領主の反応を窺った。

「この指輪はなんだ？恋人にでももらったのか？」

部屋の明かりに翳すように、鼻で笑って眺めていた領主だったが、ふとその指輪に刻まれた紋章を見たのか、表情が変わった。

指輪にはヴェルセシユカの国章が彫られている。その指輪の内側

には第二王位継承者の地位を示す文字もある。

ヴェルセシュカの国旗には国章が用いられている。 magari なりにも戦争で功績を上げたのなら、少なくともヴェルセシュカの国章ぐらい見覚えがあるはず。この徴が意味することを知っているはずだ。

「——これは……おまえは、一体……」

領主の驚きで見開かれた目が、リユーネリアを見下ろした。

リユーネリアも領主を睨み上げた。

その時、領主の背後に音もなく忍び寄った影を目の端に捕らえたが、それはリユーネリアが声を上げる間も与えず、領主を殴り飛ばしていた。

「リリア様！」

廊下のどこからかロレインの声が聞こえた。

裂かれたドレスの襟元を、残った布を寄せるようにして起きあがると、領主を殴った人物を見上げる。

「あ……」

肩で息をしている金髪の男が、リユーネリアを見下ろしていた。そしてすぐに自分の上着を脱ぐと、リユーネリアの肩に掛けてくれた。そしてしっかりと前をかき合せる。

「どうして、ここに……」

だが、その問いに彼は答えず、床に蹲って呻いている領主を無理やり立たせる。

「ロレイン。彼女を頼む」

廊下から入ってきた銀髪の騎士に声をかけると、ウィルフレッドはすぐに部屋から出ていった。

21・自己嫌悪（結局私は役に立たなかった）

「ネリア様、お怪我はありませんか？すぐに着替えの用意を致します」

床に座り込んだリユーネリアの傍らに膝をつき、ロレインが気づかわしげに眼差しを向けてくる。

まだ部屋の外では喧騒が聞こえていた。

「待つて、ロドニーは？」

視線を巡らせて、部屋の隅に倒れている少年を見つける。まだ意識がないのか、全く動かない。だが微かに胸が上下しているところを見ると、生きていることは確認できる。

ロレインは近寄ると、素早く状態を見た。

「大丈夫です。脳震盪でしょう。あとで誰かを寄こします」

無情にもそのままにしておこうというのだろうか。多少の非難を込めて視線を向けると、ロレインはため息をついた。

「そのようなお姿を他の者に晒すなど、いらぬ噂のもとです」

言われて、状況を思い出す。

「どうして、殿下がここに？」

先程見たのは幻だったのだろうか。だが、今自分がおっている上着はウィルフレッドのものだ。現実のはず。

しかしロレインは、乱れたリユーネリアの髪を手で整えながら首を横に振る。

「その話は後ほど。立てますか？」

「ええ……」

ロレインに支えられて立ち上がろうとしたリユーネリアだったが、ほっとしたのか思うように足に力が入らない。ロレインの腕をつかんで何度も試みたが無理だった。

見かねたロレインはリユーネリアの前に身を屈めると、

「失礼します」

そう言って、リユーネリアを背負った。

申し訳なさでいっぱいになる。

「村はどうになりました？」

「殿下が騎士団を伴ってこられましたので、ならず者たちはじきに捕らえられるでしょう」

どうやら、先程の気を取られてしまった外での喧騒はウィルフレッツ達 came からだったのだろう。

リユーネリアは今までいた階とは違う上階の空いていた一室に連れて行かれた。扉を閉めてしまつと階下の喧騒は全く聞こえず、静まり返った室内はすでに燭台に明かりが灯され、部屋の用意が整っていた。

ロレインにゆつくりと寝台に下ろされる。

「すぐにバレンティナが来ます。身なりを整えられたら、今日はお休み下さい」

「ですが、殿下は……」

はおっている上着を持つ手に力が入る。

「殿下は今からグウィルト様と今回の件の処理に入ります。明日にでもこちらに来て下さるよう伝えておきますので、それまでは部屋から出ないで下さい」

そう言って、ロレインは部屋から出ていった。すぐにバレンティナがお湯の入った桶と着替えを持ってやってきた。

お湯で浸した布を手渡され、リユーネリアは領主の触れた場所を何度も拭った。どれだけ強く擦っても気持ち悪さが取れなくて、見かねたバレンティナに止められるまで何度も拭いていたため肌が赤くなってしまった。

着替えも手伝ってもらって、ゆつたりとした夜着を着ると、寝台に押し込まれる。

「まだ眠くないし、村がどうなったのか教えて」

バレンティナは困ったような顔をしたが、このままではリユーネ

リアが安心して眠れないと思ったのか、少しだけ教えてくれた。

彼女たちが村に着いた時、もうほとんど略奪は終わりにかけていた事。そしてならず者たちの後を騎士団の人間が追って行ったこと。村の損害はひどく、燃やされた家も数多く上る。

ロドニーのことも教えてくれた。

ロレインの診立て通り、軽い脳震盪だったらしい。今は意識が戻って、一応頭を打ったようなので様子見の段階だが大丈夫だろうという事だった。

逆に、リユーネリアも領主の暴挙を聞かれた。

だから口止めの為にされそうになったことを話した。

バレンティナはその間ずっと手を握ってくれていて、痛ましげに話を聞いていたが、話が終わるとすぐに廊下へと続く扉に視線を向け一礼した。

「今夜もロレインと控えておりますので、何かありましたらすぐには呼んでくださいね」

そう言っただけで身を翻すと同時に扉が開いてロレインが顔をのぞかせた。

どうやら報告をしに行くようだ。二人が部屋から消えると、リユーネリアはほっと息を吐いた。まだ胸元にある指輪を夜着の上から握りしめる。

あの時、ウィルフレッドはリユーネリアを見ても何も言わなかった。視線さえすぐに逸らした。あんなことがあって呆れられたのだろうか。嫌われてしまったのだろうか。それはリユーネリアをひどく不安にした。

ふとテーブルの上に畳んで置かれているウィルフレッドの上着を見た。

寝台から下りると、ゆつくりとそれに手を伸ばす。

瞬間、涙が溢れ出ていた。

今更ながらに、あの時の恐怖が蘇ってきた。全力で拒否してもびくともしなかった。両腕には今もなお力ずくで押さえられた痕が赤

く残っている。されるがまま、もしあの時、ウィルフレッドが間に合わなかったらどうなっていたのか。考えただけでも目の前が暗くなり、足の力が抜けてしまった。

不安にかられウィルフレッドの上着を抱きしめた。涙が止まらない。

先ほどからずっと、どうしよう、という言葉が頭の中を駆け回っている。

たえ何もなかったとはいえ、領主に触れられた自分にウィルフレッドはきつと呆れただろう。結婚したからには身を守る義務が生じることぐらいリユーネリアも百も承知だ。だが助けられたとはいえ、あの瞬間だけ見れば抵抗していなかったように見られていても仕方がない。

それに、もしもこのまま嫌われてしまえば、折角上手くいっていた協力関係もお終いだ。リユーネリアの望むものは最悪、永久に手に入れられなくなる可能性だってある。

渦巻く不安に押しつぶされそうになりながら、どれほどの時間そうしていただろう。

「どうした？」

いつの間にか、背後にウィルフレッドがいた。

驚いて見上げると、逆に驚かれた。

「なにを泣いてるんだ？」

床に座り込んだままのリユーネリアの隣に跪き、ウィルフレッドは安心するようにとリユーネリアの髪を優しく撫でる。

それが優しすぎて、リユーネリアの涙腺はとうとう決壊した。

「最初は、こ、怖かったんです」

リユーネリアは鼻声で言った。

「でも、結局私は役に立たなかったと思うと悔しくて」

半分、嘘をついた。

ウィルフレッドに嫌われたのではないかということは、どうにか言葉をのんで隠した。望んでいたのは協力関係であって、好きとか

嫌いとかそのような安易な言葉で言い表せる関係ではないと思っ
ていたはずなのに、ウィルフレッドとの距離感思っていた以上に心
地よく、だから今の関係が崩れてしまうことが怖かった。

だが、ウィルフレッドは深く息を吐き出すと、床に座ったままの
リユーネリアを抱き上げた。その腕は温かくて、リユーネリアは寝
台に運ばれながらすぐそばに聞こえる声に耳を傾ける。

「役に立たないと思ったことはない。俺はいつもネリーに驚かされ、
やらなければならないことを教えてもらっている」

「教えて……？」

寝台に下ろされ、布団をかけられる。

背を向けて寝台の端に腰を下ろしたウィルフレッドは頷いた。横
顔を見つめたが、説明することはしなかった。

「よかった……」

それでも、どうやら嫌われたわけではないことが分かった。あの
時のウィルフレッドは無表情で怖かった。だが今はいつも通りだ。

気づくと、いつの間にか涙は止まっていた。

ひどい顔をしているに違いないと、涙のあとを拭おうとすると、
気づいたウィルフレッドにその手を止められた。

そのまま近づいてくる唇が、涙のあとをすくい取っていく。それ
はどこまでも優しく、いつまでもその優しさに触れていなくなる。
不安やあの時の恐怖が、薄れていく。

気づくと、離れていこうとするウィルフレッドに手を伸ばしてい
た。もう少しその優しさに触れていたくて、そのまま頬に手を添え、
自ら彼の唇に自分のそれを重ねていた。

それは、ほんの一瞬。まばたきをするほどの間。

目を開けると、驚いた顔のウィルフレッドが目の前にいて、我に
返る。

「あ、あの……」

どうしてそんな事をしてしまったのか、途端、混乱する。
ウィルフレッドの頬から手を放し、顔を反らす。

「ネリー」

名前を呼ばれても振り向けなかった。背中を向け、恥ずかしくて枕に顔を埋める。

きつと顔は真っ赤になっているだろう。

もう一度名前を呼ばれた。それでも首を横に振ることしかできなかった。

すると、首にかかった髪を梳かれた。指先が触れ、無意識にピクリと身体が震えるが、露わになった首筋に温かい吐息と唇が押しつけられた感触に、悲鳴を上げる。

首筋を押さえて身をよじると、のぞきこむウィルフレッドと視線が絡む。

「ネリー……」

甘さを含んだ声音に、身動きできなくなる。

いつものように顔中に降ってくる口づけに、リユーネリアはもう一度良かったと呟いた。

口づけの合間にその意味を尋ねられ、本当の言葉を吐く。

あの時、ウィルフレッドが怖くて嫌われたのかと思ったこと。領主に触れられた自分が情けなくて、それがすごく不安だったこと。

ポツリポツリ話していると、黙って聞いていたウィルフレッドが、最後に唇をふさいでその不安に蓋をする。そのまま深くなっていく口づけを受け入れようとした時――扉を叩く音で現実を思い出す。

リユーネリアはハツとして、ウィルフレッドを押しやった。

そうだった。ウィルフレッドはまだ仕事で、自分の様子を見にくさに過ぎないのに。

状況的にまるで自分から誘ってしまったようで、無性に恥ずかしく居心地が悪かった。

布団にもぐりこむと、ウィルフレッドは瞼に口づけを落とした。

「おやすみ」

いつものようにそれは腕の中ではなかったが、不安はすっかり心の中から消え去っていて、久しぶりに落ち着いて眠れそうだと思う

た。

ぼんやりと部屋から出ていくウィルフレッドの後ろ姿を眺めながら、ゆっくりと瞼を閉じた。

22・無我夢中（役に立たないと思ったことはない）（前書き）

ウィルフレッド視点です。

22・無我夢中（役に立たないと思ったことはない）

「いやっ、放して！」

遠くでリユーネリアの悲鳴が聞こえた時、ウィルフレッドの中で何かが外れた。

ロレインやエアアスの制止を振り切って、一人で駆け出す。腰にある剣を鞘ごと抜いた。

明かりの漏れる一室に音を立てないよう注意して覗きこむと、リユーネリアに馬乗りになった男が片手で彼女を拘束しているのが見えた。しかもドレスは無残にも裂かれている。下着の上にコルセットをつけている為、肌が直接晒されているわけではないのがまだ救いだったが、ウィルフレッドの中に御しがた感情が膨れ上がる。

それでも気丈に男を睨みつけているリユーネリアは、こんな場面であるにもかかわらず、今まで出会ったどの女性よりも気高く美しいと思ってしまう。だが同時に、そんな目をしては駄目だとも思う。それは男を挑発する目だ。

息を殺して音を立てないよう素早く近づくと、リユーネリアは驚いたように目を見張った。

男に気づかれる間を与えず、鞘で殴りつけた。

我ながら、よく剣を抜かなかったと息を吐く。

身を起こしたリユーネリアは両手で胸元を隠しながら、こちらを見上げてポツリと言った。

「どうして、ここに……」

信じられないものでも見ているような目で見られ、ウィルフレッドは自らの上着を脱いで彼女の肩に掛ける。しっかりと前を合わせ、他の男の目に触れさせないようにロレインを呼ぶ。

彼女なら、絶対にリユーネリアを悪いようにしないだろう。それだけの信頼はある。

ロレインがリユーネリアの側に行つたのを見届け、ウィルフレッドは自分が殴り倒した男を見た。まだ蹲つて呻いている。だが、容赦するつもりは欠片もなかった。無理やり立たせ、部屋から連れ出す。これ以上、リユーネリアを他の男の目にさらさせる気はなかった。まして、この男は彼女に何をしたのか。何をするつもりだったのか。それを思うと、今すぐこの男の命を断ちたい欲求が渦巻き、ウィルフレッドは早々に身近にいた騎士に男の身柄を預けた。

エリアスが近づいてきたので、伴つて別室に移動する。

ロレインに、もっと静かで使われていない部屋に移動するように言つておいたので、早々と騎士たちの目に留まることはないはずだ。あとで彼女の部屋の周囲は、人払いもしておかなければならない。

「あの男は誰だ？」

ところで、とエリアスに尋ねると、呆れたように答えが返つてきた。

「あれが領主ですよ」

その言葉に、眉をひそめる。

ウィルフレッドたちが騎士団を伴つてこの村に来たのは、実は三日前に村長の息子のデールと名乗る男が、ヴァーノン子爵夫人に伴われてウィルフレッドに面通しをしたからである。

リユーネリア達がザクスリウム領に行くことになった時点で、どんな小さなことでもかの領地に関することなら話を通すように伝達していた。だが、王宮の門番はエピ村というのがザクスリウム領にあるということを知らなかったのだ。またデールもザクスリウム領だということを口にしなかったらしい。それで門前払いをされたデールは渋々引き下がり、王都をあてもなくさまよい歩き、どうしようかと途方に暮れていたところ、ある商店にザクスリウム産の葡萄酒を見つけた。嬉しくなつて店の者にその葡萄酒のことを話し、自分たちの村のことを話していた。実はこの商店というのが、とある豪商が営む店の一軒で、その豪商というのがヴァーノン子爵夫人の

実家だった。ヴァーノン子爵夫人はこの商人たちの情報を頼りに、ザクスリウム領の噂を集めていたため、すぐにデールが引つかかったのだ。

ヴァーノン子爵夫人はデールから話を聞き、すぐに王宮へと連れて行った。

そしてウィルフレッドの耳に入ることとなったのだ。

それは、リユーネリアたちが王都を発って、四日目のことだった。すぐに騎士団を動かし、その日の夕方には王宮を出発した。二日二晩、ろくに休みも取らずに馬を飛ばした。

その間、気が気ではなかった。デールから聞いた話では、まともな領主ではないことがすぐに知れた。その領主の館にリユーネリアはいるのだ。たとえ護衛がいようと、何があるかわからない。やはり行かせるべきではなかったと何度も後悔した。

デールがエピ村に起こっている話を持ってくるまでの三日間、ウィルフレッドは広い寝台に一人で眠っていた。隣にあるはずの温もりは無く、甘い香りもない。ピタリと身を寄せてくる彼女は安心しているのか、ウィルフレッドが多少の悪戯をしても目を覚ますことはない。

当初、彼女の命を狙ってくるものを警戒して、彼女を腕の中に包んで眠っていたが、いつの間にかその温かさに逆に安堵している自分もいた。だから、あと十日以上も独り寝なのかと思うと妙に肌寒く感じてしまう。

あの日、リユーネリアがザクスリウム領へと出発する前夜、いつもなら必要以上の触れ合いを必ず拒絶していたはずなのに、珍しく抵抗することなく受け入れた。だからついつい調子にのってしまっただが、もしも彼女があのまま拒否しなければ——いや、無理にでも恥ずかしがる彼女を自分のものにしていれば、と後々思わなかったわけではない。だが、彼女が嫌がることを無理強いして、嫌われたくないという思いもあった。

最初は政略結婚など仕事の一つぐらいしか思っていなかったが、彼女を見ていると常に自分にできる最善のことをしようと努力している。しかも、ヴェルセシユカが彼女にとってどれほど危険な場所なのかも承知した上でなお、この国のことを考えてくれている。果たして自分は彼女ほどこの国の事を考えているだろうかと密かに自問自答して、何に對してなのか分からないが負い目さえ感じた。だからこそ、そんな彼女を見ていて学ぶことは多かった。

それが日常となってくるのに大した時間は必要なかった。いつしか目はリユーネリアを追い、彼女の興味を引きたいと思い始めた。しかし、彼女の興味は仕事ばかりで、しかもリユーネリアはウィルフレッドのことを博愛主義者だと疑わず、少しも嫉妬という感情を見せないことを悔しく思っていた。だから、理由をつけて彼女をからかうことで気持ちを誤魔化していた。その時だけは、自分を見てくれていたから。

だが離れていたわずかな間で、嫌でも思い知ってしまった。リユーネリアのあの紫の瞳が自分以外の男を見るのが耐えられない。それがたとえエリアスであろうと、誰だろうと、自分だけを見て欲しい――。

騎士たちがならず者を掃討してきたのは、ウィルフレッドが領主のもとからリユーネリアを助けた後、それほど時間は経っていないかった。

ロレーンとバレンティナにリユーネリアに起こった詳細を聞いて、いてもたってもおられず、見かねたエリアスが事後処理を請け負ってくれたおかげで、ウィルフレッドは彼女が休んでいる部屋へと向かえた。

眠っているかもしれないと思い、静かに扉を開く。

すると、床に座り込む小さな背中が見え、そつと扉を潜った。その背中がかすかに震えている。

「どうした？」

声をかけたのと、リユーネリアが泣いているのを知ったのは同時だった。どうしたもこうしたもないだろうと、自らを叱責する。

隣に膝をつき、弱々しく震える彼女を思わず抱きしめたくなる衝動を押さえ、伸ばしかけた手を彼女の頭に乗せる。

「なにを泣いているんだ？」

なぜ彼女が自分の上着をかき抱いているのかなどわからないまま、すぐに領主のことを思い出して怖かったのかと思い当たった。彼女に何があつたのかを思えば、一人にすべきではなかったのだ。いくら常日頃気丈な振る舞いをしているからといっても怖くないはずはない。

リユーネリアはウィルフレッドが出したものと同じ答えを返してきた。しかも、彼女は自らを役立たずだと嘆いている。

なぜそんなことを思うのか。

床に座り込んだリユーネリアを腕に抱き上げると、寝台へと向かう。

「役に立たないと思ったことはない。俺はいつもネリーに驚かされ、やらなければならないことを教えてもらっている」

いつもそうだった。不甲斐ないと思っているのは自分の方なのに、ウィルフレッドはゆつくりと寝台にリユーネリアを下ろすと布団をかけた。夜着の姿を明かりの下で直視するには耐えられない。理性を保てる自信がなかった。

「教えて……？」

彼女は不思議そうな顔をしていた。

じつと見つめられ、まるで理性を試されているような気になり、背中を向けるよう寝台の端に腰かけた。

彼女はただ一言、良かったと呟き、涙のあとをぬぐおうとした。

もう泣く様子はない。

ほっとしながらリユーネリアの手を止めると、その頬に口づけた。口づけるだけの筈だったのに、涙のあとをゆつくりと辿る。彼女の涙の一滴でさえ愛しいと思う。

このままでは理性が焼け切れてしまいそうだと思い、なんとか自制をかけると惜しく思いながらも彼女から離れようとした。

だが、ふと頬に感じた手の感触に動きを止める。

離れたはずなのに、その距離は一気に縮まった。

押しつけられた唇の感触に、ウィルフレッドは呆然とリユーネリアを見つめる。

見るまに彼女の頬は赤く染まり、背を向けて枕に顔を隠してしまった。

「ネリー」

名を呼んでも、彼女は頭を横に振るばかりだ。

だが、どうしても彼女の顔が見たかった。羞恥で赤く染まった顔を見たい。もつとその瞳に自分を映して欲しい。

気づくと、彼女の髪をかきわけ、露わになった首筋に唇を落とす。していた。

彼女が小さな悲鳴を上げて顔を上げる。当然、その隙を逃さない。

「ネリー……」

覆いかぶさるように彼女の額に、頬に、鼻に、瞼に口づけを落とす。

彼女が震えるような声で小さく、良かったと呟いたのが聞こえた。何に対してなのか、彼女の思う不安とは何なのか。先程の役立たず発言とは違う安堵をその言葉の中に感じ、彼女の全てが知りたくて訊ねていた。そして後悔した。彼女はいとも簡単にウィルフレッドの残りわずかな理性をも消し去ってしまった。

彼女の囁きに近い告白。不安。

聞いた瞬間、その言葉を奪うために唇を塞いだ。そんな不安を与える気は毛頭ない。だが、同時に不安を感じてくれたことに対して仄暗い愉悦も感じる。

たまに遊び心で深く口づけると、彼女は全身を緊張させ拒絶を示す。

だが今は――。

夢中になりかけた時、無情にも扉がノックされウィルフレッドを呼ぶ声が聞こえた。

途端、腕の中にいた彼女が全身を緊張させたのが分かった。慌てたように布団にもぐりこんでしまったのを見て、思わず舌打ちしそうになった。

それでも協力関係を望んでいた彼女の心情に少しでも変化があったことを肯定的にとらえ、彼女の瞼にいつものように口づけを落とす。

「おやすみ」

本当なら彼女の側についてやりたいと思う。だが、領主の件にしても、まだ何一つ報告や村の被害状況など把握しきれておらず、今後の方針さえ決まっていない状態で投げ出そうものなら、彼女はきつと呆れて怒る。そして、仕事を疎かにする者を嫌うだろう。

リユーネリアに嫌われないためにも仕事をしなければならぬ。そして早く片付けて、もう少し彼女との関係を近いものにしたいとも思う。

そう思っ、今は彼女から離れた。

23・事後処理（我儘を言っているみたい）

翌日、馬車でニーナが到着した。

ロレインたちに止められて出迎えることはできなかったが、部屋に駆け込んできたニーナは泣きそうになりながらリユーネリアに抱きついてきた。そして着いて早々だということにもかかわらず、甲斐甲斐しく世話を始めた。

領主とならず者たちは、王都へと連行されることになったと聞いた。本来なら領地を束ねるイーデン侯爵に裁く権利があるのだが、今回の査察の折にその件についても放棄していると見做し、第二王子の名のもとに現在はアディントンの治めていたこの地を差し押さえし、いずれは事が事なだけにこの事態に気づけなかったイーデン侯爵の責を問い、アディントンが治めていた領地を取り上げる予定らしい。

領主の館にいた召使たちは解雇となり、騎士団が逗留するには人出が足りなかったが、村人たちが下人の仕事ぐらいならと手伝ってくれている。その指示もニーナが出さなければなくなり、泣く泣くリユーネリアの側を離れていった。

ロレインとバレンティナは相変わらずリユーネリアの側にいる。

今はニーナが持ってきた衣装のため、リユーネリアは完全に王子妃の装いだ。髪も、特殊な洗剤をニーナが持参していたため、せっかく染めていた色は元に戻り、完全に黒髪になっていた。

その状態で丸二日。ウィルフレッドの指示で、リユーネリアは一步も部屋から出ることができなかった。今までは護衛であったロレインたちが、今では完全に見張り役である。

当然、リユーネリアの機嫌は悪かった。

「どうして部屋から出てはならないの」

査察は微妙な形で終わってしまったが、資料をまとめなければな

らない。これからアディントンの罪を問うにしてもそれらは必要になってくるはずだ。

ウィルフレッドもエリ阿斯も、きっと先日ので忙しいはずだ。ならば、もともと査察に関わっていたリユーネリアがその資料を作ってもいいはずである。

「殿下の命です」

「リユーネリア様。殿下は心配なさっておいでなのです」

ロレインとバレンティナは宥めるように何度目か同じ台詞を口にする。

確かにウィルフレッドが心配するのも分からなくもないが、今の屋敷には騎士団の者たちばかりがいるのだ。なんの危険があるというのだろうか。むしろ、刺客のことを考えれば王宮よりも安全ではないだろうか。

「村の様子を見たいの。この部屋では村を一望できないわ。何も行きたいと言っているのではないでしょう」

引く様子を見せないリユーネリアに、ロレインは大げさに溜息をついた。

「わかりました。では殿下に聞いてまいります。ですが期待しないで下さいね」

最後の方が、なぜか捨て台詞のように聞こえ、リユーネリアは首を傾げる。

部屋からロレインが出ていってから、バレンティナはもう耐えきれないとばかりに笑いだした。

今更だが、この二人の騎士は見た目もだが、性格も対照的で生真面目なロレインに対して、バレンティナは柔軟だ。あまり表情を変えないロレインに対して、バレンティナは表情豊かである。とつきやすさで言えば断然バレンティナの方が上である。

しかし今は、バレンティナがなぜ笑っているのか分からない。リユーネリアもロレインも、真面目に話していたはずなのだが。

「どうしましたか？」

「いえ、すみません。ロレインがあまりにも過保護すぎるのがおかしくて……」

目じりに浮かんだ涙を拭いながらも、まだ完全に笑いがおさまりきっていないようだ。バレンティナは笑いながら理由を口にした。

「過保護？」

「ええ、リユーネリア様に対してですよ？」

「私？」

どこが過保護なのだろうと首を傾げる。

「ロレインは殿下の気持ちがとてもよく分かるんです」

「……ウイルフレッド様の？」

意味が分からず、今度は逆の方向に首を傾げる。何故、ウイルフレッドの気持ちとロレインの過保護がつながるのだろう。元恋人であるロレインだが、その肩書は情報収集のための偽装であって、事実でなかったはずだ。しかしロレインは三人の元恋人の中で唯一の未婚者だ。ウイルフレッドと心を通わせていたと考えてみるにしても、それならばどうしてリユーネリアに過保護になる必要があるのだろう。しかもロレインの性格を知れば知るほど、絶対にウイルフレッドの恋人になるような性格には見えない。そういう不誠実なことを一番嫌いそうだからだ。

考えてみるが明確なものは全く見えてこない。

仕方なく白旗を掲げる。

「先程も言いましたけど、殿下はとても心配をしてこちらに駆けつけて来られたんですよ。本来なら護衛も兼ねていた騎士団を差し置いて、騎馬で来られたと聞きました」

それがどれほど異常な事態で緊急を要していたのか、リユーネリアにも分かっていた。

王族というものは、そう簡単に王宮から移動できるものではない。行程に危険がないかを確認し、馬車の周囲を騎士が近衛が護衛する。危険は徹底的に排除されてからの移動となる。だが、ウイルフレッドはそれを無視してまで来たのだ。危険を顧みず。

それは本心より心配をしてくれたということだろうか。取り繕った関係を周知させるのではなく。

そう考えると、心の奥底で甘美な疼きをわずかだが感じる。

だが、バレンティナが言うような理由だとは思えなかった。ウィルフレッドはどちらかというと言情で、できることなら面倒事から逃れたいと思っているような面を持っている。確かに最近はそのような所は見えなくなってきたが、危険を顧みず駆けつけてくれる事を自分の為にしてくれたと思うほど、リユーネリアは自惚れてはいない。

「百歩譲って殿下が私の心配をして来てくれたとして、ロレインが過保護だというのは？」

「同じ理由ですよ。とてもリユーネリア様のことが大切だからです」肩をすくめて言う彼女は、さも当然だというように見えた。

だがリユーネリアには、それをとっても居心地悪く感じてしまう。大切にされるほどの価値は自分にはない。

良くしてくれるのは感謝しているが、期待されるほどのことはできない。それが今回の事件で、よく分かったのだ。

思い出して気落ちしそうになっていると、バレンティナがところで、と声をかけてきた。

「『百歩譲って』というのはどういう意味ですか？まるで心配されていないのが当然というように聞こえましたけど？」

にこりと笑って言われ、はたと気づく。

そう言えば、ウィルフレッドとは仲の良いフリをしていたのだ。ここが王宮ではないので、つい気がゆるんでしまっていた。

「あ、いえ……、言葉のあやです。殿下に心配をかけてしまったことを心苦しく思っていたので、つい……」

意味の通らない言い訳をしていると、ノックの音と同時に扉が開いた。

ウィルフレッドにつき従うようにロレインも続いて入ってきて、バレンティナはリユーネリアに一礼して、ロレインと共に部屋の隅

に控える。

出迎えようとして礼を取ろうとすると、近づいてきたウィルフレッツドに、当然のように腕の中に閉じ込められる。

「ネリー、何を言ってロレインを困らせているんだ？」

「ちよっと、ウィルフレッツド様！」

久しぶりの人前でのフリに、リユーネリアは思わず悲鳴を上げてしまう。

そう言えばあの夜以降、事後処理に追われているウィルフレッツドとは顔を合わせていなかった。だから余計にでも自らの取った行動を思いだし、一段と気恥かしくなる。

なんとかして欲しいと思っても、ニーナや王子妃付きの侍女たちならばつかさず助けてくれるのだが、ロレインたちに助けを求めようにもこちらを視界に入れようさえしていない。それが正しい礼儀なのかどうかは別として、自分で何とかしなければならぬのかと腹を括る。

「困らせてなどっ」

どうにかウィルフレッツドの腕からのがれられないかと自らの腕をつつぱると、その拘束は簡単に外れた。意外に思って見上げると、湖面のような瞳とぶつかる。だが、その瞳は真剣な光を湛えている。

「困らせてなどいない？ロレインは駄目だと言わなかった？」

「ですけど、村に行きたいと言っているわけではありません」

どうしてそこまで反対されるのかわからず、目を反らしてつい反論してしまう。

ふうと吐息が聞こえ横目でちらりと窺うと、ウィルフレッツドが部屋の隅に控えていた二人を下がらせたのが分かった。こちらを見ていなくても気配で察するのなら、なぜリユーネリアの助けに応えてくれなかったのかと心の中で悪態を吐く。

二人が出ていって、静かに扉が閉まると、ようやくウィルフレッツドは口を開いた。

「村を見れば満足する？見たら今度は行きたいと言わない？復興を

手伝いたいと言い出さない？」

顔を覗き込むように言われ、リユーネリアはウィルフレッドを見つめ返した。

次々に投げかけられる問いに、ウィルフレッドが何を言いたいのか分かってしまった。

人間は一つのことに満足すると、次々と欲望が沸いてくる生き物だ。それはリユーネリアの中にも当然ある。

「――それではまるで、私が我儘を言っているみたいだわ。心配してはいけないの？」

「村は大丈夫だ」

素っ気なく言われ、まるでリユーネリアの心配が無駄だと言われているような気になる。

頬が上気するのが分かった。

「だったら、何も危険なことなどないでしょう!？」

なぜ分かってくれないのかと、頭に血が上って言い放つ。

三日前の出来事など、特殊なことだ。同じ建物の中を村が望める部屋へ移動するだけのことを、どうして頭ごなしに反対されているのか、リユーネリアには理解できなかった。しかも一人ではない。ロレインやバレンティナも一緒にと言っているのだ。

だが、目の前にある顔は傷ついたように歪む。

「……俺が領主の行動を聞いて、どれだけ心配したかわかってるのか」

「助けてもらったことは感謝してるわ。でも!」

「守らせてほしいと言っても?心配するのは迷惑?」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。

リユーネリアが村を心配しているように、ウィルフレッドも自分を心配してくれているというのか。だったら、なおのこと気持ちを理解してくれてもいいようなものだろう。

「なぜ駄目なの?大体、変でしょう。どうしてこの部屋から出ては行けないの?この館には、騎士たちがいるのでしょう?だったら危

険はないはずよ」

リユーネリアはウィルフレッドに近づくと、宥めるようにそっとその腕を押さえた。

村を望める部屋に行くことを除いても、間違っただけを言っただけにすぎないはずだ。そして、リユーネリア自身を部屋に閉じ込めておくウィルフレッドの真意を聞くべき権利もリユーネリアにはあるはずだった。

じっと見つめると、ウィルフレッドの瞳がかすかに揺れる。

「……分かっていて。だが、今は駄目だ」

吐き出す息と共に苦しそうに言われ、もう一度どうして駄目なのかを聞こうとした。だが、再びリユーネリアはウィルフレッドに抱き寄せられた。

背中に回された腕に、かつてないほど強く力を込められ、息苦しくて言葉が出せない。

「どうか分かってくれ。これは俺の我儘だ」

耳元で囁みしめるように吐き出された言葉に、リユーネリアはどうにか首を動かしてウィルフレッドを見上げる。だが、その瞳はきつく閉じられていてそこから何も窺うことはできなかった。

「……すまない」

謝罪の言葉と同時に解放され、思わずふらつく。だが、ウィルフレッドは身をひるがえすと、振り返ろうともせず部屋から出ていく。あまりにも痛まじげなウィルフレッドの言葉を聞いたからか、リユーネリアはしばらく何も言えず立ちつくしていた。

24・流言飛語（好き勝手妄想中）（前書き）

ジェレマイア視点です。

24・流言飛語（好き勝手妄想中）

ウィルフレッドと共にザクスリウム領へやってきた騎士団の半数は、アディントンとならず者たちを王都へ連行するのに従行させ、残りの半数——約二十名はエピソードにある領主の館に留まり、そのまゝ第二王子の警護と村の復興に当たることになった。

今回、アディントンの行状で一つだけ、査察官補佐への暴行だけは結局伏せられることになったが、ジェレマイアとしてはその件についてはウィルフレッドに対して何の申し開きもするつもりもなかった。

騎士団長の地位を返上し、必要ならばこの命も差し出すつもりさえあった。その代わり、ロレインとバレンティナへの罰を出来るだけ軽減してもらえよう頼むつもりだったが、いつまで経ってもウィルフレッドは何も言っていない。仕方がないのでエリ阿斯から話を通してもらおうとしたが、返ってきた答えは査察官補佐に関しては、一切を口にするのを禁ずるというものだった。言われてみれば、アディントンたちと王都に随行させた面々は、ジェレマイアとロレイン、バレンティナを除き、最初に査察隊に組み込まれていた者たちが選ばれていた。ロドニーに関しては、雑用係がいなければならぬと判断されたのか、ニーナという侍女と二人で慌ただしく働いていて、とてもじゃないが無駄口を叩く余裕などない。

そこでようやくウィルフレッドが、ジェレマイアの失態を不問にするという意図に気づいた。

ちょうど食堂で他の騎士たちから少し離れて食事をしていたエリ阿斯を見つけ、ジェレマイアは目の前の椅子に腰を下ろす。

「なんの用ですか？」

いつも冷静沈着な執務補佐官は、地位で言えば騎士団長よりも上ではあるが、平民の出である彼は王宮にいれば悪しざまに言われる

こともあったのだろう。決して馴れ馴れしく話そうとはしない。

堅苦しくはあるが、いちいち人の事情に口を突っ込む趣味は無い。ジェレマイアは声を落として食堂を駆けずり回っているニーナを顎で示す。

「あれは、どういう設定なんだ？」

査察官補佐の存在を隠すということは、つまり王子妃がこの館に
いること自体を隠したいと思っていいのだろう。実際、ロレインや
バレンティナからそのような報告を受けている。王子妃のいる館の
一角は、騎士団員たちの立ち入り禁止区域になっており、許可のあ
る人間しか出入りできない。当然、ジェレマイアも許可が無い為立
ち入ることは出来ないが、報告だけは受けているので状況だけは把
握しているが。

しかし、王子妃がこの館にいないことになっているのに、なぜ王
子妃付きの侍女がいるのか。その理由が必要だ。

エリアスはちらりとニーナを見てから、何でもないことのように
言った。

「妃殿下は、殿下のことを心配して自分の腹心の侍女を一人つかわ
したのでしょ」

しかしながら結局は侍女どころか下女の仕事までさせているのが
現実だ。館にいた召使を全員解雇したのは痛かったが、信用のない
者を側に置く危険を思えば仕方のないことだろう。

だがここ数日、騎士たちの間で噂されていることを耳にして、ジ
エレマイアはやはりここは王子の耳にも入れておいた方がいいので
はないだろうかと心配になった。判断しかねた場合は、まず執務補
佐官の耳に入れておくにかぎるとするのが王子に近い者のやり方
だ。

「今、立ち入り禁止区域のことを団員たちが禁断の間と呼んでいる
のを知っているか？」

触れてはならない話題というのはある。今回の場合、王子妃のこ
とに関してだ。

エリアスの表情がわずかに緊張するが、止める様子は取りあえずない。

「……いえ。それが何か？」

幾分、声の高さを低めたが、周囲から見てもそこまで変わった様子は見せない。

ジェレマイアは続けた。

「その禁断の間に入ることが許されている人間が女性に限られているというのに気づいたやつらがいてだな」

ピクリとエリアスの頬が動く。

そして、ゆっくりと立ち上がる。

「場所を移しましょう。詳しく聞かせて下さい」

言われなくても、話すつもりである。

ジェレマイアも立ち上がり、エリアスについて外に出る裏口へと向かった。

厩舎へと続く道の途中でエリアスは立ち止まり、側に建つ領主の館の外壁を一度見上げた。

つられてジェレマイアも見上げて気づく。その場所の建物の中部分は確か階段となっている部分だ。嵌め殺しの窓があるだけで、今は人影もない。

さすが王子の執務補佐官という肩書がついているだけあって、機密事項に関する用心深さはジェレマイアが束ねる騎士たちよりも優れている。

ジェレマイアの感心を余所に、エリアスは両腕を組んでその壁に寄りかかった。

「で、その禁断の間がどうしました？」

冷ややかともとれる口調は、先程の噂の続きが王子に対する悪意を感じ取っているからだろうか。実際、ジェレマイアが話そうとしたことは、決して王子に対して気持ちのいい話ではない。しかし事

実を知っているジェレマイアでさえ、完全に否定できない噂だから困っているのだ。

ピョコピョコはねている髪を撫でつけるように頭に手をやり、エリアスの直視から避ける。

「まあ、あれだな。うちの団員たちは、結婚する前までの王子をよく知っているからな。仕方ないだろう」

この執務補佐官は、日頃は第二王子のことを主を主とも思わない発言をしているが、実のところ誰よりも恭順であることをジェレマイアは知っている。この静かな怒りを買って、ただで済んだ者はいない。そして、その瞳が早く話せと促している。

この男はふだん冷静に見えているが、意外と短気だ。

ジェレマイアは覚悟を決めると、仕方なく、言葉を選んで堂々と告げる。

「相手の素性は好き勝手妄想中だ。殿下が妃殿下に内緒で女性を囲っていると思っている」

今更隠しようもない。

少なくとも、大げさにも言っていないし、嘘でもない。第一、ジェレマイアが困ったのは、女性を囲っているというのが嘘ではないからだ。

エリアスの反応を窺うと、先程と全く変わらない表情だった。いや、あえて言うなら、あまりにも強い怒りの為に動けないのだろうか。

迂闊に話しかけることも躊躇われて黙っていると、ふうっと息を吐き出し、小さな咳きが聞こえた。

「なるほど……」

夏だというのに、一瞬周囲の気温が下がったような気がしたのは気のせいではない。

冷汗が額に滲むのも仕方ないだろう。この度の失態で、この命はないものと諦めていたが、今ここで失くすことに恐怖を感じるのは何故だろう。

「そのような愚かなことを考える者など、騎士でいる資格はないでしょう。この際、永久にこの村で復興を手伝ってもらうことにでもしましうかね」

妙な脅しを言われても困るのだが、騎士団長としてその愚かなことを考える者が、ほぼこの館にいる騎士全員などとは口が裂けても言えない。二十人を一気に失っては、騎士団が人手不足になってしまう。

だがきつとエリアスのことだ。知ると必ず今言ったことを実行するだろう。

「分かった。団員達にはおかしなことを言わないよう、きつく言うておく」

これ以上、噂話に花を咲かせないよう、対策も立てねばならない。「殿下の耳にも入れないよう、気をつけて下さい」

壁から身を起こしながら、エリアスが注意事項を追加する。

しかしそれには、ジェレマイアも一度は頷いたものの、すぐに首を傾げた。

「なんでだ？」

今までの王子なら、そのような噂など一種の名声だと言って放っておいたはずだ。エリアスも見向きもしなかったはずなのだ。

だがエリアスは、一瞬動きを止めると珍しく躊躇いながら口を開く。

「……殿下は現在、あの方のことに關して少し過敏になられているところがあります。しばらく様子を見てみますが……」

ジェレマイアが察するに、エリアスは少しと言ったが、そのことを口にしたこと自体、少しどころではないことが窺えた。

「何か問題でもあるのか？」

聞いたのは単純な好奇心だ。

「いえ、もしかすると今後、あなたに力を貸してもらうことになるかもしれませんか……」

珍しく齒切れの悪い言い方に、ジェレマイアは興味を覚えた。そ

れと同時に不安も覚える。

「まさか、本当に閉じ込めているのか？」

自分で聞いておきながら、今まで疑っていたのかと自覚する。いくら大切だからだと言っても、それはやりすぎだ。

それにロレインたちからの報告でも、そこまでの話は聞いていない。立ち入り禁止区域を設けているのも、あのようことがあったため念には念を入れて注意をしていることと、単に、妃殿下には部屋で控えてもらっているとしか……。

おいおいと、ジエレマイアは唸る。

エリアスも、ウィルフレッドがリユーネリアに極度の執着を見せていることを懸念しているが、昔の王子しか知らない者ならば現実としては受け入れがたい。しかし、騎士団長の力を借りるかもしれないということから、必ずしもそれは誇張されているわけではないのだろう。

自らの思いこみも手伝い、迂闊だった。

「ああ、分かった」

頷きながら、まいったとばかりに、ぼりぼりと頭をかく。

「ですが、この事態はあの方にも責任がありますから。ご自分で何とかしていただくつもりですが、長引くようでしたらその時はお願いします」

エリアスの口ぶりから、本当にしばらく様子を見るようだった。

思わずリユーネリアに心の内で声援を送る。エリアスが手出ししないのなら、ジエレマイアも何かすることは出来ない。

話は済んだとばかりに、館内に戻ろうとしているエリアスの足音を聞いていて、ジエレマイアはふと顔を上げた。

「おい。一つ聞きたいことがあったんだが——」

呼び止めると、白金髪を揺らして顔だけがこちらに向いた。

「なんですか？」

「あの二ーナとかいう侍女だが、彼女の身元はどういうものなんだ？」

濃茶色の髪を一つにまとめ、一日中館内を忙しげに駆けずり回っている侍女を思い出す。容赦なくロドニーを手足として使い、使われている本人もここ最近はずちぶちと文句を言っているほどだ。

ジェレマイアの質問に、一瞬怪訝な顔をしたエリアスだったが、騎士団長としての身元調査と思ったのか、すぐに答えを口にした。

「妃殿下がパルミディアから連れて来られた唯一の侍女ですよ」
不審なところはありませんよとだけ告げて、再び背を向けた。

遠ざかっていく足音を聞きながら、ジェレマイアはその背に礼を告げ、そうか、と誰ともなしに呟く。

あの侍女が歩いている時、本来ならするべき足音が聞こえないことに気づいているのは、多分、まだジェレマイアだけだ。

それが何を意味するのか。

絶対に妃殿下の味方ならば、もう少し様子を見ても大丈夫だろう、とジェレマイアはそう結論づけた。

25・沈黙考（あとは覚悟を決めるだけ）

この地ですべき事後処理もほぼ片づき、明日にでもザクスリウム領から撤退する旨を伝えられたリユーネリアは一つだけ心残りがあった。

査察の調査をしていた時に、ふと思い出したのだ。

昔、何かの書物で見た覚えがあったのだが、他国の——そちらも葡萄酒が有名なある国で——特殊な条件の下に作られた葡萄酒が、それは稀少な価値のあるものとして、生産数も少ないために国外にも持ち出されることがないと記されていた。それが、その国の葡萄酒の取れる地方とザクスリウム領の気候と酷似していたため、もしかしたらその可能性を思いついた。しかし具体的なことはよく覚えていない。だが、この村には葡萄酒作りの名人たちがいるのだ。きっと、リユーネリアの言うことの意味を汲み取ってくれるに違いない。

ただ、それには何よりもまず重要な問題があった。

村人にそれを伝える術がない——。

リユーネリアは部屋に誰もいないのをいいことに、ソファの背もたれにすがり、天井を睨むようにして考え込んでいた。

ウィルフレッドとはあの日以来、顔を合わせていない。何か用がある時は必ずロレインかバレンティナを通して伝えられる。多分、忙しいのだろうということは想像つくが、いい加減リユーネリアも毎日顔を合わせる人間がニーナとロレイン、バレンティナの三人だけでは退屈にもなってくる。ではせめて部屋から出ない代わりに、村長を呼んで欲しいと言って見たが却下され、ではロドニーに手紙を届けてもらえるかを問えば、ニーナから彼にそのような時間はなとの返答が返ってきた。それは一体、部屋の外がどのような状態になっているのだろうと、逆にリユーネリアの方が心配になる。

それに、一人の時間がこんなにも多くあると、余計なことまで考えてしまう。

確かに、ウィルフレッドはリユーネリアを心配して駆けつけてきてくれたのだろう。この村に来るまでの無謀とも言える行程を聞いて、そこまで心配してくれたのかと心が動かなかったわけではないし、それが嬉しくなかったわけでもない。

だが、こうして心配していると云われながらも、部屋から出してもらえない生活が続くと、どうしても不安が募る。

もともとリユーネリアは人質としてヴェルセシユカに来たのだ。今更その扱いをされるとは思わないが、ウィルフレッドと協力関係を築けたのも、王族が戦争反対を掲げているからだ。つまり、リユーネリアはヴェルセシユカの王族にとって、なくてはならない駒なのだ。

要するに、そういうこと……なのかもしれない――。

だからウィルフレッドも心配してくれるのだろう。こうして閉じ込めてまで、リユーネリアの安全を図ろうとしている。それがリユーネリアの意に染まらないことだとしても、身を守るためならば仕方がないと思っているのかもしれないし、この国の為であると考えているのだろう。

だが、本当に仕方がないことなのだろうか。諦めなければならぬのだろうか。できることが一つでもあるなら試してみたいというリユーネリアの考えは間違っているのだろうか。

ここは腹をくくるしかないのかもしれない。最後の手段とは思っていたが、出来ることならリユーネリアの信用に関わる問題だ。この手段は出来ることなら取りたくはなかったが、ゆくゆくはヴェルセシユカの為になるはずなのだ。それを考えれば、信用の一つや二つ失うことなど容易いものかもしれないし、いずれ結果が出れば分かってもらえるというものだろう。

あとは、覚悟を決めるだけだ。

ひそかに立てた作戦をひとしきり頭の中で再現し、リユーネリア

は気合いを込めて立ち上がる。そして廊下への扉に向かうと決心して叩く。部屋の中から扉をノックするというのも奇妙な感覚だったが、ロレインから無暗に扉を開けないよう言われているため仕方がない。多分、これもウィルフレッドの指示なのだろう。何に對してここまでの警戒をしているのか、いつか問い質したいと思っているが今はそれどころではない。

すぐに開いた扉の外には、ロレインとバレンティナが控えていた。ちらりと廊下を窺うが、いつもそこに二人以外の姿を見た事はない。「どうかなさいましたか？」

ロレインがスツと前に出てきたので、当然部屋から一步も出られない。

「ニーナを呼んできてもらってもいいかしら？」
何気ない顔をして依頼する。

「わかりました」

一礼して立ち去るロレインの背中を見送り、ドキドキする心音に気づかれないよう出来るだけ平静を装い、くるとバレンティナに向き直る。ニーナは今この館で最も忙しい人間だ。きっと来るまでにしばらく時間がかかるだろう。

「暇なの。ニーナが来るまでの間、話し相手になつてくれる？」
返事も待たずに身体の向きをかえて部屋に戻ると、バレンティナは素直についてきたようで、背後で静かに扉の閉まる音がした。

後ろ暗いことを考えていると必要以上に挙動不審になつてしまうものだ。リユーネリアは自らに、まだ何もしていないのだからと言いつつもどおりの動作を心がけてソファに腰を下ろすと、バレンティナにも向かい側を進めた。

素直に一礼して腰かけるバレンティナの姿を見て、ついクスリと笑ってしまった。もう一人の騎士とはあまりにもその性質が違いくる。

「きつとロレインだったら固辞するわね」

「はい。それが彼女ですから」

ニコリと笑って答えるバレンティナを見て、やはり協力を頼むなら彼女の方が適任だと思う。しかし計画を喋るわけにはいかない。彼女たちには何も報せず、責任を負わずようなことだけは避けなければならぬ。

「そう言えば、村長さんの息子さんは無事に帰って来れたのよね？」

「はい。ニーナと一緒に戻ってきたと聞きました」

事のあらましを聞いたリユーネリアは、ヴァーノン子爵夫人にすぐに感謝の手紙を書いた。

もし子爵夫人が村長の息子を保護して、ウィルフレッドに報せてくれないければ今頃、リユーネリアは絶望の底にいたかもしれない。

その後、ヴァーノン子爵夫人からもすぐに返事が届き、王宮に返ってくることをランス侯爵夫人をはじめ皆が心待ちにしていることがつづられていた。それを見て、部屋に閉じ込められ出ることもままならない現状よりはと、リユーネリアは一足先に王宮へと帰ることも考えた。しかし———というか、やはりウィルフレッドが許可をしてくれなかったのだ。

一体ウィルフレッドがどうしたいのか分からないまま、リユーネリアの軟禁の日々は続いている。

しかし……。

もはやリユーネリアにはそのつもりはない。

ニーナが来るまでの間、バレンティナを相手に取りとめもない話をする。

騎士たちの日頃の生活をバレンティナは面白おかしく話してくれ、バレンティナ自身やロレインの失敗談を聞いて、退屈ではない時間はあつという間に過ぎていく。部屋に籠ったままの生活は、一日が長くて退屈だ。窓から見える風景も、空を流れていく雲をぼんやりと眺めることぐらいしか出来ない。だからだろうか。騎士たちの生活がとても楽しそうに聞こえる。

しばらくして、ニーナがやってくるとバレンティナは話を切り上げて、持ち場に戻って行った。

「ニーナ、聞いて」

扉が閉まると、リユーネリアは表情を改める。ニーナを連れて、出来るだけ扉から離れた。

「どうなさったのです？」

驚きながらも、声を落としてくれたのは何かを察してくれたからだろう。そつと近づき、リユーネリアに必要以上に大きな声を出させない。

「私……、どうしても村に行きたいの」

やはりこれは我儘なのだろうかという思いが、この期に及んで頭の隅を過る。すでに村が立ち直り始めている話は聞いている。だから心配をしているのではない。確かに、少しでも復興の手伝いができればいいと思う。だが、きつとリユーネリアができる直接的な手伝いはない。ならば、どうしたら村の今後の為になるのか。それを考えれば、やはり村に行かなければならなかった。

真剣に訴えると、ニーナは分かっていたように仕方ありませんねと言いながらそつと笑った。

「わかりました。リユーネリア様の思うままに」

そう言って、頭を下げる。

了承してくれたことに安堵しながら、考えていた計画を話す。無理なところを訂正したり、もつと良い案を出してくれたり情報を提供してくれるニーナはやはり頼りになる。

部屋の外に控えている二人にも、リユーネリアが部屋から出ることを誤魔化さなければならぬ。

それには、先ほど確かめた事で何とかかなりそうだった。多少無謀とも取れる方法だが、ほんの少しの間でいいのだ。リユーネリアが馬にさえ乗れば、振り切る自信はある。

「では午後のお茶の時間に」

全てを確認したのち、ニーナは部屋から出て行った。

彼女を見送って、リユーネリアは再びソファに腰かけて、いつも

のように過ごすフリを続けた。

26・作戦実行（ごめんなさい）

三時にお茶のセットを持ってニーナがやってきた。お茶とは言うても一揃えを持ってくるには台車が必要だ。様々なお菓子も当然用意されており、リユーネリアのその日の気分で選べるようになっていた。ここ数日はこれぐらいしか本当に楽しみがなかったのも、ニーナも必然的にお茶の時間には気合が入っている。だからリユーネリアも素直に喜んでいたし、いつもと変わらないように見えたはずだ。

扉の外にはロレインとバレンティナが通常通りに控えているのが見えた。ニーナに確認すると、何も異変はないとのこと、やはり中止にする必要はなさそうだった。

ニーナはいつもなら菓子を入れているトレーから、どうやって手に入れたのか騎士の制服一式を取り出した。彼女はそのままお茶の準備を始める。リユーネリアは服を受け取ると、ドレスの下にズボンと予め用意していた長靴をはく。あとでドレスを脱ぎ、上着をすぐに着替えられるように準備しておく。

お茶の準備が終わると、ソファに座りニーナに合図を送った。

「かしこまりました。では探してまいります」

作戦開始の言葉を告げ、ニーナは退室した。

ニーナが部屋を出る一瞬、きちんとリユーネリアが部屋にいるかを確認するロレインと目が会った。いつもと変わらない、大丈夫と言いかせながらコップに手を伸ばす。

ニーナにはバレンティナを連れて本を探してきてもらうよう頼んだ。ここは一応、領主の館で、査察の為に資料をあさっていた書斎は、かなりの量の蔵書がそろっていた。午前中にも暇だから会話に付き合っただけと頼んだので、そのあたりはバレンティナにも不思議に思われないだろう。しかも、ニーナに頼んだ本は全く有名で

ないものを三冊。数ある蔵書の中から探すとなると、それなりに時間がかかるはずだ。

これで、バレンティナー人は片づいた。

あとはロレインだ。

こちらは気が重いが仕方がない。

時間を見計らい、手早くドレスを脱ぎ、コルセットも外す。最近には外に出ることもできないものだから、いつもよりゆったりと身につけたコルセットは外すのも簡単だ。騎士の制服に手を通し、やはり少し大きめかと手を伸ばす。しかし作りは女性用のもので、どうやらバレンティナーの服ではないだろうかとあたりをつける。あとで謝らなければと思いつつ、それでも始めてしまった計画を今更止めることはできない。

一部を結い上げていた髪もほどき、簡単にまとめる。

よし、と気合を入れると、扉をノックしてロレインを呼びこんだ。

「ネリア様……、その服は——」

開口一番、呆気にとられたロレインの手を、有無を言わせず取る。

「実はロレインにお願いがあるの」

訝しげな表情を浮かべたままの彼女のその手を両手で握りこむ。

「これを預かっていてほしいの」

そう言っただけで押し付けたのは、ウィルフレッドから預けられていた指輪だ。

それがどれほど重要なものか——。

きつとそれは、ロレインも知っているはず。

「これは——……」

自らの手の中にあるものを見て、目を見開く。完全に彼女の呼吸が一瞬止まった。

その瞬間、素早く身を翻すと扉を開け放つ。

「私が帰ってくるまで預かっておいて」

「ネリア様！」

これれものを押しつけられたかのように完全に足がすくんで身動

きできないロレインを見て、リユーネリアは満足すると同時に申し訳なくも思う。

それが何かを知っていれば、指輪が持つ権力という誘惑と、一方それに伴う重責に挟まれ、身をもってその恐ろしさを知ることになるだろう。後ろめたくはあったが、生真面目なロレインの性格上、絶対に容易く扱わないことを確信している。だからこそ、あえて彼女に預けたのだ。

「ごめんなさい」

心から謝って、扉を閉める。閉まりきる一瞬、戸惑いを見せるロレインと視線が合う。

振り切るように視線を逸らすと、そこからは正面だけを見て走った。

この部屋の周囲は特定に人物以外近づけないよう配慮されているとニーナから聞いて、ウィルフレッドの所業にあきれながらも、逆になんて都合がいいと思ってしまった。それはつまり抜けだしたあと、人と会うことがないということだ。

一階まで駆け下り、ニーナから教えられた裏口から出ようとしたところで見覚えのある人物に出会い、思わず足を止めた。

ここは滅多に人が通らないと聞いていたのに――。

「リリアさん？」

騎士の制服に身を包んだリユーネリアを見て、ロドニーは数度目を瞬いた。

「ロドニー……」

どうやって切り抜けようと思考を巡らす。

今の名前の呼び方からして、ロドニーにはまだリユーネリアの本当の身分を知らない。ならば、査察官補佐として堂々と接すればいいだろう。

素早く計算して、親しみを込めて笑みを浮かべた。すると、ロドニーはみるみる顔を赤くした。

「もう怪我はいいの？」

あまり思い出したくはなかったが、アディントンに突き飛ばされたロドニーは頭を打っていたはずだ。脳震盪とは言っていたが、あれから何も聞いていなかったことを思い出す。

「あ、はい。怪我は、その——してないですけど……、リリアさんは大丈夫でしたか？」

聞かれ曖昧に頷く。

「ええ。大丈夫。それよりも、聞いてるわ。騎士たちが逗留しているから忙しいのですってね？」

話をふると、ロドニーは心底疲れた表情を浮かべた。

「はい。ニーナさんが、それはもうこき使ってくださいますから」

あははと力なく笑いながら、リユーネリアの行き先と同じ方向へと歩き出す。

まさか、こんなところで時間を取られるとは予想外だった。だが、ここでイラついては不審に思われてしまう。ぐつと我慢をしながらロドニーと一緒に厩舎の方へと向かう。

「それにしても、どうしたんですか？その格好は。それに髪の色も違いますよね？」

隣を歩きながら騎士の制服に身を包んだリユーネリアに怪訝な眼差しを向けてくる。来るだろうと思っていた質問に、予め用意していた答えを口にした。

「今からエピソードに行くの。一人で行かなくてはならないから、万一のことを考えて見た目だけでも強そうにみせているの。それに髪は、もともと黒かったのを染めていただけ。気分転換にね」

あえて明るく言ってみたが、気分転換どころではない。現在、リユーネリアの胸中は苛立ちで溢れている。

それに気づかないロドニーは茶色の髪も似合っていましたよと香気に告げてくる。

「そうなんです。僕と一緒に行けたらいいんですけど、今は手一杯で」

後半は申し訳なさそうな表情を浮かべるロドニーに、むしろ安心

する。もしもついて来ると言われたら、どうしようと思っていたのだ。置いて行くのに、言いくるめる時間は無い。いつ、ウィルフレッズに気づかれるかひやひやしているのだ。

しかしその安心を余所に、ふとロドニーは何かを思い出したように首を傾げた。

「でも、リリアさんとは本当に久しぶりですね。僕はてっきりあの噂はリリアさんかと心配してたんですよ」

良かったですと何故だか嬉しそうに笑むロドニーに、今度は逆にリユーネリアが訝かしむ番だった。

まったく部屋から出られない生活をしていた為、どうやら完全に情報不足だった。ロレイン達にもこちらから聞かなければ、あえて何も教えてくれようとはしなかった生活が長過ぎたのだ。

「あの噂？」

首を傾げると、ロドニーは目を見開く。

「知らないんですか？騎士たちの間ではかなり噂になってましたけど」

すでに過去形だ。

ならば、リユーネリアが閉じ込められてからすぐに出はじめた噂なのだろうか。

思わず眉をしかめる。

「どんな噂なの？」

「えっと、でも……」

視線が泳ぎ、ロドニーは言いづらそうに口を閉ざす。

「どうかしたの？」

「あの、緘口令が出てるんですけど……」

なるほど、と感心する一方、ならばそれだけ重要な噂なのだろうと判断する。リユーネリアが足を止めると、二三步先を行って、同じく足を止めて振り返ったロドニーを見つめた。

「教えてくれない？どうして噂が私だと思ったの？」

どのように関係しているのかは分からなかったが、ロドニーは先

程確かにそう口にした。心配していたと。

ロドニーは戸惑った様子を見せていたが、リユーネリアに近づいてくると周囲を見渡し、声を潜める。

「僕が喋ったのは内緒ですよ？……ウィルフレッド殿下が女性を囲っているって噂があるんです。だから僕はつきり——」

姿が見えないリリアさんではないのかと思っていたんです、と続けられたが、後半は耳に入ってこなかった。その代わり、思わず、ロドニーを凝視してしまった。

今、聞いた言葉は空耳だろうか。一体自分は何を聞いたのだろう。ウィルフレッドが女性を囲っている？

その言葉が意味することを一瞬、脳が拒否をする。だが理解すると同時に、胃の辺りにひやりとしたものが広がっていく。そして何故だか心のどこかで納得している自分がいることに気づいた。

「そう……。そんな噂があったのね——」

ゆっくりと足を踏み出し、厩舎へと向かう。リユーネリアは無理やり口元に笑みを浮かべた。

ウィルフレッドとは協力関係だ。もともと博愛主義なのは認めている。だから、別に女性を囲おうと関係ない。だが、そのことを知られないようにと緘口令までしき、その上さらにリユーネリアまで閉じ込めるとは……。

——理不尽極まりない。

「リリアさん？」

「ありがとう、教えてくれて」

後ろをついてくるロドニーに簡単に礼を告げ、急いでいるからと言って駆け出す。

足音は聞こえない。どうやら付いてはこないようだ。そのことに安心し、厩舎へと駆け込む。

鞍を付けて準備されている馬を引きだし、周囲に誰もいないことを確認すると騎乗する。久々の視線の高さと感覚に、先程の不快な気分を一瞬だけ忘れる。

ヴェルセシユカに来てからは遠乗りもできなかった。それなりに忙しかったこともあるが、安全を配慮してくれているウィルフレッドやエリアスに悪いと思い我慢もしていたのだ。

手綱をもって馬に合図を送ると、リユーネリアの希望通り動いてくれる。いい馬だ。さすがニーナが選んだ馬だけはある。

ここからは時間との勝負だ。

ロドニーに出会ってしまったのは予想外だったが、もしかするともうすでにリユーネリアが抜け出したことがウィルフレッドの耳に入っているかもしれない。リユーネリアは一瞬だけムツとしたが、馬の腹を蹴った。途端、馬は速度を上げて走りだした。

領主の館を出る直前、館の門のところで警備に当たる騎士の目の前を通った。馬を駆けての通過に、何事かと目を見張っていたが、通り過ぎてしばらくしてから何か叫んでいるのが聞こえたが、そのまま突っ走る。

今日は村長のジョナスは葡萄畑に行っていると言ったから聞いていた。場所も少し山に向かわなければならぬ。これだけ広く見渡せる葡萄畑が広がっていればリユーネリアがどこに向かうかは領主の館からは丸見えだろう。だから急がなければならなかった。

「ごめん。急いで」

馬の首を軽く叩き、お願いする。

そうして、さらに速度を上げさせ、あっという間に領主の屋敷をあとにした。

27・和気藹々（いい人たちばかりだから……）

二ーナから聞いた話によれば、村長のジョナスはなだらかな丘陵地帯の一角に葡萄畑をもっているということだった。畑の側に建っている小屋は近くに葡萄畑を持っている村人たちとの共同の小屋なのだろうか。ジョナスはその前で数人の男たちと共に休憩をしていた。

馬で駆けてくるのが見えたのだろう。ジョナスが出迎えてくれた。「おや、あんたは……。あの時の補佐官じゃないか。騎士さんだったのか？」

「いえ。これにはちよつとした事情があるのですが……。それよりも、本日はお礼を言いに来たのと、実は皆さまにお願いがあつて来たのです」

騎士の制服のことは、話を逸らすことで何とか誤魔化する。

まずは礼を言わなければと馬から下り、ジョナスに正面から向かった。

「あなたの息子さんのおかげで今回の事が公になり感謝しております」

「いや、礼を言うのはこちらの方だ。まさか第二王子自ら来て下さると思わなかった。それもあんたたちがここに査察に来ていたおかげだろう」

そう言いながら、リユーネリアから手綱を受け取り、近くの木に結びつけてくれた。そしてリユーネリアを小屋の前まで連れて行き、他の村人にも紹介してくれた。

その中にはジョナスの息子のデルもいた。無事な姿を見て思わず胸をなで下ろす。彼の行動でこの村は救われたようなものなのだよ。どのような感謝の言葉を述べても言い足りないほどだ。

「それで、何でしょうか？ お願いとは……」

小屋の前に思い思い座っている男たちが、リユーネリアの為に太い丸太を単に切っただけの簡易的な椅子を小屋から出してきてくれた。リユーネリアは礼を言って腰かける。多少ぐらつくが、腰かけられないほどではない。

ジョナスに聞かれ、リユーネリアは一度皆を見渡し、伝えたかったことを口早に説明した。この気候と葡萄が、新しい葡萄酒を作るのに適しているかもしれないこと。エピ村は夏でも寒冷で、きつと冬は早くやってくる。葡萄が実をつける時期に、霜が降りることもあるだろう。それをそのまま放置するのだ。冬に凍ったその実で葡萄酒を作ると、それは甘い葡萄酒が出来ると何かで見たことがあったのだ。

最初こそリユーネリアの突飛な発言を啞然として聞いていた村人たちだったが、しばらくして真剣な顔になる。

「おもしろいと思うが……」

「いや、確かにやってみる可能性はある」

「じゃが、まずは村をどうにかしなければなあ」

「それに新しく来る領主の許可もなければ難しいじやろって」

口々に彼らは言い始める。

しかしどちらかというと、否定的な意見が多い。

しばらく黙って飛び交う意見を聞いていたが、リユーネリアはたまらず口を挟む。

「あの、試験的にやってみてもらっただけでいいんです。葡萄酒作りは私には分からないことですし、可能性があるならばやってみてもらえないでしょうか？もちろん、復興の援助は国からでもできるだけ手伝わせていただきます」

国政に関わることを安請け合いしてはならないことなど、エリアスに言われるまでもなく承知している。だが、リユーネリアは必死だった。ここまで抜けだしてきたのに、村人たちから出来ないと言われてしまったら、何のために無茶をしたのか。もちろん、安請け合いなどではなく、復興に手を尽くすことは王都に帰ってから当

然やるべきことではあつたのだが。

唇を噛んで頭を下げると、村人たちは一瞬静まり返った。だが、次にはカバリとした笑い声が耳に届く。

「ま、いいじゃねえか。こんな可愛いお嬢さんが頼んでるんだ」

「そうだな。売物じゃねえ自分たち用のを作るぐらいなら、大したことないか」

「そうそう。それで売物になるようなら儲けたものだしな」

ジョナスを始め、口々に言い始める。

どうやら引き受けてくれる気になったらしい。リユーネリアに、取りあえずお茶でもどうかと、木を削って作ったコップを差し出してくれる。他の者も、奥さんにでも作ってもらったのだろうか。手作りのお菓子が入った籠を渡してきた。

あまりにも嬉しくて、ジョナスや村人の気持ちが温かくて胸に迫るものがある。

「ありがとうございます……」

頭を下げて礼を言うと、村人たちは照れたように笑った。

だが、ふと遠くから聞こえてきた馬の蹄の音に、ぎくりと頭を上げた。

「おや、今日は来客が多いな」

ジョナスは呑気に言いながら、立ち上がる。遠くを見るように目を眇めて、おやあれは、と呟くのが聞こえた。

リユーネリアも遠くから馬で駆けてくる人物を目にし、思わずコップを持つ手に力が入る。遅かれ早かれ見つかるものと思っていたが、いざその時が来ると怖いものだ。何を言われるのか。逆らえばかりいるから愛想を尽かされるのではないかと不安もある。しかし、そんなもの――！

抜け出す直前にロドニーから聞いた噂話を思い出し、勢いよく立ち上がる。コップと菓子に入った籠を村人に返すと、ジョナスが繫いだ馬の側へと向かう。

抜け出したことなど今は後悔していない。ならば正面から迎え撃

っただけだ。

騎馬は全部で五騎いた。

先頭を走る人物の髪が金色に輝いているのを見て、村人たちがざわめく。

「なんで王子さんが来るんじゃ？」

どうやら村人にはその姿が馴染みとなっているようだ。それでも彼らにとって王子という身分は遠いものらしく、この場に来るのが信じられないもののように見えているのだろう。

馬に寄り添って、リユーネリアはウィルフレッドが近くに来るのを見ていた。

村人たちは立ち上がり、当然頭を下げて出迎える。

ウィルフレッドは馬から下りると、彼らには見向きもせず、まっすぐにリユーネリアの前まで来た。リユーネリアも黙ってそれを見ていた。ウィルフレッドの背後には馬から下りる様子のないエリアスとロレイン、それと他にもう二人騎士がいた。

ウィルフレッドは怒っているようにも見えた。いや、怒っているのだろう。だが、リユーネリアはここで謝ったりなどしなくなかった。悪いことをしたとは思っていないし、むしろ理不尽な扱いを受けたことには腹を立てている。

唇を引き結んで黙っていると、そのまま近づいてきたウィルフレッドは有無を言わせず実力行使に出た。あっと思った瞬間には視界が揺れ、思わず悲鳴を上げていた。

「ちよつと、下ろして！」

肩に担ぎあげかれたリユーネリアは、落とされないとはい分かっているにもかかわらずウィルフレッドの服を握りしめた。

「うるさい」

静かに一喝され、そこに怒りを感じ取って思わず口を噤む。

ウィルフレッドはようやく村長に向き直ると口を開いた。

「これが仕事の邪魔をして悪かった」

「いえ、ちょうど休憩中でしたし、そのようなことはありませんが……。あの、失礼ですが、そちらの方は査察官の補佐では？」

ジョナスは恐る恐るといったように口を開いた。

リユーネリアはぎくりと身体を強張らせる。

査察官補佐としては一応名乗ってはいた。

しかし、ジョナスや村人たちが不思議に思うのも当然だろう。王子の肩に担ぎあげられ、文句を言っているのだ。ただの役人とは思えなくても仕方がない。

「ネリー、名乗っていなかったのか」

呆れたような声音に、リユーネリアも口を尖らす。

「だって皆さん、いい人たちばかりだから……」

身分を言ってしまうえば彼らの態度が変わってしまうような気がした。現に、彼らの王子に対する態度はリユーネリアに接するそれとは明らかに違う。それにリユーネリアは元パルミディアの王女だ。敵国の人間だったのだ。彼らの家族を、もしかしたら奪ってしまっただかもしれない国の人間なのだ。だから名乗れなかった。

ウィルフレッドの盛大な溜息を耳にした後、リユーネリアは肩から下ろされた。

そのままウィルフレッドの隣に立たされ、視線だけで名乗れと言われる。

仕方なく村長他、村人の方に向き直ると、ヴェルセシユカ様式の最上礼をとる。ならず者にも屈せず、村の復興を前向きに目指す彼らにはその礼が最適だと思えたのだ。

ドレスではなく騎士服ではあったが、丈の長い騎士服の上着をスカートのかわりに代用し、膝を折って頭を垂れた。

「リユーネリア・アデル・リィ・ルクレーシャと申します」

滅多に見られない最上礼を目の前でされた村長他村人たちの誰かが、ゴクリと唾を飲み込む音が聞こえた。

28・痴話喧嘩（勝負をしましょう）

第二王子が結婚して二カ月。

もともとの結婚は戦争を休戦に導く為のもので、戦争にかり出されていた民にとって、まったくの他人事ではない話だった。それはエピ村がいくら辺境にあるとはいえ同国民である以上同じのことで、ましてこの度の事件には第二王子自身が赴いているのだ。今までにはない活気が村中に溢れていて、王子に関する噂を知らない村民などおらず、まして先ほど彼の妃となったパルミディアの王女の名前も知らないはずはなかった。

「……妃殿下、でいらつしゃる？」

ジョナスに確認のように尋ねられ、リユーネリアは頭を上げると一つ頷く。

「そういうことになります」

素っ気なく言い放つ。

今は素直に認めたくない心境だ。それが伝わったのか、隣にいるウィルフレッドに腕をつかまれた。だが、それだけで先程のように肩に荷物のように担ぎあげることがされなかった。

「邪魔をした。帰るぞ」

そのまま有無を言わず腕を引っ張られ、リユーネリアは思わずカッとなって振り払った。

もう限界だった。

なぜ、このように、いかにも心配しているから迎えに来たという素振りをするのだろう。ただ、連れ戻すだけならば、ロレインやバレンティナを迎えに寄こすだけで十分だ。他に女性を囲っているのをそんなにも知られたくないのだろうか。そんなこと、リユーネリアには関係ないことだし、その為に軟禁されているのではなかった

ものではない。博愛主義は認めていると、あれほど言っておいたのに。

「自分で帰れます」

口から出た声は、自分のものとは思えないほど冷ややかだった。

「今度はどこに行こうとしているんだ？」

どこまで監視すれば気が済むのだろう。そんなに相手の女性のことをリユーネリアに知られたくないのだろうか。だが、そんなこと今更知ったことではない。事実、聞いてしまったのだから。

「帰ると言っているでしょう」

「信用出来ない」

その言葉に、リユーネリアの中で何かがブチリと切れた。

「あなたが部屋に閉じ込めたりするからでしょう！それに何をするにも駄目だって！」

さすがに、村人の前であることからロドニーから聞いた噂に関してだけは理性で押さえつける。

だが、一度口に出した言葉は止めようとしたが止まらなかった。

堰を切ったように次々と言葉が溢れ出てくる。

「一人で一日中、部屋にいて何も出来ない私の気持ちがあつて？
ニーナだって領主の館で大変な仕事をしているのよ？あなたが少なからず心配してくれているのは分かってるわ。でも館には騎士も沢山いるわ。警備の面でも王宮と変わりないはずよ。館から出ると言っているわけではなかったのよ。どうして私に何もさせてくれないの！」

言い募るがウィルフレッドは黙ったままだった。

代わりにロレインが駆け寄ってきて、リユーネリアを宥めようとする。

「ネリア様、取りあえず帰りましょう」

肩に置かれた手が温かくて、でも彼女は絶対的にウィルフレッドの味方なのだ。

そう思うとひどく悔しくて、心が冷たく震えた。

ぐつと両手を握りしめると、熱を帯びてきた目に力を入れ、ウィルフレッドを見上げる。

「――勝負をしましょう」

このままでは気がおさまらない。

突然のことに、ウィルフレッドは怪訝そうに眉を顰める。

「勝負？」

「ええ。どちらが先に領主の館に戻るか。負けた方は勝った方の言うことを聞くということでしょうかしら？」

そうすれば、ウィルフレッドもリユーネリアが領主の館に帰ることを信用するだろう。勝敗の結果次第で、リユーネリアは館内の自由を申し出る気にいるし、ウィルフレッドにしても負けたのだから部屋で大人しくしているとえるはず。文句のつけようはないはずだ。

それでも黙っているウィルフレッドに、リユーネリアはさらに挑発する。

「勝負を受けないというのであれば、不戦勝ということとで私の自由にさせてもらうわ。でも、あなたが勝負を受けて、私が負けたのならあなたの言うことを素直に聞くわ」

悪くないはずだ。

じつとウィルフレッドの瞳を見つめると、その湖面のような瞳にゆっくりと決意が現れる。

「分かった。その勝負を受けよう」

勝負に乗るかどうかが、リユーネリアにとって一つの勝負だった。ホッと息を吐き出すと、ウィルフレッドの背後で黙って成り行きを見ていたエリ阿斯が近づいてきた。

「では、私は先に館に戻っておきましょう。正確に勝負の勝敗を見極める者も必要でしょうし……」

そう言って、一人の騎士を連れて戻っていった。

ロレインはウィルフレッドの側に行つて、必死に訴えている。

「危険です！お止め下さい。ネリア様に何かあってもよろしいので

すか！」

「黙れ」

なおも食い下がろうとしているロレインとウィルフレッドを放っておいて、遠巻きにこちらを窺っていたジヨナスや他の村人たちの近くに行く。

突然始めた口論に、呆氣にとられていたようだ。

みつともないところを見られたと思いながら、リユーネリアはジヨナスに向き直る。

「あの、お仕事の邪魔をしてしまって申し訳ありませんでした」

「あ、いや、あの、そんなことは」

口ごもって視線を逸らされてしまった。

どうやらリユーネリアが心配していた通り、彼らの自分を見る目が変わってしまったようだ。だが、そこに憎しみのような感情が見えなくてホッとする。でも、やはり寂しくも思う。

先程までのあの気さくな態度でもう一度接して欲しいと願うのは、リユーネリアの我儘だ。あえて身分を明かさなかったのも、責められても仕方がない。

黙って俯いていると、村人たちが遠慮がちに声をかけてきた。

だが、その内容から、どうやら先ほどの言い争いでリユーネリアが落ち込んでいると思っているらしい。最初こそ、村人たちは遠慮がちだったが、次第にそれはいつもの調子に戻っていく。

「ああ、そんなに落ち込まなくても。王子さんは別にあんたのことを怒っているわけじゃないよ」

「そうそう、あれは独占欲じゃ」

「部屋から出るなっちゅうのはひどいが、姫さんは大切にされとるのう」

「それもアレだろう？ 姫さん、言ってたじゃないか。騎士が館に沢山いて警備の面も安心って……。じゃが、姫さんが可愛いから王子さんは姫さんを他の男に見せたくないんだらうて」

どこまでも確信をついている村人たちの発言だったが、リユーネ

リアにはよく理解できない。しかし、励まそうとしていることだけは分かった。

それはやはり温かくて、自然と口元に笑みが浮かぶ。

「ありがとうございます」

すると、村人たちも安心したように笑顔になった。

「ああ、王子さんが羨ましいのう。わしがあと四十歳若かったら」

「馬鹿言うな。誰がおまえなんかを姫さんが相手にしなさるか」

ゲラゲラと笑う声が、葡萄畑に響く。

そんな中、ジョナスと目が合う。彼は笑いをおさめると、ニヤリと笑った。

「この勝負。わたしらはリユーネリア様を応援しましょう」

突然の申し出に、リユーネリアは心が浮き立つ。この場で、自分を応援してくれる人など誰もいないと思っていた。

「ありがとうございます！」

「いえ。ここでわたしらとも、もうひと勝負しませんか？」

ジョナスの顔が、悪戯を思いついた子供ののような表情をしている。その口元には笑みも浮かんでいた。

「え、どういふ……」

「もし、リユーネリア様が勝ちましたら、先ほど話をうかがった葡萄酒を献上させていただきます」

「おお、それはいい！」

村長の提案に、村人たちの賛成の音が響く。

リユーネリアが今度は驚く番だった。ジョナスたちの応援してくれるその気持ち伝わってきて、嬉しさが込み上げると同時に、力にもなる。

馬の手綱を取ると力強く頷く。

「必ず勝ちます」

そう宣言し、軽く一礼する。

手綱を持って、出発地点へと向かった。

すでにウィルフレッドは位置についていた。ロレインは不安そう

にリユーネリアを見ている。

「ネリア様、どうかお止め下さい。今ならまだ」

「ロレイン。大丈夫よ」

彼女の手を借りて、馬に乗った。騎士の服はやはりドレスに比べると格段と動きやすい。もう少し大きさが合っていればもっと良かったのだが仕方がない。だが、ウィルフレッドよりも体重が軽い分、馬の状態はいい。疲れも少ないはず。勝算はあるのだ。

「手加減は無用よ」

「するつもりはない」

きっぱり言い切るあたり、負けたら本当に軟禁どころでは済まなさそうだと思う。だからこそ絶対に負けられない。

ロレインが合図をしてくれるらしい。出発の合図は、本来なら旗があれば最適なのだろうが、代用に小枝の先に布をつけ、それを振り上げたのを合図とするようだ。

リユーネリアは馬の首を軽く叩く。

来る時もあったのだが、よく手入れがされていて良い馬だ。二ーナが選んだのだから間違いはないだろう。

正面を向くと、ロレインは少し離れた場所にいて布のついた小枝をこちらに見せていた。リユーネリアはぐつと両膝に力を入れる。

風は吹いていない。西に傾きかけた日差しが目の奥に射す。

手綱を握り締めたのとロレインが旗を振り上げたのは同時だった。リユーネリアは馬の腹を力強く蹴った。隣で、ウィルフレッドの馬が動き出すのも見えた。

29・真剣勝負（約束よ）

リユーネリアは幼少の頃から徹底的に馬術を仕込まれていたもので、少々なことでは負けるつもりはなかった。それでも領主の館まではかなりの距離があるし、道中どのような事故があるとも限らない。だから全部の力を出し切るのではなく、余力を残しながら馬で駆っていた。

風景が風をはらんで後方に流れていく。
すぐ背後に蹄の音が聞こえ、唇を噛む。

どうやらウィルフレッドも相当の腕前らしい。離れずついてきているということは、最後で勝負をかけるつもりなのだろう。思わず唇と噛みしめる。それはリユーネリアと同じ考えだった。

だがそれよりも、この速度についてこられるだけでも大したものだと思う。

馬自体もいい馬なのだろう。

久々の疾走に、今まで燻っていたイラつきや焦燥がどこかへと消えていくのが分かった。

体温は徐々に上昇し、心地よい汗をかく。頬や額を撫でていく風は心地よく、傾きかけた夕日は穏やかで、エピ村ののどかな田舎風景はどこまでも優しい。これで、所々に見える略奪や放火の痕がなければ、どんなに美しい村だったことだろうと、今更ながらに悔やまれる。

すでに家路についている村人たちには、自分たちの勝負の事が伝わっているのだろうか。

疾走する二騎に手を振る子供もいる。

リユーネリアは笑顔で応え、馬の状態を確認しながら速度を上げた。

体重の軽いリユーネリアの馬は疲労が少ない。まして、馬に負担

をかけるような乗り方をしているつもりもない。

そのまましばらく並走し、領主の館まであと残すところわずかとなった時、ウィルフレッドが勝負に出たのに気づいた。

背後にいた馬が隣に並ぶ。

ちらりと横を見ると、ウィルフレッドもこちらを見ていた。余裕、とまではいかないが、まだ余力はあるらしい。しかし、馬の状態は思ったほど良くない。

正面を向くと、驚いたことに館の門前に溢れるほどの人ばかりができていた。遠目で見ても、それが騎士たちであることがわかる。

異様な盛り上がりを見せて声援を送っているところを見ると、彼らなりに楽しんでいるように見えない。一体、先に戻ったエリアスたちは何を吹聴したのかと首を傾げる。

驚きながらも、手を緩めるつもりはなかった。

掛け声と共に、馬に合図を送る。途端、速度を上げた馬に心の中で応援しながらも、リューネリア自身も息が上がってくる。

身体に伝わる振動と、足に込める力に疲労を感じずにはいられなかった。久しぶりの乗馬に、腿の筋肉が悲鳴を上げている。だが、負けるわけにはいかない。村長や村人たちの期待にも応えなければならぬのだから。

ただ真っ直ぐ前を見つめ、屋敷の門をくぐった。周囲の歓声が遠くに聞こえる。

手綱を引いて馬を止めると、背後を振り返った。すぐ後ろにはウィルフレッドもいる。

息が上がって、肺が痛い。胸を押さえながら息を飲み込み、エリアスを探すところを見て、珍しく笑顔を見せてくれた。

「勝者はリューネリア様です」

静かに告げられた声に、空気が揺れた。騎士たちから歓声が上がる。それは悲鳴とも叫びとも分らないような雄叫びだ。

すぐに近くにいた騎士たちが駆け寄ってきて、リューネリアから手綱を受け取ってくれた。馬から降りようとしたところ、先に下馬

していたウィルフレッドが来て、手を貸してくれた——が、その顔はどことなく不満げに見えなくもない。

「約束よ。館の中は自由にしてもいいでしょう?」

明日にはこの地を出発して王宮へと帰るが、それでも部屋に引きこもっていたくはなかった。

「ああ、好きにしている」

ようやくリューネリアの満足する返事が聞けて、思わずその胸に飛びつく。途端、周囲の騎士たちから、はやす声や口笛が聞こえる。「ありがとう」

どのように感謝をしたらいいのか分からず、先程までの苛立ちも忘れ、その背に腕を回す。しかし、その身体がわずかに強張ったのに気づき、リューネリアは顔を上げた。

そこにはいつものウィルフレッドがいた。

勝負に負けたにもかかわらず、思ったよりも涼しい顔をしている。自分を見下ろす眼差しは優しい。

だが、リューネリアはその顔に見覚えがあった。この顔は、王子の顔だ。綺麗に自分の感情を隠してしまえる仮面をつけている。ハッとして、ゆっくりとウィルフレッドから離れる。

何を浮かれていたのだろう。もしかして、彼を酷く傷つけてしまったのかもしれない。

しかもその上、この館のどこかに女性を囲っているのだった。ならば、このような衆人環視の中で抱きつくなど言語道断だ。誤解をされてしまう。

あまりの気まずさに視線を逸らしたまま固まるリューネリアの周囲に、騎士たちが勝者を称えるために集まってきていた。彼らの高い背に阻まれて、すぐにウィルフレッドの姿が見えなくなる。

人波に押されるように、リューネリアとウィルフレッドはその距離を広げていった。

その日の夕食は、なぜか大広間で騎士たちと席を共にしていた。王宮ならば絶対に有り得ないことだが、日常と違う場所にいると、騎士たちも常識が当てはまらなくなるらしい。ロレインやバレンティナの制止も、彼女らの同僚には右から左に通り返けていくらしく、リユーネリア自身もウィルフレッドの様子にそれどころではなかったので、言われるがままになっていた。

食事自体は聞くところによると、エピ村の村人たちが協力してくれたおかげで、質素ではあったが日頃から量は充分にあったようだ。近隣の村からや、ヴァーノン子爵夫人の実家からも何度も差し入れがあったようで、肉体労働である騎士たちが飢えを知らずにいられたのも、背後にそういう働きがあったからだ。

「最初からリユーネリア様ではないかと見当はついていたんですよ」騎士たちと話しているうちに、ロドニーから聞いた噂の話になり、リユーネリアは真相を知ることになった。

リユーネリアが領主の館にいるというのは、当初、騎士たちの間でも話題になっていたらしい。恐らく、最初に査察官の警護としてやってきていた騎士と、後からやって来た騎士たちが合流した時点で、予測はついていたのだろう。しかも、立ち入り禁止区域まで設けられているから違いはないと思われていたが、その夫であるはずのウィルフレッドが別に部屋を一室確保して休んでいることから、王子妃がいるという話は嘘で、実は別の女性を囲っているという噂が今度は上った。

それは騎士たちの間では、単に面白がって言っていたに過ぎなかったのだが、皮肉にもジェレマイアの緘口令によって真実味が増してしまっただけらしい。騎士たちも最後の方は自分たちがしていた噂に踊らされていたと言って笑っていた。

確かに、リユーネリアはずっと一人で夜を過ごしていた。ウィルフレッドが同じ部屋で休まないのも事後処理が忙しかったためだろうと思っていたし、せめて夜ぐらいいは話し相手になってくれと我儘を言っ手て手を煩わすのも申し訳なかった。

しかも、騎士たちから聞いて噂の真相がわかり、リユーネリアはドツと疲れた。いるはずもない女性を気にかけていたとは……。感情に任せて、変なことを口走らなくて良かったと、少しだけ安心する。

だが、気にかかるのはウィルフレッドの先ほどの態度だ。王子の仮面をつけた顔を向けられたのは、まだ協力関係を結ぶ前の頃だ。ざわりと心の中で何かが蠢く。

「リユーネリア様？」

怪訝な声に、ハツとする。

気をゆるめると意識がすぐにそちらへと向かってしまう。今は、騎士たちが祝杯を上げてくれているというのに。

リユーネリアは気を取り直して、騎士たちへと向き直る。ここ数日、本当に話す相手が限られていたので、騎士たちとの会話は純粋に嬉しかった。

そして、気づくと夜も更けていた。

30・曖昧模糊（心配をかけることしかできない）

ロレインやバレンティナが、苦勞してリユーネリアから騎士たちを引き剥がし、部屋に戻るとニーナが入浴の準備をしてくれていた。今日は馬を駆って汗をかいていて、足もそろそろ痛みを訴え始めている。ゆっくりと湯船につかりたいと思っていたのだ。

部屋の外に控える二人を残して、リユーネリアはニーナの手を借りて身体を綺麗にした。髪も綺麗に洗う。

「ねえ、ニーナ」

ぼんやりと立ち上がる湯気を見ながら、リユーネリアの髪に香油を丁寧に馴染ませているニーナを見上げる。

「なんでしよう？」

「私が館に戻ってきてからウィルフレッド様を見た？」

ずっと気になっていたのだ。騎士たちと食事をする時も、何も言っていない。確かに、館の中でなら自由にしてもいいと言う約束だったが、なんだか見放されたみたいで不安だった。

それに、馬から下りるのを手伝ってくれた時のあの表情。完全に感情を隠した顔は、何を考えているのか分からない。

ニーナは髪に布をあて、水気を取りながら頷いた。

「ええ。食事をお運びしましたよ。その時にお見かけしましたが」「どこに？」

「ウィルフレッド殿下のお部屋です」

言われてみれば、確かに騎士たちも言っていた。ウィルフレッドは部屋を一室確保していると。

王宮では、いつも一緒に眠っていたので今では一人で眠ることに多少の違和感があるほどだ。ふと夜中に目を覚ました時に、ウィルフレッドの温もりを探してしまうことがある。そして、ああ、いいのだと思ってしまうのも事実だ。

「その部屋はどこにあるの？」

「……リユーネリア様。別に夫婦だから止はしませんが、もう夜も更けております。ウィルフレッド殿下はお休みかもしれませんよ？」
言われてみれば、そうである。

食堂から部屋に戻ってきた時点で、もうすぐ日付が変わろうとしていた時刻だったのだ。入浴している間に、かなりの時間は過ぎている。いつもなら、休んでいる時刻だ。

でも、あの時の顔が気になって仕方がない。

俯いていると、気落ちしてしまったことに気づいたのか、ニーナは大きなタオルで身体を包むと、湯船から出るのに手を貸してくれた。

「仕方ありませんね、リユーネリア様は……。取りあえず髪も乾かさなければなりませんし、身支度を整えてしましましょう。その間に、殿下が起きていらつしやるかどうか確認していただきましょう」
てきぱきと仕事をこなすニーナになされるがまま、夜着を身につけると髪を乾かされる。その間に、部屋の外で控えている二人に声をかけていた。

本当にしつかりしていて頼りになる。リユーネリアにとってニーナは、むしろ侍女というより姉という存在に近かったが。

身支度が整うと、ロレインとバレンティナが部屋に入ってきた。

ニーナは入浴の後片付けのため、リユーネリアは二人に託されることとなった。

「殿下の部屋の周囲は警備上、人払いがされております。ですから、ネリア様がこのような時刻に行かれるのは本来お勧めできないのですが」

渋い顔をするロレインとは逆に、バレンティナは何故か嬉しそうに明るい声を出す。深夜だというのに、彼女はいつも陽気だ。

「ガウンをきちんと着て下さいね。一応、私が先に行って一時的に人払いをしますから」

ウィルフレッドの部屋に行くまでは通常よりも時間がかかると言

われた。

当然、ガウン姿で歩き回ることも普通なら考えられないことだ。臣下にそのような姿を見られるのも褒められたことではないことぐらい分かっている。だから、バレンティナが一時的に配備されている騎士を追っ払うと言っているのだ。

「ごめんなさい。でも、どうしても気になって」

あの時のウィルフレッドの態度を思い出して、ひどく心が痛んだ。きつと気づかない何かを仕出かして、傷つけてしまったに違いない。ロレインが小さく息を吐き出すのが聞こえ、リユーネリアは扉の方へと促された。

「確かに殿下は落ち込んでいたようです。きつとネリア様ぐらいしか元気にしてさしあげることはいけません」

どうやらロレインも気づいていたようだ。

先にバレンティナが行ってしまったのを見て、時間を見計らってロレインが廊下を進む。

廊下には等間隔で燭台に灯された明かりが揺らいでいた。足元に落とす影を見つめながら物思いに耽^{ふけ}る。

先ほど、ロレインがリユーネリアにしかウィルフレッドを元気にすることが出来ないと言っていたが、それを内心で否定する。

それはない。ウィルフレッドがリユーネリアの身を心配してくれているのは本心からだというのは分かる。その理由もリユーネリアがヴェルセシュカにとってなくてはならない駒だからだということも理解している。だが、なぜウィルフレッドが落ち込んでいるのか、そしてそれを元気にすることができの、リユーネリアだけと限定してしまうことに結びつけるのか分からない。誰か他の人でもできないことはないだろう。むしろウィルフレッドを良く知っているエリ阿斯やロレインの方がいいのではないかと思える。

それに――。

もつと違う存在になりたいと思う。

たとえ駒であろうとも、守られてばかりいる駒にはなりたくはな

い。それでは誰かを——ウィルフレッドを盾にして生きているということだ。もしもその盾を失ってしまったらリユーネリアは完全に無防備だ。ヴェルセシユカでは生きてはいけない。自ら動き、きちんとウィルフレッドの隣に立ちたかったのだ。だから今回のこともヴェルセシユカの為になるはずだと思って動いた。きちんとできることを証明したかった。

だが結局は、部屋に閉じ込められていたのも、連れ戻しに来たのも、リユーネリアにそれだけの価値が、力がないと思われているからだ。

しかも出来ることといえば。

「私は……ウィルフレッド様に心配をかけることしかできない……」ポツリと呟いた言葉を、先を行っていたロレインは聞いていたのだろう。彼女はピタリと歩みを止めると、顔だけをこちらに向けて小さく首を横に振った。

「違いますよ、ネリア様。確かに殿下は心配をされています。ですが、何故殿下が心配をされているのかわかりますか？」

言われ、少し考えてから、口を開く。

「……私が無茶をするから？」

今思えば、査察に行かせてくれと言ったことには少々承知してくれたのだろう。村がならず者たちに襲われている時に、ロレインやバレンティナを側から外したことも、館から抜け出したのも、すべてリユーネリアが出した結果だ。それがウィルフレッドの目から見たら無謀な行動に見えたのかもしれない。

だがロレインはゆるく首を横に振った。

「いいえ。……ですが、それは殿下に直接お聞きになる方がよろしいかと思います」

珍しく柔らかく笑んで、ロレインは再び歩き出した。

無茶をするからではないのだろうか。

最初に、協力者であることを望んだのはリユーネリアだ。ウィルフレッドはそれを受けてくれた。だから、地位と権力を手に入れる

ためにできることなら、どんなこともウィルフレッドに協力を惜しむつもりはなかった。執務を手伝うことも、ヴェルセシユカという国を知るには必要なことだったし、事務的なことは慣れていたもので役に立てたとは思っている。だが、王宮から出てみたら何というともない。何ができたのだろう。役に立つどころか足を引っ張っているのではないだろうか。これでは、ヴェルセシユカでのリユーネリアの立場を悪くし、さらには協力者であるウィルフレッドの立場も同時に悪くするのではないだろうか。だから、ウィルフレッドは部屋に閉じ込めていたのだろうか。これ以上、無駄な足掻きをさせないように。

気づくと溜息が出ていた。その息は重く、気分共々沈んでいく。結局、堂々巡りだ。

暗澹たる気分に沈んでいくリユーネリアだったが、気づくとロレインがある一室の前で止まっていた。

見事に誰にも出会うことなく、ウィルフレッドの部屋にたどり着いたらしい。

ロレインが扉をノックした。入室の返事が返ってきたところで、ロレインはリユーネリアに一礼して下がって行った。

そしてリユーネリアは扉に向き直ると、ゆっくりと開けた。

31・他人行儀（ずっと閉じ込めていたかった）

扉を開けると、部屋の奥の窓辺に佇み、暗闇を見つめるウィルフレッドがいた。窓に映ったその表情はどこか冴えない。

どう声をかけていいものか悩んだ末、結局知らない者の部屋を訪れたかのようになってしまった。

「あの……失礼します」

リューネリアが声をかけると、ふとウィルフレッドが振り返った。「どうした？」

いつもと変わりのない口調。だが、やはりどこか沈んでいるように見えなくもない。そう聞きたいのはこちらの方だ、と思うものの喉に声が引っかかって言葉が出ない。

今までなら彼のことだ。こんな時間に部屋から出たら危険だと間違ひなく言われると思っていたのに。自分が思っていたことは違ひ、心配していないその様子に何故だか胸が痛む。

そして気づく。

どのような理由であれ、心配してもらいたかっただけかもしれない。そしてそれを心地よく思っていただけなのかもしれない。それはなんとという自惚れなのだろう。心配されるということは、気にかけてもらえる存在ということだ。誰かに——ウィルフレッドに気にかけてもらえるほど必要とされていると思いたかったのか。それでは今までリューネリアが取ってきた行動は、まるで自己顕示欲の強い子供のようではないか。ヴェルセシユカのためと言いながら、無茶とも言える行動は、全て自分に注目を集めて安心していただけだったということなのだろうか。

自らの考えに思わぬ衝撃を受け、あまりのことに自己嫌悪に陥りそうになる。

だが取りあえず、今問題なのはリューネリアの感情ではない。取

りあえずそれは横に置き、ウィルフレッドに近づいた。

その湖面のような瞳を見上げ、そこにある悄然とした色を見て確信する。

「私はあなたを傷つけた？」

何故なのか、理由は分からない。でも自分を見下ろすウィルフレッドの表情が、また仮面を付けたように見える。

「何故謝る？謝らなければならないのは俺の方だ」

だが、そう言った途端、仮面が剥がれ落ちた。

何かを堪えるような表情を浮かべ、視線を逸らす。深く溜息を吐くと、耐えられないといったように、ついには身体ごとリユーネリアから背けてしまった。

その態度に胸が痛む。正面から見られないほど気まずく思っているのだろうか。追いつめてしまったのだろうか。自分は一体、何をしてしまったのだろうか。

「すまなかった。俺の我儘であなたを苦しめてしまった……」

不意に言われた言葉に首を傾げる。

そう言えば、以前にもその言葉を聞いたような気がした。ウィルフレッドの我儘とは一体……。

それに、先ほどから名前を呼んでくれない。それがどこか一線を引かれたように感じてしまうのは敬称だからだろうか。だがなぜ今になって敬称で呼ぶのか。それはもしかして、距離を置きたいという意思表示なのだろうか。

何となく息苦しくて胸を押さえる。

分からない。ウィルフレッドは心配してくれていたから部屋から出てはいけないと言っていたのではないのか。危険から守るために仕方なかったのではないのか。そうでないなら彼の真意がどこにあるのか分からない。

じつと黙っていると、ウィルフレッドがもう一度、今度は小さく息を吐き出した。

「あなたが怒るまで気づかなかった。俺の我儘がどんなにあなたを

傷つけ、苦しめていたか。……それに、馬を駆っているあなたが、今まで見たどの瞬間よりも生き生きしているようで、俺は……自分のしたことが間違이었다と気づいた……」

淡々と語られるその言葉はウィルフレッズの苦痛に塗れていたが、その言葉のどれをとっても、リユーネリアの事を気づかせてくれていたことが伝わってくる。

だから、いいえ、と頭を横に振った。

「部屋から出られなかったことは確かに退屈だったけど、ウィルフレッズ様は心配してくれていたからでしょう？それはあなたの我儘ではないわ」

だが、瞬時に噛み付くように言われた。

「違う！心配というのは建前だ！」

はつきりと否定され、胸に鋭い痛みが走る。

心配をしていたわけではなかったのか。ならば、やはり自分は戦争反対を掲げる者にとってはなくてはならない駒だからだろうか。だから命だけは守らなければならない。それ故、閉じ込められていたと？

それは、当初リユーネリアがヴェルセシユカに來た時に常に考えていた本来の役割を思い出させた。戦争を止めるため、パルミディアへの牽制の為の人質――。

それを正面切って言われたら正直つらい。心配しているという、真綿に包まれた言葉の方が何倍もいい。

だが今考えたことはリユーネリアの主観であって、ウィルフレッズの思惑はまた別にあるのかもしれない。もうこれ以上理解できない状況を増やすわけにはいかなかった。ここではつきりと立場を理解しておかなければ、王宮に帰ってからの身の振り方も考え直さなければならいかもしれない。いや、本当は……可能性は低いができることならリユーネリアの考えを否定して欲しかった。

痛みを押し隠し、静かに尋ねる。答えがたとえリユーネリアの望まない結果になろうとも、もう覚悟は出来ていた。

「ではどうしてなの？この数日間、ずっと、あなたが何を思っているのか考えてた。でもいくら考えても、私にはわからなかった。心配しているのが建前だと言うのなら、私をどうしたいの？」

聞きたくないような気もした。返答によっては、打ちのめされてしまいかもしれない。

ウィルフレッドはしばらく黙っていた。唇をかみしめ、言いたくないような素振りを見せていた。どれぐらいの時間、そうしていただろうか。リユーネリアはひたすらウィルフレッドが言ってくれるのを待った。まるで死刑の宣告を待つような気分だったが、それでもじっと見つめていると、やがて観念したようにウィルフレッドは口を開いた。

「——ずっと……閉じ込めておきたかった」

その声は吐き出された息と共に、諦めを含んでいた。

「……何を？」

決して早とちりするわけにはいかなかった。考えられることはいくつかある。

人質として安全を図るためにリユーネリア自身ということだろうか、それともウィルフレッドの真意なのか。

ずっと身体に力が入っていたのだろう。ウィルフレッドは長く息を吐き出すと、やっとゆっくりとこちらを向いた。

「あなたの姿を——他の男の目に触れさせたくなかった」

返ってきた答えは盲点をついていた。

それは直接的な意味合いとして、見せたくないということだろうか。それとも、ヴェルセシユカのしきたりには考えられないような何かみつともないことをしてしまっているということだろうか。

「……どうして？」

聞いて、向けられた眼差しに気圧された。

「言わなければ分からない？」

その瞳に、心臓が大きく脈打つ。

本当は知っている。答えを知っている。色々な言い訳をしながら

も、常に頭の片隅にあったことだ。

だけど、それはリユーネリアが最初に否定したものだ。望まないと、必要ないと、確かに言った――。

32・唯一無二（嫌わないで）

ウィルフレッドがリユーネリアを見つめる視線は、熱に浮かされたように潤んで視線を外すことを許さない。無意識に身体が逃げようとするのと、ウィルフレッドが手を伸ばしてきたのは、ほぼ同時でわずかに彼の方が一歩早かった。

「ネリー」

名前をただ呼ばれたただけなのに、動けなくなる。

でも敬称で——あなたと呼ばれた時よりも、心に込み上げるこの感情は何なのだろうか。

腕を滑るように手を取られると、その指先に口づけされる。触れる吐息は熱く、その一連の動作からは目が離せない。

体温が上昇する。

「ネリー……」

どこまでも甘く響く声に、リユーネリアは泣きたくなった。

「好きになってくれとは言わない。でもどうか嫌わなくてくれ」

その一言に、リユーネリアは俯く。後半の言葉は、リユーネリアが心の底でウィルフレッドに対して願っていた言葉だったのだから。「もう二度とネリーの嫌がるようなことはしない。だから守らせてほしい。俺の手を必要ないと言わないでほしい……」

口づけは指先から手首に移動しながら何度も落とされる。ウィルフレッドの伏せられた長い睫毛が微かに揺れる。

リユーネリアは、その告白を信じられない思いで聞いていた。

今思えば、ウィルフレッドが取った行動はすべてリユーネリアを想うあまりのことで、本心から守ろうとしてくれていたその思いにリユーネリアが取った行動といえれば反発して館から抜け出し、怒りを覚えて勝負を挑み、自分の主張ばかりを通していた。

それはつまりウィルフレッドの想いを否定する行動に違いなく――

」。

だが、リユーネリアはすんなりとその想いを受け取れない慎重な自分が嫌になる。ウィルフレッドが触れている自らの手から視線をそらす。

「あなたは……」

それでも慣れないことに緊張で声がひっくり返ってしまいそうになるのを何とか押さえながら、それでも声を出した。

「私があなたの主義を認める場合、私に独占欲が生じると問題だと言った私の言葉を否定しなかったわ」

「あなたはもう知っているだろう。俺には今、恋人と呼べる者は誰もいないと」

「でもこれから——」

他に恋人ができるかもしれない、と言おうとした先に被せるように言われた。

「ネリー以外は欲しくない」

はつきりと告げられ、リユーネリアは腰が抜けそうになった。足が震える。

未だに捕らえられた手はウィルフレッドに握られている。

いきなり突きつけられた強い想いに、リユーネリアの頭の中からすべての事が弾け飛ぶ。

「あの……私は……」

「いいんだ。ネリーが俺のことを嫌ってなければ……。それともこうしているのも迷惑？」

つながれた手を力強く握られて、リユーネリアは首を横に振った。「あの、迷惑じゃない、です。……でも、今までこういう可能性を考えた事もなくて、その——混乱してるの。私もあなたに嫌われたくないと思っていただけ、あなたと同じ気持かどうかと言われると分からなくて……」

混乱しながらも、リユーネリアも一つ一つ自分の感情を口にする。そして、一番重要だと思うこともどうにか吐き出す。

「でも、私はあなたのことは嫌いじゃないし、まだ先の事は、わからないけど、多分……好き……になると思うし、その努力もする」

火照る頬を空いている片手で押さえ、自分の言った言葉がウィルフレッドを傷つけなかったか反芻する。決して、いい言葉で返せたつもりはなかったので、ガツカリしているかもしれないと思い、そつと上目づかいに窺い、すぐに白旗を掲げた。

ウィルフレッドはどんな女性をも魅惑してしまうような笑みを浮かべていた。それがただ自分一人に向けられているものだと思いつき、カツと身体が熱くなる。

「……ずるい」

その笑顔は反則だ。

「ネリーが嫌ってないのなら、俺も好きになってももらえるよう努力するだけだ」

それではリユーネリアが落とされるのも時間の問題だ。コーデリア達も言っていたことがある。ウィルフレッドが落とそうと思って落とせない女性はいないと。その上、ウィルフレッドにとって自覚していない人間と自覚している人間ならば、後者の方が圧倒的に有利だということにリユーネリアは気づいていなかったが。

「ネリー、今日は一緒に寝よう」

手を取られたままさりとわれ、この直後というだけあって、今までと状況が違うだけに過剰に反応してしまう。

「ええっ！」

「そんなに驚かなくても……明日からは強行軍になるし、ネリーに嫌われるようなことは何もしない」

「——え、ええ……」

本当にいいのだろうかと思いつつ、手を引かれて寝台へと引っ張られる。先ほどの告白に腰が抜けそうになっていたリユーネリアは、その途端転びそうになった。

あっと思う間もなく、前から素早く差し出された手に身体を支えられ、転倒は免れる。だが、頭上から怪訝な声が降ってくる。

「どうした？」

思いがけず耳元で声がして、リユーネリアはウィルフレッドの胸に手について身体を支えていることに気づく。

焦って立とうとして、いつの間にか足の筋肉が硬直していることに気づいた。

思い当たることは一つ。

「昼間の乗馬で……」

今思えば、あのような勝負などする必要はなかったのかもしれない。

「痛めたのか？」

問われた途端、視界が反転した。有無を言わず身体を抱え上げられ、気づいた時はウィルフレッドの腕の中だった。

「違います！ 久々だったから筋肉痛になっただけです！ 歩けます！」
慌てて訴えたものの、ウィルフレッドは首を横に振る。

「無理はするな」

そう言って、下ろされることはなかった。

壊れ物でも扱うかのように寝台にそつと下ろされる。それだけで心臓が早鐘を打つ。

「すぐに揉み解さなかったのか？」

「はい。騎士団の方たちに囲まれてそんな時間が無かったから……」
久々に乗馬をしたのだから、本当ならその後すぐに筋肉をほぐし、冷却した方が良かったのかもしれない。だが、勝負の後はそのような間はなかったし、ウィルフレッドのことが気になってそれどころではなかった。

それに、あつという間に騎士たちに囲まれ、押しやられ、気づいた時には広間で食事を前にしていたのだ。

「まったく、あいつらは……」

そう呟くと、一度寝台から離れて——もしかして薬でもあるのだろうか——考えていると、足元に回ったウィルフレッドは、おもむろにリユーネリアの夜着の裾を膝まで上げると、ふくらはぎを揉

み始める。

「きやあつ、つて痛いっ！」

悲鳴を上げ、逃げ出そうとしても、ウィルフレッドの手はがっちり足をつかみ放してくれない。

「今更だが、しないよりはましだろう」

そんなに力を込められているわけではないが、すでに触れられるだけで痛いのだ。

涙を浮かべながら、思わず近くにあった枕を抱き寄せる。胸元に抱きこみ、痛みを逃すために自然と身体は丸くなる。それでも身体中に力が入ってしまう。

両足の筋肉を解される頃には、逆に肩に力が入りすぎて肩が凝っていた。

「明日は立てないかもしれないな」

ようやく解放され、リユーネリアは座ると目元の涙を拭う。

「馬車だから大丈夫です」

どうせ歩くことはそんなにない。多少歩く姿が無様になるかもしれないが、これは処置を怠ったリユーネリアの落ち度だ。仕方がない。それに王宮に着くまでには少しは軽くなっているだろう。

ゆつくりと足をさすっていると、いつまでもウィルフレッドがその場から動く様子がないのに、どうしたものかと見上げた。

顔を背け、さらに片手で口元を覆っている。耳がわずかに赤く染まっているように見えるのは気のせいだろうか。

「ウィルフレッド様？」

何かあったのだろうかという意味を込めて呼ぶと、ウィルフレッドはゆるく首を横に振ると、深々と息を吐き出した。

「少しは警戒して欲しいな」

ちらりと向けられた視線の先が、自らの足に注がれ、夜着が膝上までたくし上げられていたことに遅まきながら気づく。

悲鳴を上げながら慌てて隠し、ついでに布団の中に隠れる。ウィルフレッドも気まずそうに視線を外した。

「無防備すぎる……」

そう呟き、息を吐き出す。

しばらく重苦しい空気が流れたが、ウィルフレッドが諦めたように髪をかき上げてリユーネリアの隣に入ってきた。

いつものように身体に腕が回される。

それはいつもと同じはずなのに、ウィルフレッドの気持ちを知ってしまったからか身体に力が入る。それに、少しでも間に空間を作りたくなってしまふのは許して欲しい。

「ネリー」

呼ばれて見上げると、瞼に唇が下りてくる。

「おやすみ」

いつもの挨拶に、なぜかホツとする。

俯いてウィルフレッドの胸に額をよせると、ほどなく眠りの波に飲み込まれていった。

33・平穩無事（お願いがあるんです）

王宮はいつもと変わらない日常……となるはずだった――。

「リユーネリア様、あの……、また花が届いておりますけど」

さすがに王宮勤めの長いダーラでさえ、このような事態は想像していなかったのかもしれない。どこか遠慮がちに口を開く。

王宮に帰ってきた翌日から、リユーネリアの私室になぜか多くの騎士たちから花が届けられるようになった。それは薔薇であったり百合であったり、または野に咲く名もないような花であったりなのだが、毎日、毎朝届けられる。それも一輪だけ。

「……ありがとう。今度はどなたからかしら？」

ニーナに髪を整えてもらいながら、視線だけを花に注ぐ。

すでに王宮に帰着して五日。最初のうちこそ花を――それも、たった一輪という飾るにも迷惑にならない程度の花を貰うことを嬉しく思っていたのだが、多くの騎士たちから毎日届くので、現在その数は数え切れないほどになっている。それをどうにか侍女たちが見栄え良く生けてくれているが、それでも限度というものがある。だからと言って、素気無く捨ててしまうのは気持ちのこもった贈り物である以上リユーネリアにはできなかった。

「ええっと、騎士団長からです……」

「……」

リユーネリアは思わず嘖き出してしまった。

あの大きな人が一体どのような顔をして持ってきたのか。

一頻り笑った後、笑いが収まると今度は溜息がこぼれる。

なぜこんなにも騎士たちから花を貰うことになってしまったのか。思い当たることは一つだ。

ザクスリウム領でウィルフレッドと馬での勝負のことを聞き及ん

だのだろう。だがリユーネリアが不思議に思えるのは、彼らの仕えるウィルフレッドが負けた事を、なぜ彼らは腹を立てないのだろうか。むしろ調子に乗るなとリユーネリアに辛く当ってもおかしくないはずなのに、王宮内で彼らとすれ違おうものなら、大変な目にあう。どこに行くのかを尋ねられ、そこまで護衛と称して付いてくる。それはまだいい方だ。護衛と言いながら嬉しそうに話しかけ、まったく護衛になっていないこともよくあるのだが、少なくともそこにあるのは好意であるのは分かっているので無下にもできない。

「いずれ彼らも飽きますよ」

髪に飾りをさしたところでニーナが鏡をリユーネリアの正面に持ってきた。

背後に立つニーナに視線を向け、リユーネリアも苦笑する。

「そう願いたいわ」

支度も済み、もう一度寝室へと向かう。

寝室を通り抜けて、ウィルフレッドの私室への扉をノックした。

「どうぞ」

エリアスの声が聞こえ、あら、と思う。

朝早くから何事だろう。

扉を開けると、朝食の準備がちょうど整い終わったところらしく、ウィルフレッドがリユーネリアのために椅子を引いてくれた。

それが面映ゆい。

王宮に帰って来てから変わったことがもう一つある。朝食をウィルフレッドと共に取ることになったのだ。

王宮に帰ってきた翌日の朝、ウィルフレッドの腕の中で目覚めたリユーネリアに、朝日より眩しい笑顔で朝の挨拶をし、旅の疲れさえ見せず、リユーネリアの頬を愛おしげに撫でながら、反対の頬に口づけを落とした。それを侍女たちの目の前でされ、リユーネリアは思わず突き飛ばしそうになってしまったのだ。寸前で思いとどまったが……。

いつもならそのまま朝の支度に取りかかるべく、それぞれの部屋

に戻るのだが、ウィルフレッドはリユーネリアの手を取ったまま離さず、なおもその手に口づける。侍女たちの溜息とも悲鳴とも言えない声を側で聞きながら、早く離して欲しかったが羞恥と混乱で固まってしまったのだが。

「午後まで会わずにいる自信がないな……」

溜息のような呟きを聞いたニーナが、おそれながら、と口を出す。助けてくれるのかと彼女を見やると、ニーナはあくまでも彼女の仕事に忠実だった。

「少しでも長く一緒にいたいのであれば、朝餉と一緒に取られてはいかがでしょうか？」

淡々と言う彼女の提案を聞いたウィルフレッドは、途端喜色を満たし、面にあらわす。

「それがいい」

一つ返事で決定され、それからというもの毎朝の日課になってしまった。

なぜ、そのようなことを言ったのかとニーナにあとになって尋ねると、笑顔で答えが返ってきた。

「いつまでもあの調子では朝の支度に手間取りますし、朝食と一緒に取られれば、準備も一カ所で手間いらずでしょう」

リユーネリアの朝の支度は時間がかかる。その点、ウィルフレッドは簡単だ。だから、ウィルフレッドの支度が済んだ後、朝餉の準備をしてもらっていると、ちょうどいい時間になるというのだ。

ということで、朝餉の席についたリユーネリアに、ウィルフレッドは満足げに笑みを向ける。

その側に立つエリアスを見ると、いつもと変わらない様子で挨拶をされる。

「おはようございます。妃殿下」

「本当にお早いですね。何かありましたか？」

給仕をされながら見上げると、エリアスがウィルフレッドを見やっていた。

「大したことではありませんが、早いうちに殿下の耳に入れておいた方がよいかと思ひまして」

意味ありげな視線をリユーネリアに向けてくる。どうやら自分に関係のあることらしい。わずかに首を傾げると、エリアスは給仕をしているニーナに声をかける。

「最近、妃殿下は困った事がありだそうですね？」

「ええ。ですが大したことではないとおっしゃってますが」

給仕の手を止めてニーナはエリアスを見、そしてリユーネリアに視線を移す。間違つてませんよねと、その瞳は言っている。

軽く頷くと、ニーナは再びエリアスを見た。

「ネリー、何があったんだ？」

テーブル越しに手を握られ、リユーネリアは大したことではないと前置きし、最近、毎朝送られてくる花の話をした。

「誰だ、そんなことをするのは」

話を聞いたウィルフレッドは、怒りもあらわに立ち上がると寝室へと向かう。リユーネリアは慌ててウィルフレッドのあとを追った。私室への扉を開けると、途端、甘い花の香りが立ち込める。ずっと部屋にいと気づかないが、外から入ってくるとその香りはかなり強い。ウィルフレッドもその部屋の状態に一瞬呆気にとられたように立ち止まった。

エリアスは寝室へと立ち入るわけにもゆかず、一度部屋を出てから廊下側からリユーネリアの部屋へと顔を出した。そのエリアスでさえ、呆れたように部屋を見回した。

「これはまた……、思っていた以上ですね……」

どうやら話は聞いていたらしい。ある程度の想像をしていたようだが、リユーネリアの部屋に飾られた花の多さに、さすがに閉口した。

給仕を一時止めてリユーネリアのあとを付いてきたニーナに、ウィルフレッドは鋭く言い放つ。

「すべて処分しろ！エリアス、騎士団の連中に止めさせる！」

「待つて、ウィルフレッド様」

それを聞いて、リユーネリアは慌てて止める。

「騎士団の方々を止めていただくのはまだしも、折角いただいた花を処分するのは待つて下さい。いずれ枯れてしまうものだし……」

「……俺はあなたが他の男から貰ったものを許せるほど寛大じゃない」

きつぱりと言い切られ、リユーネリアは俯く。単純に花は綺麗だった。均一性がなくとも、見ていると和む。そして騎士団の人たちから受け入れられたようで単純に嬉しかったのだ。

「……すまない。——わかった。今この部屋にある花はそのままでもいい」

落ちた声音に、リユーネリアがハツとして顔を上げると、ウィルフレッドはすれ違うようにして私室へと戻っていく。

ウィルフレッドを傷つけるつもりはなかったのに。

あとを追うにしても、何と言えば良いのか分からずに立ちつくしている、エリアスが声をかけてきた。

「妃殿下。少しよろしいですか？」

ニコリと笑みを向けられ、リユーネリアは思わず一步下がった。

この作った笑みが曲者であることを知っている。だが、エリアスが次に言った言葉はこの時ばかりは違っていた。

「ウィルフレッド様！」

朝餉の席に先に戻っていたウィルフレッドに、リユーネリアは駆け寄るように側に立つ。

落ち込んでいる様子を見せながらも、それでもリユーネリアには笑顔を向けようとするウィルフレッドは痛々しい。だから自然と両手は胸の前に組み合わさる。

「あの、私……、お願いがあるんです」

唐突だろうがなんだろうが、ウィルフレッドを傷つけたのが自分

ならそれを癒すのも自分でなければならぬ。その方法はエリ阿斯が教えてくれた。

どんな男性も、女性の可愛^{こい}いおねだりに弱いんですよ、と。

言われてみれば、リユーネリアがウィルフレッドに望んだものといえは、地位と権力。これが普通一般の夫婦に適用されるおねだりだろうか。当然、エリ阿斯に聞けば、まったく可愛げがないのとこで、リユーネリアもそれは反省すべき点ではあるようだ。

「俺にできることならどんなことでも」

リユーネリアの珍しいおねだりに、それはもう全力で全快してく様が見えるようだったとニーナがあとで教えてくれた。

「あの……、私の部屋にある花はいずれ枯れてしまいます。ですから、よろしければ庭園にある花を分けてもらうことはできないでしょうか？」

ウィルフレッドの執務室から見える庭園は、こぢんまりとしているが綺麗に手入れされている。散歩で行ってみたいと常々思っていたのだが、なかなかその機会がなかったのだ。

リユーネリアの願いを聞いたウィルフレッドは、一瞬戸惑ったように見えた。

「そんな、こと……」

少しだけまた落ち込んだように見えた。

「いいよ」

ぼつりと呟かれた言葉に、リユーネリアはさらに言葉を続ける。

「あの、ではウィルフレッド様も一緒に行かれませんか？私、ウィルフレッド様と一緒に摘んだ花を部屋に飾りたいんです」

恥ずかしくはあったが、一息に言った。

もう目をそらしたくてたまらなかったが、それでもじつとウィルフレッドの返事を待つ。

しばらく呆然としていたが、すぐにいつもの優しい笑顔に戻っていく。

「いいよ。行こう」

その穏やかな笑みに、リユーネリアもほつと息を吐く。
そんな二人のやり取りを、エリアスやニーナたち侍女も穏やかに
微笑んで見守っていた。

34・白昼堂々（大丈夫）（前書き）

残酷描写あり。苦手な方はご注意ください。

34・白昼堂々（大丈夫）

午前中の予定を全て取り消したウィルフレッドに、当初行く予定だった執務室から見える中庭ではなく、王宮の裏手に広がる本格的な庭園へと案内された。

そこは見渡す限りの緑で覆われ、所々に同一色の花が植えられ、今が盛りとばかりに咲き乱れている。まるで一つの絵画を見ているような気分だった。だが風に乗って漂ってくる甘い香りが、目の前の風景を現実のものだと教えてくれる。

咲いている花は多種多様ではあったがその中でも薔薇が多く、見事な大輪の花を付けている。切り花にするには開きすぎているが、見てまわるぶんには華やかで十分、目を楽しませてくれる。

ウィルフレッドに案内されながら庭園へと足を踏み入れた。そこはまるで迷路のような作りをしており、薔薇のアーチの連なった通路を通り抜けると、身長より高い植木で壁が作られている。そのまま右に左にと曲がりながら進み、あつという間にリユーネリアの方向感覚を狂わせていく。ちょうど両手で数えられるぐらいの回数を曲がった頃には、帰る道が完全に分からなくなってしまった。

緑の壁の上の方に、遠く王宮の屋根が見え、そちらに行けば多分帰ることができるのだろうと思う程度だ。だが、きつと曲がりくねっているのもう簡単にはたどり着けないだろう。

「ウィルフレッド様は戻る道を分かってらっしゃるんですね？」
不安になって聞くと、からかいを含んだ目がリユーネリアに向けられる。

「いや。適当に歩いてるよ」

「……………」

息をのみこんで見つめると、手を差し出された。

「大丈夫。実はこの庭を抜けるにはコツがある」

背後についてくる侍女や騎士たちの目を気にしながら、差し出された手を取るべきか悩む。その躊躇いを見抜かれ、ウィルフレッドは一步戻つてくると、当然のようにリユーネリアの手を取って腕に置く。それは夜会でエスコートする位置と同じで、リユーネリアは安心して歩を進めた。

「ネリーは花の名前に詳しい？」

「パルミディアは緑と湖の国ですよ？」

笑いながら答えると、そうだったとウィルフレッドも笑む。

「それなら簡単だ」

そう言つて、庭園の秘密を口にする。分かれ道に必ず植えられている花の名前の頭文字を拾つていくとある言葉になる。言葉になるように拾つていかなければ王宮へは帰ることはできない。それは、この庭園の何処からはじめても結果が同じように設計されていることだった。

「その言葉は？」

耳元でこつそりと囁かれ、リユーネリアは口元に笑みを浮かべた。それは子供から大人まで、誰もが知っている物語に関わる言葉。

「この庭園を造った人は、とても遊び心のある方だったのですね」
「そう。とてもね」

まだ何か秘密があるような口ぶりのウィルフレッドと歩きながら、この時間がとても穏やかでリユーネリアの心も安らかな気持ちになる。戦争を終わらせるための結婚だったはずなのに、こんなにも穏やかで——幸せでいいのだろうかとも思う。まるで夢のようだとも。このまま何事もなくウィルフレッドと一生を共にすることができれば本当に幸せだと思う。いずれ子供ができ、穏やかな家庭を作ることとはきつとウィルフレッドとなら可能だろう。

添える腕に力を入れると、ウィルフレッドは歩みを止めてくれる。薔薇を指差すと、小型のナイフで切ってくれた。その上、刺を取りリユーネリアに渡してくれる。

そうやって庭園を歩きながら何本も薔薇を摘む。

いつまでもこの幸せが続けばいい。そう願っていた――。

しばらく行くと突如開けた場所に行きあたった。そこには小さいながらも噴水があり、周囲にはテーブルと椅子が置いてあった。似たような場所が他にも数ヶ所設けてあると聞き、改めて庭園の広さを実感する。

確かにこれほどの庭園ならば歩き疲れてしまう者は多いだろう。

正直、リユーネリアも少し休みたいと思っていたところだった。

侍女たちもお茶の準備を始める。騎士たちも周囲を警戒しながら、それでもこの和やかな雰囲気壊さないよう、適度の距離を保っている。

リユーネリアは一人で噴水の周囲を一周してみる。今、自分たちがやって来た方向とは違う方向へと三本、道がまだある。どこに続いているのかウィルフレッドに聞いてみようとしたその時、ふと感じた違和感に、視線を戻す。

何に対しての違和感か。すぐに分かった。

その道の一つに人がいた。騎士でも侍女でもない。まして、庭師でもない。

「ネリー！」

ウィルフレッドの逼迫した声と、その者がこちらに向かってきたのはほぼ同時だった。

何かに陽光が反射し、眩しくて思わず手を翳す。それが陽の光を浴びた剣だと気づいた時は、すでに男は目の前にいた。

リユーネリアに向かって大義名分を掲げた台詞を吐き出すと、その男は迷うことなく剣を振りかぶった。

悲鳴が遠くで聞こえる。

何かが割れたような音もした。

このまま殺されるのかと呆然と見やる。幸せな未来を思い描いていたのは、ほんの少しだけ前のことだったはずなのに、ここで終わ

ってしまうのかと思うと、それを自らも強く望んでいたのだと初めて気づく。だが、足が地面に縫いつけられたように動かず、ただ男の動作を見ているしかできなかった。

が、振り下ろされたと思った瞬間、リユーネリアの身体は突き飛ばされていた。

甲高い金属音が、地面を目の前にしたリユーネリアの耳に届いた。「逃げろ！」

ウィルフレッドの叫びを背後で聞き、地面をつかんだまま慌てて振り仰ぐ。

知らない男と、ウィルフレッドが抜刀して向き合っていた。

「殿下！」

騎士たちが慌てたように、駆け寄ってくる。

リユーネリアもすぐに、駆け寄ってきた騎士たちによって起こされ、ウィルフレッドから離された。

そこに今度は、今まさにリユーネリア達を通ってきた道から剣を持った男たちが現れた。

侍女たちの悲鳴が上がる。

「リユーネリア様！」

数名の騎士が、リユーネリアの前に立ち、彼らから守ってくれようとした。だが、当然戻る道は塞がれている。どうやら逃げ場はないらしい。

じりじりと後退しながら、侍女たちの元へと下がるしかなかった。ニーナがリユーネリアを守ろうと側に立つ。その目はとても冷静に、襲ってきた者たちを見つめている。

「大丈夫」

リユーネリアはニーナの腕をつかんで呟いた。

だが視線はウィルフレッドから離れなかった。幾度か切り結んでいるようだったが、押されているようには見えない。むしろ優勢のように見える。

「失礼します」

横でニーナの声が聞こえたと思うと、スツと視界が閉ざされた。

「ニーナ？」

「見てはなりません」

何を、とは聞くまでもなく、その直後、数度の金属音が聞こえたと思うと、うめき声ともつかない悲鳴で分かってしまった。王族を襲った者たちが役目に失敗するとどういう結末を迎えるのか、その道は一つだけだ。それは、リユーネリアにも分かっていたことだった。だが、絶命する人間の発する声は想像以上に身の毛がよだち、自然と身体が震えた。

何かが地面に倒れる音がして、続いて剣戟が聞こえていた他の場所でも同様なことが起こった。警備に必要な最低限の人数で、捕らえることは無理だったのだろう。彼らの仕事は、ウィルフレッドやリユーネリアを守ることが第一なのだ。

「ニーナ……手を外して」

「ですが」

躊躇う彼女に、リユーネリアは告げた。

「構いません」

ゆっくりと視界が明るくなり、先ほどの穏やかな庭園には似つかわしくない鮮やかな赤が地面に広がっていた。

すでに息をしていない人間が、その中ほどに倒れている。

震える息を吐き出し、ゆっくりと息を飲み込む。

視界に、出来るだけ地面に伏す人物を入れないよう視線を動かしウィルフレッドを探す。

それは容易であると同時に、とても大変なことだった。もしも怪我をしていたらどうしようという恐怖が、ウィルフレッドを探す動作を躊躇わす。だが、見慣れた姿はすぐに目に入ってくる。

「ウィルフレッド様！」

リユーネリアはニーナの手を振り切って、ウィルフレッドのともに駆け寄った。

抜き身の剣にはまだ血が付いていた。だが、彼の身の安全を確か

めることがリユーネリアにとって最優先だった。

「お怪我はありませんか!？」

「ああ……ネリーは？」

「大丈夫です」

両手を胸の前で握りしめ、ホツと息を吐き出す。

助けてもらった時、ドレスが多少土で汚れてしまったが、これといった怪我はない。

ウィルフレッドは騎士たちに指示を出した後、リユーネリアの肩を抱き寄せる。

「護衛をつける。部屋に戻っていてくれ」

「ウィルフレッド様は……」

「あとで行くから」

そう言ってリユーネリアは送り出された。

侍女と護衛の騎士に守られ、この庭園に来た時とは逆の気分を味わいながら、沈んでゆく気持ちのまま部屋に戻ることにしかできなかった。

35・表裏一体（これが私の望む生き方）

土で汚れたドレスを着替え、私室のソファに腰を下ろした。

部屋の中は朝と変わらず、花で溢れかえっている。温かな日差しが窓から入り込み、日常とどこも変わらない。見た目だけは。

朝の和やかな雰囲気はどこに行ったのか、張りつめた空気がリユ―ネリアの周りに絡みつき、先程までいた侍女たちも不安そうな面持ちのまま、それでも緊張感が発せられていた。

部屋の外には、ウィルフレッドに言われて来たのだろう。ロレインとバレンティナが控えている。

着替え終わってすぐに駆け込んできた二人の姿に、思わず目を見張ったが、二人の表情を見て思わず苦笑した。心配して駆けつけてきてくれた二人には申し訳なかったが、その心配が心の中に安堵をもたらししたのは事実だ。冷え冷えとしていた心の中が温かくなる。

笑みを向けると、二人も落ち着きを取り戻してくれ、先ほどまで側にいてくれたが、仕事を優先してもらった。

部屋を見渡し、そう言えばウィルフレッドと摘んだ薔薇を庭園に忘れてきてしまったことを思い出した。

目の前に広がる赤。振りかざされた剣――。

向けられた言葉からも、明らかにあれは自分を狙ったものだ。

今までも何度か命を狙われたことはあったが、ここまで白昼堂々と襲ってくることはなかった。いつもなら襲われたことを秘密裏に処理していたのだが、さすがに今回はそうはいかないだろう。公にすることがどのような影響を周囲に与えることになるのか。

ぐつと唇を噛みしめる。

命を狙う理由は分かる。だが、なぜ今になってこのような手段に出たのか。そこまで戦争をしたいのか。

「ニーナ」

現在、部屋にただ一人控えている侍女を呼ぶ。他の侍女たちは別

室でエリ阿斯から具体的に話を聞かれている。

傍らに立った彼女を見上げ、リユーネリアは決心する。

先ほど、念のためと思ってドレスの隠しに持っていたものを取りだし、ニーナに差し出す。

「これを」

それは小さな短剣だ。

女性でも重量を感じさせないほど軽く、扱いやすい代物だ。護身用としてパルミディアであつたものだ。だが、リユーネリアにこれを扱う技術はない。

「はい」

両手で捧げるようにして受け取ったニーナに、申し訳なくて小さく謝罪する。

だが、向けられた殺意に無防備でいられるほどの命は軽いものではない。二つの国の将来がかかっているのだ。ならば守るしかない。それがニーナに約束させたことを自らが破ることになったとしても……。

ニーナがリユーネリアの侍女となつたのはニーナが八歳、リユーネリアが六歳の頃のことだ。

当時、ヴェルセシユカとの国境沿いで小競り合いが頻発し、いつ開戦をしてもおかしくない状態が続いていた。

今思えば、父であるパルミディアの王はすでに戦争が始まることを予測していたのだろう。その当時、パルミディア王家直系の後継ぎはリユーネリア一人。弟のライオネルはまだ産まれてさえないなかつた。当然、王になにかあれば一人娘のリユーネリアに国の命運がかかることになる。つまり、失うことのできない存在だったのだ。

そこで、リユーネリアに年齢の近い侍女を側に置くということになった。それは身代わりに他ならなく、髪色も黒に近い少女たちが集められ、その中にニーナがいた。

彼女はヤドヴィガ山脈の山岳地帯に住む民族の出だった。身にもとう雰囲気か他の少女たちとは違い、どこか一線を引いたところがリユーネリアの気にかかった。

話を聞くと、王宮から出された条件はかなりのよい条件で高額な給金も出るとのこと。山岳地帯の生活は苦しく、家族を養うために、自ら決心して王宮にやって来たということだった。

わずか八歳というにもかかわらず、親から離れて暮らすことを選んだ彼女の強さにリユーネリアは心を打たれた。

それからというもののリユーネリアは何かとニーナを気にかけていたが、彼女たちの役割を知らなかったわけではない。何かあった時、犠牲となるのは彼女たちなのだ。適度な距離を取りつつ、いつもニーナを気にしていた。

だがある時、何を思ったのか、ニーナが侍女の仕事を覚えつつも、王宮の警備をしている兵士達から剣の手ほどきを受けていることを知った。

侍女の仕事は決して楽なものではない。それでもなお暇な時間を見つけて、剣の扱いを覚えようとしている彼女に理由を問うたが、決してその理由を口にすることはなかった。しかも彼女は、もともと山岳地帯に住んでいたためか、身体能力が高く、もとの素質もあつたのだろう。彼女は他の侍女とは違い、数年後には城の兵士たちにも引けを取らない腕前になっていた。

そしてリユーネリアが戦場へ赴くことが決まった時に気づいた。他の侍女には危険すぎる場所であるため連れていくことは無理でも、ニーナならば可能なこと。そのことで初めてニーナの求めているものが何であつたのかをリユーネリアは知ることになった。それは、ニーナが自分の側にいることを選んだということに違いなく、リユーネリアが侍女たちを身代わりにしたくないと思っていることを、彼女が理解していることに、さらに彼女に対しての信頼を深める結果となった。

だが、そんな彼女とパルミディアを出る前に、一つだけ約束をし

た。

本当は国に彼女を置いてきて、すべての役目から解放したかった。家族の元に返してあげたかった。

しかし、はじめてニーナが口に出し、望んだことがリユーネリアの側にいることだったのだ。リユーネリアもヴェルセシュカに人質として行くことに当然不安がなかったわけではなく、今となつてはそれが彼女の本意だったのかどうか、差し出されたその手を思わず掴んでしまったのは自分の弱さだ。

できることなら自分を守るためとはいえ、ニーナに人を傷つけるようなことをして欲しくはない。ヴェルセシュカに連れて来ておきながら、それがどんなに自分勝手な考えなのかということも承知で、彼女に武器を持つことを禁止した。

せめてこの国では普通の侍女として、普通の女性として過ごす楽しみを見つけて欲しいと思っていたのだ。決してこの地が安穏な地ではないと知りつつも、自分が上手く立ち回って今度は逆に彼女を守れば良いと思っていた。

しかし、どこにでも予測していないことは起こり得るもので、協力者として申し分ないと思っていた夫は、この結婚を最初こそ仕事と割り切っていたようだが、今では完全に私情と化している。そしてまた、リユーネリア自身もそれを心地よいものとして受け入れていた。本当なら、もっと要領よく行動するはずだったにもかかわらず、このような事態に陥る真似を引き起こしてしまった。

思うに、今回の白昼の襲撃の一因は、ここ最近の騎士たちのリユーネリアに対する態度だ。

それはリユーネリアがヴェルセシュカでの地位を向上させたと思っ
ていいだろう。

今まではウィルフレッドが夫という立場だからこそ、パルミディアの王女を受け入れていたと周囲には思われていた節もある。

だが、騎士たちの態度から確実にリユーネリアがヴェルセシュカに受け入れ始めた事に対する懸念だろう。早く危険な芽を摘み取っ

ておくべきと思つての襲撃なのではないだろうか。

ニーナにその考えを話すと、彼女は頷いた。

「どうやら考えは同じようだ。」

だが、リユーネリアはやはり申し訳なくて、目を伏せた。

「ごめんなさい。ニーナにはもつと違う生き方をして貰いたかったのに……」

「いいえ。私はリユーネリア様のお役に立てることが嬉しいのです」
微かな頬笑みさえ浮かべて言うニーナに、リユーネリアは首を横に振る。それを幸せだと思つてはいけないのだ。

「違うわ。言つたでしょう。あなたはあなたの生きたいように生きていいと」

「はい。ですからこれが私の望む生き方です」

リユーネリアの側に跪くと、下から見上げてくる。

「リユーネリア様の思うままに、お使い下さい」

自分の力不足を痛感しながら、リユーネリアは心の中でニーナに謝る。まだ彼女の力を借りなければ何も出来ないのだ。

だがいつまでも後悔しては始まらない。事はすでに起こつてしまつたのだ。頭を切り替えなければならない。

「取りあえず、今まで通りに。ウィルフレッド様から話を聞いて、それから動きましょう。少しでも状況が分かつてからの方が無駄も少ないわ」

頭の中が冷えていくような感覚が蘇る。

かつて戦場に立つた時と同じように。

常に後方にいて、剣を振るつたわけではない。だが、戦局を見ながら指示を出すことはできていた。後方支援という隠れ蓑の中で――

36・疑心暗鬼（必ず守る）

暗い思い出に沈みそうになった時、扉がノックされると同時に開けられた。

すぐに立ちあがったニーナは、当然のように部屋の隅に控える。

「ネリー」

立ち上がって出迎えたリユーネリアは、ウィルフレッドによつて腕の中に閉じ込められた。

目の前にある服が、今朝とは違うことに気づき、彼も着替えたのだと気づく。それが指し示す意味に気づき、暗澹たる気分で現実なのだと思い知る。

だが背中に回された腕から、ウィルフレッドの心配が伝わってきて、リユーネリアは安心させるように彼の背中に手を回した。

「私は大丈夫」

しっかりと声で答えると、ゆっくりと息を吐き出したウィルフレッドが頭上で辛そうに顔を歪めていた。

「また閉じ込めてしまいたい……」

だがそれは希望であつて、本気でそうする意思はないようだった。リユーネリアはそつと手を伸ばし、ウィルフレッドの頬に触れると表情をゆるめた。

「あなたがずっと側にいてくれるのなら、それもいいかもしれないわ」

そうすれば、無暗に襲われることも少なくなるだろう。だけど、それは絶対に無理だと分かっているからの発言だ。

ウィルフレッドはその言葉に目を見開いて、ふいと視線を逸らす。「できればそうしたい。だが、それではネリーから危険が消えるわけじゃない」

「ええ」

ウィルフレッドの出した答えは、リユーネリアを安心させた。危険から逃れるためとはいえ、一生、閉じこめられたまま生きていくはずはない。不満も出るだろうし、まして閉じこもっていたからといって、必ずしも安全とは言えないだろう。

「閉じ込めはしない。でも、できるだけこの部屋からは出ないで欲しい。すべてが片付くまで警備を強化する。部屋から出る時も、必ず護衛を連れて行ってくれ」

「わかったわ」

「絶対に、危険なこととはしないでくれ」

念を押されて言われた意味に気づき、リユーネリアは苦笑した。
ザクスリウム領で抜け出したことを言っているのだろう。

「しないわ。約束する」

真っ直ぐ見つめて言うと、再び強く抱きしめられた。

こんなにも誰かにとつて特別な人となることが、強く必要とされることが、リユーネリアの心を震えさす。それは強くあると同時に脆くもある。また逆も言える。この人の為に生きようという力が何処からともなく湧いてくる。

ふと緩んだ腕に、リユーネリアも身を離そうとして、結局それは叶わなかった。

後頭部に回された手によって上向かされると同時に口づけられ、思わず目の前の胸に縋った。それは束の間の出来事だったが、その間、すべての憂慮すべき事柄が頭から消え去る。

ようやく離された時、頬を両手ではさまれ、真正面から瞳を覗きこまれた。

「必ず守る」

あまりにも真摯な眼差しに、身体中が熱くなる。

「はい……」

信じないわけがない。向けられる気持ちを。

どうやら入口で控えていたらしいエリアスが、小さく咳払いをし

ながら入ってきたので、場所をソファへと移す。

ずっと見られていたのだろうかと思い恥ずかしくなるが、エリアスは表情を変えることなく報告を始めた。

「生憎、身に付けていたものから身元の分かるような物は出てきませんでした。殿下からもお聞きしましたが、相手は剣の扱いにも慣れていたため玄人と思われます」

つまり誰かに雇われたということか。

「しかし、玄人の割には……」

何か思うところがあるのか、ウィルフレッドは言葉を濁した。それに思い当たる節がエリアスにもあったのだろう。頷いた。

「そうですね。少し安易すぎると思われます」

「安易？計画が……ですか？」

話の成り行き上、そういうことだろう。

「少し考えてみれば分かることだと思います。殿下たちが本日、急に予定を変更されたことを知っていたのはどれぐらいの人数だと思いますか？」

言われて思い出す。

確かに、リユーネリアが庭園に行きたいと言ったのは、今朝の事だ。だとすると、襲撃計画を急遽庭園にしたのであれば安易になるのも頷ける。もしくは王宮内よりも庭園ならば、警備が薄いと急遽行動を起こしたと考えるなら納得できる。

どちらにしても、予定変更されたことを知っていた人間が襲ったことになる。それは極々急に決まったことなので、知っている人間は限られているはず。

「……つまり身近にいるということ？」

「そうなります。それがまだ黒幕だとは言えないでしょうけど」

「手引きをしたということですか？」

「可能性はあります」

きっぱりと言い切ったエリアスをじつと見ると、彼は続けた。

「ニーナと私は除外して考えてみて下さい。あと、あなたたちの予

定を知っていた者はどれほどいますか？」

リユーネリアには現在、ニーナを除くと侍女が六人付いている。彼女たちは当然知っていただろう。あとは、庭園についてきた護衛の騎士が六人。当然、指示を出すべき彼らの上官も知っているだろう。

他には……。

考えてみると、本当に限られてくる。

愕然として思わず黙り込んでいると、隣に座るウィルフレッドに手を握られた。

「騎士の方には俺たちがあたる。ネリーとニーナは侍女たちを注意して見ていてくれ」

「はい。——ニーナ」

部屋の隅に控えるようにして立っていた彼女を呼ぶと、すぐに彼女はやってきた。

「話は聞いていたわね？」

「はい」

頷く彼女を見ると、表情は変わらなかったが、わずかだが怒気を感じる。どうやら本来ならリユーネリアを守るべき同僚の中に、裏切り者がいるかもしれないことに対して怒っているようだ。

ウィルフレッドとエリアスを振り返り、告げる。

「おかしい事がありましたら必ずご報告します」

「では、ニーナには護衛を。他の侍女たちもそれぞれ監視をつけよう」

ウィルフレッドの言葉を、ニーナは首を振って止めた。

リユーネリアもその有り難い申し出を拒否する。

「折角ですが、ニーナに護衛は不要です」

不要というか、むしろ邪魔になるだろう。

彼女は自分の身ぐらい、本当に自分で守れる。

ウィルフレッドが眉を顰める。どうやらリユーネリアたちがまた無茶をするのではないのかと疑っているようだ。

先ほど、約束したばかりだというのに。

「大丈夫です。私はできるだけ一人にはなりません」

心配をするウィルフレッドに先手を打って告げる。

「ニーナは優秀な侍女です。ええっと、ヴェルセシユカ風に言うなら……私だけの騎士です」

パルミディアでは女性に騎士という位は与えられなかった。だから、ヴェルセシユカに來た時、ロレインやバレンティナの話を聞いて、ニーナは侍女ではなく騎士だったのだと初めて思い至った。

目の前の二人も、リユーネリアがあえて、騎士、と言ったその言葉の意味するところに気づかないはずはない。

パルミディアの国王が娘に許した彼女だけの騎士。侍女という身分に身を隠し、本来の役割はリユーネリアを守るために剣を持つことを許された者。

「ウィルフレッド様もエリ阿斯も、どうかこのことは内密に。それとニーナが帯剣することをお許してください」

今更ながら告げることになってしまつて申し訳なく思う。一生、言うような事態がなければいいと思つていたのに――。

驚いて言葉を発せられない二人を尻目に、ニーナは一度下がることを告げる。その理由は剣を取つてくるとのことだった。

ウィルフレッドは参ったというように片手で顔を覆つてしまった。エリ阿斯もニーナが去つた扉を見つめている。

それは仕方がないだろう。侍女として完璧に仕事をこなす彼女のあの細い腕で、どれだけのことが出来るのか。さぞ信じられないことだろう。

「……では、侍女の方はお任せします」
「はい」

先に立ち直つたエリ阿斯が、騎士たちへの尋問に向かうことを告げた。まずは騎士たちの裏付けを確認しなければ、護衛を任すこともできない。当然、部屋の前にいるロレインとバレンティナもその中に入っているようだったが、二人の尋問は彼女たちがここに駆け

つけてくる前に済んだらしく、どうやら護衛を任せられると判断したようだった。

だが、ウィルフレッドはニーナが戻ってくるまで側にいてくれるらしい。

今、他の侍女たちは部屋に控えていないので当然二人きりだった。

「摘んだ薔薇を、置いてきてしまいました……」

本来、花を目的として庭園に行ったはずなのに、折角ウィルフレッドが丁寧に刺まで取ってくれた薔薇を置き忘れてしまうとは残念だった。

あの薔薇を飾っていれば、眺めるたびに庭園を散歩した時に感じた幸福感を思い出せたかもしれないのに――。

一瞬にしてかき消えてしまった思いを寂しく思いながらも、リユ―ネリアはそれでも希望を込めて隣に座るウィルフレッドを眺める。

「ウィルフレッド様、あの……」

少し考えてから、口を開く。

自らの考えに頬が上気していくのが分かる。でも――。

「どうした？」

「この件が片付いてからでいいのですが、その……またお願いを聞いて下さいますか？」

「いいよ。でも今度は俺のお願いも聞いて欲しいな」

予想外の返事に、リユ―ネリアは驚きながらも、それもまた悪くないと思う。

「はい。私に出来ることなら」

快く返事をする、ウィルフレッドは柔らかい笑みを返してくれる。今、このような時であっても、この人が側にいるだけでいくらでも心が穏やかになれるのだと思えた。

37・五里霧中（黒とは言えない）

事が起こった時、ニーナを除く六人の侍女の内、二人はリユーネリアの私室や寢室の片付けの為に残っていたことは把握している。うち一人はランス公爵家の後見で侍女として王宮に上がったダーラと、残るもう一人の侍女は王太子の婚約者の実家であるクワエル伯爵家の遠縁にあたるマーシャだ。

残り四人にしても、それぞれの後見は確かなものであり、あえて言うならランス公爵家の後見というだけでダーラが一番あやしい。未だに休戦したことに否定的な議員は多い。水面下で動いている者もいるが、それでも極々少人数で、大きな動きは見せていない。取りあえず動きを監視しておくが、放っておいても問題はないと言われている。

だが、ここで問題となるのはランス侯爵だ。

リユーネリアはウィルフレッドから説明を受けながら、自分がヴェルセシユカに来てから得た情報と矛盾する話に首を傾げた。

公爵は議会での発言権は確かに高いが、ウィルフレッドとリユーネリアの婚姻を推し進めてきた一派の台頭ではなかっただろうか。つまり、戦争反対派のはず。

確認すると、ウィルフレッドは頷き、苦々しく言葉を続けた。

エリアスの言葉を借りると、一度身内に招いた方が油断させることが出来るとのこと。

極端な言い方をすると、嫁いできたパルミディアの王女が不慮の事故で亡くなるうとも、すべてヴェルセシユカ内の問題として片付けることが出来る。実際問題としてパルミディアが黙っているとは思えないが、全く有り得ないという話でもない。

しかもその可能性を考えるなら、憂慮すべきことは他にもある。パルミディアには現在、王位を継承すべき人間は、リユーネリア

の弟、ライオネル一人だ。しかもまだ幼く、パルミディアの王子一人いなくなれば、パルミディアは内側から荒れていく。

そうなることを見越してのことなら、ランス公爵も疑うべき一人だろう、と。

「でも、それは公爵が議会でも発言権が高いから疑われているのでしょうか？」

穿ち過ぎではないかとリユーネリアは思う。

寝室で、寝台の端に腰かけて話をしていたウィルフレッドに問うと、肯定された。

リユーネリアは窓際に置かれたテーブルの側の椅子に腰を下ろしている。

パルミディアを内側から混乱させ、瓦解させようとする考えでいくと、リユーネリアを亡き者にした後、なお且つ、ライオネルを狙うことになる。それはあまりにも危険すぎやしないだろうか。

ならばいつそ、ライオネルだけを狙い、次にパルミディアの王位継承権を保持するのは言わずと知れたリユーネリア自身だ。ヴェルセシユカに嫁いできたとは言え、夫は第二王子。共にパルミディアに行くことになるならば、全てはヴェルセシユカの有利に事が運ぶだろう。

リユーネリアならば、この方法を取る。明らかに益が多いではないか。

そう考えるとやはり、ランス公爵は違うのではないだろうか。

だが百歩譲って今現在、もっとも疑わしい線を考えてみる。

「仮にそうだとしたら、ダーラが情報を流す先はランス公爵家以外、考えられないのよね？」

「そうなるな。彼女はランス公爵家寄りの人間であって血縁ではないから、後見をしてきているランス公爵の顔に泥を塗ることは絶対にできない。もしも、公爵家を裏切ることがあればこの先、仕事に就くことも、嫁ぐことも、公爵の目の届くところで生活することも出来ないだろうからな」

それは血縁であっても、少なからず言えることだ。ということは、クワエル伯爵家の遠縁にあたる侍女のマーシャも情報を流す先がクワエル伯爵家以外は考えられないということか。だが、クワエル伯爵家の令嬢は王太子に嫁ぐことが決まっている。王家に反旗を翻すはずはない。

とすると、やはりダーラが今のところあやしいのか。

しかしランス公爵を疑うには不確定要素が多すぎる。行きつく先は先程の件に戻り、これでは堂々巡りだ。

「ネリー」

そのまま考え込んでいると、ウィルフレッドに不意に呼ばれた。

「はい？」

呼ばれるままに寝台に近づくと、腕を取られ、身体ごと寝台の奥へと押しやられる。

勢いづいていたため一瞬身体が跳ねたが、どこも痛くはなく、そこはいつもリユーネリアが横になる場所だった。

窓に近い方がウィルフレッドの定位置だ。今も寝台に窓際よりで座っている。

その姿勢のまま見上げると、真剣な眼差しが見下ろしてくる。外から覆い隠すように身をかがめると、リユーネリアの耳元で囁く。

「あまり長い間、窓辺にいては駄目だ」

「……はい」

話をするには必要以上な近さに、取りあえず寝台の上で座り直し、適度な距離を取る。

心臓を宥めながら、視線をウィルフレッドから外してさり気なく話を続ける。

「それで、騎士の方々は？」

「こちら黒とも白とも言い難い」

無然として答えたウィルフレッドにリユーネリアもやはり、と思う。

そうなのだ。はっきりと黒とは言えない。

ダーラとマーシャにそれぞれ話を聞いても、二人は朝からリユーネリアの私室の片付けをしていて、リユーネリア付きの侍女以外の者と話をしていないと言うのだ。侍女たちは仲が良いが、だからと言って底い合っているようにも見えなかった。

「しかも騎士の方はランス公爵家ともクワエル伯爵家ともつながりはない」

もともと騎士になろうとする者は貴族の子息でも家督を継げない二男や三男が多い。そんな彼らでも後継ぎとなる貴族の令嬢と縁続きになれば生活は安泰だ。とすれば、議会に連なる貴族に情報を売る者もいなくはないだろう。つまり、騎士に関しては、誰もが疑わしいのだ。

リユーネリアは眉間に皺を寄せて唸る。

「さっぱり分からないわ」

危険を冒してまでリユーネリアを狙ったのだ。少しぐらい何かが見えてきてもいいはずなのに、まったく尻尾がつかめない。

ふと嫌な予感が過る。

もしかすると事は簡単なことではないのかもしれない。

「ネリー。もう休もう」

考えを遮るように、強引ともいえる行動で寝台に横たわらされ、腕の中に閉じ込められた。

「あまり考え込むな。寝不足になるといざいとう時反応が鈍る」

「でも……」

何か見落としていることがあるかもしれない。それは時間が経てば経つほど思い出せなくなる。

それに――。

「眠れないなら、眠れるようにしようか？」

まるで考えを読んだかのように……しかも艶のある声が耳元をかすめ、リユーネリアは瞬間的に首を横に振った。思わず腕を押して身体の間隙間を作る。

「遠慮しなくても」

「別に遠慮はしてません。今はそんな場合じゃ——」

と言いつつ、ウィルフレッドを見上げると、その顔は楽しそうに笑っている。

「……遊びましたね」

ムツとして睨んだが、ウィルフレッドは気も止めず、リユーネリアの背中に回していた腕に力を入れ、その距離を一段と縮める。

ゆるりと背中を撫でられ、思わず身を固くする。

「遊んではないない。俺はこれでもかなり我慢をしている」

何を、と聞くほどリユーネリアも鈍くはない。求められていることも分かっている。

だが、本当はそれではいけないことも理解している。リユーネリアは義務を果たしていない。我儘を言ってウィルフレッドに我慢を強いている。本当なら夫であるウィルフレッドに義務だと言われれば、拒むことは出来ないのに。

黙り込んでしまったリユーネリアの瞼に、いつものように優しい口づけが落とされる。

おやすみと囁かれれば、瞼を閉じるしかない。

温かい腕の中は、どんな不安も溶かしてくれるようだ。ウィルフレッドの胸に、甘えていると思いつつも額をくつつけると、その胸から穏やかな心音が伝わってきて、リユーネリアはほどなく眠りの中に落ちていった。

そして、リユーネリアの予感は的中する——。

38・茫然自失（一秒でも早く）（前書き）

痛々しい描写あり。ご注意ください。

38・茫然自失（一秒でも早く）

午後は通常通り、ウィルフレッドの執務の手伝いをする予定になっていた。

部屋にいるよりも何かをしていた方が気分も紛れるし、警備の面から言っても執務室の方が警護しやすい事と、ウィルフレッドの側にいた方が——リユーネリアを狙っている誰かとしても——襲撃しにくいのでは、ということ考えた上で、特にその行き帰りの道筋さえ気をつければ問題ないだろうということになった。

ロレインとバレンティナ、他二名の騎士、ニーナと二人の侍女に周りを囲まれての移動に大仰過ぎると言ってみたが、ウィルフレッドに言わせれば、それでも現在の状況を考えるなら、王子妃という立場上少ないとのことだった。

だが、あえてこれだけの人数で押さえてもらっている。

何よりも怖気づいていると思われなくなかったし、敵を誘き寄せるにしてもこれ以上の人数だと相手も警戒する。

リユーネリアたちの私室は王宮の東棟の一階にあり、ウィルフレッドの執務室は中央棟の二階にある。

歩くだけでも、かなり移動距離があるが、その上、警戒すべき場所もそれだけ多い。

襲撃される危険性を考えると、自ずと人気の少ない場所よりは多い場所の方を選ぶようになり、道行も遠回りすることになる。

まず、東棟と中央棟を二階部分でつなぐ渡り廊下を通る。東棟は人の出入りが制限された区画であり、王族と一部の貴族にのみが立ち入ることが許されている。

比較的そういう理由で、中央棟とつながった辺りは人数が少ない。そのまま二階を突っ切れば、執務室へは近いのだが、やはり中央棟

の二階も出入りできる人間は限られている。やはり人気が少ないということで、遠回りになるが一度すぐに一階に下り、誰でも利用できる開放された公共の場である廊下を通じてから、中央棟のまさに中央にある二階へと続く階段に向かう。

人気が多いということは、つまり出会う人も多くなるということ、リユーネリアは執務室にたどり着くまでに、数多くの貴族たちに足止めをくうことになる。

その日最初に声をかけてきた者は珍しくも、中央棟に渡ってすぐにある階段を下りようとしている時だった。

執務室には本来、階段を下りることはせず、反対にわずかばかり上がることにより中央棟の二階に着く。だから、東棟とつながっている場所は、中央棟から言えば本来、踊り場といった方がいいだろう。

人気の少ない中央棟二階から呼び止められる声がして、リユーネリアは一瞬身体を強張らせる。
が――。

すでに下りる階段に向かっていていたバレンティナが小さな悲鳴を上げたことに振り返った。

一瞬、何が起こったのか分からなかった。

ロレインや他の騎士たちも瞬間、身構える。

「――バレンティナ！」

最も近くにいたリユーネリアは思わず手を伸ばした。
しかし――。

反対の腕をニーナに引っ張られ、あいた片手は空をつかむ。

目の前でバレンティナの身体が吸い込まれるように階段の下へと向かっていく。まるで自ら飛び込んだように。

その光景は、時間が引き延ばされたかのようにゆっくりと流れていく。

驚きに見開かれた目。何が起こったのか彼女もきつと理解してい

なかったに違いない。束ねられていた茶色の髪が、ゆっくりと宙に浮く。だが、すぐに次に来る衝撃を受け止めるためか、彼女は目を閉じて――。

長いようだが、実際には一瞬の出来事で勢いよく転がり落ちていくバレンティナを誰も止めることは出来なかった。

息をすることも忘れて、階下で止まった彼女を見つめる。

「っ放して――バレンティナ！」

身体ごと押しとどめられ、すぐに周囲を囲まれたリユーネリアは、ニーナを振り返る。視線を向けると、ニーナは腕から手を離してくれたが、ロレインや周囲を囲んだ騎士たちは譲ってくれない。

階段下で倒れているバレンティナはピクリとも動かない。瞼も閉ざされているようで、リユーネリアの悲鳴のような声を聞いても反応がない。

ニーナは階段の最上段手前で、床に膝をついた。

「リユーネリア様、これを」

淡々と静かな声音で言われ、リユーネリアは訝しむ。それどころではないとは思いつつ、彼女が指し示したものに視線を投げ、目を見張った。そして、次の瞬間には血の気が引いた。

指し示された場所には、細い、だが頑丈な紐が張られていた。しかも丁寧なことに、階段に敷かれている絨毯と同じ色の紐だ。

そこに悪意を感じて、リユーネリアは階段下に倒れているバレンティナを見た。

「――退きなさい」

震える声で、だがどこまでも有無を言わせない声で命じる。

周囲の騎士も一瞬躊躇ったが、リユーネリアの表情を見てゆっくりと道を開けた。

「ネリア様……」

青ざめたロレインを見て、きっと自分も同じような顔をしているに違いないと思う。

だが、リユーネリアは覚悟を決めると手すりを握り、張られた紐

を見下ろす。

証拠だから紐を切ることは出来ない。

躊躇いなくドレスを手繰り上げると、出来るだけ紐に当たらないように跨ぐ。そしてすぐに階段下へと向かう。

「バレンティナ！」

再度の呼びかけに、彼女の臉が微かに動いたように見える。

一秒でも早く側に行きたい気持ちを抑え足を止めると、まだ踊り場に留まっている侍女を振り仰ぎ、素早く指示を出す。

「すぐに医師を呼びなさい！」

リユーネリアに声をかけてきた者は、騎士の一人によって拘束されている。だが、彼が声をかけてこなければ、リユーネリアも同じ運命だったのだろうか。

だが今はそんなことを考えている余裕などなかった。

横たわるバレンティナの側に跪き、震える手をそつと彼女の口元にかざす。息があることにホツとする。

力なく無造作に投げ出されている手を取ると、バレンティナは痛みに耐えるように呻き声を上げた。

「っ、バレンティナ！——バレンティナ！」

頭を打っている可能性がある為、むやみに動かせない。

せめて意識だけでも戻ればと、リユーネリアは必死に呼びかけた。人気の少ない場所とはいえ、リユーネリアの声に次第に人が集まり始める。ロレインがすでに側に来ていたが、リユーネリアの警護をするには人が少なすぎる。

「ネリア様、あなたは階上へ」

「馬鹿なことを言わないで」

自分の身代わりとも言えるかたちでバレンティナの身に起こったことに少なからず罪悪感があつた。先ほど、手を取った時にうめき声を上げられたため、リユーネリアはただ側にいることしか出来ない。それが腹立たい。

「どうか、ネリア様」

ロレインが懇願の眼差しを向けてくる。

分かっている。むしろバレンティナが身代わりになったのだから、むやみに命を狙われやすい状態にすることが得策ではないことぐらい。

一度、ぎゅっと目を閉じると、ロレインと場所を代わる。そして、階段を上る。

途中までニーナが迎えに来てくれたが、気持ちは階下に向かう。

何度も立ち止まってしまいうりゅーネリアにニーナが痺れを切らしたのか、腕を引っ張るようにして階段を上り始めた。今は安全が第一だと思つての行動だから、誰もニーナを咎めない。

リゅーネリアも促され、ゆっくりと階段を上る。

だが、その足は重石をつけたように重たかった。

39・意味深長（落ち込んでいるわけにはいかない）

執務室の扉をノックすると、返事も待たずに開け放った。

駆け込んだと言った方がいいかもしれない。

背後でニーナが外を警戒し、そしてゆっくりと閉ざす。

仕事をしていたウィルフッドとエリアスは、パツと顔を上げると驚いたようにこちらを見た。

だが、すぐにウィルフレッドは顔を引き締めると、執務机から離れて側に来てくれた。そんなに酷い顔をしているのだろうか。

リユーネリアは執務室に駆け込んだはいいものの、もうその場から動けなかった。

「バレンティナが……」

つい先程の出来事だ。当然ウィルフレッドには話が伝わっていないだろう。報告をしなければならないと思うものの、言葉が続かない。それほど、精神的に受けた衝撃が大きかった。

差し出された腕に縋りつくように身を寄せる。促されるままソファに腰を下ろすと、肩を抱き寄せられた。

「妃殿下。護衛は彼女だけですか？」

部屋の隅に控えるニーナを見やり、エリアスに尋ねられたが首を横に振ることしか出来ない。

他の者は現場となった場所に留めている。侍女にも医師の手伝いと、バレンティナを休ませるための部屋の準備をお願いした。それからニーナだけを伴って、中央棟の二階を突っ切ってきたのだ。

「何があっただんだ」

宥めるように背中を撫でられ、ウィルフレッドを見上げ、それからエリアスに視線を向ける。

その様子を見越したのだろう。ニーナが側にきて口を開く。
「説明は私から致します」

簡単ではあったがニーナから事情を聞いたエリ阿斯は、すぐに動く。ニーナにも同行を求め、執務室から出ていく時に、衛兵に人数を増やすように指示を出していくのが聞こえた。

「ネリー」

隣に座っていたウィルフレッドにぎゅっと抱きしめられて、その温かい腕の中で次第に落ち着きを取り戻していく。自分の意思に反して小刻みに震える手を握りしめてみるが、それでも震えは治まらない。

しばらく経って、ようやく何があったのかを細かく報告した。まだ混乱が残る頭では順序を追って上手く話せた自信はない。だが全てを説明し終わって、精神的に落ち着きを取り戻してきた頃、ちょうどエリ阿斯とニーナが戻ってきた。

二人ともその顔は冴えない。

ウィルフレッドの腕の中からゆっくりと身を起こし、エリ阿斯に向き直る。ニーナはやはり部屋の入口に控えた。

「バレンティナは？」

最悪の事態が頭に浮かぶ。

「意識がまだ戻ってはおりませんのではっきりとしたことは言えませんが、左腕と、多分肋骨を何本か骨折している様子です。頭を打っているかどうかは意識が戻らないと何とも言えないとのことでした」

状態は予断を許さないらしい。意識が戻るまでは医師が付き添ってくれると言われたが、安心できる状態ではない以上、リユーネリアの胸中は締め付けられるように痛む。

だが、さらにエリ阿斯は続けた。

「バレンティナのことは取りあえず様子を見ましょう。ですが、妃殿下」

エリ阿斯は少し考えながら口を開く。

「現場を見ってきましたが、あれはおかしくありませんか？」

言われて、何がどうおかしかったのかと考える。あまりにも混乱

してしまつて周囲を見渡せる余裕はなかったのだ。

「どうということだ？」

ウィルフレッドが説明を求める。

それにエリ阿斯も現場の状態を、あつたことも含めて説明した。

「東棟から中央棟に渡つてすぐの踊り場から、一階へと下りる階段の最上段の膝下あたりに絨毯と同色の紐が結んでありました。あれでは気づく者の方が少ないでしょう。ですが、妃殿下は運よく階上から呼び止められて立ち止まつた」

ニーナから聞いたのだろうか。確認を込めて聞かれて頷く。

そこで気づいた。

エリ阿斯も一つ頷いて見せ、ウィルフレッドに説明をする。

「普通、殿下や妃殿下を護衛する時、護衛は前と後ろに必ず付きまゐります。それでいくと階段に紐を張ると妃殿下よりも先に衛兵が引っかかるはずなんです」

それでバレンティナが引っかかつてしまったのだ。

「悪戯にしては悪質です」

怒りを込めて言うと、ウィルフレッドはもちろんのことエリ阿斯も同意する。

「そうですね。わざわざ紐の色を絨毯の色に合わせていたことも考えて、妃殿下を狙つたことに違いはないと思います」

断定して言うエリ阿斯に、リユーネリアはぎゅっと手を握りしめる。治まっていた震えが、再び起こりそうだった。

「あの通路を現在使われている方は限られています。まして、一階に下りようとされる方は多分、妃殿下を除いてはいないでしょう」

東棟は王族及び一部の貴族のみが出入りできる場所だ。そういう限られた者が中央棟の一階——それも誰でも自由に出入りできるような場所に用があるはずはない。

「だが、それでも護衛の者がかかるだけだろう」

「はい。ですが運よく妃殿下がかかったら？ かからなくても精神的な痛みを与えることが出来たなら？」

仮定ではあるが、それは当たっていた。

だが、ここで怖がっているは何も変わらないことぐらいリユーネリアは分かっていた。だから震える手を押さえつけてでも、背筋を伸ばす必要があった。

「ネリー……」

ウィルフレッドが苦しげな顔をしているのを見て、無理やり笑みを向ける。

この人は、守ると言ってくれた。それに頼らないことに傷ついて
いることぐらい分かっていた。でも、頼っていないわけではない。
こうして心配してくれる人がいるから頑張れるのだ。

「相手がそう思っているのなら、私が落ち込んでいるわけにはい
かない。日常と変わらない生活が続けるだけよ」

強く言いきる。

「ウィルフレッド様。護衛の者を貸して下さい。バレンティナの様
子を見て参ります」

ソファから立ち上がり一礼する。するとウィルフレッドも立ち上
がった。

「俺も行こう」

「いいえ」

きっぱりと言い切ると、エリアスが言い添える。

「妃殿下。ロレインが執務室の外に控えております。あと何人か
いると思いますので、護衛のことに關してはロレインの手筈に従って
下さい」

「ありがとうございます」

手際の鮮やかさに思わず苦笑する。

笑って気づく。まだ笑えるだけの余裕があることに。

「ウィルフレッド様」

まだ心配そうな顔をしているウィルフレッドに、リユーネリアは
背伸びをしてその頬に口づける。驚いたように目を見張るウィルフ
レッドに笑顔で告げる。

「おかげで落ち着けました。また一頑張りしてきます」
軽く礼をして扉へと向かう。

エリアスに、リユーネリアを呼びとめた人物について後ほど報告してもらおうようお願いして、ニーナを伴い扉を開けた。

40・孤立無援（諦めたわけではないの）

リユーネリアを呼び止めた者は、最終的に疑いを消され無罪放免となった。

身分や役職等を検分し、背後関係を洗い出し、間違いなく挨拶をする為だけに呼び止めたことが実証されたからだ。

しかも、幸か不幸か、その者が呼びとめなければ、リユーネリアもバレンティナと同様に階段から落ちていた可能性を考えると、逆に呼び止めたことに対し感謝するべきなのだろう。

リユーネリアが頭を下げ謝辞を述べると、酷く驚いた様子を見せていた。

しかし、バレンティナの身に起こった出来事で、憂慮すべき変化もあつた。

侍女たちの態度だ。

彼女たちの気持ちも分からなくはない。自分の側にいるだけで、同じような目に合うとも限らないのだ。

今までは明るく陽気におしゃべりをしながら、それでもテキパキと仕事をこなしていた彼女たちが、話をすることもせず、わずかな物音にまでビクつくような反応を見せるその態度に、リユーネリアの方がいたたまれなくなる。

ただ、彼女たちは巻き込まれただけなのに――。

考えた末、侍女たちにはバレンティナの看病を交代で行ってもらうことにした。

本当なら、少しでも早く異変に気付けるよう彼女たちを側に置いておく方がいいのは分かっている。だが、だからと言って彼女たちが傷つくこともリユーネリアの本意ではない。

見えない相手は、リユーネリアに精神的な打撃を与えることが狙いだとエリアスは言っていたが、それ以上の効果もあつたようだ。

周囲から削られていく。

守りを失った目標へと、徐々に近づいていく。

「ニーナ」

何があっても動じないのは彼女しかいなかった。

呼ぶとすぐに来てくれる。

「お茶でございますか？」

「ええ。お願い」

本当は違うのだが、彼女も分かっているのだ。

心に巢食うのは薄ら寒い孤独だ。だが、それはニーナにもどうすることもできない。

バレンティナは意識も取り戻し、酷い怪我をしたものの幸運にも後遺症が残るようなものではなかった。もつしばらく寝台から離れることを禁止されているため、今はこの東棟の一室で休んでもらっている。

騎士といわれているだけあって日頃から身体を鍛えているおかげか、咄嗟に受け身を取ることができたのだろう。あれが侍女であつたらと思うと、彼女たちが怖がってしまうのも確かに頷ける。

リユーネリアでさえ恐ろしく思うのだから。

お茶をいれようとしていたニーナが、浮かない顔で戻ってきた。

「申し訳ありません、リユーネリア様」

「どうしたの？」

伏し目がちなニーナは、茶筒をその手に持っている。

視線をそれに向けると、ニーナは音と立てて蓋を開けた。ふわり

と、お茶の香りが周囲に漂う。

「いつもと香りが少し違うのです」

言われても、微妙な変化はリユーネリアには分からない。首を傾げて彼女の言いたいことを促す。

ニーナは筒を傾け、手のひらに少しだけ茶葉を取ると、少し握るようにして乾燥したそれを細かく砕いた。その匂いを嗅いで何かを

確かめている。

「……調べてみないと断定できませんが、おそらく毒草を乾燥させたものが混ぜられていると思います」

「毒？」

「はい。あまり強い毒ではありませんが、飲み続けるとそのうち体調を崩すことになっていたでしょう」

告げられた内容に、冷たい何かが足元から這い上がってくるような感覚がした。

本当に、追いつめられている。

ここはリユーネリアの私室だ。入室できる者も限られている。まして、最初の襲撃以来、入口の扉の側には常に護衛の騎士が見張り、入室の際は持ち物を入念に検査しているのだ。その警備の目をかいくぐって、茶筒に毒を入れるなど容易いことではない。

最初こそ稚拙な計画だと思って、すぐにでも犯人が見つかるものと思っていたが、気づいてみれば足場さえないということになりかねない。

もしかしたら、もう時間は残されていないのかもしれない。

知らずうちに呼吸が浅くなる。

脳裏に甦るのは、三年前のあの時のこと――。

リユーネリアが後方支援と称して戦場にいた時、実際には軍を陰ながら動かしていた時期があった。あの当時、それがどれほど重大な――多くの兵の命を背負うことになるとも気づかず、言われるがまま、戦局もパルミディアが優勢で、知識を持っていたばかりに、いい気になっていたのかもしれない。一時期は、勝機が見えていたこともあったために。

実際、国境となるセレン・アデリーナ運河を越え、ヴェルセシユカの地にも足をつけた事がある。

だがある時、急にヴェルセシユカの動きが見えなくなったのだ。一体、何が起きているのか分からなかった。大至急、情報を収集

し、状況を把握した時にはすでに遅かった。そのほんのわずかな間に、見事に戦局を引っくり返されたと言った方がいい。

結局、相手の動きをつかんだ時には、再び運河を挟んだ地に軍を引き上げざるを得ない状況になっており、その後リユーネリアは王宮へと連れ戻されることになった。

その時、初めて、どれだけの民が亡くなったのかを知った。引き上げる道筋に重なる遺体。傷ついた人々。乞われるがまま机上で展開していた軍を動かした責任。王宮へと戻される意味。利用された立場。

そして、パルミディアが負けていたかもしれない現実。

「なんだか、あの時みたいね」

あの時も、ニーナは側にいてくれた。だから、いつと断定しなくても彼女には伝わったのだろう。手に持っていた茶筒を弄びながら頷いた。

でも、あの時はまだ逃げ道はあった。それでもまだ戦える余力が残されているほどの味方がいたのだ。

だが、冷静になって考えてみる。

果たして、今回はどうだろう。

逃げ場は用意されていない。

敵の手の中で、確実に足場を崩されていつている。

状況は、あの時よりも格段に悪い。

「撤退はなさらないのですか？」

ニーナは策があると思っっているのだろうか。いつもと変わらない冷静な表情で聞いてくる。

そんな彼女を見上げ、申し訳なく思いながら笑みを向けた。

「ごめんなさい。結局あなたを危険な目にあわせてしまうのね」

あまりにも不甲斐なかった。

だが、気を落とすリユーネリアとは逆に、ニーナは穏やかな笑みを浮かべる。

「謝る必要はございません。ですが最後までリユーネリア様と共にいることをお許しください」

ゆっくりと頭を下げたニーナに、新しい生活の場所を用意できなかったと後悔が残る。それならば、彼女の望むようにするのもいいのかもしれないと頷いた。

「ええ。……でも、諦めたわけではないの」
まだ生きている。

それに守ってくれようとしている人もいるし、守りたい人もいる。諦めてしまったら敵の思うつぼだ。

それも癪に障る。

死んでしまえばパルミディアがどうなってしまうのか、残される弟も心配だった。

ソファから立ち上がると、ニーナを振り返る。

「服の用意とウィルフレッド様に伝言を。少し頭を冷やしてくるわ」
たとえ周囲から見えて不用心だと言われようと、リユーネリアは怯えて部屋に閉じこもっているようなことはしたくなかった。強がりたいと言われようと、胸を張っていたい。

追いつめられている、今だからこそ。

ニーナは一礼すると、言われたことを実行する為に下がっていった。

リユーネリアは窓の外を見て、そこにいるかもしれない敵に精々不敵に見えるように笑って見せた。

41・千思万考（自分が自分である為に）

王宮の隣には小さな森がある。

その人工的な森は貴族たちの散策の場にもなっており、季節によつては狩猟の場にもなるとのこと。

そこを抜けると広い平原が広がり、馬を駆けさせるには絶好の場所があった。

リユーネリアは乗馬服に身を包み、護衛の騎士たちに構わず馬を駆けさせる。最初こそ背後から騎士たちの制止の声が聞こえていたが、それもしばらくすると聞こえなくなった。

別に振り切ったわけではない。事実、ニーナはついて来れたのだから。

単に全力で馬を駆けさせたただけだ。あえて言うなら、付いてこれない騎士たちの腕に問題があるのだろう。

しばらく丘を進み、ようやく馬を止める。

ニーナは少し離れたところで周囲を何気に見回している。彼女を包む空気はピンと張りつめているが、決してリユーネリアの気に障ることはない。

空はどこまでも青く澄み、風は火照った頬に心地よい。

肺が新鮮な空気を求めて自然と早くなっていた呼吸もようやく落ち着いてくる。

これだけ見晴らしが良いと狙われていてもすぐに分かるというもの。まして、動物は敏感だ。リユーネリアが気づくよりも先に気づいてくれるだろう。

はるか遠くに騎士たちの姿が見える。リユーネリアが止まったところでゆつくりと、だがその姿は大きくなる。

最初の襲撃を受けてから、ずっと心の奥底で思っていたことがある。

彼らが仕えているのは、本当は誰なのか。

リユーネリアは婚姻という形ではあるが、ヴェルセシユカ王家へと籍を入れた身だ。つまりヴェルセシユカ王家の人間ではあるのだが、それでもこの身に流れる血はパルミディアのものだ。護衛である騎士はヴェルセシユカ王家に仕えているのであって、王家の血を引かないリユーネリアに仕えているわけではない。

しかし、今護衛をしているのはウィルフレッドの指示あつてのことだ。ザクスリウム領でも考えていたことだが、リユーネリアはウィルフレッドという後ろ盾がなければヴェルセシユカで身を守るなど出来ないのだ。

今、こうして一人でいると、途轍もない不安に襲われそうになる。王女といえども一人の人間だ。生きたいと思つて何が悪い。だが、王族というだけで政略結婚の駒にされ、敵国に身を置き、あまつさえ命を狙われる。どこに「リユーネリア」という人間がいるのだろう。いるのは「パルミディアの王女」だ。決してヴェルセシユカに嫁いできた第二王子の妃以外にはなり得ない。

だから、夫となるウィルフレッドに絶対的な権力と地位を望んだ。自分が自分である為に。決して駒で終わるのではなく、自らの意思で生きていると思いたかった。

でも結局は――。

「独りよがりなのよね……」

呟いた声は風が攫い、誰の耳にも届かない。

一人では何も出来ない。守られることしか出来ない。結局、駒でしかない。

耳は馬の蹄の音を拾ってくる。もうすぐ騎士たちが追いつくのだろう。

彼らにしても、駒でしかない。命令を聞き、それを忠実に守るだけだ。護衛をしているが、もしその反対の指示が出ていたとしたら、彼らは簡単にリユーネリアの命を奪うだろう。そしてそれが仕事だと割り切るのだ。

馬の嘶きに現実に戻され、背後を振り返る。

騎士たちの先頭にいた彼女は、銀色の髪を太陽の光に反射させ、同色の瞳をこちらに向けていた。苛立ちを隠そうともしないロレインに、リユーネリアは今まで考えていたことを打ち消した。

「ネリア様！」

その本気の怒声に、首を竦める。だが、恐ろしさよりも嬉しさが込み上げてくる。

彼女の本気がそこに見えて。

心配が伝わってきて。

「何かあったらどうなさるおつもりですかっ！殿下を再起不能にするつもりですか！？」

「大げさよ。つい気持ちよくて調子に乗ってしまったのよ」

「ネリア様っ」

一層、ロレインの声が高くなる。

心配を嬉しいと思ってしまう。単純にただの駒ではないのだから思える。いや、替えのきかない駒だと思われるのだとしても、彼女の言葉が、自分がウィルフレッドにとってどれほど重要な場所にいるのかを再確認させてくれる。

周囲の騎士たちも、ロレインの台詞に苦笑しながらもあながち嘘ではないと頷いている。

なんて愚かなことを考えていたのだろう。彼らは単純に命令にだけに従っているのではない。彼らも自らの意思を持って考え、動いているというのに。

その思いも込め、謝罪を口にする。

「ごめんなさい。でも、すっきりしたわ。戻りましょう」

ここ最近の出来事で暗く澱んでいた心が、嘘のように晴れ渡っていた。

空に向かって息を吐く。

まだ心配をしてくれる人がいる。完全に一人きりになったわけではないのと言い聞かせ、馬の腹を蹴った。今度はゆっくりと騎士を従えて今来た道を引き返した。

42・本末転倒（離縁して）

リユーネリアは仰向けに寝転んだまま、なぜこんなことになってしまったのだろうと頭の片隅で考えた。

視線を目の前に固定し、取りあえず牽制はしているが。

場所は寝室。時刻は深夜である。

当然、目の前にいるのは夫であるウィルフレッドだ。

なぜこのような事になったのか――。

もとを糺せばすべて己に非があるのだが、あえて言うなら、昼間の遠乗りで護衛である騎士たちを撒いたことだ。

いつもなら寝室に入るのは大抵リユーネリアの方が先だ。ウィルフレッドが仕事で遅くなる時は、先に休むように言われている。それでも目覚めは必ず彼の腕の中なのだが。

しかし今日は違っていた。寝る支度をして寝室への扉を開けるといつものあの優しいな雰囲気などどこに行ってしまったのか、まるでザクスリウム領の領主の館にいた時のウィルフレッドが、まるで待ち構えるかのように――いや、事実待ち構えていたのだろう。開けた扉の先に立っていた。

瞬間的に、これは逃げた方がいいと思った。

思わず一步下がって、扉を閉めようとした。

が、当然力で敵うことなく、扉を閉める直前に押し開けられた。そのまま腕を引っ張られ、背後で無情にも扉の閉まる音が聞こえる。侍女たちも当然、誰も何も言っていない。

ニーナに関しては呼べば来てくれるのだろうが、これぐらいのこととで彼女の手を煩わせるわけにはいかない。

「ウィ、ウィルフレッド様？」

多分、昼間の件だろうと予測はついた。

一応、ロレインには何もなかったのだから報告はしなくてもいい
とっておいたのだが、彼女も相当怒っていたようだ。この調子だと
残念ながら、聞き入れてもらえなかったらしい。しかも、最悪、
口止めたことまで聞き及んでいるのかもしれない。

有無を言わず、寝台に座らされる。

……非常に居心地が悪い。

そつと上目づかいで見上げると、じろりと見下ろされる。

こうして見ると、顔立ちが綺麗な分、かなり迫力がある。それに、
もともと王族だ。人の上に立つ風格もそれなりに備わっている。リ
ューネリアが一瞬怯んだ隙に、お説教が始まってしまった。

「ロレインから聞いた。どうして無茶をするんだ」

「無茶はしてません」

「だったら、心配をかけさせないでくれ」

「ごめんなさい」

直視できなくて、両手を膝の上に揃えて身を縮める。取りあえず、
謝っておいた方がいい。そんな気がする。

「大体、どうして今この時期に遠乗りなんかするんだ」

「……気分が塞いでたから」

正直に言ってみた。それに加えて、運が良ければ敵も出てくるか
もしれないと思っていたことは、黙っておく。だが、リューネリア
の本心を分かっているのかどうか、疑い深い眼差しを向けられる。

「だからって急に決めないでくれ。警備上の問題も――」

「でも、急な方が相手も襲撃の用意ができないかもと……」

不意をつくなら味方も騙すぐらいの方がちよいといいし、実際、
何もなかったのは出来なかったからではないかと思っている。

リューネリアの言い分に、深々と溜息をついたウィルフレッドは
呆れたように再確認してきた。

「命を狙われている自覚はある？」

「それは、十分にあります。茶葉にまで毒草を入れられましたから」
昼間の出来事を思い出し、リューネリアも深々と溜息をついた。

いくら考えても、どうやって私室にまで入り込んだのか、未だに分からない。

だがウィルフレッドの息を飲む音に、思考を遮られる。

「……なんだ、それは？」

驚き、眉を顰める彼に、逆にリユーネリアの方が首を傾げた。もしかしてニーナは報告をしていなかったのだろうか。

「聞いてませんか？」

密かにニーナは気を利かせてくれたのだろうか。自分がこれ以上ウィルフレッドに心配をかけないようにしていること知って。

だが、すでに話してしまったからには言わなければならぬだろう。失敗したなと思いながら件のことを口にした。

すると、ウィルフレッドは目を吊り上げた。

「そこまで狙われているのを知っていて、どうして大人しくしていないんだ！？」

「大人しく震えているのは趣味ではないです」

もしも、大人しくしてすべてが解決するならそうすることも考えただろう。だけど――。

「趣味ではないって……」

あきれた様にウィルフレッドは閉口してしまった。

言いながら、なんて反抗的なのだろうと思う。こんな可愛げのない女なんか放っておけばいいのと思う。

ずっと不思議に思っていたことがある。

今までは、剣で襲われたことも、階段に紐が張ってあったことも、リユーネリアを狙ったことだ。

だが、今日の昼間、茶葉に混ぜられた毒草を見て思ったのだ。

ニーナから毒は強いものではないと言われた。一度や二度、口にしたからと言って身体にすぐに影響が出るようなものではない、と。だとしたら、確かにそのお茶を口にする頻度は自分が一番高くなるだろう。しかし、いつも側にいるウィルフレッドが口にする機会も次いで高い。つまり、敵はリユーネリアを守ろうとしているウィル

フレッドも邪魔だと思い始めているのかもしれない。

——それだけは駄目だ。

一瞬で心は決まる。

だとしたら、取るべき道は一つしかない。

自らが離れるしかない。守られている場所から出るのは怖い。地位も権力もない。まして敵地にただの小娘一人でどうやって身を守ればいいのか分からない。

だが、駄目だった。自分のせいでウィルフレッドが敵の手に落ちてしまうのは考えただけで目の前が暗くなる。震えがくる。味方のいない場所に一人でいるよりも、なお恐ろしかった。

スツと息を吸うと、目の前の夫を見上げる。

「お話は終わりですか？」

背筋を伸ばしてウィルフレッドを見上げた。そして告げる。

「私もお話があります」

胡乱な眼差しを向けられ、リユーネリアはそれでも湖のような瞳をひたりと見つめる。

「しばらく別室で休ませていただきます」

「寝室を別にすると？」

確認を取るように聞かれ、素直に頷く。

「はい」

寝室だけではない。近いうちに私室も移動させてもらわなければ。ウィルフレッドから離れなければ。そう思うと心は逸^はる。

「必要ない」

あつさりと言い捨てられ、リユーネリアは食らいつく。引くわけにはいかないのだ。

「必要はあります」

「なぜ？」

「では聞きますが、どうして寝室を同じにする必要がありますか？」
「それは夫婦だから当然だろう」

面喰らったように告げられ、リユーネリアは笑った。心の中に苦

いものが広がる。傷つけると分かっているながら、口にすべきでない言葉を勢いに任せて口にした。

「私達は書面上では夫婦ですが、実際の夫婦ではありません」

本来、必要ないでしょうと続ける。

感情と理性を遮断して、頭だけで考える。ウィルフレッドを守ることを考えれば必要なことなのだ。

もともと協力関係だったのだ。人前で仲のいいフリをすればいいだけで、なにも寝室まで同じにする必要は本来ないのだ。

それだけを告げ、寝台から立ち上がった。

そして、言い忘れていたことを添える。

「明日の朝から、朝食も別々にしましょう」

二人で食事をするなどもつての外だ。同じ器から取り分けられるのだから、毒を入れられたらそれこそウィルフレッドの命に関わることだ。

部屋に戻ったら二ーナに早速別室の準備をしてもらおうと、考えながら寝室の扉を開けようとした時だった。

取っ手に伸ばした手が空をつかむ。

何が起こったのか一瞬分からなかった。

身体が宙に浮いたと思ったら、目の前にウィルフレッドの整った顔が見え、彼に抱えられていることに気づく。その瞳はすごく真剣で、怒っているようにも見える。

いや、事実怒っているのだろう。

何かを言う間も与えられず、寝台の上にやや乱暴に下ろされ、驚いて見上げるウィルフレッドに肩を押さえつけられ起き上がれなくなる。そのことに、心臓が一つ大きく脈打った。

「ウィルフレッド様、何をっ」

漸く非難を口にし、肩を押さえる腕を除けようと試みたが、突如其激しく唇を塞がれ、リユーネリアは悲鳴を飲み込んだ。

そこには思いやりも何もなかった。

ただ、想いだけをぶつけられ、リユーネリアは困惑する。

わずかな隙をついて抵抗するが、ウィルフレッドの怒りは消えない。そればかりか余計に油を注いだとリユーネリアは気づきもしない。

「本当の夫婦なら、寝室を別にする必要はないんだろう？」

言われてリユーネリアは眉を顰めた。

上げ足を取られる形でこの状態に持ち込まれるとは。しかも、ウィルフレッドの為を思って寝室を別にと言ったのに、これでは言い含められてしまう。

「駄目よ」

震えそうになる声をかろうじて強く出した。意思を貫く強さが伝わるように。

これ以上はウィルフレッドも自分自身も傷ついてしまう。想っている自覚も想われている自覚もある。だから無理矢理奪ったことをウィルフレッドは後悔するだろう。そしてリユーネリアも一方的な行為は望んでいない。

「駄目……」

牽制の意味を込めて見つめ、ゆっくりとウィルフレッドの頬に手を伸ばす。

これ以上、衝動的な行動をしないよう、視線だけで押し留める。

「どうして——」

苦しげに吐き出すウィルフレッドに、リユーネリアも泣きたくなる。

「あなたを死なせたくないの」

頬に伸ばした手で、そろりとその頬を撫でる。これ以上はないという愛しさを込めて。分かって欲しいという願いも込めて。

「私の側にいると、いずれあなたの命も脅かされてしまうかもしれないの」

「だからと言って、一人になってどうするっていうんだ？」

問われ、ゆるく首を横に振る。

「出来る限り、やれることはやってみるつもりよ」

そうだったら、なりふりなどかまっているつもりはない。どんなに醜かるうとも足掻いて、敵の尻尾をつかんで、目の前に引きずり出してやる。せめて、相打ちぐらいにでも持ち込めれば上等だろう。「でもそれは」

「——そうね。先は見えているわ」

多分、もう時間は無い。それさえ出来るだけの時間が本当にあるのか分らない。

「だったら駄目だ」

すぐに拒絶の言葉を口に乗せたウィルフレッドに、ためらい、胸が切り裂かれるような痛みを感じながら一つだけ、と告げる。

「本当は、一つだけ方法があるの」

おそらく、一番いい方法なのだろう。最後に残された唯一の逃^はげ^い道^{みち}。

だがリユーネリアはこの方法だけ取りなくなかった。たとえばこんなことがあっても、口にしたくなかったし、ウィルフレッドも同じ気持ちであればいいと思う。

だから、次の言葉がなかなか出なかった。

「どんな方法なんだ？」

驚いたように問われ、困ってしまった。彼は、思いつかなかったのだ。エリアスあたりは考えていたかもしれないが、ウィルフレッドには言えなかったのだろう。

苦笑して、一息に告げる。

「離縁して、私がパルミディアに帰るのよ」

事実上、逃げるのだ。

逃げたくはない。だが、ウィルフレッドも狙われるのであれば問題外だ。そのような矜持など捨ててしまえる。

それに死にたくなければ逃げるしかない。それによって再び開戦される可能性もある。もしかしたら二大国であるルーヴェルフェルトとゴードヴェルクの顔に泥を塗ったとして、戦争の規模自体が大きくなるかもしれない。

懸念をすべてウィルフレッドに伝えた。

それほどのことと、たかがヴェルセシュカの第二王子の王妃ごときの命の一つを比べることが出来るだろうか。

「ネリー……。離縁は出来ない」

しばらくしてウィルフレッドは応えた。

リユーネリアの肩に顔を埋めて何かに耐えるようにしている。

「もちろんよ」

その金色の髪を梳きながら、安堵する。

戦争で失われるかもしれない多くの命と、リユーネリアの命一つなら、断然後者だ。だから、自分はヴェルセシュカに残る。そしてウィルフレッドの命も守る。それだけだった。

しかし、ウィルフレッドは首を横に振る。その柔らかい髪が頬を撫で、くすぐりたい。

「違う。俺には何よりもネリーが大切だ。だから離縁などもつての他だ。離れるなんて我慢ならない」

その気持ちだけで十分だった。

「でも――」

「俺は守ると言った」

強く言われ、リユーネリは口を噤む。

その真剣な眼差しを見つめる。

「絶対に守るから……。側にいてくれ」

縋りつくように乞われ、血を吐くような悲痛の中に延ばされた手を果たして振り払えるだろうか。

リユーネリアはウィルフレッドの頭を胸に抱きしめると頷いた。理由が正しいとはどうしても思えなかったが、答えが同じなら結果も同じだ。

「守って……」

呟いた言葉は、願いだっただのだろうか。祈りだっただのだろうか。それはリユーネリアにも分からなかった。

43・急転直下（その指示を出したのは……）

「申し訳ありませんでしたわ、ネリア様」

熱烈な抱擁を受け、いつもと変わらない態度で接してくれるコーデリアに心のどこかでほっとしていた。

ミレス公爵夫人であるコーデリアは、リユーネリアが最初に受けた襲撃の時、公爵家が後見についているダーラに情報を漏洩された疑いがかかった為に、王宮へ来ることを自粛していた。

「本当はずっとネリア様とおしゃべりをしたいと思ってましたのよ。ずいぶんとご無沙汰でしたもの」

嫣然と笑ったコーデリアはやはりどこまでも美しい。

言われて、久しく彼女と会っていなかったことを思いだす。

ザクスリウム領への査察から帰ってきてほどなく、リユーネリアが襲撃されるという事件が起こってしまった為に、今度は彼女の方が王宮から遠のかなくてはならなくなったのだ。

しかし、リユーネリアの気分が塞いでいることを気にしたウィルフレッドが、わざわざ呼んでくれたのだ。

黄色のドレスを着たコーデリアは、その見た目の華やかさからも周囲の雰囲気明るく、華やかにする。ただでさえ彼女の全身からは生命力が溢れていて、その場にいるだけでも元気を分け与えられた気になる。

「わたくしも、お会いしたかったですわ」

ダーラに疑いがかけられても、リユーネリアには彼女が何かをするようには、どうしても思えなかったのだ。

コーデリアにしても、今までの付き合いを思えば期間こそ短くはあるが、彼女はいつも自分の気持ちに正直で、真っ向から勝負を挑んでくる。その裏表のない性格は、この王宮においてとても貴重なものだろう。

それに、ロレインが彼女に寄せる信頼を信用もしている。

「あら、ネリア様。私もいますのよ？」

コーデリアの背後から、ヴァーノン子爵夫人も現れる。

彼女もまた美しい人で、燃えるような色の艶やかな赤毛を結い上げ、その情熱的な色合いからは想像できないほど優しさを湛えた茶色の瞳をリユーネリアに向けてくる。彼女もまた華やかな人だ。

「ビアンカ様。ザクスリウム領の件では本当にお世話になりましたわ。お礼が遅くなってしまつてごめんなさい」

「そのようなこと気になさらないで。ネリア様のお役に立てたのですもの。光栄なことです」

二人にソファを勧め、ニーナにお茶を入れてもらう。

茶葉は新たに用意され、お菓子はビアンカが持つて来たものだ。

今、市場に出回っている人気のあるお菓子らしい。宮廷の職人が作る凝ったお菓子も美味しいが、こういう菓子も物珍しくて、たまにビアンカが持つてくるものをリユーネリアもコーデリアも楽しみにしている。

「今日はロレイン様はいらっしゃらないの？」

ビアンカが扉を見やって言う。今通つてきた扉の外に、現在、彼女はいない。

「ええ。声をかけたのですが、手が空き次第来てくれるようです」
通常なら扉の外に控えているが、今は騎士団長のジェレマイアに何かを頼まれて執務室に行っている。

そう返事をする、コーデリアもビアンカも少しだけ不満気に頬を膨らました。

「ロレイン様ばかりお側に置いてずるいですわ」

「そうですね。わたくしたちも騎士になれば良かったと話しておりますのよ」

どうやらロレインがいないことに対しての不満ではないらしい。おかしな方向に嫉妬している二人にリユーネリアは微笑む。

「ですけど、ロレインは仕事重視でわたくしは叱られてばかりいる

のですよ。お二人のように他愛もないおしゃべりをしてはくれないの」

そう不満を漏らすと、コーデリアは苦笑し、ビアンカは目を見張った。

「ロレインらしいわ」

「ネリア様をお叱りになるの？」

コーデリアはロレインと幼少の頃からの付き合いだと聞いたことがある。だからなのか、彼女の性格をよく理解している。一方、ビアンカは妃殿下を叱る騎士がいることに純粋に驚いているようだった。

「それはそうと、ネリア様。少しお痩せになったのではありませんか？」

コーデリアの視線がリユーネリアのお腹あたりに向けられる。

リユーネリアは慌てて否定した。

確かに最近、ドレスの腰回りが緩くなっている。顔はそんなに変わらないと思っていたが、もしかしたらやつれて見えるのかもしれない。

食事にも毒が入っているかもしれないという心配もあって、最近ではあまり食が進まないものの原因だろう。

気をつけなければ、と内思いながらも曖昧に微笑する。

「あのようなことがあっては心労も相当なものでしょう？まったく殿下は何をされているのかしら」

コーデリアはプリプリと怒りながら、ニーナの入れた紅茶に口をつける。

「ですが今回のこと。議会は動いていないようではありませんか？」
ビアンカが声を潜めてコーデリアに確認する。

彼女は横目でチラリとビアンカを見てから、一つ溜息を落とした。その態度にリユーネリアは確信する。彼女が何かを知っていることを。そして、それがとても嫌な予感を誘ってくる。

コーデリアは物憂げに、だがしっかりとこちらを見据えると口を

開いた。

「ええ。実はそのこともお伝えしたかったのです」

カップを受け皿に戻した彼女は、視線を下げ、ゆるく首を横に振る。

「今回の襲撃やその他のことに、議会が関わっている可能性は限りなく低いと思われるのです」

彼女の青い瞳が暗く沈んでいる。先を続けることが苦痛だともいう様に、その口調も重い。

視線で先を促すと、コーディリアはビアンカに視線を向けて一つ頷く。ビアンカも思い当たる節があるようで、そつと俯いた。

「議会には動かないようにと、どこからか指示が出ているようなのです」

「どこからか？」

おうむ返しに確認すると、二人は頷く。

「ええ。もしかしたら議員の中に、その指示に反して動いている者もいるかもしれませんが。しかし、多くの議員には動くなという指示と、それに対する口止めがなされ、それに従っていると思われるのです」

ということは、議員は王子妃が命を狙われていることを知っていて黙って見ているだけなのか。便乗して襲撃してこないだけ、まだましとも言えるが、それはそれで気分は悪い。

やはり、ヴェルセシユカの国の半分を担う議会には受け入れてもらえていないのか。分かり切っていた事なのに、ずしりと胸の奥に鈍い痛みを感じる。

「ですが、どこからそのような指示が出ているのでしょうか」

ビアンカも気味が悪いとでも言う様に呟く。彼女の情報網には引っかかっていないらしい。

一方、コーディリアは何か思い当たる節があるのか、一度口を噤んだ。

「コーディ様？」

「コーデリア様はご存知なの？」

その問いに、彼女は視線を逸らせ、深く息を吐き出した。その中に、鬱々としたものが見えるようで、リユーネリアの嫌な予感が増していく。

えてしてそういう予感とは当たるもので、コーデリアの覚悟を決めたような視線を受けると、思わず息を飲み込んだ。

聞く前から、なぜか分かってしまった。

「もしかして——その指示を出したのは……」

出した声がわずかに震える。

コーデリアはゆっくりと頷いた。

「はい。ご推察のとおり——おそらく、王族の誰かだと思われます」

44・最終結論（どんなことがあっても味方です）

告げられた言葉に、衝撃を受けずにはいられなかった。

再び戦争をする為に、リユースネリアを邪魔に思っていたのは議会ではなかったのか。王族は戦争を反対していて、自分をその駒として受け入れたのではなかったのか。

音を立てて血の気の失せる感覚を味わう。一瞬にして、目の前が暗くなる。

ふと気づいた時はニーナが傍らにいて、ソファに横たえられていた。

視線を動かすと、コーデリアとピアンカも側で心配そうにこちらを見ていた。

口早に大丈夫と呟いて、ニーナの手を借りて座りなおす。

「申し訳ございませんでしたわ、ネリア様」

落ち込んだようにコーデリアは俯いた。

くらくらす頭に片手を添え、コーデリアの行動を押し留めた。彼女が悪いのではない。むしろ、そのような情報を教えてくれたことに感謝こそすれ、謝罪を受ける謂れはない。

それよりも聞きたいことがある。

「その……誰かはご存知ですか？」

本音としたら聞きたくはない。

だが、逃げるわけにはいかない。目を逸らすわけにはいかない。王族の誰かによって、自分が今後取るべき道が決定するのだから。しかし、コーデリアはわずかに青ざめたまま首を横に振る。

紅を刷いた唇は閉ざされ、言葉を紡ごうとしない。

「わたくしは大丈夫です。知っていることを教えて下さい」

身を乗り出してコーデリアを見つめたが、彼女はゆるく首を振るばかり。

「本当に知らないのです」

いつもはまっすぐに見つめてくるその青い瞳は逸らされ、揺れているような気がした。

もしかしたら彼女には予想がついているのかもしれない。だが、きつと再度尋ねたところで彼女のその頑なな態度から、きつと答えは得られないだろうと判断する。

これだけでも収穫はあったのだ。

今の話から、その情報をこの場で話すだけでも危険が伴うかもしれないのに、これ以上迷惑をかけるわけにはいかない。

「報せてくれたこと——感謝します」

追求をしないと告げるかわりに、謝辞を述べる。

「ネリア様。どうかお気をしっかりと持って下さい」

「私たちはどんなことがあってもネリア様の味方ですから」
痛ましげな表情を浮かべる二人に、どうにか笑顔を向ける。

彼女たちの労わりは、ほんの一瞬でも慰められる。実際に、リユーネリアを狙う者がヴェルセシュカという国となった場合、その言葉は彼女たちには重荷にしかないだろう。だが、嘘を言ってもりではなかったことぐらいリユーネリアにも分かる。

「もう、戦争などこりごりですのに……」

ピアノ力が吐き捨てるように言う。

どうやら相当嫌な思い出があるようだ。

彼女は豪商の娘で、ヴァーノン子爵に見初められて興入れた身だ。ならば年若いピアノ力は、結婚する前は商家にいたわけで、戦時中には国に供給を強いられていたと考えられる。そこで嫌な思いをしたと考えるもおかしくはない。

「私たちにはやはり戦争を止めることなど出来ないのかしら」

コーデリアも力不足を嘆くように呟く。

彼女の一人娘は、パルミディアへの人質候補だ。他人事ではないのだ。

それに、子供を持つ親なら誰だって戦争などという悲惨な状況を

子供に見せたくはないだろう。勝っても負けても、犠牲はどこかに潜んで、影で悲しんでいる人が必ずいるのだから。

それを思うと胸の奥が疼く。他人事ではないのだ。

「戦争など無くなってしまう方がいいのに……」

つくづくと呟くと、ビアンカは頷いて、申し訳ございませんと一つ謝ってから続けた。

「実は私、四年前に、パルミディアが国境を越えた時、あの運河沿いの街、アクセリナにいたのです」

パルミディアにしてみれば完全な敗北、ヴェルセシユカにしてみれば完全な勝利を治めた戦いのことだ。

まだ嫁いでもおらず、家業を手伝っていたビアンカは食糧をヴェルセシユカの軍へと運んで来ていたらしい。

そこで見た悲惨な光景を今でも忘れないという。

それはまたリユーネリアにも言えたことだった。後方支援とは言え、一年以上戦場にいたのだ。幾度となくそういう光景を目にしてきて、なお且つパルミディアの勝利の為に自らの知識をもって、ヴェルセシユカの軍を迎え撃っていたのだ。

それが王族の責任だと思つて。

「パルミディアの軍勢が押し寄せてきた時、もう駄目だと思ひましたわ」

その時の恐怖を思い出したのか、ビアンカはふるりと身体を震わせた。

今なら思う。

王族であつたからこそ戦争を止めることが出来たのではないだろうか。誰かの思惑であれ、それに乗せられて自ら軍配を振ってしまった自分に責任がないとは言ひ切れない。あの時、乗せられず、どうして止めることに頭が回らなかったのだろうか。

「ですが、王太子殿下のおかげで今があるのですけど」

ビアンカは、目を伏せてふと呟いた。

だが、リユーネリアはビアンカの言葉に首を傾げる。

「王太子殿下？」

「ええ。パルミディア軍を追い返したのは王太子殿下の采配です」
コーディネリアがリユーネリアの疑問を察して、答えてくれた。

「ですが、王太子殿下は……」

「ええ。殿下はお身体の丈夫な方ではありませんわ。戦場におられた時も当初、状況を見て実際に指揮を取っていた者に助言される程度で……ですが、あの時だけは無理を押して直接指揮を取られたと聞いております」

だから、議会も王太子殿下には一目置いているところがあるので
す、と続けたコーディネリアの言葉が耳を素通りする。

リユーネリアは目を見張った。

あの時——アクセリナの戦いの時、ヴェルセシユカの軍を指揮している者を探したが、知ることは出来なかった。というよりも、探る間も与えられず追い返されたのだが。

その後、どんなに探ってもあの場で指揮をとっていた者を知ることとは出来なかった。

まさか、こんな時に知ることになるとは。

「そう……」

頭の中が目まぐるしく計算していく。

そして全てが一つに収束する。

「ネリア様？」

急に黙り込んだリユーネリアを訝しむように、二人の女性にジッと見つめられる。

「いえ、大丈夫です」

そう言っ、今思ったことを胸の奥にしまう。

それ以降は、その話を完全に打ち切り、しばらくは他愛のない会話をしてお茶会をお開きにした。

二人を見送った後、ニーナを呼ぶ。

「ニーナ。少し確認して来て欲しいことがあるの」
声をかけると、ニーナは一礼した。

二つの事を告げると、彼女は身を翻して部屋から出ていく。

彼女が戻ってくるまでの間、静寂が耳に痛かった。息苦しくなるほどの沈黙が部屋を満たす。

だが、扉が開いてニーナが姿を現した時、彼女の顔を見て苦笑した。するしかなかった。

彼女からの報告を受け、結論から言うと、自分の考えに間違いはなかった。

「では今回の首謀者のところに連絡を——そうね、お見舞いに伺いたいと伝えて」

そう告げたりユーネリアに、ニーナはゆっくりと頷いた。

45・内部事情（一人しかいないでしょう）（前書き）

ジェレマイア視点です。

45・内部事情（一人しかいないでしょう）

バレンティナが負傷した後、ウィルフレッドからリユーネリアに信頼されている人間を、と言われ、ジェレマイアは自らが護衛にくくことを即断した。

周囲からは反対されたが———というか、若い騎士たちからは職権乱用だと散々罵られ、副団長からも余計な仕事を押しつけないで下さいと睨まれたが———むしろ騎士たちが、王子妃に見惚れてまともに仕事が出来ないようでは話にならないし、王子の嫉妬も馬鹿にならない。

最近、あのザクスリウム領の一件を片付けた為か、ウィルフレッドの評判も上がってきていた。仕事量も増えてきていると聞く。その為、夜遅くまで執務室に籠っていると報告が上がってくる程だ。だからなのか、必然的にジェレマイアが護衛にあたるリユーネリアと過ごす時間が、ウィルフレッドが彼女と過ごす時間よりも長いことに気づいたのかどうか、王子の視線がたまに痛い。

朝に一通り、王子妃の当日の予定に関わる警備上の打ち合わせをすることになっていたが、午後の予定に、王子の元恋人たちとのお茶会が入っていると聞いた時には、思わず渋面をその元恋人の一人であるロレインに向けてしまった。

彼女の冷やかかな一瞥と共に、開きかけた口は凍りついてしまったが。

しかしながら、午後になってロレインは、王子やエリ阿斯に用事ができ、一旦護衛から外れることとなった。

その間に、ランス公爵夫人コーデリアと、ヴァーノン子爵夫人ピアンカの、揃っての訪問を受けた。

二人のその艶やかさと華やかさは、ヴェルセシュカの貴族内でも

有名だ。噂では、ここにロレインも入るといのだが、騎士服姿しか想像できない為、艶やか、とか、華やか、とかいう言葉が彼女に合うのか甚だ疑問なのだが。

この場にロレインがいない為、彼女たちの所持品検査がどうしても甘くなってしまうのは仕方がないだろう。

コーデリアとは何度が対面したことがあったが、いつも思うことはその整った顔に嫣然とした笑みを浮かべながらも、昂然たる態度を崩さない彼女にどこか男性的な潔さを感じるのだ。その性格があつてこそその彼女なのだが、もしもそれがなければ鼻持ちならない態度に苦手意識の方が先に立つただろうことが容易に想像できた。

持ち物に特に不審な点は見当たらなかったので二人を通したが、王子の元恋人と本妻とのお茶会に恐怖を感じたことは言うまでもない。

どれぐらいの時間が経ったのか。

お茶会は無事に終了したのか扉の内側から声が近づいて来た。二人が部屋から出てきたが、前もつてリユーネリアには迂闊に廊下に出ないよう忠告をしておいたので、姿を現すことがなく安堵する。しかし――。

目の前の二人の美女の表情はそれぞれ別の意味で物憂げだった。ピアノ力は心配を隠せない様子で、私室の扉を振り返っていたが、コーデリアに関しては何を考えているのか。その眼差しは廊下に敷かれた絨毯に向けたまま、険しさを孕んでいる。

「何か気にかかることでもあったのですか？」

王子妃に対しての気がかりならば、是非とも耳に入れておかなければならない。どんな小さなことからでも、思いもがけない警備上のミスは起こりかねないのだ。

「――いいえ。何でもございませんわ」

スツと顎を持ち上げ、こちらに向ける視線はまっすぐに、逸らさ

れることはない。口調は冷やかだが、決して逃げようとしな——誤魔化そうとしない意志がそこに見えて、ロレインといいコーデリアといい、女にしておくのは惜しい存在だと思わずにはいられない。

近頃の若い騎士の中には、彼女たちのように強い精神をもつ者は数えるほどしかない。他人の意見に流される者も多く、疑いたくはなかったが、最初の襲撃の件にしても、もしかしたら、という思いが全くなかったかという否定できない。

コーデリアの態度に感心しながらも、逆にそれが返って、彼女が何かを隠していることを匂わせた。

ふと横を見ると、未だ心配げな様子を隠さないビアンカが、実は、と呟いた。

「先程、御気分を悪くなさったようで、少しの間意識を失くされてましたの」

その内容に、眉を顰める。

確かにここ数日というものの、リユーネリアの身にまとう雰囲気は見ていて痛々しいほどだった。それは顔色が悪いとか、急に痩せたとか、そういう見た目的な変化ではない。

おそらく、ザクスリウム領での査察に赴いた時の彼女を、ジェレミアは知っているからこそ、そう感じてしまうのだろう。

王子に馬での勝負を挑むほど、気丈で、生き生きとしていたあの王子妃が、だ。

だが、倒れたとなると、看過できない。すでにそれほどまでに精神が追いつめられていることになる。

「一体、なんでそんなことになったんだ？」
思わず敬語も忘れて問い詰める。

ビアンカは困ったようにコーデリアを見た。自らの迂闊な発言に気づいたのか、口元に手を当てている。見るからに彼女も動揺しているようだ。

一方、コーデリアは一つ溜息を吐くと、まるで仕方がないという

ように……だが挑むような眼差しを向けてきた。
「少し、お時間はよろしいかしら。騎士団長様」
その眼差しは有無を言わせないものだった。

自分の代わりに警備にあたる騎士を呼び寄せ、喜び勇むその姿に一抹の不安を覚えながら、コーデリアについて王宮の客室へと案内された。

王宮を我が家のように使えるのも彼女が元王族で、ランス公爵夫人と言う立場だからだ。

日頃、客として使うことのない部屋に、どうにも居心地が悪く、そわそわと落ち着かなくなるのは大目に見て欲しい。

ビアンカはというと、コーデリアに促されるように王宮を後にした。彼女も何かを察しているのだろう。素直に頷くと、去り際に一言だけ、あれでよろしかったのですかと、コーデリアに聞いていた。あれ、とは何だったのか。

ソファに落ち着くと、コーデリアは侍女にお茶を出させてから人払いをした。

そして単刀直入に、切り込むような眼差しを向けてきた。

「ネリア様を狙っている人物について、貴方たちはどこまで分かっているのです？」

明らかに非難めいた発言に、ジェレマイアはいい気はしなかったが、その件に関しては自分と直接情報を集めているエリアスの不手際であることに違いなく、口調は重くなる。

しかも、彼女はランス公爵夫人だ。

黒に近い人物の一人でもあるのだ。

「いや、これと言った収獲は——」

「わたくしを疑うのはお門違いですわ。貴方もエーメリー家の者ならば、あの話は知っていらっしやるでしょう」

彼女の言っていることに思い当たり、思わず口を噤む。

確かに知っている。議会が王子妃を狙った件について、傍観者でしかないことを。

だが、この情報はつい先刻まで不確かなものだったのだ。裏付けをとり、ロレインが今現在ウィルフレッドのところに行っているのも、この件についての報告なのだ。

つまり、そこから考えられることは一つしかない。

「首謀者が王族の誰かだということか」

「……まさか、まだわたくしを疑ってはいらっしやらないでしょうね？」

元王族の彼女は美しく整えられた眉をはね上げる。

ジェレマイアは慌てて首を横に振った。美人を怒らすとおっかないと肝を冷やす。

「あまり考えたくはない事態だな……」

髪をかき混ぜながら呟く。

「呑気なことをおっしゃらないで。このようなことをする人が誰かを考えてみなさい」

思いがけない台詞に、さすがにジェレマイアもあからさまな非難を向ける。

「おいおい……。王族のことに騎士団長ごときが口を出せる問題じゃないだろう」

事実、面白くはない。ここまできて蚊帳の外に放り出されることになりかねないのだ。少なくとも、騎士団は王族の命令で動いているのだ。命じられたら背くことは出来ない。

「だったら、ネリア様がどうなるうとあなたは責任がないとおっしゃるのね？」

「いや、そうは言って——」

「でしたら、このようなことが出来る人が、一人しかいないことくらい早く気づきなさい！」

ぴしゃりと言い放ち、コーデリアはすくつと立ち上がった。

「すでにネリア様はお気づきのはずですわ。貴方がたがどのような

対処を取るのか。あとはウィルフレッド殿下にお任せするわ。ついでに——わたくしをがっかりさせないと殿下には伝えておいて「上から冷ややかな眼差しを受け、ジェレマイアは思わず息を止めた。」

彼女の瞳にあるのは、覚悟だ。この先何が起こるのか、彼女は予測がついている。

しかし、リユーネリアが気づいていることはあり得ない。まだ確実性に欠ける為、エリアスとも話し合って耳に入れることはまだ先にしようと決めていたのだ。

いや——。

先程ビアンカが言っていた、あれ、のことなのか？

問おうとして、扉の閉まる音にハッとする。

顔を上げたそこには、すでにコーデリアの姿はなかった。

46・直接対決（時間をあげよう）

報せるべきなのか、報せないでおくべきなのか。

リユーネリアは王太子殿下の私室へと向かいながら、なおも悩んでいた。

夕刻、王太子殿下に面会を申し込んだ返事が来た。もしかしたら拒否されるかもしれないと思っていたが、思いの外すんなりと許可が下り、今、北棟へと続く回廊を歩いている。

国王及び王太子——つまり王族の生活は基本的に、北棟で近衛兵による厳重な警備をしかれた上に成り立っている。しかも王太子は病弱ときている。面会するとしても本人の許可はおるか、医師の許可まで必要になってしまふのだ。だがつい先程、その両方の許可が下りたのだ。

今から会すべき理由は、単なる見舞いだ。

強い理由を思いつかなかったということもある。が、多分、どのような理由にしろ、四年前のアクセリナ戦を指揮していたのが王太子だというのは、どのような誤魔化しも嘘だと見抜くはずだった。しかも、リユーネリアは本音を問い質しに行くのだ。命を狙いましたか、と。その上、確実な証拠は無いのだ。不敬と言われずとも、発狂したと思われても仕方がないことをしに行くのだ。

もう、ここまで追いつめられたのだ。

殺されるよりも発狂したと思われた方がいい。

前後に護衛の騎士を従え、侍女はニーナのみを連れてきた。

北棟に入る前に、護衛の騎士たちとは別れる。北棟専属の近衛兵による護衛に代わるのだ。ニーナはそのまま付き従う。

やはり考えた末、戻る護衛の騎士の一人に伝言を頼む。リユーネリアに声をかけられ、彼は頬を上気させ敬礼した。

伝言先は夫であるウィルフレッド。

ただ、王太子と面会する旨のみを伝えてもらうことにした。詳しいことは、伝言など出来るような内容ではない。

北棟は静かだった。

夕暮れ時と言うこともあり、斜陽が長く影を引く。

いくつもの角を曲がり、重厚な扉の前にたどり着く。その扉の前にはまた護衛が立っており、リユーネリアに敬礼した。

扉をくぐると、取次の間で少しの間待たされる。ここから先は、ニーナは入ることは出来ない。

通された先の部屋では、ソファでくつろいでいる王太子――カールがいた。

夕暮れの日差しが部屋に入り込み、ウィルフレッドによく似た、だが線の細い頼りなさを見せる男性がゆったりと立ち上がった。

わざわざ出迎えてくれようとしている相手に、リユーネリアは部屋の入り口でドレスをつまみ、礼をした。

「王太子殿下におかれましては、この度の面会をお許し下さり感謝しております」

床に落とした視線の先に、カールの靴先が見えた。

「堅苦しいのは止めよう。さあ、こちらに来て座ってくれ」

ソファを示され、頷きを返す。

「お身体の調子はいかがですか？」

ソファに向かい合って座り、他愛もない会話で繋ぐ。一応、見舞いと称してやってきたのだ。それぐらい聞かなければおかしいだろう。

カールはウィルフレッドによく似た顔立ちで瞳の色も同じ色だった。だが、ウィルフレッドの瞳が波の立たない穏やかな湖だとすれば、カールの瞳は底の見えない深い湖を思わせる。

その瞳がリユーネリアを捕らえる。

「ここ最近調子いいよ」

ゆるく笑みを浮かべてはいるが、瞳が笑っていないかった。

「さて。見舞いとは表向きで、本当は私に話があるんだろう」

どうやって話を切り出そうかと迷っていたが、まさかカールの方から話を振ってくれるとは思わなかった為、逆に不意をつかれた形になる。

だが、やはり、とも思う。

リユーネリアがここに何をしに来たのか、彼は知っている。分かっているのだ。

「王太子殿下にお聞きしたいことが――」

意を決して口を開く。が、ふと手を上げて遮られる。

「その、殿下、というのは止してくれないかな」

「では何とお呼びすれば？」

わずかに緊張して問うと、口の端を上げてカールは笑みを浮かべる。

「名前で……というのはさすがにまずいか。兄で構わないよ。きみは弟の妻。私にとつて義理の妹になるのだからね」

思いの外、親近感を漂わせるカールに、リユーネリアは戸惑いを覚える。

本当に、今、目の前に座っている人物が、自分の命を狙っていたのか不安になる。もしかして、全く思い違いをしていたのではないだろうか。

侍女がお茶を運んできて、テーブルの上に置いた。

いつも飲むお茶とは違う香りが漂い、リユーネリアは微かに首を傾げた。わずかだが、薬のような匂いがする。

「お気に召さないかな。身体にいいお茶だよ」

それをカールから言われても、あまり嬉しくはない。いつぞやは毒草を茶筒に入れて贈ってくれたではないか。

奇妙な眼差しでお茶を眺めていたからだろうか。カールはふと笑った。

「毒は入っていない」

その笑い方がウィルフレッドに似ていて、慌てて視線を逸らす。そしてカップを手取る。

やりづらい。

そう思いながらお茶を口に含む。そして視線を彼に向けたまま嚙下した。

「お義兄さま」

と、呼んでみる。

まさか本当に呼ばれるとは思っていなかったのだろう。目をわずかに瞋り、だが、すぐに寂しげな笑みを浮かべる。

「なかなかいい響きだね。ウィルフレッドはもう兄とは呼んでくれないから」

「そうですか……」

実の弟から兄と呼ばれないからと、その嫁に呼ばせるとはどういうつもりなのだろう。

カップを受け皿に戻すと、息を一つ吐く。そして、視線をカールに向けた。

「なぜ、わたくしの命を狙ったのでしょうか？」

このままいけば、うかうかとかわされそうだと思い、リユーネリアは直球でいくことにした。

底の深い湖のような瞳を見つめていると、そこに興味深いものを見るような色が浮かぶ。

どれぐらいの時間が経っただろうか。カールはゆっくりと口を開いた。

「きみが四年前、パルミディアの軍勢を率いていたと知ったから……かな」

否定もせず、正直に認めたことにリユーネリアは瞠目した。

「ですが、ならば何故、すぐにわたくしを狙わなかったのです？」

「ヴェルセシユカに来てってことかな？それはきみにも時間をあげようと思ったからだよ。味方を作るだけのね」

あくまでも穏やかな口調を保ったまま、その内容は恐ろしいことを言う。つまり、はじめから仕掛けようとしていたのだ。

47・暗澹冥濛（きみになら見えるはず）

カールがリユーネリアの命を狙ったことを、どうやって知ることが出来たのか――。

最初に感じたのは違和感だった。

命を狙うならもっと直接的に来てもいいはずだ。

確かに最初の襲撃以来、警備も厳しくなったが、リユーネリアたちもわざと警備の手を抜いたり、相手を誘い出そうと罠を張ったりしていたのだ。しかし、結局直接的だったのは最初の一回だけで、警備を厳しくしたそれ以降は手のひらを返すように、徐々に周囲を削って逃げ場を失くしていく方法に変わった。

その方法が、四年前のアクセリナでの戦いに似ていることに気づいた。精神的にじわじわと追い詰められていく。その上、確実に弱点をついてくる。こちらの考えなどお見通しとも言うように。

そしてコーデリアたちから聞いた、議会は動いていない、ということ。王族が関わっていること。王族なら、侍女たちも疑いなく話してしまうだろう。警戒対象は議員だったのだから。騎士たちも同じことが言える。報告は義務だ。

バレンティナが階段から落ちた時の件もそうだ。コーデリア達とのお茶会が終了した後、ニーナに確認を取ってきてもらったのだが、呼び止めた者が不審に思われなかったのは、彼がクワエル伯爵……つまりカール側から情報を得ていたからだ。あの時、王族を疑ってもしなかったのだから。

極めつけは茶筒に入った毒草だ。あの後、調べて分かったのだが、その毒草は本来、薬として使用される。薬に関わる機会の多いカールなら、製法など知っていてもおかしくはないだろう。

最後に、ビアンカから聞いた四年前の戦いの指揮を執ったのがカールであったということ。すべてが一本の線で結ばれ、結果、王太子

にたどり着く。

カールは組んだ足の上に両手の指を組み、ソファの背にゆったりともたれ掛かっている。

底の見えない深い湖のような瞳をこちらにむけたまま、笑んでいるのは口元だけ。

「四年前は、私が勝利した。しかしその時、きみはまだ十三の子供だった。子供に勝てるのは当然だろう。――だが、四年が経った今、きみはどれだけ成長したかな」

「――そのためだけに私の命を？」

それはあまりにも悪趣味だ。

「ちよつとした賭けをしてみただけだ。きみが生きているうちに私に気づくと私の負け。当然、きみが命を落とした時には私の勝ち」
軽々しい口調とは裏腹に、言っている内容は空恐ろしい。

その上、カールが絶対的な安全圏にいる上での賭けだ。

割が合わない。

しかも、人の命を何だと思っているのか。そのような軽々しいものであつてはならないはずだ。

冷静にならなければ思いつつも、込み上げてくる怒りを押さえこむよう、腿の上に置いた手を握りしめる。

それに気づいているのか、いないのか。カールはなおもゆったりと告げた。

「だから時間をあげた。誰を味方につけるのか。それによってきみの運命は変わる」

「でもつ、だからと言って私の周囲の人まで巻き込んでいいはずないでしょう！」

あまりの暴言に、我慢ならず声を荒げていた。

バレンティナは大怪我を負ったのだ。もしかすると、命を失っていたかもしれないのだ。

「そうだね。あれは悪いことをしたと思っている。だけど、戦争で何万という人を殺したきみがそれを言うの？」

まっすぐに向けられた言葉に、息を止める。

それは……。

上気していた頬から熱が失われていくのが分かった。

「ああ、ずるい言い方だったね」

相変わらず瞳は笑わないまま、口元だけに笑みを浮かべ、カールは手を横に振り払った。まるで、今の言葉を取り消すように。

「だけど、きみが味方につけた者たちは、いい選択だったと思う。こうして私にたどり着けたのだからね」

冷やかな笑みを浮かべるカールは、ウィルフレッドとは似ても似つかない。冷めた眼差しで、こちらを静観している様子は、次のようにリユーネリアが出るのか待っているのだろう。

だけど、どうして冷静でいられようか。

その上、先程の不意をつく反撃に、じわりと湧き出てきたのは恐怖だ。やはり彼は、こちらの弱点が何か、いつそれを使えば効果を発揮するのを知っている。

先程とはうって変わって、この場から逃げ出したい恐怖を、怒りで何とかすげ替え、リユーネリアは背筋を伸ばした。

緊張の為か、喉が渇く。唇を湿らせ、ゆっくりと息を吐く。

まだ、話は終わってはいない。

「……もしも——」

無理に感情を押さえ込んでいるためか、声が震える。

上げた視線の先にある、底の見えない湖が恐ろしいと心底思う。

「もしも、私が四年前、アクセリナにいなかったら貴方はこんなことをしなかったの？」

先程、ふと思い浮かんだのだ。

戦地に赴いていなかったら、このようなことにならなかったというのだろうか。バレンティナも怪我をすることはなかったのだろうか。

その言葉に、つとカールは目を細めた。

「きみはウィルフレッドが以前「戦争をする必要があったのだろう

か」と言ったことに、どう返した？」

どこから情報を得ているのか。カールは随分前のことを思い出させる。

まだ、あれはウィルフレッドと結婚する前。お互いのことを探り合っていた頃のことだ。

あの時、自分は何と言っただろう。

リユーネリアが脳裏に浮かび上がってきた言葉を口にするよりも早く、カールは口を開いた。

「それを今更言って何になる」

冷酷とも取れる口調で告げた。

そうだ。確かにあの時、そう言っただ。

実際あったことを今更なかったことには出来ない。それは十分承知していたはずなのに、大切な人ができるだけ、心の揺れも大きくなる。

「過去は過去だ。消すことは出来ない。ならばそこから最良の選択をするべきだと思わないかい？」

カールの言っていることはヴェルセシュカに來た当時のリユーネリアの考え方と非常に似ていた。

だから分からなくはない。それが王族として、民をまとめるものとしての必要な考え方なのだろう。

だけだ。

「これが貴方の言う最良の選択だったと言っのですか？」

違ふと思つた。

今回のことは、王太子の娯樂にしか見えない。最良の選択が、人の命を軽々しく扱うものであつていいはずがない。

「——そうだね。きみは今、とても感情的になっている。だから納得がいけないみたいだけど、きみになら見えるはずだよ。——ああ、時間切れみたいだね」

そう言つて、リユーネリアの背後の扉を見やる。

あまりに衝撃的なことばかりに、言葉を失つてしまい、背後の物

音にまで気を留めていなかった。

途端、激しい音と共に扉が開く。

「ネリー！」

呼び声と共にウィルフレッドが駆け込んでくる。

振り返って、思わずソファから立ち上がる。それと同時に、ウィルフレッドの背後から近衛兵が数名部屋になだれ込んだ。

ウィルフレッドの様子から、ただならぬものを感じたのだろう。

王太子の部屋に飛び込んでくるなど無茶をする。たとえ兄弟であっても、不審極まりない。近衛兵が腰のものに手をやっていないだけまだ安心できたが。

「ネリー？」

先程のカールの発言に、ひどい顔をしていたのかもしれない。両腕をつかまれると、引き寄せられた。

カールや近衛兵の目の前で、抱き寄せられて思わず身を固くすると、その耳にカールの感心したような声が届いた。

「噂は本当だったんだね。……なるほど、仲は良いようだね」

恥ずかしさのあまり突き飛ばしそうになるのを何とか我慢し、ウィルフレッドの腕を宥めるように押さえた。

すると、ウィルフレッドがリユーネリアの視線の先からカールを隠す。

「あの、ウィルフレッド様。まだお義兄さまとの話は――」

背中に向かって言うと、ウィルフレッドはそれさえも遮るようにソファにくつろいでいるカールに向けて口を開いた。

「王太子殿下。一体、どういうつもりです。私の妻に何をするつもりだったのですか？」

その態度は、弟というよりも臣下のそれに近くて、リユーネリアは先程カールが見せた寂しげな笑みを思い出した。

「どうしてそんなに他人行儀なのかな。たった一人の弟にまでそんな態度を取られるとは」

不本意そうに言い放ち、そして諦めたように溜息を落とした。

「リユーネリア殿。この場は引いてくれないかな」
そう言って近衛兵を呼ぶ。

ずらりと周囲を取り囲まれ、彼らに腕を取られると、丁寧ではあるが否応なしに部屋から連れ出される。

しかし部屋から出る直前、カールは告げる。

「あ、そうそう。賭けは私の負けということだ」

振り返ったリユーネリアにカールは笑顔を向けてきた。

「賭け？」

ウィルフレッドは訝しげに眉を顰める。だが、リユーネリアは首を横に振るとウィルフレッドを促して部屋を出た。

言えるような内容ではない。今はまだ、心の整理が間に合わない。
「ネリー？」

カールの部屋から出されると、近衛兵から自由を取り戻す。

周囲はすっかり薄暗くなり、空気がひやりと頬を撫でる。

「戻りましょう。終わったわ……。ニーナも」

ずっと控えの間で会話を聞いていたはずだ。ニーナは頷くとリユーネリアに従った。ウィルフレッドも無理に問い質すようなことはしなかったが、こちらを気にしながらも、リユーネリアと共に中央棟へと足を向けた。

48・是非曲直（ここにいない必要はない）

執務室に行くと、そこには顔に心配という文字を貼り付けたロレインと、落ち着き払ったエリアスが待っていた。

すでに夜の帳は下り、窓の外の庭園も闇に閉ざされ、見ることは出来ない。

ソファにそれぞれが腰を下ろし、一人居心地悪そうにしているロレインが、躊躇いがちにエリアスの横に座る。

ニーナは四人分のお茶を入れると、部屋の隅に控えてしまった。

事の次第を話すべきなのか、本当は迷っていた。

話は遡って四年前の事から話さなければならなかったし、何より、ウィルフレッドがこの度の件の首謀者であるカールを慕っていることを知っていたからだ。

真実を知ったウィルフレッドは、きつと傷ついてしまったろう。

彼は優しい人だから、カールがリユーネリアに対して行った事に、負い目を感じてしまうかもしれない。そのようなことなど、四年前に自分がこの国に対してしたことに比べれば些細な事なのに。

本当は四年前のことも、ずっと心に秘めたままではいようと思っていた。自らの罪は一生をかけて贖っていくつもりであったし——いや、この国の人間に、自分が人殺しであることを知られることが、折角得た信頼を失ってしまうことが、単純に怖かったのだ。

だが、結局はここまで事が大きくなってしまい、彼らも巻き込んでしまったからには何も話さないでいるわけにはいかない。それに、これも自らが招いた罪の一端なのだとすると、罰を受けないわけにはいかないことぐらいリユーネリアにも分かっていた。

だから四年前のことはすべて話した。

自らが戦争で軍を動かしていた事も、ヴェルセシュカの民を殺してしまった過去も。

あの当時、この国に嫁ぐことになるとは考えもしていなかったのだから、躊躇いはなかった。だが、今は自国民となったヴェルセシユカの民を傷つけてしまったことは謝罪をしても、簡単に償えるものだとは思っていない。

彼らから冷たい視線を向けられるのが怖くて、話す間中ずっと、握りしめた両手だけをじっと見つめていた。

その告白を黙って聞いていた三者から言葉はなかった。

誰も何も発しない。

その沈黙は、まさに針のむしろで、息苦しさを感じてしまう。顔を伏せるように身を堅くして誰かが何かを言うのを待った。

「四年前と言えば、妃殿下は十三——ですか？」

最初に沈黙を破ったのはエリアスだった。いつもの口調に少しだけ安心しながら、小さく頷く。

「ですが、ネリア様は剣を扱えなかったのでは？」

ロレインもいつもと変わらない。

「はい。ですから後方支援という形で従事していました」

身を縮めて、何度目かの謝罪を口にする。

先程からずっと黙っていたウィルフレッドが、隣で身じろぐのを視界の端に捉え、息を詰めた。

「戦争は誰が悪いと言えるものじゃない。ネリーが心を痛める必要はないんだ」

握りしめた手を上から覆うように握られ、振り仰ぐ。そこにはいつもと変わらない……いや、少し沈んだ瞳をしたウィルフレッドがいた。

「ですが……」

「それよりも、今回のことはそれが根底にあるのだろうか？」

話を促され、リユーネリアは躊躇いがちに頷いた。

カールから新たに聞いた話をつけ加え、最後までウィルフレッドに彼の兄が自分の命を狙ったと言っているものかと悩んだ。

だが、アクセリナ戦のことを話した時点で、しかもウィルフレッ

ドがカールの部屋に乗り込んできた時点で、今回のことに王太子が関わっていることに気づいていると判断した。中途半端に誤魔化すよりも、すべて話してしまった方がいいように思えた。

彼の瞳が沈んでいるのは、すべてを知らなくても何か予感しているのだろう。ウィルフレッドの顔を見ていられなくなって、再び俯いて一息に説明した。

話し終わっても、ウィルフレッドは口を閉ざしたままだった。暗い眼差しは、じっと絨毯に注がれ、瞬きの一つもしない。

やはり、ひどく傷つけてしまったのだ。

「ウィルフレッド様……」

なんて声をかけたらいいのか分からなかった。だが、それでもすっかり消沈した面差になんとか笑みを浮かべ、心配をかけないようにしているウィルフレッドに胸が痛んだ。どうしようもない後悔が胸に込み上げる。

もしかしたら最初からすべて、間違いだったのかもしれない。

休戦の為の条約で、パルミディアの王女である自分が嫁ぐことが条件に提示された時点で、断っておけば良かったのかもしれない。ヴェルセシユカに刃を向けていた王女など、本来この国に相応しくなどなかったのだ。

そうすればこのようなことなど起きなかったかもしれない。ウィルフレッドを傷つけずに済んだのかもしれない。バレンティナも怪我などしなくて済んだのかもしれない。

奥歯を噛みしめる。と、前方から声がかかった。

「妃殿下はご存知でしたか？」

エリアスからの突然の質問に、わずかに首を傾げる。

「何をですか？」

「本来、妃殿下との御婚約は王太子殿下がなさるはずだったことです」

「え……」

思いがけないことに、目を見開く。

そんなこと知らない。

「ですが表向きは王太子殿下の病弱を理由にウィルフレッド殿下にその話は移行したのです。今分かりました。王太子殿下は今回の事をすでにその当時から考えていらっしやったのでしょね」

冷めた口調でエリ阿斯は言い放つ。

どうやらかなり気に入らないようだ。

エリ阿斯は主であるウィルフレッドを一見したところ見下しているように見えなくてもないが、仕事はきちんと補佐し、やるべきことはやっている。しかも、見えにくくはあるが、敬愛もしている。自分の主人を貶めるような真似をされ、怒らない家臣はどうか。

だが、それよりも自分の婚約する相手が王太子殿下だったというのは初耳だ。

すぐに平常に戻ったエリ阿斯は、顎に手を当てて首を傾げた。

「しかし御婚約の話が出て、王太子殿下が今回の事を思いついたのだとしたら……これは陛下も一枚噛んでいる可能性が高いですね」

その言葉に、リユーネリアは息を止めた。

そうだ。考えられないことではない。

つまり、ヴェルセシユカにとってリユーネリアの存在はいなくてもいいほど軽いのだ。騎士たちには受け入れられたと想っていただけに、その反動は大きかった。

「エリ阿斯！」

青ざめたリユーネリアを見て、ウィルフレッドが声を荒げた。

「申し訳ございません」

強い叱責に、エリ阿斯は軽く頭を下げるにとどまる。

エリアスの言ったことは真実だ。

そうになると、自分がこの場にいる意味はないのだ。

確かに、カールは賭けと言った。

カールがなぜこのような賭けをしたのか、その理由はリユーネリアになら見えると言っていた。だが、分からない。分かるのは、本気で自分の命を奪おうとし、それを見て見ぬふりをした国王もいた

のだ。

理由はどうであれ、いらないと言われた事実の方に打ちのめされる。

青ざめたリユーネリアの側に、それまで部屋の片隅に控えていたニーナが近寄ってきた。床に膝をつき、何も言わずそっとリユーネリアの手を取る。

彼女の言いたいことが伝わってくる。

その眼差しがもう十分でしようと言っている。

確かに、自分に出来る限りのことをしてきたつもりだった。しかしそれは、ヴェルセシユカの王族も戦争に反対していると思った上で、協力し合えると思っていたからだ。だが、もう――。

ニーナの手をぎゅっと握り返し、一度息を深く吸い込む。

そして決意を込めて顔を上げる。

「私はパルミディアに帰った方がいいのでしょうかね」

不要とされるならここにいない意味はない。休戦の約定を、まさか自らが破る様になるとは思わなかった。

「ネリー！」

横から慌てたように、腕をつかまれる。

「ウィルフレッド様。所詮、私たちは政略結婚です。この結婚がなにも利益を生まないのなら、私はここにいない必要はないのです」

全ての感情に蓋をして、ウィルフレッドを見た。そして視線をエリアスに向ける。

「このような事態を招いてしまい、私が帰国したとしても誰もウィルフレッド様を責めはしないでしょう。色々と手続きをしなければならいでしょうから、準備だけでもしておいていただけますか？」

それに一瞬躊躇い、何かを言いたげに口を開きかけたが、結局は頷いたエリアスを見て、リユーネリアはニーナに促されるよう手を取られてソファから立ち上がった。

ぐっと喉の奥に力を入れる。

でなければ今にも泣き崩れそうだった。

ロレインも一緒に立ち上がった姿を目の端に捉え振り向くと、苦々しげな表情をした彼女が微かに頭を下げた。

「お部屋まで一緒にします」

「ありがとう。ロレイン」

どこまでも仕事に忠実な彼女に、心から礼を言う。

もう護衛をする必要などない。賭けは終わったのだから。

執務室から出るまで、リユースネリアは振り返らなかった。ウィルフレッドからも呼び止められることはなかった。

49・悲憤慷慨（優しく、しないで）

夜――。

リユーネリアは別室を用意してもらい、そちらへと移動した。

他の侍女たちも何かを察しているのか、黙々と仕事をこなしている。

だが、ニーナにはさりげなく探りを入れているようで、時折そういう姿を見かけたが、彼女の口が誰よりも固いことをリユーネリアは知っている。申し訳ないとは思いつつも、他の侍女たちへの対応をニーナに任せ、夕食も取らずに湯浴みだけを済ますと、早々に寝室へと引き上げた。

見慣れた部屋とは違い、どこか寒々しい。ここは日頃使われていない客室か何かなのだらう。白いシーツの敷かれた寝台に横たわると、あまりの冷たさに身を丸める。

一人になると気がゆるんでしまい、目頭が熱くなる。ぎゅっと目を閉じると、ゆっくりと息を吐く。

文句は言ってはいけない。あの温もりを求めてはいけないのだと自らに言い聞かせる。だが、カーテンも閉め切り、夜の静寂があたりを囲む頃になると、必死に押し込めようとしていた感情が溢れ、それに伴い涙腺がゆるむ。

布団を頭から被り、嗚咽が漏れないようにして、シーツで目を押さえた。

くるしくて痛くて、どうしようもない虚しさが心を穿つ。今まではいつでも手の届くところにいてくれたのに、もう縋りつくことさえ出来ない。

手を放したのは、自分だ。決めたのは自分。だから、泣くのは間違っている。

政略結婚で嫁いだ先から拒絶されたのでは、帰るしかないではな

いか。間違つてはいない。

エリアスの話しからするとウィルフレッドは、本来リユーネリアが嫁ぐ相手であつた王太子のカールから自分を押しつけられたことになる。それなのに、これ以上は無いというぐらい大切にしてくれて、想つてくれたというのに、想いを返す時間さえ許されないとは国の思惑に振り回させたのはリユーネリアだけではない。ウィルフレッドもだ。彼こそ体のいい駒だ。

なんて、残酷なのだろう。

駒にだつて感情はあるのに。

その時、扉をノックする音がして、グツと息を詰める。

「ニーナ？」

布団から頭だけを出し、扉に向かって問いかける。彼女なら、一言何か言つてから扉を開けそうだが、今扉の向こうは無言だ。

涙で鼻声になりながらも、リユーネリアは告げた。

「ごめんなさい。一人にして……」

どうか放つておいて、と願いを込めて言う。

だが、その願いはかなわず、すぐに小さな音を立てて扉は開いた。隣室から差し込んできた明かりに、慌ててリユーネリアは布団に潜りこむ。泣き顔など見られるわけにはいかない。

絨毯の上を歩く音がかすかに聞こえ、そつと布団の上に手を載せられた重みを身体に感じる。

「ネリー……」

その声に、自然と身体が震える。

どうして――。

どうしてここに来るのだろう。どうしてニーナは彼を通したのだろう。

ぐるぐると様々な思いがぶつかりあつて混乱し、咄嗟に返事ができなかった。

「パルミディアに帰るつもりなのか？」

布団の上から感じる圧力は、優しく撫でられているようだった。

問いも責めているわけでもなく、単に確認しているような軽さを感じて、ウィルフレッドにはもう自分が必要ではなくなったのだと思っただ。

「……帰ります」

くぐもった声で応えると、布団を撫でる手が止まる。

「そうか——」

静かな、諦観のこもった声が耳に届き、途端、先程まで止まっていた涙腺がゆるんだ。

ずっと考えないようにしていたのに、この胸に溢れる気持ちは今答えたものとは逆のものだ。

息を殺して涙をこらえようとした。

だが、かすかに息を吐いた次の瞬間、ばさりと布団をまくり上げられ、冷たい空気が顔に触れたと思った時には、攫うようにウィルフレッドに抱きしめられていて、気づくとその胸に顔を埋めていた。「泣くくらいなら帰ると言っただ」

先程まで縋りつくことなど二度と出来ないと思っていた温かさを頬に感じ、いけないと思いながらも自らの腕をその背中に回す。離れたくないとぎゅっと力を込めると、それ以上の力でもって抱きしめられる。

「私はいらないと……」

「誰がいらないと云っても、俺には必要だ」

髪をやさしく梳かれ、背中をなだめるように撫でられる。

ずっとこの国に必要であろうとした。必死に努力をして、必要であると思いこもうとした。だが、結局は捨て駒同然の扱いを受け、失意に沈んでいたというのに、何も知らされずにいた、やはり駒同然の扱いを受けていた人だけが必要だと言ってくれた。

泣いて熱を持った瞳で見上げると、ウィルフレッドの湖面のような瞳と視線が合わさる。

悔しかった。今この時にそのようなことを言われては、折角決心したことが揺らいでしまう。

「優しく、しないで」

悲鳴を上げ続けている心を自ら抉り、ウィルフレッドの胸を押す。一度縋りついておいて、矛盾しているとは思う。

でも駄目なのだ。縋っては駄目――。

だが、背中に回された腕にわずかに力を入れただけで、リユ―ネリアはすぐに元いた場所に戻された。

お願い、と小さく呟く。

拒絶の意味を込めて首を横に振ると、それが気に食わないのか、ウィルフレッドはなおも背中を抱く腕に力を込める。

「ネリー」

「――もう」

まるで心臓がどうにかなくなってしまったのだろうかと思うほど、痛かった。

リユ―ネリアの言葉に、わずかにウィルフレッドの腕の力が弱まる。

「何をすればいいのか思いつかない。どんなに頑張っても何が出来なのか分からない。もう――疲れたの……」

言葉を吐き出しながら、視線を逸らす。

それは逃げる為の口実だ。

本当は、たとえ死ぬことになるうとも、この国にいてもいいなら、ウィルフレッドの側にいたい。どんなことにだって立ち向かっていく。だけど――。

「ネリー、聞いてくれ。あれから考えた」

耳元で聞こえるウィルフレッドの低い声音に、身体も心も逃げようとする。これ以上彼の側にいては離れられなくなる。

胸を押す手に力を込めたり、身体を擦ったりしてみたが、身体に回された腕はびくともせず、むしろ拘束を強める。無駄なあがきだと思いつつも、それでもじたばたしている、耳に寄せられた唇が告げた台詞に身体が固まった。

「俺は、王族としての権利を放棄しようと思う」

50・泡沫夢幻（あなたの望むままに）

予想外のことを告げられ、目を見張ってウィルフレッド見上げた。どうして、そこまでのことを――。

「本当のことを言うと、どうして兄上がネリーの命を狙ったのか……賭けだと軽々しく口にしたのか、俺には分からない。昔から優しくかった兄上が、個人的な理由で戦争の時のことを持ち出してきて、このような非道な真似をするとは、どうしても俺には信じられないんだ」

揺らぐ湖面のような瞳の中に葛藤を見つけて、リユーネリアは思わず目を逸らした。

彼に無用な痛みを与えたのは自分だ。そのような顔をさせてしまったことが申し訳なくて、直視できなかった。

俯き、目を伏せたが、頬を挟まれると、無理に顔を向き合される。まだ話は終わっていないと、こちらの心の中を見とおすように。

胸が塞がるように苦しかったが、彼が聞けと言うなら聞かないわけにはいかない。

伏せていた目を上げると、ウィルフレッドは続けた。

「俺の中には未だ兄上を信用している部分がある。兄上を側で支えていきたいという思いもある。だが、ネリーが側にいることが許されないというのであれば、俺は――」

額をこつりと合わせると、間近に目を閉じたウィルフレッドが見える。それはとても辛そうに見えて、彼に何を捨てさせようとしているのかを思い知る。

「……はじめからこうしておけば良かったんだ。俺にはこの国よりもネリーが大切だ。それは俺の立場であれば抱いてはならない感情だと言うことは分かっている。だが、ネリーをパルミディアに帰すことなど出来ない。何をおいてもできないんだ。だとしたら、俺に

はここにいる意味はない。だからネリー。どうか、帰るとは言わないくれ。ずっと俺の側にいてくれ」

頬に添えられた手がするりと背中にまわり抱きしめられ、リユーネリアは目を瞬き、こぼれ落ちそうになる滴を堪える。

ウィルフレッドはなおも続ける。

「明日にでも陛下に願ひ出よう。幸いにも、ネリーとの婚姻の折に賜った領地がある。そこで静かに暮らそう」

それは、淡い夢のような話だった。

現実問題として、何も解決はしていない。

だけど、悪くはないかもしれない。離縁するのではないのなら、休戦の約定を破ることもならない。それで彼の側にいられるなら、何もかも考えずに側にいていいなら。いつか思った願いが叶うかもしれない――。

「ウィルフレッド様……」

彼はいつも、リユーネリアにとって欲しいものをくれる。自分の犠牲を厭わず守ろうとしてくれる。

彼を守りたいと思う。せめて、彼が生まれた国を守りたいと思っていたが、今はそんな大それたことなど言えるような身ではない。

だから、この人の心だけでも守りたいと思った。望まれているのなら、この心ごとすべてを差し出してもいい。

こぼれ落ちる涙と共に、胸の中の靄が溶け出ていくようだった。

リユーネリアはそっとウィルフレッドから身を離すと、決意を込めて見上げる。

「――はい。ずっとあなたの側に……」

手を伸ばし、ウィルフレッドの頬にそっと触れた。そして告げる。湖のような瞳をひたりと見つめて。

「私のすべてをあなたに。――あなたの望むままに」
すべてが上手くいくとは思わない。

でも、いつか時間をかければ、もっといい解決方法が見つかるのかもしれない。だけど、今は――。

そつと頬を撫でられ、顎を持ち上げられる。リユーネリアはその手の持ち主を見つめる。

「ネリー……」

ウィルフレッドに名前を呼ばれるのは好きだった。その声が心地いい。そう言えば、いつから照れなくなったのだろう、と思いながら瞼を閉じた。

優しく唇を啄ばまれる。

「ネリー、いつか言っていたお願いを聞いてくれるか？」

一度、目を開けてからゆっくりと頷く。笑みを浮かべたウィルフレッドの手に頬をすり寄せる。

「名前を呼んでくれ」

何を言われたのか分からず、目で問う。最初から名前で呼ばせてもらっていたはずなのに、と思っているとウィルフレッドは苦笑した。

「様を付けずに。……様をつけられると、距離を取られているみたいで嫌なんだ」

今更だけど、と付け加えられて、リユーネリアは思い出した。

リユーネリアの愛称を最初にコーデリアが呼んだ為に、ウィルフレッドが拗ねてしまったことがあった。その為、彼は仕事を放り出し、宿めるのが大変だったのだが、今では彼だけがリユーネリアのことをネリーと呼ぶ。それは誰よりも甘く、心に響く。

「ウィルフレッド」

名前を呼び、自ら身を近づける。

唇を軽く合わせると、後頭部を支えられ、次第にお互いの息さえ欲するよう深く深く口づける。吐く息は熱く、意識を混濁させる。求めているのか、求められているのか。

ウィルフレッドの手が、身体の線を夜着の上からたどっていく。寝台に仰向けにされ、首筋や鎖骨に、柔らかく熱いものが幾度も押しつけられる。

肌蹴た夜着から肩はむき出しになり、ウィルフレッドはそこにも

口づけを落とす。

「ウィルフレッド……」

名を呼べば、唇を求められる。手を伸ばせば、手を握ってくれる。息が上がってきた時、いつかされたように心臓の上に、口づけが落とされた。

軽い痛みと共に鮮やかさを取り戻した赤い痣に、リユーネリアは頬を赤くする。

その痣に手を当てたウィルフレッドは告げる。

「この痣は決して消さない。もちろん俺以外に付けさすことも許さない」

ゆるぎのない強い眼差しに、息をのみ、どこまでも強い独占欲に心が震える。必要だと、求められていると思い知る。だが、浮かんでくるのは嬉しさだ。

手を伸ばして返事の代わりに再び口づけようとした時、あり得ない勢いで扉が叩かれた。

思わず二人とも見つめ合って固まる。

「殿下！大変です！出てきて下さい！殿下！」

それはエリアスの声だった。

叫びながらもなお扉を破らんばかりに叩いている。

思いがけない邪魔に、止まっていた時はウィルフレッドによって破られた。眉根を寄せ、深々と息を吐き出す。そして、リユーネリアの肌蹴た夜着を直すと、扉に向かって告げた。

「何事だ！」

「いいから出てきて下さい！陛下がいらっしゃいます！」

陛下、の言葉にリユーネリアは寝台から身を起こした。

どうやらエリアスは先触れで来たらしい。

しかし、どうしたことだろう。用があるなら国王はウィルフレッドを呼べばいいだけなのに、わざわざ北棟から東棟まで自ら足を運ぶなど、どういう魂胆なのか。

「ネリーはここにいろ。大丈夫だ」

そう言つて頬に口づけを落とす。

「私もご一緒します」

「いいと言つても無駄なんだろうな。……わかった。ニーナに支度を手伝つてもらつて、間に合えば来てくれ」

「はい」

ウィルフレッドを見送ると、入れ違いにドレスや化粧道具一式を持って侍女たちが入ってくる。エリアスの騒ぎに、急遽用意したのだろう。

ニーナは水を張った盥を持ってやってきた。

どうやら泣いていた事はニーナには分かっていたらしい。素直に顔を洗うと、侍女たちに寄つてたかつて身支度を整えられた。彼女たちの腕前の確かさ日頃から知っていたが、急いでもその腕は落ちない。むしろ磨きがかかると言つた方がいい。

そうして、リユーネリアの支度が整つたのは王がやってきて間もなくのことだった。

51・君子豹変（承知していた）（前書き）

ウィルフレッド視点です。

51・君子豹変（承知していた）

「一体、何の用なんだ？」

王と向かい合ってソファに腰を下ろしたウィルフレッドは、不機嫌も顕わに、本来なら取るべき礼も無視して冷やかな視線を送った。

王からしてみれば、足を組み、斜に構えて対面するその態度は、反抗期の少年そのものなのだが、まさかリューネリアとの時間を邪魔されたことに対しての逆恨みも混じっているとは思えないのだろう。ウィルフレッドの態度を鼻であしらった。

現在、部屋の中には三人しかない。

王には通常なら付かず離れず周囲を固めている近衛兵がいるが、どうやら部屋の外にでも待機させられているのだろう。

残る一人はというと、侍女たち全員がリューネリアの支度のため寝室に行ってしまった為、エリアスが先程から部屋の隅で四苦八苦しながらお茶を入れている。

ソファの中央にウィルフレッド同様ふんぞり返った王は、息子の態度などお構いなしに口を開いた。

「何でおまえたちは自分たちの部屋にいないんだ？」

もしかしたら、一度は私室の方に連絡が来たのかもしれない。だが、このような時間に訪ねてくること自体非常識だ。

そもそも、そのような質問に答える気にもならない。原因を作ったのは一体誰なのか。

ふいつと視線を逸らし、口を閉ざす。

だが国王は物珍しそうに周囲を見渡していたが、一向に口を開こうとしないウィルフレッドに何を思ったのか人の悪い笑みを浮かべた。

「喧嘩でもしたのか？」

どこまでも嬉々としている父親に、白い目を向ける。

本当に誰のせいだと思っているのか。カールと共謀しておかしの真似をした為に、リユーネリアがどれほど傷ついたと思っているのか。追い詰め、パルミディアに帰ることまで彼女に考えさせたことを彼らは気づいているのだろうか。

こぼれ落ちそうになる溜息をかるうじて飲み込み、素っ気なく言い放った。そうしないと、恨み事が口から出てしまいそうだった。

「あなたには関係ないだろう」

果たしてどのような反応が返ってくるものかと、耳だけで様子を窺うと、思ったよりも真剣な声が返ってきた。

「いや、ある」

声の真剣さに思わず顔を向けると、態度は相変わらずだった。ソファの背もたれに両腕を乗せ、肩でも凝っているのか首を鳴らしている。

その態度に思わずムツとして、再度否定する。

「ない」

「ある」

「ない」

「……本当にあるんだが——」

何度目かの問答の後、漸くソファの背もたれから両腕を下ろす。

そこには王というよりも、父親としての顔しかなく、眉をひそめる。

「だったら、どう関係あるのか言ってくれ」

よく考えれば、このような時間に来ること自体、異常なのだ。警戒するに越したことはないだろう。

しかし王は面白くなさげに一瞥する。

「本当に喧嘩じゃないのか？」

「違う」

「では、愛想をつかされたのか？」

「違うと言ってるだろう」

あまりのしつこさに、いい加減腹が立ってつい声を荒げると、王はふむと頷いた。

「で、^{リユーネリア}義娘殿はどこに？」

初めから予測がついていたのか、リユーネリアがいるだろう寝室に目を向け、早く出て来ないかとそわそわしている父親を前に、ウィルフレッドは今度こそ深々と溜息をついた。

結局、最初の質問は見事かわされてしまった。

本当に何の用があつて、このような時間に訪ねてきたのか。

目の前に座る父親は、少なくとも機嫌は悪そうに見えない。同じ王宮内で暮らしているとはいえ、親子といえど滅多に会うことはないので、単純にリユーネリアに会えることを心待ちにしているように見える。

思い返せば、初めて王とリユーネリアが対面した時、この父親はそれはもう一目でリユーネリアを気にいったらしく、ウィルフレッドとの結婚を自分以上に喜んでいたように思える。それなのに、本当にこの父親は王太子のしたことを黙認していたのだろうか。エリアスはああ言つたが、気づいていなかったということはないのだろうか。

いや、それはないな、と自らの甘い考えを否定し、視線を目の前の王に向ける。

「まだ支度に時間がかかる。それよりも――」

「カールの件なら承知していたぞ」

聞く前に返ってきた言葉に、一瞬、何を言われたのか分からなかった。

数度頭の中で反芻して、漸く理解すると同時に、ウィルフレッドはソファから立ち上がっていた。そして平然としている王を見下ろす。

「何だ？言いたいことがあるならはつきり言え」

促されたものの、頭に血が上り、瞬間的に言葉に詰まる。

言いたいことなど山ほどある。

だが、第一に聞くべきことは決まっていた。

「――なぜ彼女を狙った？」

目の前にいるのは父親ではない。今はもう王の顔をした男が、余裕を湛えた笑みを唇の端に浮かべている。

「危険に晒すことは了承したが、命まで取ることは認めていない。それにおまえが守らないようなら不要な存在だ。さっさと切り捨てるべきだろう」

「もしも、ということだつてあるだろう！それに彼女を精神的に追いつめて何がしたかったんだ！」

「彼女も王族の生まれだ。これぐらいのことで挫けるほど軟弱ではないだろう。それにおまえがついていたんだろう？支えてやれば問題ない」

「では、何のために兄上は――王太子殿下はこんなことをした！」怒りに任せて問い続けたが、その質問に関してはふと王は口と嚙んだ。

「それは義娘が来てからの話だ。いいから、座れ」

問うこと全てに淀むことなく答えられ、ウィルフレッドは怒りに手を握りしめる。

まだ何か言つてやらなければ腹の虫が治まらない。だが口を開こうとした時、寝室の扉が開いた。

「遅くなりまして申し訳ございません、陛下」

髪を結い上げ、落ち着いた色のドレスに身を包んだリユーネリアは、もう憂いの色は見えなかった。しかし、まだどこか緊張した面持ちをしている。

スカートをつまんで軽く礼を取ると、王は嬉しそうにリユーネリアに近づいた。

「いやいや、気にしなくていい。こんな時間に来てしまったこちらが悪い。それよりも、少し痩せたのではないか？」

ウィルフレッドと対峙していた時とはまるで別人のように目尻を下げる父親に、ウィルフレッドはリユーネリアに近づこうとしてい

る父親から離すべく彼女を引き寄せる。

リユーネリアに怪訝な眼差しを向けられたが、彼女はすぐに王を振り返り、笑みを浮かべた。

「恐れ入ります。ですがどこも異常はございませんので心配にはおよびません」

ふわりと笑んだリユーネリアは、ウィルフレッドの父親に対する親しみを見せる。

そのような気づかいをさせているのに、この父親が彼女にした仕打ちはあまりにも酷薄すぎるものではないだろうか。

ウィルフレッドの隣に腰を下ろしたリユーネリアを見て、王は満足そうに笑んでいる。

「それで、話があつて来たんじゃないのか？」

王もソファに腰を下ろしたのを見て、ウィルフレッドは当初の質問を再度した。

お茶を入れるのに手間取っていたエリアスに代わり、侍女たちが手際よくテーブルの上にカップを置いて部屋の隅に控えるのを見て、王が彼女たちを一瞥すると、軽く手を払った。彼女たちは心得たように一礼すると部屋から出て行く。

部屋に残ったのは、王とウィルフレッド、リユーネリアとエリアスだけだった。

「人払いまでして何なんだ……」

ウィルフレッドもさすがに居心地が悪かった。それほど重要な話なのだろうか。

王はリユーネリアにまっすぐに向き合い、姿勢を正した。それだけで、隣のリユーネリアから緊張が伝わってくる。

じわりと滲み出す張り詰めた空気を破ったのは王だった。

「この度のこと、すまなかつた」

そう言って、深々と頭を下げた。

ウィルフレッドは驚きのあまり、息をするのも忘れて父親を見入った。リユーネリアも身動き一つしない。どうやら驚いているらし

く、瞠目している。

頭を下げたまま、さらに王は続けた。

「どうしてもとカールに頼まれてな。だが、必要な事だと思ったから私も認めた」

「必要な、こと、とは？」

我に返ったリユーネリアの声は震えていた。無理もない。痩せ細るほど食事も出来ず、どれほど怖い思いをしたことだろう。なかなか寝付けなかったこともウィルフレッドは知っている。

ゆっくりと身を起こした王は、真剣な顔をしてから口を開いた。

52・一陽来復（やってみるか）（前書き）

カール視点↓リユネリア視点です。

52・一陽来復（やってみるか）

時は夕刻に遡る。

リユーネリア

義妹の訪問からしばらく経つてのこと。

残光に暗く沈む室内に、侍女が来客を告げる。だが返事も返す間もなく、客は遠慮なく部屋に入ってきて来た。

「身体の調子はどうだ？」

珍しく息子の部屋を訪ねてきた王を、ソファに力なく座っていたカールはゆっくりと見上げた。

「ええ、おかげさまで」

最近、身体の調子良かったのは単に賭けのことで気が張っていたからだ。だが、先程すべては終わってしまった。いつもの単調な生活に戻るだけで、明日辺りから体調を崩すかもしれない。いや、すでに身体はだるくなりつつある。

報告をすべく、王を見上げる。わずかに口元に笑みが浮かぶのは、こちらの望む通りに決着がついたからだ。

「賭けは終わりました」

「そうか。おまえの負けか？」

「ええ。当然でしょう」

今回の事は、王も無論、知つてのことだ。

パルミディアと休戦が決まり、その条件に彼女との結婚が決まった時に今回の事を思いついたのだ。

当初、リユーネリアは自分に嫁ぐことになっており、休戦の約定にもそれが明記されてあった。

戦争で国自体が弱っているとはいえ、このまま休戦してもヴェルセシユカの議会は未だ力を持ったままだ。このままでは戦争が再開という事も有り得ない話ではなく、ならばどのようにして国力を衰

えさすことなく、彼らの力を削ぐことが出来るのか、取りこむことが出来るのかを考えた。

当時、カールが議会に対して持っていた切り札はいくつかあった。アクセリナ戦での評価もその内の一つだった。

だがもう一つ。リユーネリアが戦争で密かに指揮を取っていた事実だ。そのこと自体は決して大きなことではないかもしれないが、議会が知らないのであれば彼女の存在価値を低く見ている彼らは痛い目を見ることになる。

それが議会への抑制になるならば、リユーネリアを利用しない手はないと思った。

しかし、そうなると妻となる娘とこの賭けが出来るはずもない。だから王に無理を言ってパルミディアの王女を弟に嫁がせたのだ。

懸念すべきことはまだあった。議会が直接彼女の命を狙うことも有り得る。そのような愚かな者たちを牽制するためにも、自らが動くことを通達し、彼女自身の保全を計り、なお且つ手心も加えたつもりだ。

怪我人が出たのは予定外だったが、あの事故のおかげで議会が完全に傍観を決めたと言ってもいい。

「おまえはあの娘をどう見た？」

王はおもしろげに問う。

そこに含まれる意味に苦笑し、答える。父親には自分の根底にある考えまでお見通しだったようだ。

「度胸と責任感、あれは普通の貴族の娘にはないものを持っている。生まれながらの王族でしょう。人の上に立つべき資質を備えていると思います。しかも運も味方につけている」

「……本来ならおまえに嫁ぐはずだったのを、変えたのはおまえだ。惜しくなったかと問われ、それには首を横に振った。

「私では荷が重い。それに……そんなことを思うとウィルフレッドに殺されかねない」

天寿は全うしたいんですと付け加える。

それには国王も笑う。そして最後に問う。

「では、いいのか？」

「ええ。お任せします」

これが自分の我儘のせいで義妹になった彼女への謝罪と、余計な御世話かもしれないがちょっとしたお節介だ。

そう言つて、ソファに身を沈めた。やっと重責から解放放たれる。これで良かったのだと思った。

国王の真剣な顔に、告げられる言葉を待つ。

「義娘殿の気質を見る為に。かつての敵国パルミディアから嫁いできて、ヴェルセシユカの王族としてどれほどこの国を考えてくれているのか。そして夫であるこいつをどれだけ支えることが出来るのか。また、こいつがどれほど義娘殿を大切にしているのか」

その言葉に、目を閉じた。

——つまり、試したのか。

内容ははつきり言つて、酷いものだ。人の心をいたぶる様な、まして実際に怪我人までを出している。だが、そこまでして試さなければならなかった理由を漠然と思ひ当たる。

カールの言つていた、見える、の意味。

頭が働きます。

リユーネリアは深々と息を吐き出し、そして——唇の両端をかすかに持ち上げた。

「それで、わたくしは合格でしょうか？」

もう、答えなど聞かなくても分かっている。

自分の考えが正しいなら、いや、カールが言つたように、彼にたどり着いた時点で勝ちだったのだ。

それと同じことを国王は口にする。

「ああ。カールにまでたどり着く可能性は半々だと思っていたからな」

国王は微かに笑った。

そして、今度は視線をウィルフレッドに向ける。

「カールは、王太子の地位をおまえに譲るそうだ」

「は？」

「いずれ、国王になるお前を支えるのに必要な資質を義娘殿に認めたようだ」

つまり今までのことは、国王やカールに、リユーネリアが王妃になる素地があるかを試されていたのだ。

しかもカールが賭けていた相手は、リユーネリアではない。議会だ――。

すべてが繋がると、カールの賭けがいかに綱渡りだったのが窺い知れる。

自らが安全圏にいたかと思っていたが、一歩間違えたら――つまりリユーネリアが賭けに負け、ましてカール自身の身にも何かあれば、この国は本当にどうなっていたのか。

確かに賭け自体、内容は酷いもので理解しがたい扱いもされたと思う。人のことをなんだと思っているのかという怒りもある。

だが、彼らも結局はこの国を思っていたことなのだ。

国を存続させ、民を守ることが上に立つ者の義務だ。もっと、他に方法があったのではないかと思わなくてはならない。しかし、それはきつと時間をかければ、の話だ。カールが早く王太子の位をウィルフレッドに渡したかったのなら、リユーネリアの命を馬鹿な考えを持つ議会から守るためだったと考えるならば、この方法が確かに手っ取り早かったのかもしれない。

そう思うと、仕方がないと思うしかないではないか。

それに、国王から伝えられたカールからの謝罪の言葉と、お節介だと言われた贈り物。それはリユーネリアが最初に望んだものだ。

絶対的な地位と権力――。

このような形を望んでいたわけではないが、この地で生きる足場が約束されたようなものだ。

だが、ウィルフレッドは怒りを顕わに国王に食い下がる。

「何、寝言を言ってるんだ。今まで散々ネリーの命を脅かすようなことをしておいて王妃になれというのか？——それに俺が国王？王太子にさえなれるわけないだろう。議会が反対する」

しかし、国王はもう決めたとばかりに話を続けた。

「いや、明日の議会で承認を取る。そうすれば、もう義娘殿に手出しはできん」

「むしろ、もっと悪質になるだろう……」

「——お前はもう少し頭を使え。カールと渡り合うほどの娘だ。それに、近々ゴードヴェルクから使者がくることになっている」

初耳のことにちらりとエリ阿斯に視線を送ると、微かに頷いた。

ゴードヴェルクはヴェルセシユカの隣国だ。パルミディアとヴェルセシユカの休戦には手を貸してくれたが、もともと好戦的な国家だ。

そのゴードヴェルクからの使者とは、あまり嬉しい報せではない。今までは王太子であるカールがいるからこそ牽制できていたのだが、最近ますます体調を崩している王太子に、ゴードヴェルクが何を思ったのか。

つまり、議会にとってカールが王太子の地位から引くならば、代わりにゴードヴェルクを牽制できる者が必要になる。その代わりがリユーネリアだ。ならば、リユーネリアをどうにかしようと馬鹿な考えを起こす者は、逆にヴェルセシユカに反逆したと思われることになる。つまり、ウィルフレッドが王太子の地位につけば、リユーネリアの立場も盤石になるということ。

どこまでも彼らの手の上でいいように転がされていると知りつつも、望まれるように動いてしまう自分がいる。

リユーネリアは顔を上げた。

「わかりました。ウィルフレッド様と私が、その使者にお会いします」

ニコリと笑って告げた。

まだ、この国でできることがあるならば、出来る事をするだけだ。

確かに、彼らの思い通りになるのは癪だと思つ気持ちはある。だが、ならば期待以上のことをして見返してやる。そう思うぐらい、許されるだろう。

「よし。では任そう」

パンッと王は自分の足を叩くと、ソファから立ち上がった。

「そういうわけで、近いうちにおまえは王太子だ。覚悟しとくんだな」

話が勝手に進んでいくことに呆然としているウィルフレッドを尻目に、王は反論する間も与えず、笑いながら扉に向かう。

「おい……」

我に返ったウィルフレッドが父親に向かって伸ばした手は、扉が閉ざされることによって止まる。

確かに、王の突然の発言に驚いているのはウィルフレッドだけだ。エリ阿斯を見れば、彼も途中から予想がついていたのか——いや、もしかしたらリユーネリアがパルミディアに帰るといふ発言をした時点で、あの時、躊躇を見せたエリ阿斯はある程度の予測がついていたのかもしれない。

エリ阿斯は気味が悪いほどにこやかに笑っている。

「とりあえず、おめでとうございます」

本気なのか、嫌味なのか。

エリアスの告げる言葉に、ウィルフレッドは嫌そうに顔を顰めた。リユーネリアはウィルフレッドの側に寄ると、見上げてから言う。「ウィルフレッド様。静かに暮らすのは、もう少し先……もつと歳を取ってからになりそうですね」

王宮から離れて領地で暮らすのも悪くなかった。少しだけ残念だという気持ちもないわけではない。

だが、心の中は思いの外すつきりしていた。今まで散々役に立たないと思わされてきたが、これからやらなければならないことが待ち受けていると思うと、気が引き締まる。

だが、隣でウィルフレッドは逆に沈んだ顔で首を横に振る。

「俺には無理だろう」

もともと執務が好きではない彼のことだ。

それなりの教育もほどほどに受けているだろうに、ウィルフレッドはカールが王になると思っていた節がある。それに、王位に何の魅力も感じていなかったことはリユーネリアにも手に取るように分かっていた。

それなのに今更王太子になれと言われて、どうしていいのか戸惑っているのだろう。

エリアスもそれは十分に分かっているのだろう。肩を竦めている。ウィルフレッドとは彼の方が付き合いは長いのだ。だが彼のその様子を見る限り、決して無理だとは思えない。

「大丈夫ですよ、殿下。妃殿下がいらっしゃいますから」

エリアスの言葉に、リユーネリアもウィルフレッドの腕にそっと手を乗せ頷く。

「はい。私も一緒に勉強しますから、お手伝いさせて下さい」
出来ることを頑張ってみましょうと告げる。

その言葉に、ウィルフレッドは深々と息を吐く。

そう——今はまだ、リユーネリアにも先のことは分からない。

出会った当初、彼が王位につく可能性があることは確かに聞いていた。だが、あの頃はそれを思えば不安の方がはるかに勝っていた。しかしウィルフレッドは少なくとも、カールほど切り捨てることも必要だという冷酷さを持っていない。それが人の上に立つ者にとって適しているのかどうかなど分からない。だけど——。

「そうだな。まずは、出来る事ことからやってみるか」

最後の言葉は、まるでリユーネリアの心情そのままにウィルフレッドは呟いた。

53・未来永劫

噴水の吹き上げる水飛沫に、陽光が煌めき青い空はどこまでも澄み渡っている。

どこからともなく聞こえる鳥の声に耳を傾けながら、テーブルに置かれたカップに手を伸ばす。

今日はあの日のやり直しだ。とは言っても、同じ庭園内でも場所は先日とは違う休憩場所だ。

ここは噴水から幾分か離れた場所に作られた東屋で、夏の乾いた風が吹き抜けていくので日差しさえなければ涼しく心地良い。テーブルの端に先程摘まれたばかりの薔薇を置き、円形のテーブルを囲むように置かれた椅子に腰かけ、隣にはウィルフレッドが座っている。

今日は刺客が現れることもなく、穏やかな時間が流れていく。たが多分、もう少ししたらこの平穏な時間も破られてしまうのだろう。議会は昼前には終わると聞く。きっと王宮中の者たちがウィルフレッドを探しにやってくるに違いない。

「今日は逃げてこられたんですね」

朝食時、突然ウィルフレッドに庭園に誘われた。

というか、問答無用に決定され、支度が出来次第連れ出されたと言ってもいい。

お茶を飲んでいたウィルフレッドは穏やかに笑う。

「しばらくは落ち着けないだろう。こうして庭園に散歩に出ることも難しくなるかもしれないし……」

「はい。ありがとうございます」

笑顔で答えると、ふとウィルフレッドはその穏やかな笑みを消し、わずかに躊躇ったのち声を潜める。

「ネリーには無理をさせたか？」

それが何を指しているのか理解した途端、顔が熱くなる。

「……いえ、大丈夫です」

確かに、違和感はある。でも歩けないほどでもないし、むしろ何かをしていないと昨夜のことを思い出してしまつて恥ずかしくなる。赤くなっているだろ。う頬に片手をあて、一口お茶を飲む。

「そう言えば、以前ネリーが言っていたお願いというのは何だ？」

「あ、それは――」

言われて、あの日、この庭園で言ったことを思い出す。

あの時ならば、きっと叶うはずだった願いだ。だが、今では少し内容が変わってしまった。それを口にするのは、また躊躇われるような気がして困ってしまう。

「言いにくいこと？」

「いえ、あの……」

どう言つべきか悩む。

カップを取りあえず皿に戻し、周囲にいる侍女たちを見渡す。

聞いていない素振りで聞いているのが彼女たちだ。先程、ウィルフレッドがリユーネリアの身体を気づかった言葉も、彼女たちは理解したはずだ。朝の着替えを手伝うのも彼女たちなのだから。

今はドレスで隠れているが、実はその下にはウィルフレッドが付けた痕が身体中に残っている。彼女たちの眼差しが、今朝の着替えの時ほどいたたまれなかったことはない。

しかし、もう彼女たちには知られているのなら、逆に開き直つてしまふのもいいのかもしれない。

「……あなたと家族を持ちたいなと」

口にするのは恥ずかしかったが、一度口にしたら引つ込みはつかない。

あの時は、まだ単に第二王子の妃で、後継ぎなど考えることなく単に、家族、だったのだ。だが、これから王太子となるウィルフレッドとその妃であるリユーネリアにはもう一つ仕事が課せられる。それがリユーネリアにとって最も重要な仕事になるはずだ。

ウィルフレッドはそのお願いに、一瞬目を瞬いたが、すぐに先ほどよりもより一層深い穏やかな笑みを浮かべると、リユーネリアの手を握った。

「それは、そんなに遠くないうちに叶えよう」

それにはリユーネリアも頷く。

庭園の外が賑やかになりつつある。どうやら議会は予定よりも早く終わったらしい。これで穏やかな時間も終了となる。

ウィルフレッドと顔を見合わせると小さく笑い合う。

これから忙しくなるが、きっとこの人が側にいればどんな困難なことだって立ち向かっていくことが出来るだろう。もちろん、どれだけのことが出来るのか分からない。だが、これからは周囲に振り回されるのではなく、自らの足でこの地を踏みしめ、自らの手で、きつと遠くない未来、幸せを手に入れることが出来る。

そう思いながら、ウィルフレッドの手を握り返した。

53・未来永劫（後書き）

皆さま、最後までお付き合いいただき本当にありがとうございます。少しでも楽しんでいただけたでしょうか。

これにて本編は終了です。

約5ヶ月間の連載でしたが、完結までたどり着くことが出来たのも、みなさまの優しい励ましがあってのことです。本当にありがとうございます。ございました。

番外編にて数話ほど彼らの今後などを投稿する予定です。もし宜しかったらお付き合いいただけると幸いです。

では、ここまで読んで下さったすべての皆さまに感謝を！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2401p/>

この結婚は政治的戦略

2011年10月6日03時28分発行